

「東山梨教育研究第62号」の発刊に寄せて

甲州市教育委員会教育長 小林 俊彦

東山梨の教育研究の集大成であります「教育研究第62号」が、多くの先生方のご尽力により、ここに発刊されましたことに、心から感謝と敬意を申し上げます。

さて、改めて2023年を振り返ってみますと、「大谷翔平」、「生成AI」、この2つの言葉（大谷選手は人名ですが）が衝撃とも呼べるほどのインパクトを世の中に与えた年だったと私は思っています。

大谷選手は、3月のWBCにおいて日本を世界一に導き、メジャーが開幕すると、今シーズンも「二刀流」として目覚ましい活躍を見せ、その結果、2年ぶり2度目のMVPを獲得するに至りました。正に、世界が大谷翔平で始まり、大谷翔平で終わった2023年ではなかったかと思います。ご存知のように、大谷選手は国内の全小学校に3つずつグローブを寄贈しました。寄贈の際に添えられた手紙には、「このグローブが、私たちの次の世代に夢を与え、勇気づけるためのシンボルとなることを望んでいます。」と記されていました。新型コロナウイルス感染症の流行やロシアのウクライナ侵攻、イスラエルとハマスの戦闘行為など、誰もが目を背け耳をふさぎたいと思うニュースが日々飛び交い、将来においても予測困難な時代にありますが、大谷選手が望むように、子供たちの誰もが将来に希望をもち、自分の夢を描いてそれに向かって歩んでいくと強く願います。

「生成AI」も、2023年、世界中を席卷したと言えるでしょう。Open AIが2022年11月にリリースした言語モデルの「Chat GPT」は瞬く間に浸透し、リリースから2か月後には、ユーザー数が1億人を超えたと言われています。「こんな絵を描いて。」と言葉で指示するだけで画像を生成してくれる「画像生成AI」も同じように浸透しました。秋ごろには、SNS上で、生成AIで作成された日本の首相が会見をするといったフェイク動画が大きな話題にもなりました。こうした生成AIは今なお、驚異的な進化を続けており、数年前に話題となった「シンギュラリティ2045」、2045年にはAIが人間を超える「知能」を有するといった問題も現実味をかなり帯びてきたのではと思わざるを得ません。

文部科学省は昨年7月に、「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」を出しましたが、2045年、目の前の子供たちが社会の担い手の中核として活躍していると考え、ガイドラインが掲げている内容を私たちは大切にしていかなければならないと思います。大谷選手が贈ってくれたグローブと同じように、AIが子供たち誰もが将来に希望をもち、自分の夢を描いてそれに向かって歩んでいける存在になればと願っています。

私たち大人でさえ、将来を見通せない厳しい時代を迎えています。しかし、そうした中にあっても、目の前の子供たちには、自分のよさや可能性を認識し、それを十二分に発揮して、多様な人々と協働しながら持続可能な社会の創り手になってほしいと強く願います。そして、その後押しを責任もって行うことが私たち大人の使命であると思います。東山梨教育研究は、多くの先輩方が長年にわたり培ってきた教育実践を礎として進められており、今後も確かな歩みを進めていかれるものと確信しております。

結びに、東山梨教育と教育関係各位のご尽力に敬意を表し、益々のご発展をご祈念申し上げます。

あいさつ

東山梨教育協議会会長 新海 直仁

東山梨教育協議会の研究成果を収めた「東山梨教育研究」第62号がここに発刊の運びとなりました。今年度、各校においては約4年間のコロナ禍で滞った教育活動を再開するにあたり、多くの困難、課題を乗り越えて研究を進めてこられたことと推察いたします。このような中においても、子ども達の成長を支えるために、歩みを止めずに研究に取り組まれた先生方に心より敬意を表すと共に、その足跡として多くの研究実践の積み重ねが収録されたこの研究紀要は、まさに東山梨地区の教職員としての誇りであり、自信を持って社会に発信することができる宝物であると思います。

県内の各支部で行われているこの『教育協議会』は、校長会、教頭会、教連の教職員が一堂に会して、授業を中心に理論研究で議論を重ね合わせ、実践を通して切磋琢磨し合いながら子ども達の教育のために力を尽くしていく会です。いわゆる「教育三者」がお互いの垣根を越えて「研究」という土俵で教育を語り合う、他県には見られない全国に誇るべき組織的な研究体制と言えます。私たち東山梨教育協議会も、昭和39年4月20日、設立総会が開催され、60年を迎える歴史ある協議会であります。

今年度も各校において、「学びの主体者」である子どもを中心に据えた授業改善が進められました。GIGAスクール構想に基づくICT環境整備の充実、一人一台端末の活用定着が進み、令和の日本型学校教育に示される「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に向けて、端末を活用した学びの場の工夫など、授業のあり方にも広がりが見られるようになりました。もちろんデジタルの良さを取り入れながらも、教育本来の姿である、教員と子どもの対面による関わり、交わりを大切にしたい学びを基本として、各校において着実に実践が積み重ねられ成果をあげることができました。

しかしながら、社会の多様化と同時に教育課題の複雑化も進み、依然として児童生徒の不登校、教員の働き方改革の停滞など、教育のウェルビーイング向上における課題は山積しています。これらの課題解決に向けて、私たちは「学び続ける教員」として研究を通して自己研鑽を重ね、着実に教師力を磨いていくことが必要です。同時に、「共に高まり合う教職員集団」として、研究の広がり・深まりを支える組織体制の整備強化も不可欠です。教協の組織研究を通して、共に手を携え、一人では解決できない課題に対して、チームとして同じベクトルを向いて課題解決を探っていくことが求められています。

幸いなことに、東山梨地区には、多くの先輩方が長年にわたって培って来られた盤石の組織体制と実践があります。これまでの東山梨教育研究冊子に幾度となく記載されている、「光は東より、教育は東山梨から」という言葉の志は、今も失われることなく生き続けています。その証として、今年度の教育実践も東山梨地区の子ども達の成長を力強く支え、確実に後押しする研究であったことがこの冊子に集約されています。先生方には、どうか東山教育に自信を持って、さらに教育研究に力を注いでほしいと思います。今後も保護者・地域・行政・関係機関との連携を深め、研究活動の継続と教育課題の解決を図り、輝かしい子ども達の未来を保障してくださるものと期待しています。

終わりに、本年度も東山梨教育協議会の様々な研究活動に対し、ご指導・ご支援をいただいた多くの関係者の皆様に心より感謝申し上げます、あいさつといたします。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実におけた授業づくり —教師のファシリテーションに焦点をあてて—

I 研究内容

1 研究目標

授業づくりにおける教師のファシリテーションについて理解を深め、授業実践・分析・交流をしながら授業力の向上を図る。そして、ファシリテーションの考え方や技術を導入すると、授業はどのように変わるのか、また児童の考え方や協働的な学びがどのように深まっていくのか明らかにする。

2 研究方法及びその実際

①先行研究から、教師の授業ファシリテーションの考え方を学ぶ。

②講師を招聘し、授業における教師の授業ファシリテーションについて学ぶ。

・5・9月 山梨大学教職大学院 教授 東海林麗香先生

『教師の授業ファシリテーションについて』

・10月 山梨大学教職大学院 准教授 茅野政徳先生

『国語科における教師の授業ファシリテーション』

③各自の実践を持ち寄り、ポスターセッションを行う。

・場のデザイン、対人関係のスキル、構造化のスキル、合意形成のスキルのうち、一つに焦点をあてた一人一実践をした。3回にわけて、ポスターセッションの形式で発表会をした。

④学級集団づくりの一環として、学級力ミーティングを取り入れる。また、学級力向上プロジェクトの取組についての情報交換会をする。

・9月及び1月に、学級力向上プロジェクトについての情報交換会を行った。取り組みの様子を、15分程度でスライドにまとめ、それをもとに小グループで意見交換をした。個別化個性化された学びと協働的な学びを往還させながら、授業を展開していくためには、のびのびと発言できる学級風土や、前向きに学び合う雰囲気醸成が必要不可欠であることが確認された。

II まとめ

1【ファシリテーションの考え方や技術を導入すると、授業はどのように変わるのか】

- 授業を展開している最中に、自分の授業を客観視して捉える場面がでてきた。そして、子どもの言葉をもとにして、展開していこうと意図するようになってきた。「子どもたちの言葉を流行らせる」というイメージをもつ。
- 単調な授業ではなくなった。“教師対1人”の繰り返しだけでなく、隣同士で話し合って深める時間や、学びに向かう時間が増加した。協働学習とは、教師と学級全体のやり取りを繰り返していくことも協働学習と捉えられるのではないだろうか。
- 子どもの思考量が増えている感覚を得た。思考がスムーズに流れることを考えて、授業づくりを

していくようになった。「思考を止めない」という意識をもつ。

- ファシリテーションの考え方や技術の導入は、協働学習・個別学習を考えることそのものである。
- ファシリテーションの考え方を授業に導入するということは、子どもに学びをゆだねること。一方で、学習のねらいや正しい知識は教えていく必要がある。おさえるべき学習内容や知識を、正確に抑えられないのではないかと懸念される。だからこそ、単元題材計画の中に適切に協働学習を設定していきたい。

2【児童の考え方や協働的な学びがどのように深まっていくのか】

- 子どもたちは、ひとつの考え方のみで満足しなくなってきた。ファシリテーショングラフィックを意識した教師の板書を指さしながら、少し前の友達の発言に戻って話を広げたり、友達同士の考えを関連づけたりしていた。ファシリテーショングラフィックは、児童の思考を支える立派な材料となる。
- 考え方や学び方を深めていくためには、まず、全員を同じスタートラインに立たせることが必要である。目的を共有し、明確にするからこそ、協働的な学びの効果が発揮され、促進される。
- 低学年であっても、経験によって学習の深まりは増す。教師が継続して、子どもの発言をそのまま板書したり、言葉をかけていったりするうちに、2学期になると、友達の発言との関連性や自分の立場を示しながら発言する児童がでてきた。また、正解でなくても間違えた理由や、どうすれば正解になるのか議論する姿が現れてきた。学習に深まりがでてきている。

Ⅲ 成果物

- ・ 各実践をまとめたポスター
- ・ 学級力向上プロジェクト情報交換会時に作成した資料

合意形成の経験値UP
『1000gに挑戦!!』

指導者：藤木真里佳 五十嵐祐太

目的：合意形成の経験を増やそう

＜現状の課題＞ 子供たちの合意形成の成功経験が少ないのでは？

①話し合いの時間が確保できない

合意形成にはテーマによって大変時間がかかる。学活での話し合いを何時までとれない

②話し合いの趣旨が難しい

話し合いの内容が悪い入れが過ぎると折り合いが付けづらい。なだめると議論にならない

＜実践内容＞ 合意形成をゲームで体験しよう！

グループごとに理科室のものを色々合わせて1000gを目指そう

グループごとに理科室の中の物を持って重さを感じ取りながらトレイに載せて、15分間で合わせて1000gを目指します

＜ヒント＞ ①1000gの目盛りを持つ ②物の重さを1つだけ計れる

＜ファシリテーターとしての意識＞ 合意形成を成立させるために

話し合ってグループ全員が納得して進めていこう

○前提のルール（事前指導）

- ・グループ全員で一緒に動こう！
- ・必ず相談して全員納得して進めよう！
- ・「これはダメ」ではなく「こっちの方がいい」で改訂を目標にしよう！

○声掛け（ヒント①②を使うとき）

- ・「○○さんが1000g持つてOK？他の人持つてないよ？全員納得してる？」
- ・「○○の重さを計るよ？他の物計れないよ？全員納得してる？」

★実践を通して得られた成果★

納得解を作ることができた経験

どのグループでも決めた重さの範囲で重さを出せた。納得した重さの範囲で重さを出せた。グループメンバー間で納得した重さを出せた。グループメンバー間で納得した重さを出せた。

意見を言いやすいグループ関係

グループの中で意見を出し合うことが増えた。グループの中で意見を出し合うことが増えた。グループの中で意見を出し合うことが増えた。グループの中で意見を出し合うことが増えた。

★今後も子供たちに様々な合意形成の成功体験をさせていきたい★

お互いにフォローしあう集団に...😊

個人

1学期は、個人に目を向け、それぞれの得意なことをピックアップすることが多かった。+ 学習規律の指導

2学期は、各自の得意を活かして、お互いにフォローしあえる集団になっていくよう意識し、写真を撮りためようと思いついた。

集団

まとめ：集団としての意識の統一、自己有用感、居場所をつくる

子どもの意見を引き出すファシリテーショングラフィック

藤木 優美

（これまで）

入学してからこれまで新しい友達ができ、学校生活に慣れることに重点を置いていた。色々なことが新しく、初めてのことはばかりで、教師側から指示したり指導したりすることが多かった。

意識したこと

- ・ ややかなどの記号表現の工夫
- ・ 子どもの意見をどの程度文字に
- ・ クラスから意見を考えさせ、自分事にする
- ・ すべての意見を中立的に受け止める、漢字と板書
- ・ 簡潔で分かりやすいファシリテーション（共通事項を定めること）

成果

- ・ 話し合いを経て、子どもたちで声をかけあい、進んで行動できる意見が増えた。
- ・ みんなで決めた目標を達成する喜びを味わった。

課題

- ・ 様々な意見が出るため、その場でどこに書くか、どうまとめるかが難しくなった。
- ・ 発達段階によっては過度な情報量は分かりづらいため、色で印を書いたりマークをつけたりするとよかった。

（これから）

教師の手を少しずつ引き、放していくことで「自分たちでやるのは楽しい」「こんなこともやってみたい」という気持ちが増えつつ出てくる。じっくりクラスで考える時間を大切に、そのような機会を増やしていきたい。

～まとめ～

見える化することでお互いの発表相互のつながりが見えやすくなった。また、子ども全員が意見を言えることで一人ひとりが自分事として考えるようになった。今後とも繰り返し実践し、「話し合いって楽しい」と思ってもらえるように取り組んでいきたい。

（研究主任 藤木真里佳）

「主体的・対話的で深い学び」に向けた学びの創造

～ I C T 機器の活用を通して～（3年次）

I 研究内容

- 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向け、I C T 機器を使用した授業実践。
活用を始めて3年目となった今年度は、これまでの研究をうけ一人一台端末のさらなる活用を目指し、授業内での活用場面を区別しながら活用方法を研究していく。
- 2 I C T 機器の計画的な活用、活用スキルの向上
各学年、ブロック、全体において情報交換の機会を設定し、各教科で計画的に活用していくようにする。また、本来の研究計画とは別に、短い時間でのミニ校内研を実施し、教員全体のスキル向上を図っていく。
- 3 授業以外での校務 DX
「学級力向上プロジェクト」や「八のつく日のふりかえり」等の既存の取組を、エクセルの共同編集やフォームのアンケートを活用することで、入力や集計の時間を削減したり、用紙の削減等を行ったりして、DX化を図りながら進めていく。

II 具体的な研究活動

- 1 リーディングDXスクール事業に関わる研修会の実施
 - (1) (4月26日)
 - ・「1人1台端末を活用した授業づくりの考え方」について
講師の先生に本校の授業を参観していただき、それを踏まえてのご講演
講師： 山梨大学教育学部准教授 文部科学省学校DX戦略アドバイザー 三井一希 先生
 - (2) (5月17日)
 - ・「GIGAスクールにおける学び」
講師の先生に本校の授業を参観していただき、それを踏まえてのご講演
講師： 柏市教育委員会 教育研究アドバイザー（以降省略）
文部科学省学校DX戦略アドバイザー 西田光昭 先生
 - (3) (7月5日)
 - ・「児童生徒の端末の持ち帰りによる家庭学習、校務の効率化や対話的・協働的な職員会議」
講師： 文部科学省学校DX戦略アドバイザー 西田光昭 先生
 - (4) リーディングDXスクール事業アドバイザーと先進校教諭による学習会（8月10日）
 - ・「1人1台端末＋クラウド環境の日常的活用による主体的な学びの実現＋校務・研修改善」
講師： 春日井市教育委員会教育研究所 水谷年孝 先生，春日井市教育委員会指導主事
春日井市立藤山台小学校教諭，春日井市立高森台中学校教頭，
 - (5) リーディングDXスクール事業アドバイザーによる講演会（8月21日）
 - ・「GIGAスクール構想下におけるデジタル・シティズンシップ教育」
講師： 京都教育大学 専任講師 大久保紀一郎 先生
 - (6) (12月13日)
 - ・「主体的・対話的で深い学び」に向けた学びの創造 ～ICT 機器の活用を通して～
講師： 文部科学省学校DX戦略アドバイザー 西田光昭 先生

2 主体的・対話的で深い学びを支えるICT機器を使用した授業実践

(1) 校内授業研究会(10月25日)

音楽科「いろいろながっきの音をさがそう」 2年3組 大久保 有羽 教諭

指導助言: 文部科学省学校DX戦略アドバイザー 西田光昭 先生 先生

(2) 公開授業研究会(11月21日)

国語科「世界にほこる和紙」 4年2組 橋本 耀太 教諭

指導助言: 文部科学省学校DX戦略アドバイザー 西田光昭 先生 先生

3 既存の様々な校内の取り組みをよりスマートに行うためのクラウド環境の活用

(1) 八のつく日の振り返り フォームによる集計

(2) 「学級力向上プロジェクト」 フォームによる集計・グラフ化

(3) 各種アンケート(学校評価など)

(4) 職員会議・校内研究でのクラウド活用

(5) 授業時数、週予定、支援体制のスプレッドシートの活用による一元化

(6) 欠席連絡のフォームでの受付・スプレッドシートで集計し各クラスに配布

Ⅲ 成果と課題(○成果 ●課題)

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向け、ICT機器を使用した授業実践

○児童が自分の考えをまとめていく場面では、ICT機器がより効果的に活用できた。

○研究授業はもちろんこと、日々の実践を通して、教員同士で情報交換を行う中で成果や課題、改善点を共有することができた。また、それをもとに、様々な教科でのICT機器の活用にチャレンジすることが増え、活用が進むと児童の情報活用能力も向上し、さらなる課題を見出すことにつながった。

●情報活用能力の向上が見られた一方で、書く力など、ICT機器の活用以外の児童の表現の能力の低下が見られる。

●ICT機器を用いて「深い学び」につなげていくためには、活用スキルの向上は必要不可欠で、そのための指導も欠かせない。系統的な指導計画をもとに、各学年で指導にあたる必要がある。

2 ICT機器の計画的な活用、活用スキルの向上

○講演会や講義を通して、新しいアプリやその具体的な活用方法を知ることができ、活用することへの意識が上がり、各々の授業実践に活かすことができた。

●効果的なアプリや活用方法が様々ある中で、児童が実際に活用するとなると、できることとできないことがあり、発達段階を考慮する必要性が見出された。ホームポジションの指導等、教員間での共通理解と学年を系統的に見た計画的な指導が必要である。

3 授業以外での校務DX

○ドライブの活用により、連絡帳や欠席児童とのやりとり、課題の配布、時数集計、お便りの作成等、様々な面で校務がスムーズになった。

●保護者にも1人1台端末の活用、ドライブベースでの作業を周知しながら慣れてもらうことで、今後、より校務の簡易化が図られていく。

Ⅳ 成果物

1 研究授業指導案

2 Google Workspace for Educationのアプリや授業支援ソフトを活用して作成した様々な教材

3 「八のつく日」の振り返りに関する資料

4 「学級力向上プロジェクト」に関する資料

5 各種アンケート

6 校務DXに関わって作成した様々なファイルやデータ

(研究主任 佐久間 剛)

研究主題

児童が主体的・協働的に学ぶ授業を目指して(3年次)
～ICTを効果的に活用した授業実践～

I 研究の内容

1 めざす子ども像

各教科において、ICT 機器を効果的に使うことで子どもたちが主体的・協働的に学ぶ授業を創造することができる。

- ・見通しをもって学習に取り組む子ども
- ・学習課題を見つけ間違えたり失敗したりしても粘り強く取り組む子ども
- ・学習活動を振り返り、新たな課題を見出す子ども
- ・子ども同士の協働、ほかの人との対話など異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出す子ども

2 研究の内容・方法

(1) 今日的課題関連の学習

ICT 校内研修会を行い、ICT 端末の操作方法などを確認する。全職員の ICT のスキルアップを行う。

(2) 授業研究

指導主事等を要請し、授業研究による検証を行う。

(3) 一人一実践の公開授業

一人一実践を公開し、授業改善と授業力の向上を図る。

(4) 児童の実態分析と指導法の改善

全国学調の結果分析から、本校児童の実態把握をし、授業づくりの視点や指導法の共通理解を図る。

(5) 教育課程説明会の環流報告

3 実践内容

(1) 今日的課題関連の学習

山梨県総合教育センターの中村忠廣主幹指導主事を講師として迎え、ICT の活用についての学習会を行った。思考ツールや Google for Education について具体的に学ぶことができた。また、かえで支援学校の梅澤陽子先生を講師に迎え、「特性のある児童への支援について」というテーマで特別支援教育にかかわる学習会を行った。

(2) 研究授業

6学年1組 算数科「データの特ちょうを調べて判断しよう」

授業者 新藤 圭悟

研究授業では、自分が問題に思ったことに対して、情報を集め、整理・分析し、解決へと繋げられるようにするためにICTを活用することで情報の収集や整理が、より簡単に、より正確にできるICTの特性を利用した。

・使用場面

個別学習でデータを読み取り、結論を出す個別解決の場面

・目的

データの整理(データ収集・グラフ作成など)、スライド作成

・使い方について

スライドを使い、自分の考えをまとめる。

スプレッドシートで学習感想の記入。

グラフ作成ソフト(sgrapa)でグラフ作成。

(3) 一人一実践

一人一実践として、9名の教諭が授業公開を行った。校内研の研究主題に基づき、ICTを効果的に活用した授業に取り組んだ。可能な限り授業を参観し、紙面での意見交流を行った。また、「一人一実践報告会」を3回に分けて行い、参観することができなかった実践についても情報を共有できるように工夫した。

II 成果と課題

1 成果

- 日々の授業で、ICTを活用しているので、児童のスキル上達がみられる。また、思考ツールを使って自分の考えをまとめることができるようになっている。
- 教員側としても活用大切さを学び、意識して有効利用することができた。また端末の活用について具体的な学習会を行うことができた。教職員のICTのスキルアップにつながり有効だった。
- 一人一実践を公開しあったことで、自分の授業に生かせることを学ぶいい機会になった。
- 特別支援教育について学習会があったことで、対応の難しい児童に対して気をつけなければいけないことなどがわかってよかった。

2 課題

- 目先のICTの利活用のみにとらわれず、広く人間形成を目指すことを視野に入れながら、ICTのメリットとデメリットを理解した上で、本来の目的を達成するために適切な方法をその都度考えていくことが大事だと思う。
- ICT機器の過度な利用は心身の健康(特に視力)に影響を及ぼすことが危惧されている。健康に留意してICTを正しく使うことについても確認しておきたい。また、1日のICTの利用(普段、勉強のためにICT機器を使う)時間が長いほど全国学力状況調査の正答率が低いというデータもあるので、実際に1日の使用時間はどのくらいなのか考えるうえで、学校での利用時間についても考慮していきたい。

(研究主任 岩下 亜希子)

「自ら学び、豊かに表現し、深い学びに向かう児童の育成」

～ICTを効果的に活用した授業づくりを通して～

I 研究の内容

1 豊かに表現し深い学びを目指した授業づくり

- (1) 一人一台端末の活用についてのスキルアップ研修会
- (2) ICTアプリの活用例の紹介(一人一実践の交流会)

2 ICT端末を活用した授業研究

- (1) 公開授業研究 第4学年 国語「ごんぎつね」 吉澤 成南教諭
- (2) 一人一実践
 - 第1学年 算数科「けいさんぴらみっど」 高野恵美子教諭
 - 第2学年 音楽科「ようすをおもいうかべよう」 行田 玲子教諭
 - 第3学年 国語科「すがたを変える大豆」 宮澤みさ子教諭
 - 第5学年 国語科「新聞を読もう」 望月 泰祐教諭
 - 第6学年 英語科「Unit6 This is my town.」 鈴木 陸人教諭
 - 第6学年 家庭科「こんだてを工夫して」 窪田真由美教諭
 - はぐくみ 国語科「かたかなで書くことば」(2年) 三枝 剛 教諭
 - かがやき 国語科「くじらぐも」(1年) 岩森智香子教諭

3 学びを支える学級集団づくり

- (1) 学級力向上プロジェクトへの取り組み(児童の回答をICT Formsで実施)
- (2) WEBQU(3,4,5,6年生)の2回実施と分析および具体的対応
- (3) 授業と家庭学習の有機的な結びつけ
 - ア ICTを活用して家庭学習の取組を全校で実施。(AIドリル)
 - イ 自主学習ノートの取組と学習意欲の喚起

4 今日的教育課題関連の学習会

- (1) 「WEBQUの結果を活用する学級集団の理解と対応のヒント」
講師：公認心理士・学校心理士・上級教育カウンセラー
跡見学園女子大学 非常勤講師 品田笑子様
- (2) 「特別な支援を必要とする児童の支援」
講師：山梨県教育庁特別支援教育・児童生徒支援課
副主幹・指導主事 北畑貴美様
- (3) 「きれやすい子の背景と衝動のコントロールエクササイズ」
講師：スクールカウンセラー 國政友子様
- (4) 「第1回 ICTを効果的に活用した授業づくりを通して」
講師：研修指導課 指導主事
文部科学省初等中等教育局 GIGA StuDx 推進チーム 有賀拓也様
- (5) 「保健学習会～性の多様性の理解と緊急対応について」
講師：養護教諭 窪田敬子教諭
- (6) 「第2回 ICTアプリについての研修会」(校内情報担当職員)
講師：鈴木陸人教諭(Googleアプリ)
望月泰祐教諭(スクールタクト)
- (7) 「AIドリル学習会」 講師：尾美奏子様

Ⅱ 成果と課題

Ⅰ 成果

【ICTを活用した授業づくりについて】

- 講師を招いたICTの研修により、知識を得ることができてよかった。自分のスキルを高めたり、授業で活用したりすることができ意識改革となった。授業で利活用していくことと職員間での利活用を同時に進行して取り組めたこともよかった。また、スクールタクト、google for educationのそれぞれの特性を活かした授業実践の共有とアプリの汎用性を意識した実践をすることもできた。
- 様々な活用の方法や場面があり、一人一実践でも教科の特性を考えた活用方法が情報提供されとても有意義だった。また児童の端末操作の技能の向上も見られた。
- 児童同士の共有だけでなく、個別の進度を把握しながら進めることができたところがよかった。
- ICTの活用で4年生の公開研究授業から自分とは異なる考え方や見方があることを授業内で知ったり比較できたりする有効性が実証された。
- ICTの利活用に伴い、使用のルールやマナーについての全校集会や講師をお招きした情報リテラシーの合同授業を取り組んだことは、その後の端末活用の授業につながり児童が自ら留意するようになった。
- AIドリルについて全職員で研修し、児童の学習進度への対応および家庭学習との両面からハイブリッドな活用を保護者に説明する機会を設定でき、家庭の理解を得られたことがよかった。

【学びを支える基盤づくり（学級集団づくり）】

- ICTを利活用して豊かな表現を目指していくためには、学級づくりが基盤となる。本年度は学級力だけでなくWEBQUの実施にあたり講師を迎えて分析とその対応について、全職員で本校の学級を事例に研修できたことが、各学級集団の分析と対応を早期に検討できたことがよかった。
- 学習理解のためだけでなく、学級集団にどう効果的にICTを活用していくかという視点でも話し合いがなされ、研修内容をすぐに学級経営に反映させることができるようになっていた。学級力アンケートもグーグルフォームで行うことができるようになり、アクションに素早く移すことができた。

【今日的教育課題関連の学習会】

- ICT、WEBQU、特別な支援を必要とする児童への対応、保健関係など本校に必要な学習会を年度当初にプラスして実施したことで、全職員で本校の課題を共有しその分析や対応について検討していったことは、学級集団だけでなく学校集団の基盤づくりともなった。

2 課題

- ▲「山梨市小中学校ICT活用スキル系統表」を意識しながら指導してきた。授業でICTの活用をしていくうえで、児童のタイピング力をどのようにつけていくのかを校内で確認していくことが必要である。特に、3年生からのローマ字と英語の学習との関連を考えて、個人差が生じないように、計画的なタイピング指導の基盤づくりが必要になる。
- ▲ICTを活用し子どもが主体的に学ぶ授業づくりの基本スタイルを全職員で学ぶ研修を設け、個別最適化の授業にどのように対応・変革していくのかを学ぶ必要がある。
- ▲授業および家庭学習において、AIドリルを取り入れていくことで個別最適化に対応できることが臨める。これまでのようにノートやプリントなどに書いて学習するよさや必要性もあるが、AIとの両面を生かしたハイブリッドな展開で、個別最適化の指導を探索する必要がある。

Ⅲ 成果物

- 1 公開研究授業および一人一実践の指導案9点
- 2 学級力向上アンケート結果（各学年 2～3回実施）
- 3 WEBQUの結果（3年生以上 2回実施）

（研究主任 宮澤みさ子）

確かな学力の定着・向上を目指した指導の工夫

～ ICT を効果的に活用した授業づくり ～

本校ではこれまで、基礎学力の確実な定着を図った授業づくり・授業改善を進め、児童の確かな学力の定着・向上を目指し研究を進めてきた。昨年度に引き続き、新しい時代に必要となる資質・能力の育成に努め、主体的・対話的で深い学びに迫るとともに、ICTも最大限活用しながら、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する『個別最適な学び』と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす『協働的な学び』の一体的な充実を図るよう、授業実践を通して研究をすすめた。

I 研究の内容と方法

1 授業づくりの研究

(1) 講師を招聘しての学習会

- ・ICT 活用についての学習会

- ①5月24日「Google Classroom」について JINS担当

- ②7月19日「ICT活用研修会」学校教育課 志村貴美子指導主事

(2) 課題解決に向けた取り組み

- ・ICT活用交流会(各学級での実践や課題を共有)

- ・LDX事業 還流報告・学習会

- ・ICT を取り入れた対話的な学びを工夫した授業研究

- ・一人一実践授業

2 学級力向上プロジェクトへの取り組み

(1) 学級力プロジェクトの学習会

(2) 学級力アンケートの実施,スマイルアクションの実施

(3) 実践共有

3 積み上げてきた研究・学習環境づくりの継続

(1) 学習のきまり

- ・「学習あたりまえ6か条」の継続とバージョンアップ

- ・対話を支える話し方の指導:話型の揭示,伝え合いの仕方の定着

- ・「やまなしスタンダード」のあり方について検討

(2) 家庭学習と連動した授業の工夫

- ・「家庭学習の手引き」の活用

- ・「自主学習ノート」の取り組み

- ・家庭でのタブレット活用実践の交流

Ⅱ 研究実践

Ⅰ 授業研究

第Ⅰ学年 生活科「きせつとあそぼうーあきー」 授業者 山下 陽子

Ⅱ 一人一実践授業

2年, 3年, 4年, 5年, 6年, 特別支援(なかよしⅠ なかよしⅡ ひまわり), 教務

Ⅲ 成果と課題

Ⅰ 第Ⅰ学年生活科授業実践に関わって

見つけたものを写真に撮ったり, それを紹介したりする活動において, タブレット端末を有効に取り入れての授業実践であった。子どもたちがそれぞれねらいを持ち, 意欲的に活動に取り組んでいた。友達と交流したりすることができていた。そこには子どもたちの学ぶ意欲がしっかりと学習場面に表れ, 対話的な学習を行うことができていた。また, 教師も児童も ICT の活用能力が高く, 日頃より児童の活動をうまく引き出すための ICT の活用が積み重ねられていると感じられた。今後さらに効果的に ICT を活用するにあたっては, 活動の切り替えや, 対話場面での話し方・聞き方といった学習規律や基本的な学習態度についてはしっかりとおさえていかなくてはならないと再確認された。

Ⅱ ICTを活用した『個別最適な学び』と『協働的な学び』に関わって

授業実践・一人一実践では, 多くの授業で自己調整をしながら学習を進める手立てが工夫されており, 個別最適な学びを意識した授業実践を共有することができた。また, 児童の課題解決場面や, 授業の振り返りなどでは, 異なる考えが組み合わさり, より良い学びを生み出していた。協働的な学びも進められてきたことで, 今後必要とされる児童の資質・能力についても具体的に共有することができた。そして『個別最適な学び』と『協働的な学び』を進めていくにあたり, やはり ICT は大変有効であると共通確認された。

Ⅲ ICT活用と学習環境・基盤づくりに関わって

今年度も学級力向上プロジェクトや学習のきまり, 家庭学習の視点からも児童の確かな学力の向上について研究を進めた。『個別最適な学び』と『協働的な学び』や今後必要とされる児童の資質・能力に関しても, ICT を活用する能力だけではなく, 安心して意見を交流できる学級や, 他者を認め合える学級づくりといった学習環境整備が必要不可欠であると確認された。また, 家庭学習についても, 生涯にわたって能動的に学び続ける力を実行する貴重な場面であることをおさえ, 今後も継続的に指導していくことが必要であると再認識された。

Ⅳ 成果物

Ⅰ 授業研究 指導案

第Ⅰ学年 生活科「きせつとあそぼうーあきー」 山下 陽子 教諭 指導案

Ⅱ 一人一実践授業 指導案

Ⅲ 「学習あたりまえ6か条」 低学年・高学年用

(研究主任 雨宮 菜月)

「生きる力を支える確かな学力の育成」

～ICT を効果的に活用した、主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり～

I 研究の内容

1 授業づくり

(1) 「やまなしスタンダード」の5つの視点に基づいた授業改善

- ②話合い、討論、発表などの言語活動を効果的に取り入れている。
- ③児童生徒は、他の人の話や発表に耳を傾けている。
- ④児童生徒は、ノートをとっている。
- ⑤活用・探究など、学んだことを別の場所で使うようにしている。
- ⑦家庭学習(宿題や課題)と授業が、有機的に結びついている。

《特別支援教育版》

- ②障害の状態に応じて自ら考え、判断し、表現する活動を具体的に取り入れている。
- ③自主的・自発的な学習を促す教材・教具等を用意している。
- ④達成感や自己肯定感が高められる指導を工夫している。
- ⑤学んだことが活用できる場を設定している。
- ⑥学んだことと実際の生活との関係を示し、学ぶ意欲を育てている。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現

一人一実践授業を実施(10月～1月)

- ・ICTを効果的に活用した授業づくりを行う。
- ・発問や問い返しを工夫する。
- ・板書やノート等とICT端末の作業バランスを考える。
- ・お互いに授業を参観し合い、意見交換をする。

第1学年 国語科 「これは、なんでしょう」

第2学年 国語科 「冬がいっぱい」

第3学年 音楽科 「ちいきにつたわる音楽でつながろう」

第5学年 算数科 「面積の求め方を考えよう」

第6学年 算数科 「おもしろ問題にチャレンジ(割合の表し方を調べよう)」

あおぎり学級・なかよし学級・たんぽぽ学級(第4・5学年)

自立活動 「宝さがしでクイズ！」

なかよし学級・たんぽぽ学級(第4学年) 国語科「プラタナスの木」

(3) 授業研究会(11月1日)

第4学年 算数科「面積のはかり方と表し方」

授業者 菅野 雄太 教諭

指導助言 峡東教育事務所 小林 みずほ 指導主事

峡東教育事務所 藤森 一樹 主幹・指導主事

(4) 実践的な学習会の実施

①ICT端末の基礎的・応用的な操作について(講師：株式会社ジインズ様)

②学級力向上プログラムについて(講師：高野 栄子 教諭)

2 学級・学習習慣づくり

(1) Q-Uの分析方法と学級経営の生かし方学習会の実施

Q-Uの結果を基に、各学年「Q-U学級支援シート」を作成し、学級集団のタイプ・

個別支援が必要な児童の様子・今後の取り組み方針などを確認した。

(2) 家庭学習の充実

- ・日課の中に、家庭学習スタンバイの時間を設定し、各学年の発達段階に応じて家庭学習の習慣化を図った。
- ・家庭学習の主旨について理解を深めてもらえるように、おたよりや学級懇談会を通じて保護者に説明をしたり、子どものノートを学年だよりに掲載したりして家庭との連携を強化した。

3 その他

(1) 情報交換

家庭学習や ICT の効果的な活用方法、教材教具の工夫・活用、学級づくりなど、お互いの実践例を発表し合い、年間のまとめを研究紀要に記載。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果の分析

(3) 研修会の還流報告

校内研の時間に情報交換の場を設け、参加した研修会の還流報告や参考になる実践例、最新の情報などについて発表し、参考とした。

II 成果と課題

- 八幡小児童の課題を把握し、「やまなしスタンダード」の5つの視点を意識する中で、授業づくりに取り組むことができた。
- クロームブックの操作について、基礎グループ・応用グループに分かれて学習会を行ったことにより、それぞれのレベルに合った研修を受けられることができた。
- ICT を効果的に活用した、主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりに主眼を置き、研究を進めたことで、ICT 機器を授業に取り入れ、自分の考えをまとめ、さらに他者の意見や考えも共有するツールとしての活用を全校で進めることができた。
- 研究授業や一人一実践を実施することで、各学級で研究テーマを意識した授業実践をすることができた。ICT の効果的活用に焦点を当てた授業実践が多く行われ、学びの質を向上させるとともに、職員同士も学び合い、自身の授業改善につなげることができた。
- 自主学習ノートの掲示や、家庭学習スタンバイの時間を活用して、友だちが取り組んだ学習内容を知る機会を与えたことにより、自分の学習に生かそうとする児童の姿が見られた。
- 学級力向上プロジェクトの基本的な考え方や、具体的な取組などを学び合い、全校で取り組めることができた。今後も情報を共有しながら学習会を継続していきたい。
- 全国学力・学習状況調査の結果の分析を行い、明らかになった本校の課題に対してどのように取り組むかを職員全体で話し合い、共通認識をもって授業改善に取り組むことができた。
- △ICT 端末を活用する必要性については、授業の目標を念頭に置き、児童が主体的に課題達成を目指せる内容であるか、検討することも大切である。
- △一人一実践に関しては、成果の共有という面で課題が残った。
- △自主学習については、ノートだけではなく子どもの実態に応じた取り組み（ICT 端末等）を考えていく必要がある。

III 成果物

- 1 研究授業・一人一実践の授業実践報告書
- 2 「学級・学習習慣づくりの取り組み」各学級の取り組みと成果・課題
- 3 Q-U 学級支援シート など

(研究主任 精進 利恵)

I 研究の内容

1 研究主題

『自ら考えをもち、考えの幅を広げ、深めるための指導の工夫』
～「学び」にICTの活用を取り入れた授業づくりをとおして～

2 主題設定の理由

学習指導要領においては、情報活用能力を言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付け、育成を図るとともに、学校のICT環境整備とICTを活用した学習活動の充実を明記している。ICTを含む様々なツールを駆使し、探究のプロセスにおける様々な場面において、ICTを効果的に活用していく力を育成していく。また、学びを深化するために必要となる情報活用能力や社会とつながる協働的・探究的な学びを通じて、資質や能力を育成していくことも求められている。そして、知識という情報を共有し、考えを交流、議論させ、自らの学びをより深くしていく場面を学校の教育現場において多く設定していくとともに、基本となる知識の習得とその知識を組み合わせる創造的に問題を解決する力の育成も求められている。

以上のことから、学力向上の基礎となる確実な知識・技能の習得を行い、得た知識・技能を活用して、深く多角的・多面的に考え、課題を解決することが課題となる。児童がより論理的に思考し、互いの考えを交流させながら創造的に問題解決していくことができるよう、ICT機器をより効果的に取り入れた授業づくりを中心に研究を進めていきたい。

3 研究の目標

ICT機器の活用を取り入れた授業づくりを通して「主体的・対話的で深い学び」の実践研究による授業改善を図る。そして、児童の学習意欲や自己の考え等の変容をもとに、教育的な有効性について検証していく。今年度はさらに、自分の考えの根拠となることを「検索」し、そこから必要とする情報を取捨選択する情報活用能力と言語活動の充実を図り、考えを再構築していく過程も大切にしていきたい。

4 研究の内容

(1) 基本的な知識・技能の習得をはかる指導の工夫

- ア 知識を確実に習得させる手立ての工夫
- イ 複数の場面に汎化できる学習技能の指導
- ウ やまなしスタンダードへの取り組み

(2) 論理的思考力を伸ばす指導の工夫

- ア 知識・技能を活用する場面を仕組む授業
- イ 考えの変容をねらいとしたICTを効果的に活用する場面を仕組む授業

(3) 家庭との連携

ア 家庭学習への取り組み，自主学習の質の向上

【「未来へつなごう岩手っ子の学び」…毎月18日に家庭学習の振り返りを行う】

5 研究の方法

(1) 全体研究…指導の内容や方法の工夫を学ぶ等，共通理解のもと研究を進める。

(2) 研究授業…年間1本行い，全体で研究を行う。

(3) 実践授業…一人一実践で授業提案をし，全体で研究会を行う。

Ⅱ 成果と課題

1 成果

教職員の ICT 機器への活用が積極的になり，授業実践が飛躍的に進んだ。また，教師が児童の実態をふまえた上で ICT 機器を活用した多様な授業づくりを進めたことで，児童の活用技術も上がり，情報の収集，整理・表現において成長が見られた。特に今年度の目標であった「自分の考えの根拠となることを検索し，情報を取捨選択する情報活用能力が育ってきたことが大きな成果であるといえる。

2 課題

主体的・対話的な学びを促すためには，ICT 機器を活用しながら「協働的な学び」と「個別最適な学び」の2つを実現していかなければならない。教職員・児童共に ICT 機器の活用には慣れてきたが，情報の整理・分析，思考・判断，他の児童と共有し合う発展的な学びにおいては課題が残る。課題解決のためには，今後も児童が論理的に思考し，互いの考えを交流させながら問題解決していけるよう，ICT 機器をより効果的に取り入れた授業づくりの研究を検討していかなければならない。そのためには，授業で活用したシートや活用例を日常的に情報共有し，学校の財産として残す等の工夫を継続していく必要がある。

Ⅲ 成果物

1 授業実践指導案及び記録（※は全体研究授業）

(1) 1 学年	国語「じどう車くらべ」	山宮 彩子教諭
(2) 2 学年	算数「三角や四角の形をしらべよう」	関口 若子教諭
(3) 3 学年	国語「漢字の意味」	今澤 比呂樹教諭
(4) 4 学年	算数「計算のやくそくを調べよう」	廣瀬 明子教諭
(5) 5 学年	※国語「資料を用いた文章の効果を考え，それをいかして書こう」	桐山 祐希教諭
(6) 6 学年	国語「テーマを決めて調べよう」	望月美奈子教諭
(7) おおぞら教室	国語「かたかなで書くことば」	加々美教子教諭
(8) わかばと教室	理科「電気と私たちの暮らし」	古屋 裕太教諭

「歯・口の健康づくりのために、主体的に考え、行動する児童の育成」
～プログラミング的思考の活用を通して～

I 研究の内容

1 主題設定の理由

昨年度まで研究を進め育成してきた「プログラミング的思考」は、様々な分野で活用することができる。昨年度は、「プログラミング年間指導計画」を基本とし、各学年教科を中心とした学習の中で育成に努めてきた。児童も、順序立てて考えていくことで思考が整理され、理解力も高まった。そこで今年度は研究指定を受けた「歯・口の健康づくり」について昨年度までに育んできた「プログラミング的思考」を活用することによって、主体的に考え行動する児童の育成につながり、効果的に筋道を立てて考え、より深い学びへと展開していけるのではないかと考え、研究主題と副題を設定した。

2 研究の具体的内容と方法

(1) 研究の内容

- ア 健康な体（歯・口）についての学習会を開き、授業研究の推進を図る。
- イ プログラミング教育のねらいであるプログラミング的思考の育成とは、どのようなことかを更に理解を深める。
- ウ 自校の現状や課題を把握する。
- エ 授業実践や委員会での活動を行い、その結果を分析し、本研究の成果と課題を明らかにし、今後の指導に生かす。

(2) 研究の方法

- ア 講師を招聘しての研修会（歯・口の健康づくり，プログラミング的思考）
- イ アンケートや検診結果を分析・集計
- ウ 一人一実践報告（学級活動・各委員会での取り組み）

3 研究実践

(1) 研修会① 『「生きる力」を育む 学校での歯・口の健康づくり』について

講師 山梨県教育庁保健教育課 指導主事 遠藤 和代 先生

研修会② 『「プログラミング的思考」とは何か、活用の仕方』について

講師 山梨県教育庁義務教育課 副主査・指導主事 雨宮 正倫 先生

研修会③ 『令和5年度児童の歯と口の健康課題について』

講師 若月歯科クリニック 院長 若月和美 先生

(2) 授業実践【各学年・各委員会の取り組み】

ア	第1学年	鶴田 望	教諭	『歯の役割と虫歯について考えよう』
イ	第2学年	笠井 裕弥	教諭	『歯に良い食べ物について考えよう』
ウ	第3学年	相澤 拓実	教諭	『歯みがき上手になろう』
エ	第4学年	名取 夏海	教諭	『正しい歯の磨き方を知ろう』
オ	第5学年	古谷奈都美	教諭	『調べたことを正確に報告しよう』
カ	第6学年	川手 太朗	教諭	『私たちにできること』
キ	児童会	川手 太朗	教諭	『こどもまつり』他
ク	環境整備委員会	土橋 洋子	教諭	『水道場の環境整備』
ケ	保健委員会	遊免阿里沙	教諭	『保健集会の取り組み』他
コ	放送委員会	清水 正俊	教諭	『歯磨きソング制作・歯みがき動画』他
サ	給食委員会	橘田 栄	教諭	『歯に良い食べ物クイズづくり』他
シ	体育委員会	小林 宏美	教諭	『ケガ防止のためのポスター作り』
ス	図書委員会	清水 恵	教諭	『歯に関する本の読み聞かせ』他
セ	保健指導	丸山沙緒里	養護教諭	『歯磨き指導、歯・口に関する掲示物』

II 成果と課題

1 成果

- (1) 歯みがきチェック、毛先チェック、歯っぴーノート、歯みがきカレンダー、アンケートなど、様々な観点から現状分析、課題把握を試みたことは有意義だった。
- (2) 歯科校医を招いての学習会や、親子活動や学級活動の中で歯科衛生士による学習を実施できて、教員も保護者も歯と口の健康づくりの理解を深められた。
- (3) ジャムボードを活用した染めだしは、自分自身の口の状態を確認できた。学校ではなく家庭で行ったことで家庭と連携しながらゆっくり観察することもできた。

2 課題

- (1) プログラミング的思考について、学習会をして、理論については理解ができたが、歯と口の健康づくりに生かしていく難しさがあった。
- (2) プログラミング的思考の活用について、具体的にどの場面において効果、成果が見られたのかを可視化できると更に良かった。

III 成果物

- 1 一人一実践の授業実践活動報告書・指導案
- 2 学習会に招聘した講師からご提供いただいた資料
- 3 「歯・口の健康づくりについて」に関する意識アンケート
- 4 各学年・各委員会で作成した掲示物等

(研究主任 笠井 裕弥)

「自ら課題を見つけ、自ら解決しようとする児童の育成」

～思考スキルを活用し、個別最適な学びと協働的な学びの日常化を通して～(1年次)

I 研究内容

1 研究内容

(1) 問題解決能力を高める探究プロセスへの授業改善について研究する

- ・ 問題解決能力を高める探究プロセスと南小思考スキルを活用して、授業改善を図る。
- ・ 「シンキングサイクル」と「南小思考スキル及び見方・考え方」を組み合わせる。
- ・ 個別最適な単元構成のカリキュラムマネジメントを行う。
- ・ 児童が学習を進める際、見方・考え方を働かせるように単元を計画する。また、単元計画の際には、一斉授業と個別学習を行う授業を適切に分けて単元計画をつくる。
- ・ ICT 端末を使用し、「見通し」と「ゴール」の共有化を行う。

(2) 個別最適な学びを支える「協働的な学び」を実現させるための環境づくり

- ・ 協働的な学びの土台である非認知能力の育成のため、WEBQU 調査を実施し、教職員全体で具体的な解決策や対応策などを検討・実施し、親和的な学級集団づくりを目指す。
- ・ 協働的な学びを実現するためのファシリテーターやコーチとしての教師の役割や発問や問い返しを意識した教師の授業における関わりについて研究を深める。
- ・ 一人一台端末等のICT環境を生かした個別の学びの共有化を図り、個別最適な学びを支える協働的な学びの実現を目指す。
- ・ ICT 端末活用のスキルの向上を図る。デジタルシティズンシップなど ICT 端末を活用するための、素地を養う。(タイピング、情報モラル、端末活用能力など)

2 具体的な研究活動

(1) 学校 DX 戦略アドバイザー(山梨大学准教授 三井一希先生)を招聘しての学習会及び授業観察を通しての授業改善

- ・ 5月31日「1人1台端末を活用した授業づくりの考え方」の学習会
- ・ 9月12日「子供が主体的で協働的に学ぶ授業づくり」の学習会

(2) 研究授業及び一人一実践

ア 公開研究会(10月20日)

第2学年 国語科「おはなしのさくしゃになろう」 秋山 実沙 教諭

第6学年 算数科「円の面積」 内田 由布 教諭

イ 一人一実践(研究成果物の「塩山南小校内研究サイト」)

第2学年指導案



第6学年指導案



(3) 協働的な学びを支える親和的な学級集団作りに関する取組

- ・ 甲州市確かな学力育成プロジェクトの取組でもある WEBQU の実施し、教職員全体で具体的な解決策や対応策を検討・実施した。
- ・ 朝学習に週1回の「みなみこタイム」(Simpler プログラム)の実施

(4) ICT 端末活用のスキルや情報モラルの向上に関する取組

- ・ 週1回の朝学習のチャレンジタイムの活用(タイピング練習等)
- ・ GIGA ワークブックの活用 等

II 成果と課題

(1) 問題解決能力を高める探究プロセスへの授業改善について研究について

- 全校で統一して探求プロセスと南小思考スキルを授業内に取り組み、学習の流れやゴールを見据えることができた。それにより、一人ひとりが次の活動を意識して取り組むことができ、子どもも自分から学びに
いこうという気持ちが徐々に向上しつつあり、自分でどのように学んだらよいか、思考する力がついてきて
いる。思考スキルを意識し、思考ツールとも繋げて考えることが出来る児童が増えてきている。
- 学習者主体の学習形態となり、児童自ら、情報収集して、整理分析するときに思考スキルを活用して、自
分の考えをまとめることができるようになってきた。また、教師側が児童に学びを委ねる際には「見方・考え
方」をしっかりと示して学習に入らせることが大切だと感じた。
- ルーブリックを提示して自己評価させることで、自己に合わせた目標を持って取り組み、その目標を達成し
ようとする意欲や達成できたときの達成感を味わっている児童の様子がうかがえました。
- 情報を集めることは自然とできるようになってきたが、「まとめ・表現」などはまだまだ課題がある。
- 探究プロセスによって一時間ごとの流れでは探究のサイクルを取り入れることが出来たが、単元ごとの
サイクルを意識した授業を行えたことがあまりなかった。また授業スタイルを変えたことでうまく単元計画
やカリキュラムマネジメントができなかった。
- 南小思考スキルと各教科の見方考え方について、うまく併用できなかった。それぞれをリンクさせて子ども
に指導ができるようにしたい。また、児童の実態として思考スキルの活用が難しい面もあった。
- ICT 端末ばかりを使うのではなく、ノートのよさ、ICT 端末のよさを理解したうえで選択させることができる
よう指導していくことが大切だと感じた。ノート指導もきちんと行っていく必要があると思う。

(2) 個別最適な学びを支える「協働的な学び」を実現させるための環境づくりについて

- WEBQU 調査を通して、授業内外で、子どもたちが助け合ったり、協力したりする場面を作ることができた。
個々の学力向上の土台となる自発協同的に学び活動する学級づくりに WEBQU は有効であった。また、
WEBQU は結果を見て対応方法などを把握することができ、働き方改革にもつながった。
- 年間を通して ICT 端末を使う機会が非常に増えたため、児童たちの ICT 活用スキルが向上した。低学年
のうちからも、慣れ親しむ取り組みができていた。特別なものとして使うのではなく、文房具と同じような感
覚になりつつある。
- ICT 環境を活かした授業を行ったことで、従来の授業よりも個別に指導することができる時間を十分にと
ることができるようになったことが利点だった。また、個別最適な学びだけでなく、友達との交流方法も充
実させることで協働的な学びにもつながった。
- 学習者主体の授業づくりを進めていく上は、これまで以上に「だれとでも話せる」「違いが認め合える」と
いった学級集団の必要性を改めて実感した。
- みなみっこタイムでの取り組みが、親和的な学級集団づくりに大きく貢献したと思います。
- 「甲州市立塩山南小学校 ICT 活用スキル、情報セキュリティ・モラル教育指導計画表」を活用し、ICT
端末活用のスキルの向上を体系的に進めていきたい。
- コミュニケーションを上手く取れない子や、読み書きの力が不足している児童等への個別の支援が課題
である。児童一人一人の個の違いや持ち味の良さ、価値を尊重していく、インクルーシブ教育も進めてい
きたい。
- 親和的な学級集団づくりにおいては、ファシリテーター、コーディネーターとして、児童の学習や活動における
教師の教師としての力が必要となる。ファシリテーターやコーチとしての教師の役割については、これまでの
一斉授業とは異なる向き合い方となるので、意識して取り組んでいくことが課題である。

III 成果物

- ・ Google クラウドによる校内研究会の資料の蓄積
- ・ 「南小思考スキル」及び「探究サイクル」の掲示物
- ・ Googleサイトによる校内研究紀要のまとめ
- ・ 低学年・中学年・高学年別 考えるための技法「南小思考スキル 17 条」
- ・ 全国学力状況調査結果の課題の各学年の系統性と具体的取組資料 (研究主任 池田 理恵子)

「深く学び、考える児童の育成」 ～各教科における見方・考え方を働かせる授業づくり～

I 研究内容

1 研究について

昨年度まで「主体的に学び、考える児童の育成」を主題として、ICT 端末を効果的に活用した授業づくりについて研究を進めてきた。その中で、主に算数科と道徳科において、学びを深めるという視点で ICT 端末を活用した授業改善が図られた。

今年度は「英語教育改善プラン推進事業」の指定を受け、「深く学び、考える児童の育成」を主題として、主に国語科と外国語科における見方・考え方を働かせる授業の在り方について研究を行った。見方・考え方を働かせる授業づくりを通して、深く学び、考える児童の育成をめざして研究を進めてきた。

2 研究の具体的内容と方法

(1) 講師を招聘しての学習会の実施

「国語科・外国語科における、

深い学びに向けた見方・考え方を働かせる授業づくりについて」

国語科講師：県義務教育課 主幹・指導主事 八巻 一貴 先生

外国語科講師：県義務教育課 主査・指導主事 佐藤 岳人 先生

(2) 見方・考え方を働かせた授業研究及び一人一実践

ア 研究授業 (11 月 8 日)

第2学年 国語科「お手紙」

雨宮 由香 教諭

指導・助言：峡東教育事務所 主幹・指導主事

立川 慶樹 先生

第5学年 外国語科「I want to go to Italy.」 (11 月 28 日 公開研究会)

～自分のおすすめの国を ALT の家族に紹介しよう～ 三枝 英太郎 教諭

指導助言：信州大学 教授 酒井 英樹 先生

山梨大学 教授 田中 武夫 先生

イ 一人一実践

第1学年 国語科「じどう車ずかんをつくろう」

倉田 和美 教諭

第3学年 外国語科「What's this?これなあに」

畑 佑弥 教諭

第3学年 音楽「ちいきにつたわる音楽でつながろう」

古屋 ゆか 教諭

第4学年 国語科「プラタナスの木」

中根 絵里 教諭

第6学年 国語科「人を引きつける表現」

平山 沙織 教諭

第6学年 外国語科「This is my town.」

大村 隆 教諭

ひまわり学級 国語科「かたかなで書くことば」

筒井 ひさ美 教諭

たんぽぽ学級 国語科「詩を朗読して紹介しよう」

渡辺 良太 教諭

(3) 「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト」と連携した取組

ア WEBQU調査の実施。事例検討会を行い、対応策を活用した学級集団づくり

イ 学校と家庭が連携した家庭学習の取組

Ⅱ 成果と課題（○成果 ●課題）

(1) 講師を招聘しての学習会の実施

○県義務教育課指導主事より本校の研究の柱である見方・考え方を働かせる授業づくりの視点について、各教科の特性をふまえて多くの示唆をいただき、共通理解を図ることができた。

(2) 見方・考え方を働かせた授業研究及び一人一実践

○児童が深く学ぶためには、教科特有の見方・考え方を働かせる授業を行うことが必要であり、その部分を焦点化して研究を進めることができた。また、見方・考え方を働かせる授業とはどのようなものであるかについても理論研究や実践を通して研究が深められた。

○見方・考え方を働かせる授業づくりをすることで、児童が身に付けるべき資質が明確になり、児童自身も課題に対して深く考える姿が見られた。

○国語科は校内、外国語科は甲州市の外国語教育推進委員をはじめ多くの先生方に参加していただき、研究授業及び研究会を開催した。特に外国語科では、言語活動の目的・場面・状況及び個別最適な学びと協働的な学びの往還を意識した授業を通して、児童の発信力を向上させるための授業の在り方を提案することができ、推進校としての役割を果たすことができた。

●授業において、児童が見方・考え方を意識していくためには、教師自身が単元や本時で働かせる見方・考え方を明確にし、それを児童と共有する必要がある。そのために更に理論研究を進めていきたい。

(3) 「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト」と連携した取組

○結果がすぐに分かり、他学年の状況を共有することができる WEBQU の利点を活かして分析とその後の取組を行った。学年の枠を越えた多くの職員が目で見ながら結果を分析する中で学級づくりの手立てが生まれ、大変参考になった。

○実際に取り組んだ自主学習ノートを教室に掲示したり紹介したりし、互いに見合うことで学習に取り組む意欲につながっている。また、昨年度作成した各学年の自主学習メニューを今年度も配付し、それをもとに自主学習に取り組むことで、学習の内容に関して選択が広がっている。

○家庭学習について、児童がノートだけではなくミライシードや Google スライドなどの ICT 端末を活用することも選択できるようになってきた。

●児童の情報モラル、情報リテラシーの育成については、今後も様々な課題が出てくることが予測される。授業参観や学年部会でもGIGAワークブックを活用する等、保護者との連携を図りながら、適切に使用できるよう継続して指導する必要がある。

Ⅲ 成果物

1 研究授業指導案・一人一実践指導案

2 授業の概要

（研究主任 中根 絵里）

「確かな学力」を育む学習指導に関する研究

—算数科における主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり(3年次)—

I 研究の内容

1 授業研究

(1) 研究授業

第3学年 算数科 「数の表し方やしくみを調べよう」

村松 夏帆教諭

山梨県総合教育センター 渡邊 信也 指導主事

(2) 一実践授業

第1学年 算数科 「どちらがおおい」

奥山 美恵教諭

第2学年 算数科 「計算のしかたをくふうしよう」

向山 紀子教諭

第4学年 算数科 「四角形の特ちょうをしらべよう」

岡村 理恵教諭

第5学年 算数科 「差や和に注目して～表を使って考える」

小泉 匡之教諭

第6学年 算数科 「比例の関係をくわしく調べよう」

竹川 憲任教諭

知的〔すみれ〕学級 第3学年 算数科 「同じ数ずつ分けるときの計算を考えよう」

高石 圭子教諭

自閉症・情緒〔つくし〕学級 第4学年 算数科 「計算のやくそくをしらべよう」

矢崎さつき教諭

第4学年 理科 「自然のなかの水のすがた」

雨宮 正 教諭

(3) 算数の基礎学力定着に向けての取組

『算数オリンピック』・・・「数と計算」領域の学年相当の基礎学力定着を目指して

2 学級集団づくり

WEBQU 検査(全学年)実施とK13法による分析・アタックシートの作成・活用の充実

3 ICT 機器の活用

(1) ICT 端末に関わる技術向上のための研修

(2) 「ICT 端末活用の記録」作成

(3) ICT 端末活用時の「やくそく」の検討

Ⅱ 成果と課題

Ⅰ 成果

- ・3年計画の集大成となる本年の校内研究は、算数科における主体的・対話的で深い学びの授業の在り方について、職員全員で実践を重ね、理解を深めることができた。
- ・主体的・対話的で深い学びの授業づくりに向け、問い返し発問の具体、協働学習の在り方、ICTの効果的な活用法など、練り上げられた研究授業となった。ICT端末や実物投影機を使うことにより児童が理解を深め、協働的な学びを実践できていた。研究会においても、ICTを活用して会の効率化をはかり、充実した話し合いができた。
- ・一実践は、研究主題を意識し、児童の発達段階や教科の特性に合わせた、様々な取組がなされた。学年相応のICT端末を工夫して使った授業、問い返しの発問を意識した授業実践であった。今年度は、研究授業に関わって算数科の協働的学習を意識した一実践に取り組めたことが良かった。参観者が記入する「参観シート」により、自分自身の実践を客観的に振り返る機会にもなった。
- ・今年度も、算数の基礎学力定着に向けた取組として、「計算力」に焦点を絞った「算数オリンピック」(学期1回)を実施した。子ども達が楽しく意欲的に取り組めるよう工夫を重ね、算数の学習に自信を持って取り組むための基盤作りとして有効な取組であった。
- ・ICTの活用については、常に情報交換をしながら、必要に応じて技術を学べる職場環境であった。ICT活用のための環境整備にも取り組み始めた。

Ⅱ 課題

- ・「算数オリンピック」実施の方法を工夫してきたが、まだ意欲や学習の理解度に大きな差が見られる。活動として成功しただけではなく、真に学力を向上させられるような出題問題であるか問題の精選というところまで迫った取組にしていきたい。合格点に満たない子への支援や今後の取組についても改善を重ね、CRTなどの結果についてももしっかり分析・検証をしていきたい。
- ・算数アンケートの結果では、自分の考えを発表することが好きではない、または苦手と考える児童が多いことが分かった。算数科においては問題解決学習だけではなく、自分の考えを表現し友達と交流することで、これまで見えていなかった考え方や解法を見出し、算数科の面白さやよさへの体得へとつながっていくと考える。今後、児童が自分の考えを表現するという点についても研究していきたい。

Ⅲ 成果物

- 1 研究授業・一人一実践授業の指導案、使用した教具、ワークシート
- 2 「算数オリンピック」に関する資料・問題等
- 3 児童「算数アンケート」のデータ資料(Googleフォームより実施)
- 4 ICT端末活用の記録

(研究主任 岡村 理恵)

「主体的に表現する児童の育成」

～小集団における ICT を活用した対話的な学びをつくる授業～

I 研究の内容

1. **教員の ICT 活用指導能力の育成** ・ ・ ・ 指導者自身が有効に ICT を活用していくために、指導者の ICT 活用力を高めていく。
 - ・ 講師を招聘しての研修
 - 「小集団における ICT を活用した対話的な学びをつくる授業」の学習方法について
 - ・ 校内での実践研修
2. **授業づくり** ・ ・ ・ 学力の実態把握と少人数や集団における効果的な学習方法と授業実践
 - ・ CRT 検査、全国学力・学習状況調査を分析して、学習面の成果を把握し、課題を明確にして今後の授業改善に生かす。
 - ・ 各種調査で明らかになった児童の課題を改善するための効果的な学習方法の実践をする。
 - ・ 少人数や小集団、個を生かした「対話的な学び」の実現のための授業実践と検証。
(コミュニケーション、ICT の活用も含む)
 - ・ 甲州市 Teacher's Note の活用
 - ・ めあてと目的を明確にした一人一実践
 - ・ 授業における ICT の効果的な活用
3. **学級集団づくり** ・ ・ ・ 児童の実態把握と集団づくり
 - ・ WEBQU を生かした児童理解と集団づくり。PDCA サイクルを活用。
 - ・ WEBQU の結果分析と対応策シートを活用した集団づくりを行う。
 - ・ 要支援群に属する児童や、プロットの位置が教師の見とりと違う児童に焦点を当てた策も考え、児童一人一人を丁寧に見とり、個を大切にする。
4. **学びを促す環境づくり** ・ ・ ・ 学校生活の基盤づくり
 - ・ 「大藤スタンダード」「家庭教育 子育て Q&A」「家庭学習の手引き」を活用した家庭学習の効果的な実践の取組。
 - ・ 5 つの合言葉の具体的に実践。学年に応じた「大藤スタンダード」の徹底。
 - 〈わくわくべんきょう〉 ・ ・ ・ 勉強のスタートは、驚きや疑問、楽しく学ぶ。
 - 〈のびのびとうこう〉 ・ ・ ・ 何事も夢中です。徹底してする。
 - 〈みんななかよし〉 ・ ・ ・ いじめや仲間外れを生まない集団でいよう。
 - 〈にこにこあいさつ〉 ・ ・ ・ あいさつ、返事をしっかりする。
 - 〈いきいきかつどう〉 ・ ・ ・ 自ら考えて行動する。自分で決めて、自分で守る。
 - ・ 家庭学習定着を図る環境整備
 - ① 「自学ノート」の年間を通しての実施をする。
 - ② 家庭学習スタンバイの時間を帰りの会の前にとる。

- ③家庭学習と授業を有機的に結びつけ、知識探求や学習の復習をする。
- ④ノートが終わったら、校長先生にも見てもらう。
- ⑤自学ノートを google クラスルームに掲示する。(写真に撮って掲載 随時更新)
1 学期は担任、2 学期から児童が自分でアップ。励ましコメントは自由に行う。
- ⑥月・金の朝学習の時間は、各学年学習の時間とし、水については、全学年タイピング練習の時間とする。学習では AI ドリルを活用する。
- ⑦「大藤スタンダード」に基づき、生活面や学習規律の統一を行う。
- ⑧大藤・神金・玉宮小で、各学年のクラスルームを作成する。
※行事の打ち合わせの他、学習発表会などに活用可能。

5. 研究実践

① 一人一実践

第1学年	国語科	授業者	中村 千春
第3学年	道徳科	授業者	中村 亜矢子
第5学年	理科	授業者	堀口 藍花
第6学年	家庭科	授業者	三森 明美
なかよし学級	自立活動	授業者	近藤 祐未

II 成果と課題

(成果)

- ①学びを促す環境づくりのため、行ってきたことがよかった。まずは全体指導が通る集団づくりが必要と考え、大藤スタンダードに則りながら、学習規律の定着やノート指導なども重視してきた。
- ②パソコンを使った学習が特別なものでなく当たり前になるよう、できるだけ毎日授業等で利用してきた。今まで自分から発言することが少なかった児童が、パソコンなら意見が言いやすいと、対話に参加するようになった。児童は「jamboard はみんなで使える」「classroom に先生からの連絡がある」「Chat ですぐみんなに伝えられる」など、コミュニケーションツールとしての ICT の特徴を感覚的に捉え始めている。Chat や classroom の児童による活用場面も増えた。それぞれのツールの特徴を理解することで、情報を受け取るだけでなく、使い分けながら発信する力が付くと感じた。

(課題)

- ①デジタルとアナログのバランスが難しい。日常から実際に書く場面がどんどん減ってきて、児童が書くことを嫌がる傾向にある。正確に写すのも苦手な子が多いと感じる。
- ②先進校の授業を動画で見えてきたが、自分のクラスにどう落とし込むか。学びのサイクルを作り、対話によって学習を深めるために、学年当初からどのような指導を行っていくか研究する必要がある。
- ③ルールが適用されない学級では、ICT の活用も安心して取り組めない。まずは学級集団づくりが重要である。

III 成果物

- ・ WEBQU 対応策シート
- ・ 授業実践指導案
- ・ ICT 学習会資料
- ・ 全国学力学習状況調査分析結果

「少人数学級における思考力・判断力・表現力の育成」
～問題解決における情報の活用を通して～

I 研究の内容

1 研究目標

学習過程において、アウトプットを意識した授業の工夫と改善を図っていくことで、子供たちの主体性と思考力・判断力・表現力等を育むことを目指す。

2 具体的内容

(1) 授業づくり

①児童の実態把握

- ・ Q-U の分析
- ・ 全国学力テストの分析

②一人一実践と研究授業の実施

- ・ 情報の活用を意識した授業の工夫と改善
- ・ ICT 環境を活用した実践(日常の授業の中での活用を図る)
- ・ プログラム教育のための学習会
- ・ 学校間ネットワークの交流実践の継続

③「ふるさと学習」の取り組み

- ・ 地域人材の活用
- ・ 地域との連携と情報発信
- ・ 「ふるさと学習」の発表会

(2) 学習基盤づくり(甲州プロジェクトと関わって)

①Q-U調査の実施(2回)と分析

②互いに認め合い、高めあえる集団づくりを目指した学級活動の取組

③家庭学習や学習規律の確立の取組

④生活環境向上の取組(GIGAワークブックの活用)

II 研究の方法

1 一人一実践

第1学年国語科「しらせたいな見せたいな」

大島めぐみ教諭

第2学年算数科「新しい計算を考えよう」

川崎 幸江教諭

第3学年算数「数のあらし方やしくみを調べよう」

前島 国学教諭

第4学年算数科「計算のやくそくを調べよう」

亀山昂太郎教諭

第5学年算数科「ならした大きさを考えよう」

小河真由美教諭

第6学年理科科「てこのはたらき」

窪川純一郎教諭

第5・6学年音楽科「詩と音楽の関わりを味わおう」

名取 美和教諭

2 ふるさと学習発表会

第1学年 「いいね！すごいな！かみかねのしぜん」

第2・3学年 「生活科と総合的学習の時間で学んだこと」

「ダイダラボッチと二子山」

第4学年 「上条集落大発見！」

第5・6学年 「神金から平和を考えよう」

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- ・一人一実践をお互いに参観することにより、個別最適な学習、協働的な学習、ICTの利活用など参考あることが多かった。来年度も続け、全教職員の指導能力の向上に努めていければと思う。
- ・思考力・判断力・表現力の育成を行う手段としてICTを活用していくための方法について情報交換などを通して学習することができた。
- ・甲州市学力プロジェクトと関わりながら校内研に取り組むことができ、ICTの活用がすすんだ。
- ・アウトメディアチャレンジの取り組みは、アウトメディアを意識することができよかった。養護教諭がデータでまとめてくれているので経年の結果が一目瞭然であった。
- ・Q-U分析を全職員で検討することで、全校での児童理解につながった。検査結果を利用して、友達との関係などをしていく手がかりになった。

2 課題

- ・ICTを活用する場面を精査し、どのような意図をもってICTを使うのかははっきりさせることが大切だと思った。紙（リアル）とICT（デジタル）のよさを教師が理解しながら「リアル」×「デジタル」の最適な組合せや使い分けを考えて授業をつくることも大切である。
- ・一人一実践について、全体的に見通して計画し、お互いの授業を参観することができればよかった。
- ・学力プロジェクトとの関わりや学校課題、授業づくりとやることはたくさんある。時間配分を考え課題を絞り、重点化して取り組んでいきたい。
- ・家庭学習の習慣は個人差が大きかった。全ての児童が自分から進んで行っているとはいえない。主体的に学ぶ態度を培うためにも、よく取り組んでいる児童の例を提示しながら、自分に合った課題を見つけ、取り組むことができるように指導していきたい。ICTを活用した家庭学習の習慣を身につけさせることにも課題が残った。

Ⅳ 成果物

- | | | |
|-----------|---------------|------------|
| ・一人一実践授業案 | ・ふるさと学習実践資料 | ・掲示用探求サイクル |
| ・神小スタンダード | ・アウトメディアチャレンジ | |

（研究主任 大島 めぐみ）

~~~~~

## 玉宮小学校

~~~~~

個を高める確かな学力の育成

～個別最適な学びの実現を目指して～

I 研究の内容

1. 個別最適な学びの実現に向けた授業づくり (ICT の効果的な活用)

(1) 学習会

- ・「個別最適な学びの実現を目指した授業づくり」

講師：甲州市教育委員会 那須 栄樹 指導主事

- ・甲州市ティーチャーズノートの活用
- ・情報交換会（実践の共有）

(2) 一人一実践授業及び振り返り

- | | | | |
|------------------------------|-----|-------|----|
| ・第1学年国語科「しらせたいな 見せたいな」 | 授業者 | 青木 恵 | 教諭 |
| ・第2学年国語科「かたかなで書くことば」 | 授業者 | 田邊真由美 | 教諭 |
| ・第4学年算数科「四角形の特ちょうをしらべよう」 | 授業者 | 梶原美奈子 | 教諭 |
| ・第5学年社会科「日本の工業生産の今と未来」 | 授業者 | 山本 諭 | 教諭 |
| ・第6学年たけぶえ学級算数科「拡大図と縮図」 | 授業者 | 滝島 正彦 | 教諭 |
| ・第6学年わかたけ学級自立活動「狂言の体験をしてみよう」 | | | |
| | 授業者 | 柏原 真澄 | 教諭 |

(3) 児童の ICT 活用スキルの向上に向けた取組

- ・現状把握と対策（「めざせ!!タイピング名人!!」「キーボー島」「らっこたん」等）

2. 学びの基盤となる親和的な学習集団づくり

(1) WEBQU の分析と対策

- ・全職員による WEBQU の分析と対策

(2) 人間関係の向上を目指した取組

- ・なかよしスキルタイム（構成的エンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング）

(3) 学習規律の確立

- ・「玉宮小学習スタンダード」の定着

3. 家庭と連携した取組

(1) 家庭学習の充実

- ・自主学習ノートの掲示（自主学習コーナー）
- ・自主学習メニューの提示（自主学習の進め方）
- ・スタンバイの取組
- ・意欲付け（担任、管理職、保護者による励ましのコメントやアドバイス等）

(2) 望ましい生活習慣に向けた取組

- ・情報モラル教育（GIGA ワークブックの活用）
- ・生活時間コントロール（アウトメディアチャレンジ）

Ⅱ 成果と課題

1. 授業づくりに関わって

授業実践、実践共有を行う中で、多様な学び方、学ぶ道筋、学ぶ速度など、個別最適な学びの授業づくりに向けて、理解を深め、日々の実践に活かすことができた。児童の変容として、授業のねらいを意識して見通しを持って学習に取り組めるようになった（Classroomでのめあて、ループリック、授業の流れの提示）、友達の考えを参考にしながら学習を進められるようになった（Jam boardでの他者共有）、学習に主体的に取り組めるようになった（ヒントカード、学び方の選択）等が挙げられた。一方、個に重点をおいたため「対話的な学び」がおろそかになっている、学習内容は理解しているがそれを言葉として表現したり自分の考えをはっきり話したりすることが難しい児童がいる等の課題が挙げられた。また、Classroomでの配信（めあて、ループリック、流れ等）、児童が自走できるような手立て等に、多くの準備時間や研修時間が必要であり、現状の働き方では難しいということが教師側の課題として挙げられた。さらに、クラス内20名程度のクラスと本校のように非常に少人数のクラスでは、全く同じ授業展開ではなく、配慮しなければならない部分があり、本校独自の授業づくりを進めていく必要があることが確認された。

2. 学習集団づくりに関わって

WEBQUの取組では、分析と対策を全職員で行う中で、学校全体で児童の思いや悩みを共有したり、親和的な学級集団にするための対応策を考えたりすることができ、学級経営に活かすことができた。QUだけでは見取ることのできない児童の問題にどう立ち向かっていくのかが、今後の課題である。なかよしスキルタイムの取組では、月に1度、エンカウンターとソーシャルスキルトレーニングを行う中で、人間関係づくりや友達との関わりを学ぶことで、学年の枠を超えた交流を深めることができた。学習規律の向上に向けた取組では、玉宮小学学習スタンダードを年度始めに全職員で確認し、学習のきまり、学習用具の持ち物、話し方名人・聞き方名人、話し方の例等、共通理解を持って指導を行ってきた。教師・児童ともに意識を継続して取り組むことで、さらなる定着を図りたい。

3. 家庭と連携した取組に関わって

家庭学習の充実に向けた取組では、管理職や担任等の毎日の励まし等もあり、児童が毎日自主学習に取り組むことができた。家庭学習の習慣化は図られているので、今後、さらに保護者と連携を図ったり、スタンバイの時間を充実させたりする中で、自主学習の質の向上を目指していきたい。また、ICTを活用した家庭学習の可能性も探していきたい。望ましい生活習慣に向けた取組では、夏休み明け、冬休み明けの2回、アウトメディアに取り組み、メディアとの付き合い方について、保護者、児童の意識を高めることができた。

Ⅲ 成果物

・ICTを活用した各教科の授業案、教材

（研究主任 青木 恵）

『全ての児童の「主体的・対話的で深い学び」を めざした授業づくり』

～ICT の活用を通して～

I 研究内容と方法

1 具体的な研究内容

(1) 授業改善に関わって

○授業改善における ICT の活用に関する学習会と授業実践

- ・「主体的・対話的で深い学び」を実現する児童を育成するための理論研究
- ・児童の「主体的・対話的で深い学び」を実現する ICT を活用した授業の実践
- ・ICT の活用方法に関する学習会

(2) 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトに関わって

○確かな学力を育成するための取り組みの継続

- ・WEBQ-U と分析の実施
- ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化に向けた授業改善
- ・家庭学習やメディアコントロールへの取り組み

2 研究の方法

(1) ICT を活用した「主体的・対話的で深い学び」についての研修

(2) 講師を招いての学習会

(3) ICT の活用方法に関する学習会

(4) 一人一実践

(5) ICT 機器を活用した実践記録の作成

3 具体的な取り組み

(1) 学習会

ア 温かい人間関係を育む学級づくり～様々な支援を要する児童への手立て～

講師 日本学校教育相談学会 公認心理師 内藤 雅人先生

イ 校内学習会（一人一台端末の効果的な活用方法を全員が提案）

(2) 研究授業

第4学年 黒瀬 貴広教諭 国語科「世界にほこる和紙」

※山梨県総合教育センター 副主査・指導主事 渡邊昭二郎先生を招いての研究会を実施

(3) 一人一実践

- ・第1学年 遠藤 香織教諭 国語科「じどう車くらべ」
- ・第2学年 小野 愛子教諭 生活科「町のすてきをはっぴょうしよう」
- ・こすもす 深味 朝日教諭 自立活動「野菜を収穫して食べよう」
- ・第3学年 堀内 美紀教諭 国語科「つたわる言葉 ことわざ・故事成語」
- ・ひまわり 菰原 美海教諭 音楽科「いろいろなリズムを感じ取ろう」(4年)
- ・第5学年 望月 啓介教諭 道徳科「青い目の人形」
- ・第6学年 岡村 澄人教諭 社会科「全国統一への動き」

Ⅱ 成果と課題

1 成果

- ・研究主題を設定して3年目ということで、一つの区切りを意識して取り組むことができた。より多くの児童が主体的に学びに向かい、それぞれの授業・教科に応じた見方・考え方を働かせながら、「主体的・対話的で深い学び」に近づくことができたと思う。
- ・学習会については、日本学校教育相談学会の内藤先生を講師にお招きすることができ大変勉強になった。温かい人間関係を育む学級づくりや愛着障害などについてお話ししていただき、児童への関わり方について学んだことを、自分自身の教育実践につなげられたことが大きな成果である。
- ・全員が授業公開を行い、互いの学びを深めることができた。今年度は、特に学習者の視点に立った「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を意識し、授業づくりを行った。児童が主体となり、解決方法を選択、決定、調整する場を作る中で、ICT機器をどこでどのように活用するかを考えながら行うことができた。

2 課題

- ・一人一実践の授業をお互いに参観し合うことが難しかった。今後は、このような場を設けなくても、クラスルームなどを使って、先生方の日々の実践を気軽に見られるような仕組みを作っていきたい。
- ・ICT活用については、やはり普段からの使用頻度や使用内容も大きく関わっているので、毎日の授業の中で、どのように扱っていくのかという点については、今後の課題である。また、特別支援教育やスタートカリキュラムなどについても、全校体制で取り組むことが必要不可欠である。

(研究主任 遠藤香織)

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

～個別最適な学びと協働的な学びの日常化～

I 研究の内容

1 研究の目標

〇ICTを基盤として、学習者主体の授業を目指し、児童が自己決定・自己選択をする姿を目指すことで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善をする。

2 研究の具体的内容

(1) 学級づくり・集団づくり

ア WEBQ-U, 学校生活アンケートを参考にした学級, 集団づくり, 児童理解

イ 各学年の「今後の対応策」の共有化, 不満足群の児童の再確認

(2) 授業づくり・授業改善

ア 授業改善への意識とわかって楽しい授業づくり

イ ICT端末の効果的活用の日常化, 「甲州市 Teacher's Note」を活用した授業づくり

ウ 各教科, 行事, 特別活動, 総合的な学習の時間と関連するユニバーサルデザインを意識した授業づくり

エ 一人一実践

・第1学年 山下 史江教諭 算数科 「10よりおおきいかず」

・第1学年 杉本 真知子教諭 国語科 「じどう車くらべ」

・第2学年 守屋 博貴教諭 生活科 「町たんけん2」

・第2学年 水上 由人教諭 国語科 「おもちゃの作り方をせつめいしよう」

・第2学年 高野 育愛教諭 音楽科 「おまつりの音楽」

・第3学年 天野 ねいろ教諭 国語科 「すがたをかえる大豆」

・第4学年 佐野 誠一教諭 理科 「物のあたたまり方」

・第5学年 中村 悦子教諭 算数科 「面積の求め方を考えよう」

・第6学年 新藤 亘教諭 国語科 「鳥獣戯画を読む」

・第6学年 中嶋 康雅教諭 算数科 「データの調べ方」

オ 授業の構造化, 掲示用「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」ブレイクの制作・活用

カ 言語力の基礎を育む日常的な取組(音読, 発表, 書く活動, 語彙を増やす活動, 読書等)の工夫

キ 全国学力テストの分析

(3) 保護者との連携

- ア 「家庭学習の手引き」を利用した家庭学習ノート(いじりの子ノート)と端末を活用した自主学習の支援・周知
- イ 各学年の取り組みについての情報交換・系統的な支援の共通理解

Ⅱ 成果と課題

1 成果

- ・WEB-QU となったことで、全職員で画面を見ながら分析・情報共有ができ、様々な側面から児童の様子を把握することができた。
- ・さまざまな教科で、ICT端末を日常的に活用し、「主・対・深」を目指した授業づくりを行い、分からないことは職員間で教え合ったりすることもできた。
- ・甲州市「確かな学力」育成プロジェクトに関わって、同じ歩調で研究を進めることができた。

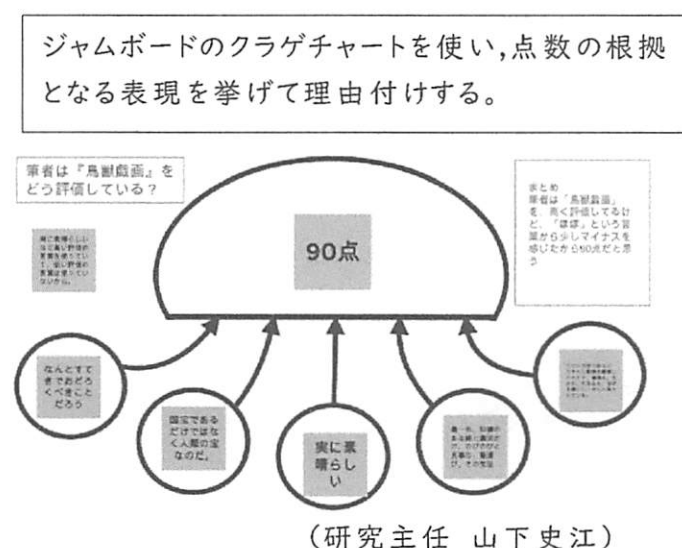
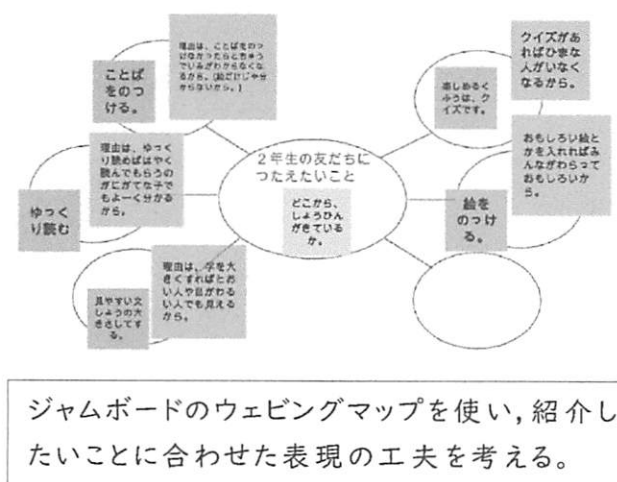
2 課題

- ・一人一実践授業を互いに参観し合うことで、一人一台端末の活用場面や活用方法等、授業づくりのヒントを得ることはできたが、全職員で振り返り、成果や課題点を共有することができなかった。有効的な活用方法等全体で共有する時間をとり、日々の授業改善につなげたい。
- ・「家庭学習の手引き」・「いじりの子ノート」については、職員間で意思統一を図り、保護者と連携した取り組みを充実させていき、児童が家庭学習の良さを実感し、継続していけるような指導をしていきたい。また、ミライシードなどの端末での自主学習も加わってきているので家庭学習の方法を見直していきたい。

Ⅲ 成果物

1 一人一実践授業案及び実践のまとめ

2 授業の構造化、掲示用：探求サイクル「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」プレートの制作・活用



学習者主体の授業改善をととした、児童の資質・能力の育成
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図りながら～

I 研究内容

1 研究内容と方法

(1) 研究内容

- ア 児童の実態把握と分析、改善策の検討。
- イ 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと連携した研究。
- ウ 「学習者主体の授業」についての理論研究や学習会。
- エ 「学習者主体の授業」に向けた授業研究。

(2) 研究方法

- ア 全体研究会とブロック研究会（低・中・高）を取り入れた研究体制で研究を進める。
- イ WEBQU・研究テーマに関わる学習アンケートを行い、児童の実態を把握・分析共有化し、具体的な改善策を検討する。
- ウ 甲州市「確かな学力」育成プロジェクト講演会に積極的に参加したり、3部会の取組や『Teacher's Note』から学んだりして、日々の実践に活かす。
- エ 講師を招いての学習会開催や公開研究会への参加、動画視聴・書籍などから理論研究を進める。
- オ 研究授業の指導案検討を行う。講師を招聘して授業研究会を行う。
- カ 一人一実践の授業公開を行う。参観者の意見を授業改善に活かす。

2 具体的な取り組み

(1) WEBQU・学習アンケートの結果分析・改善策の検討。

- ア WEBQUの結果及び分析から改善策を検討し・共通理解を図る。また長期休業中に改善策を見直し、ミスマッチのものは新たに対策を考え、実践に活かす。
- イ Forms版学習アンケートの結果から課題点を1つ挙げ、授業改善策を検討する。職員間で共有し、実践に活かす。

(2) 「学習者主体の授業改善をととした、児童の資質・能力の育成」を意識した授業の実践。

- ア ICTを積極的に活用し、学習者主体の授業を目指す。
- イ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識し、複線型の授業を展開する。

3 具体的実践

(1) 理論研究（学習会の実施）

- ア 「社会科における『学習者主体の授業づくり』について」
講師 義務教育課 古屋 達朗 指導主事
- イ 「学習者主体の授業づくりにおけるICT端末の利活用について」
講師 都留文科大学 野中 潤 教授

(2) 実態調査

- ア WEBQU（第1回 5月、第2回 10月）
- イ Forms版学習アンケート（第1回 7月、第2回 2月）

(3) 授業実践

ア 研究授業

第6学年	高橋 里恵教諭	社会科「近代国家を目指して」
第3学年	保坂 洋仁教諭	社会科「事故や事件からまちを守る」
第5学年	辻 みなみ教諭	算数科「四角形と三角形の面積」

イ 授業公開（一人一実践）

第1学年	前田 文 教諭	国語科「もののなまえ」
第2学年	功刀 海彩教諭	算数科「九九をつくろう」
第4学年	志村 多恵教諭	算数科「四角形の特ちょうを調べよう」
こすもす	荻原 幸菜教諭	第5学年音楽科「曲想の変化を感じ取ろう」
たんぽぽ	小川 正仁教諭	第5学年国語科「古典芸能の世界」
第6学年	志村 克人教諭	理科「電気とわたしたちのくらし」
第6学年	木下里江子教諭	外国語科「This is my town.

～甲州市にあるものやそこでできることを紹介しよう～

II 成果と課題

1 成果

- (1) クラスルームに課題や流れを提示し、授業を展開することで複線型の学習を行うことができた。個別に取り組んだり、グループで取り組んだり、学習に合わせた「学び方」を見童それぞれが選択することができている。
- (2) 見童が1時間の授業で終始、集中して学習に取り組む姿が見られた。また、授業前から「課題に取り組みたい」という見童がいたり、授業後に「もっとまとめたい」という見童がいたりするなど、学習に対する意欲が高まった。
- (3) 教科書を読んだり、教科書の内容をまとめたりする力がついた。見童によっては表現力が大きく高まり、自分なりの表現方法を習得することもできた。
- (4) 探究のサイクルを意識した授業展開が定着し、学習者自ら課題に取り組む意識が高まった。また、全校で統一した掲示物を作成することで、どの学級でも同じような授業展開が意識できている。

2 課題

- (1) 見童それぞれが一生懸命まとめたり、表現したりしているが、時間が十分に確保できないことが多い。「情報の収集」場面での効率化を図ることなどをおして、十分な時間の確保、理解の深まりにつなげていきたい。
- (2) 個別最適な学習に近づけている一方で、「協働的な学習」をどのように組み込んでいくか、十分でない。また、『社会的な見方・考え方』を取り入れながら、見童の資質能力の向上を図る」という部分に近づけていない。授業の中で掲示物や積み重ねの中で意識させるなど、今後も研究を続けていきたい。
- (3) 単元の導入段階から「学習者主体の授業」を展開することで、単元全体として、学習者が主体となって取り組めるよう、さらに研究を深めていきたい。

III 成果物

- 1 研究授業及び公開授業の指導案10点
- 2 Forms 版学習アンケート結果（2回実施）
- 3 WEBQU の結果（2回実施）
- 4 「探究のサイクル」「教科の見方・考え方」の掲示物

「主体的・対話的で深い学び」を実現する児童の育成 —ICTの活用を通して—

I 研究の内容

1 実践授業

- 第1学年 国語「ものの名まえ」
- 第2学年 国語「自分とくらべて、かんそうを書こう」
- 第3学年 国語「れいの書かれ方に気をつけて読み、それをいかして書こう」
- ひまわり学級 国語「絵や写真を見て話そう」
- 第4学年 算数「どのように変わるか調べよう」
- 第5学年 算数「分数のたし算とひき算」
- 第6学年 社会「幕府の政治と人々の暮らし」

2 各種調査結果の分析・課題把握・活用

- (1) 全国学力学習状況調査・C R Tの結果分析・課題把握・活用
- (2) WEBQUについての分析・情報共有・活用
- (3) 教育課程説明会の還流報告

3 研修

I C T端末活用についての学習会

4 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

- (1) 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトをうけた授業改善
- (2) WEBQUの実施と分析・活用の充実
- (3) 家庭学習の推進

II 成果と課題

1 授業研究

ICTを学習ツールの一つとして、子供の可能性を広げる「個別最適な学び」や「協働的な学び」の実現に重点を置き、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり・授業実践を中心にして研究に取り組んだ。実践後には、毎回研究会を設け、ICTの幅広い活用の仕方を互いに学び合うことで、効果的な手立てについて研究を進めることができた。甲州市の授業デザインに即した授業の展開を意識し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践を行った。ICTを活用する中で、互いの考えを共有したり、思考ツールを使用し思考を整理したりと効果的な活用を目指していった。ペアやグ

ループ、自由に話し合う等の学習形態の工夫、ICT 内でのヒントカードの提示、自己評価の活用など様々な手立ての工夫が見られた。全員が授業を公開し、互いの授業を見合うことで、それぞれの児童の実態にあった指導の工夫や活用方法の手立てについて学び合うことができた。

2 各種調査結果の分析・課題把握・活用

各種調査結果では、意見交流をする中で課題把握を行い、授業改善に向けて取り組むべき課題を明らかにすることができた。全職員で確認することで、系統的な指導を意識して取り組むことができた。

WEBQU の活用については、学級や個人の傾向を細かく分析し、実態を把握することができた。2 回目の WEBQU の結果から前期であげた課題を普段から意識して取り組むようにしたことで、後期の結果に生かすことができた。新たな課題も出てくるため、引き続き取り組んでいきたい。

3 研修

ICT 端末利活用の実践を積み重ねるため、校内研究会で情報の共有化を図り、共通理解の下、研究を進めることができた。ICT の活用については、日々新しい活用方法が求められているので、今後もさらに研修が必要である。甲州市教育委員会や甲州市内の小学校の情報を得ながら、研究を進めていきたい。

4 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

教育講演会や甲州市ティーチャーズノートの内容を普段の授業から意識して取り入れ甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと連携しながら取り組むことができた。各自が課題意識をもって参加することによって、主体的に学ぶことができた。ICT を「読み・書き」と共に一つの学習ツールとして、児童が効果的に活用していけるよう、甲州市教育委員会や甲州市内の小学校の情報を得ながら、今後もさらに研修が必要である。

WEBQU の活用については、学校全体の結果をすぐ共有できるため、素早い対応をすることができた。情報交換を行い全児童の様子を共有したり、担任が気になる児童に全職員でアプローチしたりと、活用の充実を図り、親和的な学級集団作りに生かすことができた。

Ⅲ 成果物

授業実践の指導案、実践記録、ワークシート、資料等

(研究主任 広瀬 沙希)

「自ら考え、よりよく生きようとする心豊かな児童の育成」
～伝え合い、対話の中で考えを深める道德の授業づくりを通して～

I 研究の内容

1 道德科における「伝え合う」を意識した授業づくり

(1) 学習会

- ・「伝え合い、対話の中で考えを深める道德の授業づくりについて」

山梨県教育庁義務教育課 指導主事 小嶋 庸子 先生

- ・「対話を深め、考え議論する道德を目指した発問や指導の工夫」

北杜市立明野小学校元校長 内藤 雅人 先生

(2) 公開研究授業（道德教育推進教師研修会）

令和5年11月17日（金）

- ・第3学年 道德科「分け隔てはせずに」ドッジボール大会 授業者 水上 千春 教諭

指導助言 峡東教育事務所 指導主事 小林みずほ 先生

- ・第5学年 道德科「勝沼の未来を考える」自主教材 授業者 阿部伸之介 教諭

指導助言 山梨県教育庁義務教育課 指導主事 小嶋 庸子 先生

(3) 一人一実践

- ・第1学年 道德科「温かい心で親切に」はしの上のおおかみ 授業者 菱澤 里美 教諭

- ・第2学年 道德科「いつも正直に」金のおの 授業者 志村 和哉 教諭

- ・第4学年 道德科「分け隔てはせずに」ドッジボール大会 授業者 村田奈緒美 教諭

- ・第6学年 道德科「勝沼の未来を考える」自主教材 授業者 山内 要保 教諭

2 児童の実態把握 親和的な学級集団づくり

(1) 道德意識調査

(2) WEBQU の取組

3 学校教育全体における道德教育の推進

- (1) 児童会との連携 (2) 自然の杜の活用 (3) 年1回の道德授業参観実施

II 成果と課題

今年度は3年間の道德教育推進校の2年目となる。昨年度の反省を生かして今年度は「対話」というキーワードのもと、研究を進めてきた。子供たちの実態をもとに教師の願いが明確な研究主題となり、研究授業や研究会、日々の道德の授業や道德的研究主題からぶれることなく進めることができた。

【研究仮説】

道徳の時間において、自己の考えを深める対話を充実させたさせた授業（A）を行うことで、自己を見つめる児童（B）を育むことができるであろう。

【柱①】 考え、議論する工夫と手立てについて

- ・多様な考えを深める発問
- ・表現方法、交流の場の工夫

【柱②】 自己の成長に気づく工夫と手立てについて

- ・自分事として考える
- ・振り返りの活動

【柱①】

成果としては、道徳意識調査や WEBQU から分かる子供たちの実態把握を参考に、自分事として興味関心が持てる発問を用意することで、多様な考えや本音を引き出すような授業を展開することができた。ICTやフェイスマークの活用も子供たちの表現活動として大変有効であった。どの子も全員が自分の考えを表出できるようにという研究を今後も続けていきたい。

課題としては、自分の考えを友達と対話を通して伝え合うという活動が自然とできるようになったが、個々の対話の様子を具体的に見取ることが充分ではなく、その後の終末は子供たちに任せてしまっている一面が感じられる。また、言葉で対話する子供たちの姿をどこまで見通して指導していくかも課題である。

【柱②】

導入から本時のねらいの設定までの過程は、自分事として考える大切な第一歩であることを踏まえて授業づくりを行うことで、最後まで教師のねらいや主題からぶれることなく授業を展開することができた。子供たちの考えをあらかじめ想定して問い返しを用意しておくことで、多様な意見をさらに深めることができた。ワークシートの記述の仕方についても、どの立場で、誰に向けて考えるのかを明確にすることで、自分事として考える子供たちの姿が見られたことは大きな成果であった。

振り返りの方法としてワークシート、一枚ポートフォリオ、今年度からはループリック「心のものさし」を使用した。活用の仕方については今後検証していく必要がある。振り返りは時間が無くなってしまうことが多いが、自分の考えを深めるという点、次の学習に生かすという点で大切な活動である。自分の考えのまとめは授業時間だけでなく、家庭学習として取り組む方法も考えていくとよい。

道徳教育推進校3年目となる来年度は、終末でもう一步考えが深まることを目指し、充実した対話の後の活動について研究を進めていきたい。自己の考えの深まりを促すような「問い返し」、話し合った内容や考えの変容の表出の仕方、まとめ方について研究を深めていきたい。

Ⅲ成果物

- ・研究授業指導案
- ・道徳意識調査
- ・一枚ポートフォリオ
- ・心のものさし

（研究主任 菱澤 里美）

主体的に学び、表現する児童の育成 ～効果的な言語活動を取り入れた授業改善を通して～

効果的な言語活動を取り入れ、児童が目的意識をもって取り組もうとする学習活動を工夫することで、主体的に学ぼうとする意欲を育て、自分の考えや思いを表現する力を養っていきたいと考えた。

I 研究の具体的な内容と方法

1 理論研究、学習会

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた効果的な言語活動について」

講師 山梨大学大学院 茅野政徳先生

2 児童の実態調査

言語活動に対する意識についてのアンケートを1学期と2学期の2回実施し、
実態と変容を把握することで指導に生かした。

3 国語科の授業実践

(1) 研究授業

第3学年 国語科 授業者 武井尚輝教諭

教材名 「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」

指導・助言 峡東教育事務所 指導主事 小林みずほ先生

(2) 一人一実践

第1学年	国語科	「くじらぐも」	教諭	三森 美礼
------	-----	---------	----	-------

第2学年	算数科	「九九をつくろう」	教諭	廣瀬きよ美
------	-----	-----------	----	-------

第3学年	理科	「明かりをつけよう」	教諭	内田 俊彦
------	----	------------	----	-------

第5学年	社会科	「暮らしと産業を支える情報通信技術」	教諭	内田絵里奈
------	-----	--------------------	----	-------

第6学年	国語科	「大切にしたい言葉」	教諭	金井 京子
------	-----	------------	----	-------

特別支援学級 自立活動		「ウッディランドへようこそ」	教諭	渡邊 尚英
-------------	--	----------------	----	-------

特別支援学級 自立活動		「言葉をつなげて～思い出をスライドにしよう」	教諭	大村ひとみ
-------------	--	------------------------	----	-------

(3) 学習会

○探究のプロセスを意識した問題解決的な学習のポイント	教諭	内田絵里奈
----------------------------	----	-------

○特別支援教育に関わる研修	校長	松井 渉
---------------	----	------

教諭	大村ひとみ
----	-------

4 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

(1) 学級集団づくり

WEBQ U調査を生かした児童理解と学級集団づくりへの取り組み

(2) あいさつ、学習規律

登下校時の職員室へのあいさつ、児童会を中心とした「あいさつ運動」

児童会による学習規律定着のための「授業ビンゴ」

(3) 授業づくり

ティーチャーズノートの活用

(4) 家庭との連携

「家庭教育/子育てQ & A」「家庭学習の手引き」の活用

G I G Aワークブックの活用

II 成果と課題

1 成果

- ・理論研究では教科書をもとにした実践事例や具体的な取り組みを教えていただき、自己の実践につなげることができた。
- ・研究授業や一人一実践の授業において、新しい授業改善の取り組みや1人1台端末の活用の仕方などを学ぶことができ、互いに研鑽の機会となった。
- ・校内の研修では、日々の実践に生かせる内容が全職員で共通理解できたので、今後も授業改善のための取り組みを中心に研修を継続していきたい。
- ・児童の学習アンケートから「聞かれていることに正しく答えることができる」「相手に合わせた話し方をしている」「必要なことを調べたりまとめたりすることができる」等の項目において、1回目よりも2回目の方が肯定的な回答をした児童が増えたことは大きな成果だといえる。話し合いに関してはほとんどの児童が肯定的な回答をしていることから、話し合い活動に積極的に参加していることがわかった。
- ・全校でことわざや四字熟語などの暗唱に取り組んだことで、児童の言葉への関心や意欲が大きく高まった。

2 課題

- ・探究のプロセスや思考ツール、1人1台端末の効果的な活用については、全職員が日々の実践に取り入れていくための学びの機会がさらに必要である。ティーチャーズノートのさらなる活用に向けても、引き続き学び合いの場を設定していく。

III 成果物

1 研究授業指導案

2 一人一実践の指導案

3 児童の言語活動に対する意識調査

(研究主任 金井 京子)

大和小学校

「共に学び合い伝え合う児童の育成」

～ICTを活用した授業づくりを通して～

I 研究の内容

1 ICTを活用した授業づくり

(1) 研究授業及び研究会

第3学年 国語「すがたをかえる大豆」

指導助言 山梨県総合教育センター 指導主事 渡邊 昭二郎先生

(2) 実践授業及び振り返り

第1学年 国語「かん字のはなし」

第3学年 理科「物の重さをくらべよう」

第4学年 図工「昆虫をかこう」

第5学年 算数「割合」

第6学年 保健「病気の予防」

(3) 講師を招聘しての学習会

ICT活用学習会

「ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について」

講師 甲州市教育委員会 指導主事 那須 栄樹先生

授業づくり学習会（菱山小との合同）

「授業を通して自己肯定感の向上を図り、対話が深まる授業づくり」

講師 全国ネット・菊池道場 道場長 菊池 省三 先生

2 意欲的に学ぶ学習集団づくり

(1) 学習規律の確立

・「大和小学習のきまり」の内容見直しと習慣化

・学習規律に関するアンケートの実施と分析

(2) WEBQUの分析と対策

・年2回 WEBQU 調査の実施

・WEBQU 分析会議による対応策の全体確認

3 家庭と連携した学習環境づくり

(1) 家庭学習習慣化の取組

・自主学習の取組についてのアンケート実施（児童・保護者・教職員）

・自主学習掲示板による自主学習ノートの紹介やスライドやドキュメントを活用しての調べ学習の成果物の紹介

・自主学習スタンバイの実施（自主学習強化週間期間）

・自主学習の内容見直し（ノートとタブレット端末）

・自主学習強化期間（チャレンジ週間）の実施（学期に1回 年間3回）

- ・自主学習ビンゴの取組〈学習内容の多様化〉
- ・家庭学習の必要性などについての家庭への啓発とアンケート結果の還流

Ⅱ 成果と課題

1 授業づくりに関わって

研究授業，一人一実践では，ICT 端末を活用して，子どもたちが共に学び合い，伝え合うことができるような授業実践を行った。3年生国語の研究授業では，すがたを変える食材と変化した食品を調べたことをJamboardにまとめ，その情報を共有して学び合う授業を行った。渡邊昭二郎先生に研究授業の指導助言をしていただき，相手意識を持って学習することの大切さや児童が主体となって学習を進め，対話や思考を深めるためのツールとして，どう効果的にICTを使うかなどについて指導していただいた。一人一実践では，1学期に那須栄樹先生からご指導いただいた授業づくりのポイントを取り入れた授業を実施した。どの学年もICTを活用し，協働的な学びを通して，自分の考えを広め，学びを深めるという視点で授業を行った。各学年の発達段階に応じた活用を行っており，子どもたちが主体となって自ら学ぶ姿や考える姿，友だちの意見を聞いて，共感や納得，新たな発見を得る姿を見ることができた。全員が授業を公開し，お互いの授業を見合うことで，ICT教材の活用法や指導の工夫，手立てについて学び合うことができた。また，授業後には，参観者の意見や感想を授業観察シートにまとめ，互いに成果や課題を共有した。紙面で確認をすることにより，授業者や参観者以外の職員にも，授業内容や児童の様子を知らせることができた。

2 学習集団づくりに関わって

WEBQU 検査を2回行い，結果の分析会議を全職員で行ったことで，全学年の実態を知り，問題点に対して様々な視点から対応策を考えることができた。小規模校のよさを活かし，全職員が共通理解したうえで，指導にあたることができた。

「大和小学習のきまり」については，定期的に自己評価をさせることで，児童に改善を意識させることができた。

3 学習環境づくりに関わって

自主学習に関わる取組の継続により，家庭での学習習慣が定着してきている。自主学習チャレンジ週間時に，多くの職員でノートを見たり，ビンゴの取組をしたりすることで，学習内容の幅が広がった。自主学習掲示板設置により，他学年のものを参考にしたり，互いの感想を言い合ったりして，児童の関心や意欲を高めることができた。自主学習スタンバイの記入についても定着している。

Ⅲ 成果物

研究授業，実践授業の授業案（ワークシート，ICT教材等も含む）

授業観察シート（一人一実践共有まとめシート）

WEBQUの分析結果，対応策シート

自主学習ビンゴ(R5版)

（研究主任 塩澤 美希）

「 確かな学力の定着・向上を目指した授業改善の工夫 」
～ 学びの多様性と ICT を利活用した授業を通して ～

I 研究の内容

1 本年度の研究の重点

これまで「確かな学力の定着と向上」を基本テーマとし、特に学力向上のために「やまなしスタンダード」をベースとした構造的な授業づくりと家庭学習の定着について研究を行い、多くの成果を挙げてきた。

そして今年度は、前年度までの研究を継続し、更なる定着と質的向上を目指すと同時に、GIGA スクール構想に伴う ICT 活用を積極的に実践することで、学習活動の一層の充実と主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に繋げていく。

2 研究部会

(1) 教科別研究会

- ・「やまなしスタンダード」を取り入れた授業づくり・授業改善
- ・ICT の利活用、一人一台端末をどのように使っていくか情報交換
- ・新しい教科書（学習内容含む）の進め方
- ・3 観点に伴う評価のつけ方

(2) 学年別研究会

- ・Q・U 検査の分析→個への対応、集団づくり
- ・学びの質的向上を目指した学級・学年集団づくり
- ・GU ノート（自主学習ノート）の取り組みから、授業改善の工夫につなげる。

(3) 本校の授業研究

本年度は、GIGA スクール構想に伴い、ICT 端末をどのように使っていくかを中心に、全教職員が授業の中で、端末を使用できるように研究を進めた。一人一台端末をどのように授業の中で使っていくか、ファシリテーターを中心とした指導案検討を行うことで、主体的で対話的な授業改善を目指し研究を進めた。Google for Education の活用を研究することで、授業改善、校務の効率化に繋がる研究をすることができた。

◇道徳 2 年 2 組 令和 5 年 7 月 5 日（水）実施

教材名 「六千人のビザ」

（出典：「新訂 新しい道徳 2」東京書籍）

授業者 安富 あすか 教諭

AI テキストマイニングを使うことで事前学習の振り返りを短時間で視覚的に示した。発問を工夫することで、ねらいに迫り、生徒が国際理解について

考えを深めることができた

◇道徳 1年2組 令和5年10月18日（水）実施

教材名 「思いやりの日々」

（出典：「新訂 新しい道徳1」東京書籍）

授業者 杉岡 佑月 教諭

スプレッドシートの共同編集機能を活用することで、より多くの考えに触れさせることができた。生徒の考えから共通するフレーズに着目し問い返しを工夫することで、「本当の思いやり」について、より具体的に考え、意見を共有することができた。

（4）学習会

◇Google for Education 学習会 令和5年11月8日（水）実施

講師 斎藤 和裕 教諭

Forms、QRコードの活用などについて学習会を実施した。実際に端末を操作しながらの講義で分かりやすく、すぐに活用できるものばかりだった。

◇Google for Education 学習会 令和6年1月17日（水）実施

講師 和地 勲 教諭 （甲府市立大國小学校）

便利ツールやアプリの活用、生徒作品の情報共有方法など最新の情報を学べる良い機会となった。

II 成果と課題

1 成果

- ・端末で使える実践事例についての研修を行い、授業や行事で活用することができた。様々な講演や研修、教科部会を通じて自身の指導を見直し、改善に努めることができた。
- ・授業研究では、ファシリテーターを中心とした小グループの話し合いにすることにより、多くの意見が出され、授業案検討、授業後の研究会も活発な意見交換が行われた。

2 課題

- ・ICT活用、個別最適な学習、協同学習など、学習法が多様化する中で、それらを統合的な視点で学ぶ必要がある。一方で、研究内容が多岐にわたるので（教科授業研究・QU分析・ICT関係など）精選したほうがよいのかもしれない。

III 成果物

- ・学習指導案（1年道徳・2年道徳）

（研究主任 内田 晴奈）

I 研究主題

自ら学ぶ力をつける学習指導に関する研究

～個別最適な学びの実現に向けた ICT 活用の在り方～

II 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）における生徒に身につけさせたい資質・能力は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の 3 つの柱となっている。そして、さらなる学びの質の向上のためには「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を推進していく必要があることが述べられている（文部科学省平成 30 年）。

本校では、これまで①「思考・判断・表現力を高める取組（山北スタイルづくり）」②「基礎学力定着の取組」③「教材教具の開発・工夫と ICT 活用」という 3 つの観点に特に力を入れて研究を進めてきている。その研究を通して蓄積された教育実践をもとに、「話型の研究」「課題提示の工夫」「まとめと振り返りでの工夫」に取り組み、確実に成果を上げてきた。また、山梨県道徳教育推進事業の指定を受けた際には、「発問の工夫」「振り返りシートを活用した評価文」について議論を重ねた。そして、授業の中で生徒一人ひとりの考えが可視化されることにより、他者の考えから多くの気づきを得て、自己の考えを深めることができるように ICT を活用した授業づくりにも取り組んできている。

ICT に関わっては、「Society 5.0 時代を生きる全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びを実現するためには、学校現場における ICT の積極的な活用が不可欠」であることが文部科学省から示され、「GIGA スクール構想」に基づいて整備された 1 人 1 台端末の積極的な活用が求められている。本市においても、令和 3 年度（2021 年）にタブレットが 1 人に 1 台貸与され、本年度は端末の日常的な持ち帰りも実施している。

AI（人工知能）が発展し、生徒一人ひとりを取り巻く環境も価値観も多様化している現状を鑑み、多様な子供たちに個別最適化の学びの環境を整えていく必要性があると考え、このような時代背景とともに、本校においても ICT 活用のニーズが高まったことにより、ICT を効果的に取り入れた「主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善」を通して資質・能力の育成を目指していきたいと考え、主題を設定した。

また、昨年度までの校内研究において「個別最適な学び」へのアプローチが十分ではないという課題が見えたことから、学習活動における「個別最適な学び」のための ICT 活用の在り方を副主題として研究を進めることとした。本年度は文部科学省の「リーディング DX スクール事業」の指定を受けており、この副主題とリンクさせて指定校としての研究を深める機会をいただいたことを活かして、主題にせまる校内研究を進めた。

Ⅲ 研究内容

1 自ら学ぶ力をつける取組（思考力、判断力、表現力等を高める取組）

○授業過程の工夫（「山北スタイル」）

【教師】①課題提示の工夫・生活等と結びつく課題 ↓ ・意欲につながる課題 ②自力解決支援 ↓ ・生徒自ら思考・判断・表現するための支援 ③相互解決・展開 ↓ ・ペア、グループ解決、全体解決 ④評価・まとめ ↓ ・評価(生徒・教師) ・まとめ(定着と繋がり)	【生徒】①課題の把握（的確な） ↓ ※見通し ②自力解決(記述ノート等) ↓ ※活用力 ③相互解決(学び合い) ↓ ※協働的学習 ④まとめ(学習整理) ※振り返り
--	--

ア 日々の授業実践への導入 イ 一人一実践

ウ リーディングDXスクール事業公開研究会における研究授業

10月18日プレ研究会 授業者 古屋希望教諭 2学年理科

11月15日公開研究会 授業者 梶 加奈 教諭 1学年数学

2 基礎学力定着の取組

(1) 学力を向上させるための自主学習ノートの活用

※3学年で基本的な条件だけは統一する。

・部活のある日には、放課後残さない。

・帰りの会での5分間は家庭学習の準備を行う。

・1日のページ数は、それぞれの学年や生徒の状況によって決める。

(2) 朝読書→読書活動の定着

(3) 山北サポートタイム

3 教材教具の開発・工夫と1人1台端末の活用

・個別最適な学びのためのICT活用の在り方に関わる研究

(リーディングDXスクールアドバイザー・先進校の教員を講師とした学習会)

・各教科の実践事例の共有化(1人1教材)

・「特別の教科 道徳」は、学年ごと教員全員で授業を実践

Ⅳ 成果と課題

○ODXの学習会を通してICTを活用した複線型の授業についての理解が深まった。副題の個別最適な学びの実現に加え、協働的な学びの実現にもつながる研究となった。

○課題に対してのアプローチの方法を生徒が自分で考えて行動できるようになっている様子が見られる。一人一台端末が学習のツールとなりつつある。

○研究授業は、他教科の授業を参観することで担当教科でのICT活用法の幅を広げることができた。

▲これまでに実践してきた「山北スタイル」におけるICTを活用した複線型の授業の進め方については今後検討・実践を進める必要がある。

(研究主任 宮下智英)

研究主題 主体的に学習に取り組む生徒の育成
～場面に応じた対話的な学びを通し、伝える力を高めるための授業づくり～

I 研究の内容

1 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業づくり

今年度の校内研は実践研究とし、「個別最適な学び」を目指し、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」と、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身の学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」につながること目指し研究を進めた。その基礎となる学級づくり、授業の構造化、家庭学習に焦点をあて研究を行った。

(1) よりよい学級づくりを基にした主体的・対話的で深い学び

- ア 主体的・対話的で深い学びを意識した継続的な授業実践
(一人一実践授業)
- イ 日常的な取組(生活ノート指導、学活、各教科指導 等)
- ウ Q-Uの分析から介入方法の検討・実践

(2) 主体的な学びへとつながる工夫・言語活動の充実

- ア 授業の構造化(やまなしスタンダード)を基本とした授業実践
- イ 効果的に新聞を活用した実践(NIE)
- ウ ICTを活用した学習活動の充実

(3) 保護者や地域・小学校との連携(家庭学習等)

- ア 「自主学習ノート」の有効活用
- イ 家庭学習について、保護者にも協力を呼びかける。
- ウ 学習規律や板書方法などを確認して徹底する。
- エ 地域の方々に協力してもらった実習体験を通した学習
(協働的な学び・山梨市 ECHOES 学習)

II 成果と課題

1 よりよい学級づくりを基にした主体的・対話的で深い学び

主体的・対話的な学びを進める上で基礎となるのが「学級経営・学級づくり」であることは、県の指導重点にもあるように周知の事実である。そこで本校ではQ-U分析を用い、今年度は「学級経営・学級づくり」に対してどのように介入していくかという点から検討を行い、学級づくりに臨んだ。

Q-U分析では、全学年の分析・介入方法について全教職員が関わり検討を行った。それにより生徒の実態を把握して共通理解を図り、指導に役立てることができた。また、各教科で分析した内容や介入方法を意識し、グループ編成や学習形態を工夫することにつなげることができた。また、全職員が関わったことで多様な視点からの意見が出され、偏りのない意見を取り入れることは介入方法を考える際にも非常に有意義なものとなった。また、年間2回のQ-U分析を行い、その都度変容を見取り、再度介入方法を検討することで、各クラスの現在の位置が確認でき、今後の指導のきっかけにつなげることができた。

これらの分析を基本とし、主体的・対話的で深い学びにつなげることができるよう、年間を通して授業改善に取り組んだ。テーマにどれだけ迫ることが出来たかを検証する機会を、本年度は数学科に提供してもらった。研究授業一回だけで

成果を見取することは難しいが、今後も継続して研究を進め、さらにTCを招聘し、指導助言を頂くことでより研究が深めることができると考える。また、主体的・対話的な学びを考える際に、グループでの話し合い活動などの場面が考えられる。このような活動を効果的に行うためには、どの教科においても、話し合いの仕方をもう一度生徒に教授する必要があるという課題があげられた。この点について1年を通して仕組んでいく必要があると考えられる。

2 主体的な学びへとつながる工夫・言語活動の充実

主体的・対話的な学びを考える際に、グループでの話し合い活動などの場面が考えられる。このような活動を効果的に行うためには、どの教科においても、話し合いの仕方をもう一度生徒に教授する必要があるという課題があげられた。この点について1年を通して仕組んでいく必要があると考えられる。

NIEの取組は年間を通して行った。日常的に新聞に触れ、全校に対して発信する取組を通して、言語活動も充実させることができた。さらに今年度は、「サンスタ」等も取り入れながら、従来の取組をさらに発展させることもできた。今後は、記事の内容についても考えさせ、より教育効果が高まるよう指導していくことが必要だと感じる。

ICTの活用方法については、今年度深く探ることはできなかった。各教科や担任の先生方が日常的に情報交換を行うことを鑑み、試行錯誤することが多かったように感じる。DXの活用が推進されているので、デジタル教科をはじめ、タブレットの活用場面を短時間でもよいので、授業の中に設定していくことが求められる。ただし、「リアルとデジタルのバランス」を大事にする必要があるため、より教育効果が高まる使用方法や場面を検討していきたい。また、授業中や休み時間も含め端末の使い方やモラルについても、指導を継続し、運用方法について共通理解を持って確認していかなければならないという課題が挙げられた。

3 保護者や地域・小学校との連携（家庭学習他）

自主学習ノート（以下、笛川ノート）の取組は、1日の学習を振り返り、家庭学習へとつなげる取組である。家庭学習の習慣を身に付け、定着させる面でも非常に有効だと考える。今年度はできる限り1日の振り返りを行う時間を確保し、学習が苦手な生徒や、家庭学習の習慣が身に付いていない生徒の負担を軽くするよう工夫を行った。また、担任が中心となり日常的に指導を行った。継続した指導を行うことで、より深い家庭学習に繋がる生徒もみられた。しかし、学習に対する意欲の低い生徒や、学習時間が小学校に比べ増えることに対して適応が不十分な生徒については、よりきめ細かい指導が必要になる。さらに、家庭学習に対して保護者の理解や意識を変えていく必要があると感じる。笛川ノートの取組は目的を理解し、継続的に取り組むことで非常に効果的な学習につなげることができる。これをよりレベルアップするために、有機的な家庭学習を仕組んでいきたいと考える。そのために、家庭によって学習に対する考え方が違う現状に対し、どのようにして保護者を巻き込み、家庭でも支援していただけるかという点についても検討していく必要性を感じる。

1小1中という地域の特性を活かし、ブロック交流会を中心に、情報交換だけでなく、多くの面で連携を密に進めることができた。今年度は小学校の授業参観から、黒板の掲示物（授業展開の可視化）のヒントを得ることができた。中学校でも学習の展開状況が見える化するため、早速取り入れることができた。

Ⅲ 成果物

一人一実践学習指導案、Q-U分析、クラスごとの介入方法、笛川ノート有効活用例、黒板の掲示物
(研究主任 布施 洋)

「主体的に学ぶ心豊かな生徒の育成」

～WEBQUを活用した集団づくりを基盤とした学力向上への取り組み～

I 研究の内容

甲州市では国や県の施策を受けて、地域に根差した教育を進めていくための取り組み（平成23年10月に「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」が発足）が今年度も継続して行われている。4月の説明会において、今年度も昨年度までの取り組みを継続して、定着を目指していくことが確認された。取り組みを継続して行うことの大切さを改めて感じる1年間だった。

本校の現状を見てみると、市のプロジェクトの基盤となる「集団づくり」という点において、生徒相互のあいさつや支え合い、学び合い、様々な活動を通して、さわやかで充実した学校生活を送っている様子が見えてくる。Q-U分析において、「満足度群」の割合が全国平均を上回っていることから、落ち着いた学校であると客観的に見ることもできる。

しかし、不登校生徒の数を見てみると、長期欠席者の人数がここ数年増加傾向にある。生活習慣の乱れが主な原因となっているが、友人関係の問題が原因となっていることも多い。

学力面においては、全国学力・学習状況調査や県学力把握調査において平均点を下回る教科があるなど、生徒の学力向上に対する取り組みが喫緊の課題となっている。また、今年度リーディングDXスクール事業の指定を受け、ICT端末を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業研究に取り組んできた。

以上のことを踏まえ、今年度は「集団づくり」というこれまでの方針を受け継ぎつつ、それを基盤とした学力の向上を目指した研究を進めてきた。

*研究の柱となる具体的内容と方法

「SUN（ステップアップノート：自主学習ノート）」「SUT（ステップアップテスト：学年ごとの小テスト）」「一人一実践」「WEBQUの活用」「ICT端末の活用」の取り組み

- (1) SUNとSUTの活用を検討する。
 - ・授業の中で家庭学習とつながる働きかけの方法の研究を行う。
 - ・「スタンバイの時間」における課題設定の方法の研究を行う。
- (2) 市のプロジェクトと連携した板書計画や指導案作りを行い、授業の構造化を目指す。
 - ・市のプロジェクトで作成された「Teachers note」を全員で確認して、学力向上に向けた授業実践を行う。
- (3) 「一人一実践（ステップアップ授業）」を行い、全員が授業を公開することで各教科の授業力を高める。
- (4) WEBQ-U調査の分析を行い、生徒の実態を把握する。
 - ・市のプロジェクトにおける「各校の取り組み内容」を参考にして、各校の実践で効果のあったものを共有しながら実践していく。
- (5) ICT端末を活用し、「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業を行う。
 - ・「めあて」や「ループリック」「本時の流れ」を端末上（クラスルーム）に提示しておき、生徒が学習内容を把握した上で学習に取り組む流れを定着させる。
 - ・「振り返り」と「自己評価」の時間を確保し、学習を振り返えさせる。

Ⅱ 成果と課題

1 ICT端末を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業について

今年度リーディングDXスクール事業の指定を受け、これまでの教師・生徒のICT活用が大きく変わった1年となった。甲州市「確かな学力」育成プロジェクトの取り組みにより、「めあて」や「振り返り」を板書し提示することがこれまでの授業の流れであったが、一人一台端末を活用することにより、「めあて」「ループリック（評価基準）」「本時の流れ」を事前に提示するようになった。これまで「振り返り」は個で振り返りシートに記入していたが、端末上に1つのシートを作成することにより、他者の考えについても触れられるようになり、生徒が互いに刺激を受ける機会にもなった。また、学校DXアドバイザーである山梨大学准教授の三井一希先生を講師にお迎えし、5回にわたる学習会を行うことができた。さらに、「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業を最先端で行っている愛知県や静岡県などの学校を視察させていただき、実際の様子を生で見ることによって、より具体的に自分の授業に取り入れることができた先生が多かった。さらに、本校において拡大校内研を行い、職員が一体となって取り組み、これまでの研究の成果、「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業を校内外へ発信することもできた。

課題としては、自走して学習に取り組む生徒が増えている一方、学習に課題を持つ生徒の取り組む姿勢に差が出てきてしまっているところである。WEBQ Uの調査結果をもとに、教室に適応できない生徒やコミュニケーションをとることを苦手とする生徒、グループに入れない生徒など、学級満足群の枠から外れている生徒への対応がさらに必要である。今後も「居心地のよい集団づくり」を目指した学級・学年経営を基盤とした授業づくりを行っていきたい。

2 「SUN（ステップアップノート）」「SUT（ステップアップテスト）」の取り組み

学力向上を目指して、市のプロジェクトと連携して上記の取り組みを通年で実施することができた。家庭学習（SUT）については、取り組み内容をさらに検討して、生徒の学習内容に合わせた、より柔軟な取り組みを進めていきたい。

課題としては、現在行っている「ステップアップテスト」という学年ごとの小テストの実施方法が、学力向上に資するものになっていないという反省が出ていることである。教職員の学校評価でそのような傾向が強い。「個に応じた学力向上」に向けて実施内容と方法を改善する必要性を感じているため、研究を継続していきたい。

3 研究のまとめと来年度に向けて

甲州市の「確かな学力育成」プロジェクトを校内研究の基盤とし、それを深化・発展させるべく1年間の研究を進めてきた。Q-Uの分析により、普段はそのような素振りが見えない生徒も集団の中で悩みを抱えていることも発見できた。学校全体で分析結果を共有して、支援が必要な生徒に対する支援の方策を考え、それぞれの立場で生徒に接することで、確実に集団づくりや学力の向上を進めていきたい。

本校の学校全体での「基礎学力」を分析してみると、「基礎学力」が定着しているとはいえない現状がある。「学力の向上」については本校の喫緊の課題といえるため、来年度もこの点を最重要課題として研究を深めていく必要性を感じている。

今年度はICT端末の活用については、これまで以上に授業や家庭での活用が充実した1年となった。昨年度の課題でもあった、有用性の理解や魅力ある授業についても一定の成果があったと考えられる。しかし、学校での学習と家庭での学習の違いが浮き彫りになってきていると考えている。生徒一人ひとりが、学校で学んだことを振り返る学習や自分が必要としている学習は何かを考えられるような家庭学習のあり方についても研究を進めていきたいと考えている。研究テーマの根本ともいえる「学力の向上」や「授業改善」をさらに進めていくために、教師の資質向上や「授業改善」を進め、学校カリキュラムマネジメントの意識を持って校内研究を進めていきたい。

（研究主任 佐々木 英司）

「生き生きと学びつづける生徒の育成」

～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～

I 研究の内容

1 主題設定の理由

本校は、大菩薩山嶺の扇状地に広がる農村地帯に位置する小規模学校である。本校の特徴として、地域の方々とのつながりが深いことがあげられる。有価物回収や強歩大会の協力などを通して、生徒たちの活動を地域全体で支えてくださっている。

本校の学校教育目標は「かしこい生徒・おもしろいのある生徒・たくましい生徒」である。「かしこい生徒」「たくましい生徒」を育成するための学習活動を進めていながら、それぞれの子どもたちに沿った学びを考えていく必要がある。また「おもしろいのある生徒」を育てていくには、協働的な学びが必要不可欠であると考えている。

本校は、平成30年度から3年間、県教育委員会から「主体的・対話的で深い学び推進事業」の推進校の指定を受けた。これまでの研究の成果を生かしつつ、主体的・対話的で深い学びを実現する授業の創造に向けた研究を進めていき、新学習指導要領への円滑な移行と、それに先立つ適切な教育課程の編成を図り、確かな学力の向上が実現できるよう研究を行ってきた。また昨年度は、県総合教育センター情報研究部の研究協力校として、指導助言をいただきながら1年間研究を進めてきた。授業内での一人一台端末の利用をはじめとするICT機器・教材の運用だけでなく、家庭学習におけるデジタル教材の有効活用についても学び、生徒自らが課題を選択し取り組む「個別最適な学び」についての研究を深めることができた。

これまで研究を進めてきた「主体的・対話的で深い学び」と「ICTの効果的運用」をさらに深化させ、「令和の日本型学校教育」が示す個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるような研究を行っていくことで、さらに発展的な研究が行えると考えている。以上のような理由で、研究主題を設定した。

2 研究の主な具体的取組内容

(1) 基礎学習

ア 研究についての基礎学習

○「令和の日本型学校教育」について

イ 研究のための環境づくりとしての研究

○Web-QUを取り入れた支援法の研究と実践

○塩北ライフの実践と改善

○スタンバイノートのさらなる活用（ICTを含めて）

(2) 授業実践に向けた研究

①「個別最適な学びと、協働的な学びの実現」をめざすための工夫についての研究

※学校教育の質の向上に向けたICTの効果的な活用について

②「個別最適な学びと、協働的な学びの実現」をめざすための研究

※「指導と評価の一体化」を意識した授業改善

③カリキュラムマネジメントの充実に向けた取り組みの推進

※地域の実態を踏まえ、教科等間のつながりを意識した教育課程の編成の研究

④甲州市確かな学力育成プロジェクトとの連携

○各部会の成果物の生徒への還元

○甲州市の統一取組の実践

Ⅱ 成果と課題

1 成果

- ・令和の日本型学校教育について、甲州市 Teacher'sNote を資料とし、全職員で研究することができた。また、リーディング DX 先進校の授業動画や文部科学省の GIGA スクール構想についての動画を視聴することで、これまでの授業スタイルから、「自分の学びを自分で責任を持ってデザインする生徒」を育成する授業について、共通理解を図れた。
- ・週末の家庭学習（スタンバイノート）にデジタルドリル（ラインズ）を取り入れ、その取り組み状況や効果等について検証することができた。
- ・生徒総会での Jamboard や chat、授業や学級活動での classroom の活用など、昨年度よりも ICT 端末を活用する場面が大幅に増えた。端末を使うことを目的とせず、より効果的な生徒の学びを引き出すために、来年度も研究を進めていく。
- ・12月1日に金森淳教諭による社会科の研究授業を行った。ICT 端末を使用して、生徒が自分なりにアジアの国々について考えをまとめており、個別最適な学び（学習の個性化）となっていた。また、Jamboard を使いグループごとに意見共有し、具体的解決方法を考える場面では、協働的な学びが促されていた。

2 課題

- ・スタンバイノートについては学校評価でも課題として出されていて、生徒と教職員の感覚に大きなギャップがあり、生徒が本質を理解できていないまま取り組んでいる様子が伺える。デジタルドリルの活用も含めて、今後も検討していく必要がある。
- ・ICT 端末の活用について、さらに研究を深めていかなければならない。来年度の塩山中との統合を見越した中で、授業について複線型の授業形態をしっかりと研究していかなければならない。
- ・カリキュラムマネジメントについて、地域人材を活用し、各教科や総合的な学習の時間で連携をすることが必要であると感じつつも、十分に活用できていない現状がある。
- ・「個別最適な学び」の面で言うと、発展的な課題を与え、上位層を伸ばすということにまだ改善の余地があり、各教科での教材研究の工夫が今後も求められる。
- ・ICT とアナログの両方を使いながら、様々な生徒へのきめ細やかな支援や、個々の力を伸ばす学びの機会の提供など、生徒一人ひとりに寄り添った指導が行えるよう、来年度以降さらに研究を深めていきたい。

（研究主任 武井松里子）

「自ら求め、学ぶ生徒の育成」

—対話を通じた授業づくり・ICTの活用を通して—

I 主題設定の理由

新学習指導要領では、次の6点

- ①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
- ②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④「子供一人ひとりの発達をどのように支援するか」(子どもの発達を踏まえた指導)
- ⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- ⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

を柱にカリキュラム・マネジメントの実現を目指すことが求められると示している。

1時間の授業において、生徒が「何を学ぶか」という見通しを持ち、【めあて】を理解した上で授業に参加し、授業の終わりに「何が身についたか」が明確となるような【自己評価】や【振り返り】をすることが重要であると考え。このことを実現させるためには、まず生徒の「主体的に学ぶ姿勢」が前提にあり、その根本には生徒と教師がともに楽しいと思える授業を展開することであると考え。また、協働を通して互いの考えを交流させることで「分かった」や「できるようになった」が増えることは、自信へとつながる。【甲州市 teachers Note より抜粋】

ICT活用に関しては、甲州市で生徒一人に対して一台のギガ端末が導入されてから2年が経過した。2年前を「ギガスクール元年」として3年目を迎える。生徒の日常的な利用が定着している中で、次のステップとして、より効果的な活用を進めていくことに重要性を置いている。授業内での効果的な活用は、教員の活用スキルの向上が必須である中で、個別最適化な学びを目指した、ICT端末活用の確かな推進を目指していく1年として研究主題を設定した。

II 研究の具体的な内容と方法

I 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとタイアップした教育研究

(1) 家庭学習の充実

自主学習ノートを全校統一の取り組みとして行った。取り組み方の例を示し、生徒の学習進度に合わせた方法を模索した。その日の授業の振り返りと共に個別最適な学びの実現を図った。

(2) WEB-QUの実施と結果分析

学級・集団づくりの質の向上のため、WEB-QUを実施し、学年ブロックに分かれ、結果分析を行い、全校で各学級の状況を把握し、学級集団の向上を図った。

(3) 授業の構造化への追求

「めあて」を生徒に示すことで、生徒に身につけさせたい力を明確にさせた。また、ICT端末を用いて、学び合う授業の構造化をさらに深めた。

2 本校独自の教育研究

(1) ICT 端末の効果的な活用

授業の目的を達成するための学習ツールとして ICT 端末の効果的な活用に取り組んだ。個別最適な学びの実現と確かな学力の向上を図るために、職員間で情報提供しながら、様々な場面での ICT 活用について実践と検証を行った。また、授業内での効果的な活用スキルの向上のため、講師の方にお越しいただき教職員全員でスキルアップの向上に取り組んだ。

(2) お互いの授業を見合う

ICT を活用した授業について見せ合う「一人一実践」を設けて、ICT 活用について研鑽を図った。また、本校では多くの教科で TT が実施されるため、教職員同士でお互いの授業について相談しながら、授業力向上に努めた。

(3) 学びの基盤づくり

各教科で授業内の様子について情報共有をしながら、授業規律の継続指導を行った。また、全校統一の授業評価シートの活用を通して、学年と教科のつながり(指導と評価の一体化)を意識しながら、全職員で指導にあたることができた。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

今年度の校内研究について、本校教職員対象に振り返りアンケートを行った。一年間の研究を通して、ICT 活用のスキルや授業づくりについては成果を感じた先生方が多く、ICT の効果的な利用について、実践や情報共有の中でスキルアップをすることができたといえる。ICT を積極的に授業内で活用しようとする先生方が増え、お互いに刺激し合いながら着実にスキルアップすることができた1年となった。

本校は、各学級の課題や良さを全職員が理解しながら、指導にあたっている。日々の情報共有に加えて WEB-QU を実施し、課題や手立てを考えることで、集団形成や個に対する関わり方について改めて共通意識をもつことができた。

2 課題

松中ノート(自主学習ノート)について、意欲的に取り組むことができた生徒は、ノートのまとめ方・学習の振り返り方・自分に合った学習の仕方について考える力を伸ばすことができたが、全体的な取り組みを見ると課題が残った。生徒間で意欲にばらつきが出てしまったことが要因だと考えている。松中ノートの意義や効果を生徒本人に理解させた上で取り組ませることができなかったことが、モチベーション低下につながったのではないかと考えられる。教職員の共通意識の徹底や、評価方法を模索する必要がある。

(研究主任 藤原堅汰)

「確かな学力を育む学習指導の在り方」

～個別最適と協働的な学びを実現させる ICT の効果的な活用を目指して～

I 主題設定の理由

勝沼中学校の学校経営における基本方針は、甲州市で進める「確かな学力育成プロジェクト」の3つの視点である「授業づくり，授業改善」「学級づくり，集団づくり」「保護者，地域住民等との連携」の中にすべて含まれている。ゆえに，甲州市のプロジェクトをもとに，生徒に確かな学力を保証する集団づくり，授業づくりを推進し，併せて豊かな心を育む取り組みを実践することで，基本方針の実現へと向かっていくと考えられる。確かな学力の基盤となる主体的・対話的で深い学びの実現には，質の高い授業を教師が行うことで学力を育てることと，学ぶ側の生徒の学級力を育てることが不可欠である。しかし，生徒を取り巻く社会も大きく様変わりし，貧困をはじめとするさまざまな困難を抱えている家庭や生徒も多く，特別な支援を必要とする生徒も多く存在する。QU分析等を活用し，ともに授業を創る（学ぶ）側の生徒の土壌づくりに生かしていくことが大切である。これは基礎ができていないところに，いくら家を建てようとしても崩れてしまうためである。校歌の歌詞の中にある「学舎は常に愉しく」という言葉は，勝沼中のキーワードであり，生徒が学ぶことが愉しくなるように教師集団がひとつのチームとなって授業づくりと学級づくりに主体的に挑戦し励んでいくことを表している。

「個別最適な学び」では，子ども一人ひとりの特性や学習進度，学習達成度等に応じ，指導方法・教材や学習時間等に柔軟な提供・設定を行う「指導の個別化」と，一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで，子どもたちが主体的に学習を最適化する「学習の個性化」が必要である。「協働的な学び」では，探究的な学習や体験活動などを通じ，子ども同士や，教師と子ども，あるいは他校や地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら，持続可能な社会の創り手となることができるような授業や交流を様々な場面で意識的に仕組むことで必要な資質・能力を育成していきたい。さらに，新学習指導要領において示された資質・能力の育成を確実にすすめることが重要である。「深い学びの実現に向けた ICT 活用推進事業」に引き続き，日常的な職員間での学び合い，教師の ICT 活用の向上・指導力向上を図っていきたい。

II 研究の具体的内容と方法

(1) 授業づくり，授業改善に関わって

ア ICT の効果的な活用方法の探究

イ ユニバーサルデザインを意識した学習環境づくり（掲示物やチョークの色等）

ウ 単元テストや「朝学習」（定期テスト前1週間）、「学舎タイム」の設定

エ CRT 検査や全国学力学習状況調査，県学力把握調査の分析及び指導の改善

オ 授業の構造化（めあて（学習課題），まとめ，見通し，振り返り等の提示）

カ 読書活動の充実（朝読書の実施）

キ 甲州市「ティーチャーズノート」の活用

ク 情報活用能力の育成に関する単元の洗い出し

（２）学級づくり，集団づくりに関わって

ア 「hyper-QU」の実施と K-13 法での分析及び活用

イ 甲州市「ティーチャーズノート」の活用

ウ 平和教育の実施（事前の学習会とわだつみ平和文庫の見学）

エ キャリアパスポート（づくり）の利活用

【研究授業の実施】上記の（１）と（２）をふまえ，研究授業を行った。

２学年 社会科 単元名 第３部第３章第２節中国・四国地方 丹治 群 教諭

（３）家庭学習の習慣化に関わって

ア 教科毎の定期的な家庭学習の課題設定と確認

イ 自主学習の取り組み AI ドリル（ラインズ，MEXCBT）

ウ 基礎・基本の定着を目指す「学舎タイム」の実施

エ 甲州市「学習の手引き」「家庭教育・子育てQ & A」の活用

Ⅲ 成果と課題

「授業づくり・授業改善」「学級づくり・集団づくり」「家庭学習の習慣化」の３つの柱を立て，具体的な取り組みを行った。

授業づくりにおいては，ICTの効果的な活用を推進している。本校では，教師のしかけにより①学習者の学びを刺激する「刺激機能」②学習者の学びをガイドする「方向づけ機能」③学びに必要な情報を可視化する「可視化機能」の３つに取り組んだ。４月より，それぞれの教科や学活，行事などで工夫を凝らした実践が日々行われ，その成果と課題を積み重ねる中で，デジタルとアナログの最適化を模索してきた。個別最適な学びを実現すべく複線型の授業を構想し，各自で実践を行った。その際，先生方に参観していただき，これからの授業の形態のイメージやアイデアの共有を行うことができた。また，CRT 検査や全国学力学習状況調査，県学力把握調査の分析を行い，学校全体で課題を見つける中で授業改善に取り組んだ。

学級づくりにおいては，「hyper-QU アンケート」を実施し，K-13 法で学年毎に分析を行い，職員全体で共通理解を図りながら改善策を考えることで「チーム」として学級・集団づくりに取り組んだ。第２学年において，わだつみ平和文庫について事前学習と見学を実施することもできた。

家庭学習の習慣化においては，教師が授業の終わりにその時間の振り返りができる問題を数問出題し，基礎学力の定着を図った。さらに，第１学年では，もっと学習したい生徒用にノートを配布し，自分の計画で学習が進められる「自習学習ノート」の取り組みも行った。しかし，AI ドリル（ラインズ，MEXCBT）の活用については，さらに改善の余地がありそうである。

（研究主任 佐藤治彰）

2023年度 東山梨教育協議会研究の概要

研究推進委員長 広瀬 竜太

I はじめに

東山梨教育協議会は、東山梨地域全体の教育振興を願って、1964年（昭和39年）に校長会・教頭会・教連の三者が、県教委、各地教委の協力により設立された。これまでの活動の中で、私たちは「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」を目標に、今日的な課題の解決に向けてとりくんできた。また、管理職・教諭・専門職員が協働して組織研究を進め、東山梨地域の学校教育の向上、教職員個人の資質の向上、教職員相互の強固なネットワークの構築を図り今に至っている。

一方で、子どもたちや学校教育をとりまく状況をみると、多くの課題が山積している。2021年度、文部科学省調査によると、不登校の子ども数は、小中学校、高等学校ともに前年度に比べて増加傾向にあり、小中学校で24万4940人となっている。とりわけ小中学校の増加率は昨年度比から24.9%増となっており、過去最多となっている。また、不登校の子どものうち、36.3%が学校内外の機関で相談を受けることができない現状がある。新型コロナウイルス感染症が子どもたちの心に与える影響も大きく、国立成育医療研究センターの2022年3月の調査では、小学校4年生から6年生の15%、中学生の24%に中等度以上のうつ症状があることが明らかになったという報告もあり、事態を深刻に受け止め分析する必要がある。

2018年調査 OECD加盟国（37か国）における平均得点の国際比較では、経済が低迷している現在においても、「15歳時点での日本の学力」は変わらず世界トップクラスである。その一方で、2019年に実施された日本財団「18歳意識調査」の第46回目、若者の「国や社会に対する意識」を見てみると、「自分を大人だと思う」「自分は責任ある社会の一員である」「自分で社会や国を変えられると思う」など、教育の最上位の目標とも言うべき「主体性・当事者意識・自律」といったことについては桁違いで世界最低である。たとえ学力が高くても、もっとも大切なものを失っては何にもならない。優先すべきことを国全体で合意していく必要も見えてきている。

本協議会では、2020年度より新しい形の研究体制の構築、発展的再編を行い、課題改善へと歩みをすすめている。しかしながら、新型コロナウイルスの影響で検証できていない部分があった。今年度はアフターコロナの教育研究活動として、発展的再編を検証する一年としてきた。教育活動は時代と共に変化していくことが必要だが、ただ時代の変遷に流されるのではなく、我々は、教育の不易と流行をしっかりと捉えた教育研究を行っていかなければならないと考える。子どもたちを中心に据え、学校・家庭・地域に根ざした「心豊かなふれあいのある教育」、「誰一人とり残さない」というSDGsの理念を踏まえたインクルーシブな学校づくり、組織研究の体制を東山梨の教職員が一丸となってすすめていきたい。

II 研究の推進について

1 研究の目標

「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」

2 研究推進の基本的方針

- (1) 1964年発足より半世紀以上が経過した歴史的な重みや意義を重視し、東山梨の抱える今日的な教育課題解決のための研究を推進する。
- (2) 教育課程（カリキュラム）の自主創造的な編成にとりくむ。
- (3) 各学校の校内研究と教協研究との有機的結び付きとその充実を図る。
- (4) 保護者・地域住民との連携を強化する。
- (5) 組織研究の意義を理解し充実発展させるために、積極的な参加意識の高揚と組織的参加体

制の確立を図る。

(6)平和・人権・環境教育を積極的に推進し、生命の尊さや平和の大切さの意識高揚を図る。

(7)働き方改革の視点から行った教協改革をすすめ、新たな教協体制の確立を図る。

(8)ウィズコロナ・アフターコロナの視点を取り入れた教協体制の構築・推進にとりくむ。

3 研究の組織づくり

研究の基底は校内研究にあるとの認識に立ち、課題の本質に迫り、解決の方法・内容を考えたり、専門的力量を高めたりする教育研究部会と、同じ地域に勤めるものが課題を共有し、連携をはかりながらその解決策を探るブロック交流研究会、さらに特別委員会を設け教協研究の推進を図った。以下、具体的に掲げる。

(1) 教育研究部会

共通テーマ：「人間性豊かな子どもの育成と教科教育課程の自主創造的な編成をめざし、教育の本質を実践的に追究する。」

	部 会 名		部 長	学校名	テーマ
1	国語科教育	小学校	後藤美樹	塩山南小	思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導 ～「指導と評価の一体化」を目指して～
		中学校	数野 透	塩山北中	主体的・対話的で深い学び実現する国語科の指導 ～言語活動の充実を通して～
2	外国語教育		的場貴政	塩山中	主体的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成 ～表現につなげる活動の工夫～
3	社会科教育	小学校	徳倉賢治	日下部小	市民を育てるための「主体的・対話的で深い学びを」 どのように実現するか
		中学校	志村真宏	塩山中	市民を育てるための「主体的・対話的で深い学びを」 どのように実現するか
4	算数・ 数学科教育	算 数	古屋 卓	塩山南小	つくり、いかす算数授業の創造
		数 学	佐藤治彰	勝沼中	わかる授業の工夫と授業実践 ～基礎学力の定着と考える力の育成～
5	理科教育	小学校	廣瀬哲也	加納岩小	わかる理科授業の創造 楽しく学び 自然を豊かにとらえる理科授業をどのようにすすめるか
		中学校	古屋希望	山梨北中	わかる理科授業の創造 ～考える力の育成と教材教具の工夫～
6	音楽科教育		雨宮雄貴	塩山中	確かな学び 広がる音楽 知覚・感受をもとにした音楽的思考力・判断力・表現力等の育成
7	美術・図工科教育		小澤朋子	山梨北中	一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか ～感動と発見のある授業づくり～
8	技術科教育		嶋津英斗	山梨北中	「つながり」を深め、資質・能力を育む技術家庭科教育 ～「つながり」を活かした教材開発～
9	家庭科教育		松明舞子	勝沼中	「つながり」を深め、資質・能力を育む 技術家庭科教育
10	保健体育科教育 (小学校)		上矢元気	塩山南小	教材の本質をふまえた体育指導のあり方 ～体づくり運動(遊び)を通して～
11	保健体育科教育 (中学校)		大澤祐子	勝沼中	生きる力を育てる保健体育学習を目指して ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～
12	保健教育		佐藤なほみ	祝小	自らの健康づくりに意欲的に 取り組む子どもをどう育てるか

13	生活科教育	奥山美恵	奥野田小	子どもが生き生きと学ぶ生活科 ～主体的・対話的で深い学びを引き出すための手立てを通して～
14	自治的諸活動と生活指導	鶴田 望	笛川小	一人ひとりを大切にした学級づくり
15	特別支援教育	中村悦美	日下部小	自立をふまえて（どの子ども共に生き、共に育つ） ～一人ひとりの実態をふまえた支援と指導のあり方～
16	福祉教育	中村 咲	加納岩小	学校教育における福祉教育のあり方を探る
17	食教育	小林由紀子	加納岩小	食生活を考える ～子どもたちのより良い食習慣づくり～
18	平和・人権教育と国際連帯	中村依里	日下部小	平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして
19	環境教育	松岡めぐみ	加納岩小	「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方 ～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～
20	情報化社会と教育・文化活動	中村千春	大藤小	情報活用能力を高める研究
21	進路教育	佐久間潤	山梨南中	一人ひとりにあった生きる力をつけるための進路指導キャリア教育は どうあるべきか ～小・中学校の実践を通して～
22	保護者・地域住民との提携	廣瀬尚子	大和小	地域とともにある学校づくりをめざして
23	教育条件整備	砂山玲央	塩山中	豊かな教育を子どもたちに
24	カリキュラムづくりと総合学習	前島香織	山梨北中	豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の編成 と実践
25	教育評価	小林淳子	東雲小	「生きる力」を育む評価のあり方

（２）ブロック交流研究部会

共通テーマ：「地域が抱える教育課題を共有し、解決に向けた交流を行い、同一地域の小中連携や小中の系統的な教育のあり方を追究する。」

ブロック名		ブロック長	ブロックテーマ
山梨 支 会	山梨南 ブロック	内田晴奈 (山梨南中)	○ICTの活用と小中連携
	山梨北 ブロック	佐久間 剛 (日下部小)	○小中の連携を深め、山梨北ブロックの児童・生徒の指導に生かす
	笛川 ブロック	布施 洋 (笛川中)	○小中連携を図るために、小学校児童生徒の相互理解
甲 州 支 会	塩山 ブロック	中根絵里 (塩山南小)	○小中の連携を深める中で、系統性をつかみ授業に生かす
	塩山北 ブロック	中村千春 (大藤小)	○小中の連携をはかり塩山北中学区の子どもたちを育てていこう
	松里 ブロック	山下史江 (井尻小)	○同じ地域に学ぶ子どもたちの教育のために、小・中・地域の交流と連携を深めよう
	勝沼 ブロック	広瀬沙希 (祝小)	○甲州市「確かな学力育成プロジェクト」との連携を図りながら、同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える

(3) 特別委員会

- ア 教育環境研究特別委員会（委員長 三枝一哉 委員…校長会・教頭会・教連・事務職）
- イ 児童生徒連絡協議会（会長 松里中学校生徒会会長 土屋 響 顧問教員 雨宮友久）

4 部会運営

本年度は、教育研究部会 25 部会、ブロック交流研究会 7 部会を成立させた。教育研究部会は年間 8 回、ブロック交流研究会は年間 2 回設定し研究活動を行った。年間計画等しっかりと見通しの上になつての研究活動を更に推進していくことが重要である。

5 研究日と研究集会

毎週水曜日を研究日とし、地区教協研究日以外は校内研究にあてる。厳に校内行事等を入れずに研究時間を確保するようにしたい。春季・秋季・冬季教育研究会は 4 年ぶりに参集開催を実現した。

6 研究推進地区

甲州支会を研究推進地区とし、塩山中学校を会場に各種教研活動を行ってきた。

7 教育講演会

参集の形で開催することができた。教協会員の参加者数に制限は行わなかったが、OB、一般参加者の参加制限を行った。

Ⅲ 今後の課題

「子どもたちの学び、私たち教職員の学びを止めない」という視点を持ち、この 3 年間新たな教育・教研活動を模索してきた。新型コロナウイルス感染症対策や GIGA スクール構想による新たな業務が付加される中、教職員の多忙化改善の視点に立った新しい形の研究体制のもとで、様々な教育課題解決に向けて、さらに質の高い研究活動をすすめて行く必要がある。ウィズコロナの時代に積み重ねてきた教育実践をいかし、アフターコロナの時代における持続可能な教研活動を構築していきたい。目の前の子どもたちの姿がスタート。東山梨教育の長い歴史の中で、先輩方が積み上げてくださった私たちの組織研究に誇りをもち、一人ひとりがその意義を自覚する中で、東山教育がさらに充実・発展するよう努めていきたい。

〈東山梨教育協議会役員〉

役職名	氏 名
会 長	新海直仁（笛川小）
副会長	山縣重人（塩山南小） 金森 淳（塩山北中）
事務局	広瀬竜太（勝沼中）[研究推進委員長・事務局長] 日野原和貴（加納岩小・教育会館）[事務局次長]
委 員	新海直仁（笛川小） 清水岳人（日川小） 三枝一哉（岩手小） 依田久幸（塩山北中） 小宮山昇（玉宮小）
	山縣重人（塩山南小） 鈴木 学（山梨南中） 中村亮二（勝沼小） 日原英二（八幡小） 内田浩恵（勝沼中）
	金森 淳（塩山北中） 前田大輔（塩山中） 広瀬竜太（勝沼中） 保坂洋仁（勝沼小） 日野原和貴（加納岩小・教育会館）
会 計	保坂洋仁（勝沼小）
会計監査	廣瀬 学（山梨南中） 橋本尚一（笛川小） 若月敬二郎（後屋敷小）

思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導 ～「指導と評価の一体化」を目指して～

I 研究テーマについて

平成29年に告示された新学習指導要領の中では、「カリキュラム・マネジメント」の充実について「教育課程を編成・実施し、学習評価を行い、学習評価を基に教育課程の改善・充実を図るというPDCAサイクルを確立することが重要」と示されている。また、私たちの日々の授業を振り返っても、計画、実践、評価、改善という一連の流れを繰り返しながら行い、児童のよりよい成長を目指した指導を行っている。児童の成長を見取り、その成果に応じて次の指導を行う「指導と評価の一体化」は非常に重要である。また、平成31年中央教育審議会報告「児童生徒の学習評価の在り方」に示された基本的な方向性には、評価によって「児童生徒の学習改善につなげること」と述べられている。学習指導要領「総則」にも、「児童のよい点や進歩の状況を積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること」、「学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」と書かれている。評価は、教師の授業改善の観点のみではなく、児童自らが学習改善を行っていくためにも重要なものである。

昨年度は、「評価」の視点がテーマに入ったことで、単元または本時の目標を達成するために、どのような活動を仕組んでいけばよいか、どのような教師の働きかけ・問いかけが必要であるかを考え、指導と評価の一体化について研究を深めることができた。3年サイクルの2年目である今年度は、単元や本時のなかで児童は目指す姿になっていたか、そのための手立ては良かったか、評価をどのように次の指導へつなげるのかを更に具体的に検証していく必要がある。研究授業や実践報告の中に「見取りの視点」「児童の変容」「教師の振り返り」の視点を入れ、児童の次の学びにつながることを意識しながら研究を進めていきたい。

II 研究の内容について

1 研究方法

- ・授業研究 …児童の実態に即した(発達段階に応じた)授業研究の取り組みを行い、検証する。→教材・話題の発掘
- ・実践交流 …国語科の学習で思考力・判断力・表現力を育むための指導をどのように行ったか実践を発表し合い、交流する。

2 授業研究

- (1) 単元名 自分の気持ちを詩でつたえよう～詩の発表会をしよう～
- (2) 教材名「ようすをあらわすことば」「見たこと かんじたこと」(光村図書2年下)

甲州市立奥野田小学校 第2学年 向山 紀子教諭

(3) 単元の目標

- ◎身近なことを表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気づき、語彙を豊かにすることができる。

【知(1)オ】

- ◎経験したことや想像したことなどから書くことを見つけることができる。

【思B(1)ア】

- 言葉には、事物の内容を表す働きがあることに気づくことができる。【知(1)ア】
- 語と語や文と文の続き方について注意しながら、つながりのある文章を書くことができる。【思B(1)ウ】

(4) 成果と課題

- 部員が持ち寄った語彙力を高める取組を日頃から行ったことで、言葉を広げることができていた。また、日々の積み重ねが、児童の書く力、自分の言葉で表現する力を高めることにつながっていた。
- 授業者の「ことば」を大切にしようとする気持ちが児童にも伝わっており、「言葉を知ることが好き」「詩を書くことが好き」という気持ちがよく伝わってきた。
- 写真や吹き出しといった手立てを用いることで、詩を書く見通しがもて、児童にとって流れが分かりやすかった。
- 題材によって、詩の書きやすさが変わり、言葉が上手く出てこない児童もいた。言葉を引き出すための手立てを授業内でも行う必要がある。また、次時以降の指導につなげていくことが大切である。

Ⅲ 成果と課題

- 言葉に対するアンテナ(言語感覚・言語意識)の感度を上げることが重要であることを確認できた。日々の生活での気づきを教師が意図的に広め、深めていくことが、言葉の醸成につながる。
- 実践発表・授業研究において、部員が忌憚なく発言し、よい雰囲気の中で充実した研究をすることができた。また、部会全体で指導案を検討し、テーマに迫るための手立てを考えることができた。
- 語彙を増やすことも、考えを深めたり広めたりすることも、「何でも言える学級集団」があつてのことだと改めて気付かされた。国語の授業を進めながら、互いの言葉を聞き取り、紡ぎ合わせていきたい。
- 評価が、教師の指導改善につながるものになっているか、更に検証し、理解を深めていく必要がある。

(部長 後藤 美樹)

「主体的・対話的で深い学び」を実現する国語科の指導 ～言語活動の充実を通して～

I 研究の内容

本部会では生徒の実態を踏まえ、上記のようなテーマで研究に取り組んできている。コミュニケーションツールの変化や人間関係の希薄化、情報があふれている現代社会において、自己の学びを調整しながら主体的に学びに向かうこと、また教材との対話や生徒同士、教員との対話を通して学びを習得していく力が、今まで以上に必要となってくる。適切な言語活動の充実を通して国語力をつけるために、本研究テーマを設定した。

II 成果物

指導者 森岡 輝

1 単元名・目指す言語能力

「魅力を効果的に伝えよう～適切な根拠をもって鑑賞文を書く～」

2 教材名 「魅力を効果的に伝えよう」（光村図書2）

3 展開

過程	学習内容と活動（主発問◎ 発問○）	指導上の留意点
導入 5分	1 前時の確認をする。 2 本時のめあてを設定する。 鑑賞文を発表し合い、効果的な表現を見つけよう。	・自分が選んだ絵と鑑賞文について確認する。
展開 15分	3 3人グループを作り、交流を行う。 ◎鑑賞文を読みあい、良いと思った表現や、より適切な表現について検討する。	・Google ドキュメントのコメント機能を使って、表現の検討を行う。 ・発表を聞く際は、 「魅力を明確に、わかりやすく書くことができるか。」 「魅力の具体的な説明が、読み手に伝わりやすく、説得力のあるものになっているか。」 「伝えたい様子にぴったりの表現で書くことができるか。」

		の三つの観点で鑑賞文を読み合うよう伝える。 ・コメントを書く際は、 「どの部分が、どのように感じたから良かったというように、具体的に書くこと。」 「改善案、代替案を必ず一つは書くこと。」の二つの観点で行うよう伝える。
18分	4 グループで話し合った内容を基に、鑑賞文を書き直す。 ・グループで話し合いながら、鑑賞文がより良いものになっているかを確認する。	・ドキュメントのコピーを作り、書き直しをさせる。 ・絵の魅力がさらに伝わりやすい効果的な表現を選んで鑑賞文を書くよう指導する。 ・司会を中心に話し合いをする。
7分	5 話し合いの中で変わった部分を発表させる。	・変更した部分をマーカー機能で色を変えた上で提出させる。 ・発表者のドキュメントを大型モニタに映す。 ・一グループ一人発表させる。
まとめ 5分	6 振り返りシートに本時の振り返りを行う。	・学んだことを、日常生活にどう活用していくか、自分の学びにどのように利用していくかという視点を持って振り返りをさせる。 ・振り返りで書いたことを何人かに発表させる。

Ⅲ 成果と課題

どの単元でも共通することだが、「目的」や「ねらい」の重要性について確認できた。「目的」を理解して言語活動を展開した生徒たちは、深い学びを得ていたが、理解不足のまま参加した生徒たちは、不完全燃焼だった。しっかりと「目的」を理解させながら導く「発問」の大切さも確認できた。ICTについては効果的な活用を見直す必要があり、また言語活動を展開するときの教員の役割を明確にしておく必要性も感じた。来年度の課題としたい。

（部長 数野 透）

主体的に英語学習に取り組む児童生徒の育成 ～表現につなげる活動の工夫～

I 主題設定の理由

本年度は「主体的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成～表現につなげる活動の工夫～」を研究テーマとして、小中連携という視点も踏まえ、これまでと同様に小学校の教員と中学校の教員が同じテーマのもと、研究を進めていく。

中学校における新学習指導要領では、それまでの4観点から、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」からなる3観点へと変更となった。そのため、本年度も3観点による新たな評価方法に関する研究を深めていくことを研究の一つの視点としていきたい。

さらにもう一つ具体的な視点として、特に“教科書題材（学習資料）をどのように扱って児童・生徒の主体的な学びを実現していくか”ということについての研究も含めていきたい。教科書は授業の中心となる学習教材であり、新学習指導要領において新たに導入された教科書の題材からどのように児童・生徒の主体性を引き出す授業をしていくのかという「視点」や「考え方」を学習することはどの教師にとっても重要なことである。小中連携の視点から考えると、1つの教科書題材について、小・中それぞれの教員が同時に見合うことも大切であると考え。しかし、小学校では2020年度より、中学校では一昨年度より使用教科書が変更となったことから、学年別の部会を設け、教科書題材をどのように扱うか、共通教材の作成や指導法のシェアに視点を置くこととした。また、GIGAスクール構想により、1人1台端末が与えられている環境において、ICT端末やデジタル教科書の活用方法についても学習していきたい。

英語学習においては、小・中学校の連携を軸に、児童・生徒達が「楽しい」と感じ、「わかる」と思う授業を創造することで、学習者がより主体的に取り組むことができる。そのためには、苦手意識を持ちやすい「書くこと」や「話すこと」といった表現の活動を工夫することが大切であると考え、本研究テーマを設定した。

II 研究の内容

- ・研究主題に迫るための指導案作成と授業実践
- ・教科書題材を活用した、教材作成や指導法の共有
- ・提案授業動画視聴および協議

1 授業実践研究

8月30日 松里中学校 益田 宗士 先生 「Enjoy the Summer」

講師：山梨大学教育学部附属中学校 関原 寛明 先生

1月24日 塩山北小学校 畑 佑弥 先生 「What's this?」

2 学年別研究会

部会員がそれぞれ主として指導している学年ごとに分かれ、教科書題材の扱いについて共通教材の作成や指導法の共有を行い実践した。最後の研究部会にて、全体でそれぞれの実践を報告し、全体で共有した。

3 学習会

夏季学習会では、小中連携の視点から、先進校の小中の外国語授業の動画を視聴し、「表現につなげる活動の工夫」や授業の進め方（中間指導等）について、両校種の視点から意見交換を行い、学び合いを行った。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

“児童・生徒が「楽しい」「分かる」授業を創造することが「主体性」を引き出す”という仮説に基づき、学年別研究会や統一授業研を行い、多くの気づきを得られた。小中1本ずつの指導案検討・研究授業を行い、他校種の先生方と意見交換をする良い機会になり、小中連携を深めることができた。さらに、ICT端末の活用方法を実際の使用場面から考えることができ、「授業で生かせる」視点が共有できた。

2 課題

学年別研究会において、話し合われた教科書教材やICT端末、デジタル教科書の効果的な使用法や実践例などを、年度末のみではなく、年数回全体で共有できると良かった。また、人数に偏りが生じてしまう、毎年同時期に実践を行っているため似たような実践になってしまう、という課題も見られた。さらに、限られた回数の中で研究を深めていくためには、テーマの中でも焦点を絞り、講師を招聘して学習会を行い、共通理解を持って研究に取り組む必要があった。

今年度は、研究授業において、単元後半のやりとりや発表の授業を研究したが、その授業に至るまでの過程についても確認し、意見交換ができるとさらに良かった。また、小中連携の観点から、今年度実施した「夏休みのやり取り」や「クイズづくり」など、同じ活動を発達段階に応じてどのように発展させていくのか、多角的な視点から実施することも良いのではないかと考える。そのために、授業の動画を録画し、実践共有をすることも効果的である。

（部長 的場 貴政）

市民を育てるための「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するか

I 主題設定に関わって

1 「市民を育てる」について

- ・現代の課題に迫る SDGs の視点や、平和、人権、民主主義（選挙権拡大）、防災教育等に焦点を当て、現在の社会の有り様を認識し、未来の社会の在り方を判断する子どもたちの育成を目指す。

2 「主体的・対話的で深い学び」について

- ・子どもたちが、自分事として主体的に学ぶことができる学習課題や地域素材について研究を深める。
- ・社会科授業で主体的・対話的で深い学びをどのように実践するか研究を進める。
- ・問題解決的な単元構成で、単元を通して深い学びを達成する授業づくりの研究を進める。
- ・未来の社会の在り方を判断する場面をどのように取り入れるか研究を進める。
- ・歴史を認識する学習の手立てについて研究を進める。

II 部会研究について

1 研究の内容

- (1) 社会的事象の教材化
- (2) 教師の効果的な指導や支援（発問や板書、資料の提示、資料の活用等）
- (3) 社会認識の深まりの見取り（学習の評価）
- (4) 授業の振り返り（授業の評価）
- (5) 言語活動の充実（位置付け、内容）

2 研究の方法

- (1) 授業実践研究（小中合同）
 - ・「私たちがつくるこれからの社会」（山梨北中 3年 荏原 悠光 教諭 8月）
 - ・「自然災害とともに生きる」（玉宮小 5年 山本 諭 教諭 1月）
- (2) 学習会
 - ・「災害・防災教育と学校教育」（講師 山梨大学准教授 秦 康範 先生）

III 成果と課題

1 成果

- (1) 小中合同での研究により、校種間のつながりや違い、小中9年間を見通した社会科教育について再認識できた。
- (2) 市民を育てるというテーマを受け、子どもたちが自分事として主体的に学ぶため、学習会で研修したことを生かしながら、地域の課題を意識した授業研究を、小中それぞれの段階で行うことができた。
- (3) ICTを活用しながら「主体的・対話的で深い学び」を実現する方策について、授業実践をもとに研究を深めることができた。

2 課題

- (1) 児童が主体的に学習を進めることと、情報の収集場面におけるICTの活用を、情報リテラシーの指導と合わせてどうしていくのが良いか。
- (2) これまで築き上げてきた社会科の授業観を、時代の変化に合わせてどう変革していけば良いのか。何を残していくべきなのか。
- (3) 児童の学習を深めるにはどうすれば良いのか、それをどのように見取るのか。

（小学校部長 徳良 賢治 塩山南小学校）

市民を育てるための「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するか

I 主題設定の理由

昨年度同様、市民を育てる「主体的・対話的で深い学び」を得るために、必要な手段及び方法を研究することとした。研究会の回数も少ない中ではあったが、小中合同の研究授業、指導案検討、臨地研修等を行い、次のような生徒の育成に繋がるものとして進めた。

- ①学習課題に対し、主体的な学びに向かうことのできる生徒
 - ②追究すべき課題を明確にとらえることのできる生徒
 - ③他者と協働し対話的な学びから考えを深めることのできる生徒
 - ④導き出した結論を、様々な資料や他者の意見を参考にしながら検証することのできる生徒
- 「主体的な学び」や「対話的な学び」は、生徒たち自身の力を着実に育み、その力が将来に繋がるよう努めていかなければならない。これまでの科学的認識を育てる授業研究を土台に「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を考え、研究を進めた。

II 研究内容

1 授業研究の実施（小中合同）

8月 荏原 悠光 教諭（山梨北中）

中学3年生 公民的分野 題材：「誰もが大切にできるルールとは」

1月 山本 諭 教諭（玉宮小）

小学5年生 題材：「自然災害とともに生きる」

2 学習会

8月：「災害・防災と学校教育」（講師 山梨大学准教授 秦 康範 先生）

III 成果と課題

- 臨地研修や学習会が授業づくりに活かされていくというスタイルが、今年度特に良い形になっていた。授業案が明確であったことから、学習会の計画も設定しやすかった
- 自然災害をテーマとして、教材が身近な存在になり、実際に起こる課題や、起こる可能性がある問題について考えを深めることができた。
- 端末を積極的に活用し、自分たちの考えを端末内に整理することができた。
- 小中それぞれの社会科の目標があるので、同じ題材を扱うことがあっても、アプローチの仕方も異なり、そういうことを考える機会があった。
- 個別最適化、協働的と言われるが、本当の意味で個別最適化とはどういうことか、協働的な学びとはどういうことか、ICTの活用も関連させながら再確認して、授業づくりに取り組んでいく必要がある。

（中学校部長 志村 真宏 塩山中学校）

つくり，いかす算数授業の創造

- 子どもたちが主体となり，数学的表現を通してかかわり合う授業づくり
- 数学を活用する意識や実践力を育てる「生活・社会とつながる教材」の研究と実践
- 数学の実際や子どもの考え方の変容が明示された研究と実践

I 研究テーマについて

小学校学習指導要領では、算数的な活動の充実や数学的思考力・表現力と算数を生活の中で活用しようとする態度の育成が示されている。それを踏まえ、算数部会では次の点に重点を置いて研究を進めてきた。授業を通して、数学的な表現（図・式・言葉・記号・操作）を用いたり、説明させたりして、子どもたちにコミュニケーションをさせていき、そこで出てきた表現を使って、できるだけ子どもの言葉でまとめさせていきたい。また、知識の活用についても考えていきたい。教科書の教材内での活用や生活内での活用を通して、算数で学習したことが、日常生活でも活用できるということが子どもに実感できる授業の研究をしていきたい。

以上のことから、今後必要不可欠になるであろう ICT 端末の利活用も含めて、この研究テーマを設定した。新学習指導要領になりコンテンツベース（内容中心）からコンピテンシーベース（資質能力中心）への授業改善の研究をさらにすすめていきたい。そして、授業を通して子どもの変容がわかる研究に近づけていきたい。

II 研究の内容

1 授業実践研究

（１）日時・場所：令和５年８月３０日（水） 八幡小学校 第４学年

授 業 者：菅野 雄太 教諭

題 材：面積のはかり方と表し方

～日常生活につながる算数授業～

（２）研究討議より

- 全員が、面積の単位（平方センチメートル（ cm^2 ））を知り、面積を数値化して表すことができた。
- 個人でのまとめや学習感想のなかに、面積を数値で比較することで早くできる、簡単にできるという記述が多く見られた。前時に、普遍単位を用いずに比較した結果であり、困り感から、普遍単位による比較が便利であると導き出すことができていた。
- 学習感想から授業に入ることで、問題提示、めあてづくりが児童の困り感を解決するためのものとなっていた。

- 学習方法を複数提示することで、問題解決のために、児童自身で学習調整ができていた。
- 紙と ICT 端末どちらでも取り組むことができるようにしたことで、様々な考え方が生み出されていた。
- 友だちと取り組むことを選択した児童が、学び合いのなかで間違いに気付き、正しい解答を導き出すことができていた。
- ICT 端末を用いて、友だちの考えを閲覧できる状態で自力解決を行ったため、友だちの考えをノートに写すことのみで終える児童がいなかった。
- クイズ大会の結果をもとに問題を作成したことで、児童の興味関心が高まった。また、日常生活と算数には密接な関係があることに児童自ら気付くことができた。
- 学校生活において「〇〇は□□cm²くらい。」と発言する児童が多く見られ、面積の量感が身に付いただけでなく、算数を日常生活につなげて考えさせることができた。
- 「単位があるよさってなんだろう。」と発問することで、面積を数値化できることのよさや、前時との違いがより明確になった。
- 平方センチメートル (cm²) が実際にどの程度の大きさか理解できるように、より丁寧に扱う必要があった。
- 今回は、単位を提示後に数を数えたが、数を数えてから単位を提示する流れも考えられる。
- 図形を並び替えて数えてもよいが、その方法だと時間がかかってしまう。早く数えられた方が便利であるという考えを先に共有できるとよかった。

Ⅲ 成果と課題

- 部会員全員が積極的に考えを出し合い、授業実践を行うことができた。今までの授業形態にこだわらず、試行錯誤しながらも、ICT 端末を積極的に利用してテーマに迫ろうとしていた。
- 研究授業では、ICT 端末を用いて他者参照しながら課題を解決する児童もいたり、ICT だけでなく、紙を用いて考える児童もいたりした。学習者が主体となる個別最適な学びが展開されて、「つくり、いかす算数授業の創造」のヒントを見ることができた。
- ICT の活用や、学習感想について、実践事例を共有しながら学ぶことができた。また、日常生活と算数の関係について考え、学ぶことができた。
- 個別最適化と ICT の利活用が中心となる今後の授業展開について、また算数、数学科として本部会で何を研究していくのかを年度当初に確認していくことが必要だと思う。
- 中学校へ進学した後のことも考え、端末への入力とノート作りの割合をどのようにしていくのが、よりベターかを中学校数学部会と連携して、研究していく必要がある
- 算数科としての板書の大切さを感じた。個別最適化を目指す中で、一斉指導で教えなければいけない場面もでてくる。そんな中で教師としてどのように授業を計画して行っていくか、何をめあてとして児童に活動させるのかをよく吟味し、考えていく必要があると思った。

(部長 古屋 卓)

わかる授業の工夫と授業実践 ～基礎学力の定着と考える力の育成～

I 研究の内容

数学科教育部会では、研究テーマの中の「考える力の育成」に焦点を当て研究を進めてきた。具体的には、①生徒が興味を持って取り組める教材や教具の提示、②考える力や思考の深まりを引き出させるような授業形態や発問設定、③生徒の興味をひく上で効果的な操作活動や、動的なものを捉えるのに有効な ICT の活用を取り入れた授業展開等を踏まえ、各校で実践した指導案や生徒がまとめたワークシートなどを持ち寄りながら研究を深めてきた。それらの中には、実践する前に指導案検討を行い、授業後に報告を受けた事例もあった。検討したことが授業にどのように現れ、生徒たちの思考にどう影響を及ぼしたのかを考えられる経験となった。統一授業研では数年ぶりに参集し、生の研究授業をそれぞれの視点で参観することができた。また、研究会における意見交換を通して授業観を広げることができた。生徒一人ひとりが「わかる授業」を通して考える力を身につけることができるよう、部会員全員で積極的に研究活動に取り組むことができた1年だった。

II 成果と課題

1 成果

- ・先生方との協議をする中で、自分にはない視点に気づくことができた。
- ・統一授業研や部会の活動を通して、ICT の活用について深めることができた。
- ・各校一実践の発表を聞くことができ、知識が広がったと同時に、自分が今までやってきた実践と比べ良いところを取り入れることができた。
- ・多くの先生方が参集のもと、研究授業を行うことができた。
- ・初任者の研究授業の指導案も検討することができ、よりよい授業実践となった。
- ・先生方の実践から学ぶことができた。特に ICT の活用については、chat や jamboard, GeoGebra を活用した実践が興味深かった。
- ・授業を受ける生徒の人数によっても評価の仕方に違いが生まれるなど、目の前の生徒を的確に見とり、授業構成や評価方法を考えていく必要を確認できた。

2 課題

- ・来年度は、各校の先生方の実践を今年度以上に共有して、意見交換できる場があると良い。
- ・夏の統一授業研の指導案検討で、ほとんど山梨北中の先生方に負担をかけてしまった。統一メ

ールなどを駆使して、もっと検討に関われたと思う。

- ・実践発表だけでなく、1つの単元や題材について全員で研究を進めていくこともしていきたい。
- ・夏の統一授業研までに研究会の回数が少ないため、指導案検討が一度しかできなかった。本来は、もう少し時間をかけて部会として準備ができればと思う。
- ・実践の持ち寄りという数年前の形式に戻ったが、箱ひげ図を研究していた時のように、1つの実践を深めていくことも有意義だと感じた。
- ・リーディングDX指定校の塩山中学校の数学の授業を参観したが、今後このような授業が求められるのであれば、部会で研究してもいいのではと思う。

III 授業実践（成果物）

1 第一回統一授業研

（1） 授業内容

6月の部会で授業者と単元を検討し、第2学年の「1次関数」の単元で研究成果となる授業を行うことを決定し、8月の部会で指導案検討を行った。夏の統一授業研で研究授業と研究会を行うことができた。表・式・グラフを比較検討したり、計算やグラフをかいたり、生徒の作業量が十分に確保された授業となった。グラフが点の集まりを示す際に使用したファンクションビューについて知る機会となり、ITCの活用の仕方の研究にもつながった。

授業者：菊島 昭佳教諭（山梨北中学校）

単元名：2学年 3章 1次関数 「グラフとグラフの関係について理解しよう」

ねらい：知・連立方程式の解が、2つの2元1次方程式のグラフの交点であることを理解する。

- ・グラフをかいて連立方程式の解を求めたり、連立方程式から2直線の交点の座標を求めたりすることができる。

（2） 研究会より

- ・生徒が発表する場面を組み込むことで、より活動的な授業とすることができる。そのためにはタイムマネジメントが必要となる。
- ・指導意図と異なる解法で課題解決を図る生徒が多かった。解決するためには、解き方まで指示を出した方がよいのかもしれない。
- ・夏休み明けということもあり、授業感覚が生徒も薄れているかもしれないため、「教え合っても良い」といった声掛けをしてあげることで救われる生徒もいたかもしれない。
- ・中心発問に時間をかけるため、ICT（デジタル教科書やパワーポイントなど）を有効活用できるとよい。
- ・数学の授業において、数学の言葉を正しく使えるように意識させたい。

（部長 佐藤 治彰）

わかる理科授業の創造

～楽しく学び、自然を豊かにとらえる理科授業をどのように進めるか～

I 研究の内容

1 具体的内容

- 子ども中心の授業づくり ○理科教育で何を学ばせるか
- 地域に根ざした理科教育 ○臨地研修や実験工作演習

2 授業実践（小中参観）

井尻小学校 佐野誠一 教諭 4 学年 「とじこめた空気と水」

3 外部講師

「最新の実験教材・ICTの活用講習」 株式会社ヤガミ、初鹿科学
「安全な科学工作実験」 中村雅彦 講師

4 各校の地域教材について

玉宮小学校 「玉宮水神池自然公園」について

II 成果と課題

1 成果

- 授業実践で夏は小学校の実践をみて、小中連携を図ることができた。
- 空気という目に見えないものをイメージ図に書かせて、全員でイメージを共有する流れがよかった。
- ジャムボードやスプレットシートを児童が使いこなしており、日頃から活用している成果が見られた。
- 2 回の外部講師により、実践的に学ぶことができた。
- 地域教材として、豊かな自然、里山を児童に感じてほしいとの思いから、2000 年に地域の方々の有志によって整備され、生物さがし、米作りの活動が続けられている実践が紹介された。

2 課題

- 授業実践では、「体積」「手ごたえ」「おし返す力」を精選したり、具体的な生活での事例を挙げたりすることで、理解を深めたい。
- 板書で実験の手順を示すことも挙げられた。
- 今年度は、1 校（玉宮小学校）のみだったが、来年度も継続して、各校の地域教材を知る機会を設けていきたい。
- 授業者決めが大変。専科が導入された学校もあり、理科を受け持っていない職員もいる。

（小学校部長 加納岩小学校 廣瀬哲也）

「わかる理科授業の創造」

中学校部会テーマ

～ 考える力の育成と教材教具の工夫 ～

I 研究の内容

1 理科の学びを支える、教材・教具の発表と検証

各校から授業で実践した教材教具を持ち寄り、研究討議を行った。延べ3名6教材。

2 理科自由研究の審査（支部）

各校から自由研究の代表作品（各校学級数分）を持ち寄り、県下児童生徒理科自由研究の代表作品2点を選考した。

3 夏季学習会

例ケニスより、講師を招聘し、授業内容のため実験器具等の紹介や体験を行った。
→最新の実験機器から手軽な実験方法の紹介をして頂き、今後の授業の参考になった。

4 統一授業研究会の実施と指導案検討

冬の統一授業研究会

指導者：村田 裕紀 教諭（山梨市立山梨北中学校）

指導：第3学年 地球と宇宙（第2分野「月や金星の運動と見え方」）

「金星の見える形や大きさが変わる理由を説明しよう」

→ICT 端末の効果的な活用、探求の過程に沿った授業の展開

5 授業に関する情報共有と検討

II 成果と課題

ICT端末の活用が進み、ICT端末を使った教材の発表が多かった。また、そのデータを共有して実際に活用することができ、部会として学び合いながら進めることができた。また、実験の仕方を検討し合うこともでき、実物を使って学ぶことの大切さも感じた。今後、ICT端末の活用が進むこと、部会構成員の年齢等を考えたとき、実物で驚きをもたせ、目で見て触れて考えさせる理科を実践されてきた先輩方の財産が継承されなくなっていくことが予想される。理科では、事物現象を体験的に学び、思考することが何よりも大切だということは変わらないため、そのような指導技術を学べる機会を、蓄積していける機会をしっかりと持ち続けていきたい。そして、生徒が主体的に学び、驚きと発見が生まれるような授業を今後も目指し、「理科好き」が増えるような授業実践を考え、各校で取り組んでいきたい。

（中学校部長 山梨北中学校 古屋希望）

「確かな学び 広がる音楽」

～知覚・感受をもとにした音楽的思考力、判断力、表現力等の育成～

I 主題設定の理由

これまで『「わたしの音楽 みんなで音楽」 ～音楽を形づくっている要素を感受し自ら広げる音楽の世界～』をテーマに研究を推進してきた。仲間とともに音楽を表現したり味わったりするためには、一人一人がどのような音楽を表したいのかといった、思いや意図が出発点となって、仲間とともに共有し、音楽の世界を広げていけるようにすることが重要であることと捉え、研究を推進してきた。

これにより、本研究では、音楽を知覚したり感受したりする学習を重点的に取り上げ、音楽を形づくっている要素がどのように関わっているのかを学習の中核に位置付けながら、音楽を表現したり味わったりする学習を展開する研究を推進してきた。授業実践においては、感性を高め、思考・判断し表現する「一連のプロセス」を重視してきた。音楽のよさが、どのような要因から生まれてくるのかを探るために、思考し、表現したり鑑賞したりする学習を実現することで、児童生徒の感性が高まり、より深く音楽を表現し味わうことへとつなげるよう、学習を展開してきた。また、児童生徒が取り組みやすさを感じられるようにスモールステップの設定や、教材や提示資料の工夫をする他、個別最適な学習環境を作るための ICT の活用にも取り組み、成果をあげてきた。

これからの研究では、「音楽を知覚したり感受したりしながら音楽に対する感性を働かせる学習」については、これまで同様、重要な学習と捉える。そして、児童生徒が感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現したり味わったりする活動において、「そのよさや価値等を考えるなどして、創造的に表現したり鑑賞したりする力を育成」することができるよう、さらに研究を推進していく。

この「よさや価値等を考える」ためには、音楽のよさ、面白さ、美しさを感じ取りながら想像力を働かせて聴き、どのように表現したいのか、音楽表現に対する思いや意図を明確にもち、自らの言葉で適切に表すことができるなどの力が求められる。これは、基礎・基本の習得とともに、音楽に関わる思考力、判断力、表現力等をどのようにして育成していくのかといった視点が重要であり、研究の中核となる。

義務教育9年間の積み重ねを意識する中で、9年間で身に付けた音楽の学力が、その後の人生において生きて働くものとなり、生涯において生活の中で豊かな関わりを続けていくことが重要となる。これは、「学びに向かう力、人間性等」に関わることであり、生活の中に音楽を生かしたり、我が国や諸外国の音楽に親しんだりする態度を養うこととなる。授業においては、生活や社会における音や音楽の働き、そして音楽文化についての観点及び理解を深めることによって実現できるものとする。

これまでの本県の研究実践の成果を基に、児童生徒が豊かで多様な音楽と出会い、音楽的な見

方・考え方を働かせて学習することによって、「知識及び技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養が図られ、生活や社会の音や音楽と豊かに関わる資質・能力が育成され、生涯にわたって生きて働くものへとつながることを目指して、本研究を進めていきたいと考えた。以上のことから研究主題を設定した。

【研究の視点】

- ① 知識・技能を活用し、一人一人に主体的な学びを促す活動の工夫
- ② 一人一人が明確な思いや意図をもち、伝え合う中で学びが広がる活動の工夫
- ③ 仲間と協働する喜びを感じながら音楽を表現したり味わったりする活動の工夫

Ⅱ 研究の内容

1. 研究の具体的内容

(1) 学習会

①夏季学習会「ICT 端末の常時活動での使用の工夫」

講師：上野原小学校 和智 宏樹 先生

②「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて

講師：山梨県総合教育センター 指導主事 小林 美佳 先生

(2) 実践報告

①題材名 「曲想と音楽の構造との関わりや音楽の特徴をとらえ、「ボレロ」のよさや美しさを味わおう」

松里中学校 竹川 佳那 先生

②一人一実践発表

Ⅲ 成果と課題

今年度は参集して研究授業を行い、実際に参観しながら研究を深めることができた。学習指導案検討やワークシートの作成などに全員の先生に関わっていただいたことで、深く研究することができ成果につながった。また、各校の実践を発表する学習会や討議を行い、歌唱やリコーダーの指導法や、感染症対策の現状など、他校の様子や実践の様子を知り協議していくことで、指導力アップに結び付けることができた。

学習会では、上野原小の和智宏樹先生による『ICTを活用した授業デザインと音楽活動の工夫』と、指導主事の小林美佳先生による『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて』についての学習会を行った。個別最適な授業の実現においては、ICTの活用が大きく効果を発揮することから、本部会の研究授業においても積極的なICT活用を試みた。また、「学習者主体の授業」についての考え方や、授業作りを学習会で行った。個別最適な学びにつながる授業の実現に向け、引き続き研究を深めていきたい。

課題としては、部員数の減少が挙げられる。特に小学校教員の数が激減しており今後も懸念される。小学校の先生方に少しでも役に立つような研究内容の工夫などを行い研究を更に深めていきたい。

(部長 雨宮雄貴)

一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか
～発見と感動のある授業づくり～

I 研究の内容

1 研究の柱

(1) 子どもの課題や実態にあった題材と授業づくり

(ア) 目の前の子どもの課題や実態をつかみ、ねらいを明確にして、より造形的な資質や能力が発揮できる題材の研究をすすめる。

(イ) 様々な場面で、子ども一人ひとりに表現する喜びを感じさせる。また、その表現を通し、子どもが自分や周りの人々、社会、自然や環境などを見つめ、子ども自身が主体となるような授業の組み立て方を工夫する。

(2) 子どもの表現活動によりそう支援のあり方

(ア) 子どもの思いによりそう支援のあり方を考える。

(イ) 子どもが何に悩み、考え、試行錯誤した末、どのような表現につながったのか、活動の様子の観察、子どもとの対話、スケッチや記録など、いろいろな方法で作品や活動を読みとる研究をする。

(3) つながりと広がり、先を見通した実践の積み重ね

(ア) 子ども同士が関わり合い、話し合うなど、互いに学び合うことのできる場の設定を試みる。

(イ) 題材と題材の関連や小・中学校の連携を考えたり、他教科との関連を図ったりすることで、子どもや学校の実態に応じた、系統的・発展的なカリキュラムの工夫をする。

(ウ) 子どもの生活を取り巻く地域や社会、それに関わる人々とのつながりをもった美術教育を通し、自分自身や社会を見つめていけるようにする。

(エ) ICT 機器を有効的に活用できるような実践研究を行う。

2 研究の方法

- ・授業研究を実施し、授業の在り方を考える。
- ・実技研修や学習会を実施し、授業に還元する。
- ・一人一実践による作品研究を行う。
- ・研究会場を持ち回り、各校の展示環境などを参考にする。

II 成果と課題

1 成果として

・今年度は、参集しての授業研究や県教研に向けての研究、一人一実践の作品研究、博物館での学習会、実技研修など様々な研究を行うことができた。また、「発見と感動のある授業づくり」という副題があることで授業をつくる視点が明確になり、子どもたちの姿を中心に据えた授業検討ができ、より研究を深めることができた。

・久しぶりに実際の授業を参観し、子どもたちのわくわくした気持ちであふれた教室の雰囲気を感じることができた。授業者の古屋ゆか先生の導入の巧みさや、個々の子どもに対するきめ細やかな対応、材料の豊富さ、子どもたちのつぶやきや試行錯誤している様子な

ど、実際に見ることができよかった。これからも感染対策に留意しながらこういった機会をもち、学びあいたい。一方で、昨年度の研究授業を動画に記録し、編集することにより図工・美術の授業で目指すポイントを改めて確認することもできた。実際に授業を参観し討議することと、それを動画に残すことで、より研究を深めていけると思われる。

2 課題として

- ・今年度は授業研究を参集で行うことが出来たので、実際の子どもの活動や姿から検証し学ぶことができたが、県の図美展の搬入で一回集まる回数が減ってしまい、授業案検討が十分に出来なかった。来年度は一回目の統一授業研究日が9月になるので、一回目に実施することにしていくとよいかもしれない。

- ・部会員が減り続けていることが大きな課題である。県教研でも常に高い評価を受けている研究をしているだけに、それが広がっていかないことが非常に残念である。

- ・図工・美術の授業における ICT 端末の活用に難しさを感じている。効果的な活用方法についての研究も深めていきたい。

- ・子どもたちに付けたい力を明確にし、その力を養うための授業づくりを意識したが、まだまだ研究を重ねる必要がある。特に、「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」「協同的な学び」について、図工・美術の授業では自然にできるところもあるが、さらに理論的な研究をしていくべきである。

Ⅲ 統一授業研と県教研の実践報告

1 県教研実践報告 小6「音色を形に」 授業者：市川安紀（塩山南小）

〈A 表現(1)イ(2)イ B 鑑賞(1)ア 共通事項(1)アイ〉

「音楽を形や色で表す」という題材で、子どもたちは、音楽に触れて、感じたり想像したりしたことを基に、表したいことを見付け、表し方を考えながら表現していった。実体のない「音」をどう色や形で表していくか悩みながらも、「音」を集中して聴き、色の選び方や線の強弱、塗り方など、試行錯誤しながら制作に没頭していく姿が見られた。高学年における主題設定や表現方法の多様性について有効性のある実践であった。

2 統一授業研実践報告

小2「みて、さわって、〇〇になりそう！」 授業者：古屋ゆか（塩山北小）

〈A 表現(1)イ(2)イ B 鑑賞(1)ア 共通事項(1)アイ〉

コルクやモールなど、色や形、質感が違った様々な材料を基に、つくりたい物を発想して試しながら作品を制作する題材であった。授業者の巧みな導入により、子どもたちは「やりたい！」と目を輝かせながら材料に向かっていく姿が見られた。ただ、「絵や工作で表す活動」と「造形遊び」との境目にあるような題材であり、授業のもっていき方に難しさがあった。もう少し材料に触らせて、考えさせる時間があるとよいとの反省点も出たが、総じて、子どもたちが五感を総動員して作品づくりを楽しんでいる姿を見ることができ、実際の授業を参観して行う研究の重要さ、素晴らしさを改めて感じた統一授業研であった。

（部長 小澤 朋子）

「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育

～「つながり」を生かした教材開発～

I 研究の内容

本研究会では、6年前から継続して地域教材の発掘について研究している。これまでに小水力発電や太陽光発電と農業、6次産業としてのワイン醸造などについて取り上げた。授業では小水力発電や甲斐サーモン、太陽光パネルと農業などについて取り上げ、実践を積み重ねてきた。身近な場所にあるということで親近感を感じ、学習意欲が高まったり、登下校中に見ることもできることで、学習内容と自分の生活とをつなげたりすることができることは大きな利点である。これまでの実践から地域教材を活用することで、生徒が興味を抱き、学習効果を向上させる手応えを感じることができた。

今年度は、新型コロナウイルスの5類移行を受けて、地元の産業に関わる施設を視察することができた。山梨市牧丘町にある八丁養鱒場を視察し、水産生物の栽培を「産業」としての視点から見た様々な実態を学ぶことができた。

また、GIGA スケール構想の中で一人一台タブレットが導入されて久しく、令和の学びの「スタンダード」としてICTの効果的な活用が求められている。本研究会でも、技術科の学びの特性として、今までの教育実践とICTのベストミックスを高い次元で実現していくことが可能であると考え、積極的に学習活動でICTを活用する実践を行ってきた。昨年度は、小学校におけるプログラミング教育とのつながりを生かし、さらに高等学校の情報科ともつなげられるようにビジュアル型プログラミング言語とテキスト型プログラミング言語の両方を扱う実践を行った。今年度は、情報の技術だけでなく、それ以外の内容でICTを授業で活用するための実践を行い、ベストミックスの実現に向けた研究を進めてきた。

II 具体的な研究内容

1 地域との「つながり」を生かした生物育成の技術の教材開発

山梨県で身近な生物育成の技術として、水産生物の栽培を扱うことは、生徒の視点を広げ、学習を深めるために大きな役割を持つと考えられる。この地域の産業としては、桃や葡萄といった果樹の栽培が有名であるが、笛吹川の源流である西沢や多くの湧水地、広瀬ダムや琴川ダムといった豊富な水資源の利用も行われている。そのため、地域とのつながりの中で効果的に水産生物の栽培の技術について学ぶことができると考え、山梨市牧丘町にある八丁養鱒場において、地域の産業に関わる施設の視察を行い、生物育成の技術の学習を深めるための教材研究につなげていった。

今回視察した八丁養鱒場は、河川から水を引き込み、自然の水の流れを生かした栽培を行っている。この養殖方法は、湧水を利用する栽培より病気の繁殖が少なく、ポンプ等による循環式の養殖で付いてしまう匂いも少なくなり、高品質な商品を作ることが可能である。商品は県外にも出荷するだけでなく、県外から仕入れに来る業者もいるそうである。

教材への利用に関しては、生物育成の技術（１）の内容の学習の中で、身近な産業として紹介するとともに実際の管理技術の工夫や、地域や環境といった制約条件など技術の見方考え方につなげる学習を行いたと考えている。また、豊富な水産資源や綺麗な環境など、地元の良さに気づき郷土愛を感じられるようにもしていきたい。

技術の見方考え方につながる、技術の工夫に気づく学習では、動画を使い施設を見せることで、そこにある管理技術の工夫（水の中だけでなく、総合的な工夫）を考えさせるといった活動も考えられる。その後、海水魚の養殖など違った施設と比較させることで学びを広げることできる。また、山梨には海水魚の養殖をしている場所があり、そういった場所とつなげるように展開させることもできると考え、他の地域との共同研究も来年度以降行っていくよていである。

2 ICTを活用し LDX を意識したつながりをつくる、授業実践

山梨北中学校の１年生で「材料と加工の技術による問題解決」の内容で授業実践を行った。タブレット端末を活用し、自分の構想を３Ｄデータとして表現する内容であった。この授業実践で扱う題材については、山梨県技術・家庭科研究部会の研究テーマである【「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育～つながりを生かした教材開発～】のもと、様々な「つながり」を考えながら設定されていた。また、リーディング DX スクール事業（以下、LDX）の研修の中で学んだ、ICTを活用した複線型の授業になるように構成している。生徒が主体的に学び、自らの学習を調整する力を育むために GIGA 端末やクラウド上のデータの活用、共有することで、今まで以上に効果的な「つながり」方を模索した授業であった。

Ⅲ 成果と課題

本研究会では、つながりをととても意識して研究を行い、共同研究を深めることができたと思う。八丁養鱒場での臨地研修では、生物育成の技術の中でも扱いの難しい内容であると感じている部分について学ぶことができたのは、大変大きな収穫であった。

また、多くの授業実践を、情報交換という形で共有して、生徒の変容を確認することもできた。臨地研究での学習を、地域教材として授業で取り上げた時には生徒は身近なところで、養殖がおこなわれていることに驚き関心を高めていた。LDX の複線型の授業を目指した授業実践では、ICT を活用していなかった授業に比べ、効果的な面も多く見られた。

一方で、新しい学びを意識して実践したため、様々な部分で研究不足を感じるものがあった。今回の実践から、次の段階の課題として、「利用するだけでなく効果的に活用するためにはどうしたらよいか」という視点で研究を深める必要性があることが確認された。

また、「つながり」をテーマに研究をしているが、自分たちでも気が付かないつながりもある。授業者も多面的に題材や教材をとらえながら生徒の反応を考え授業を構成する必要がある。今後も研究を深めていきたい。

生物育成の学習に研究の焦点をしぼり、研究授業ができればさらに研究も深まり、本地区ならではの実践が深まっていくと思う。

（部長 嶋津 英斗）

「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育

～住生活における「住生活の課題と実践」に向けて～

I. 研究の内容

1. はじめに

現行の学習指導要領では、育成を目指す資質・能力として、(1)「知識及び技能」(2)「思考力・判断力・表現力等」(3)「学びに向かう力・人間性等」の三つの目標が示され、その中でも学習した知識・技能を実生活で活用するために、家庭や地域社会などと連携を図った「生活の課題と実践」の充実が求められている。また、「小学校と中学校の系統性を図り、幼児や高齢者の家庭内事故を防ぎ、自然災害に備えるための住空間の整え方を重点的に扱い、安全な住まい方の学習の充実を図ること」と明記されている。

そこで、本研究では、引き続き住生活の学習を基盤に自分や家族の生活について考え、よりよくするための工夫や実践しようとする態度を育成したいと考え、これまで取り組んできた住生活における「生活の課題と実践」の研究をさらに深めるため、今年度新たに小中の「つながり」を深めた「衣食住の生活」の住生活の内容の研究に取り組んだ。

2. 今年度の概要

- (1) 子どもの実態把握のためのアンケート作成と実施
- (2) 各校で実践するベースとなる指導計画の作成
- (3) アンケート結果をもとに(2)の指導計画の見直し
- (4) 見直した指導計画をもとに各校で授業実践



3. 具体的な研究の内容

(1) 子どもの実態把握のためのアンケート作成と実施について

令和5年9月、東山梨地区中学校1年生268名(3校)を対象にアンケートによる調査を行った。アンケートの内容は、中学校で学習する内容を網羅し、生徒が課題を見つけられるように配慮した。また、小学校での既習事項を振り返らせることや、既存の知識と普段の家庭生活で実践していることをリンクさせて問うことにより、実態把握ができるように工夫した。アンケート結果より、子ども達は実際に災害を体験した機会が少ないことから、災害への備えや安全対策について実感を持った受け止めができていないという実態が見られた。また、最近では居住環境の利便性が良くなっているためか、自身の住まいについて実際に困っていることや不便に思っていることについても気がついていない様子も伺うことができた。

(2) 指導計画の工夫について

題材のはじめに、アンケートで自分の住生活を振り返らせ、まず、「家族の生活と住空間とのかかわり」「住居の基本的な機能」の学習をふまえ、モデル家族の健康・快適・安全で持続可能な住空間の整え方について課題を設定する。次に、幼児や高齢者など家族の家庭内事故を防ぎ、自然災害に備えた安全な住空間の整え方についての学習を生かして、課題を解決するための計画を立てて実践し、評価・改善する構成である。住生活の問題は、それぞれの家族や個人によって異なるものである。健康・快適・安全で持続可能な住生活を送るために、日々の住生活を振り返って見つめ直すことで問題を見いだし、一人ひとりにあった課題を設定し、その解決に向けてそれぞれが異なる実践を行う「学習者主体」の授業づくりを目指し、全11時間の指導計画を考えた。

(3) 授業実践について

自分や家族を取り巻く身近な問題点に気づき、問題を見極めて課題を設定し、解決する活動を通して、自分のこととして住まい方について考え、よりよい住生活の実現に向けて、工夫し創造しようとする実践的な態度の育成をねらいとし、授業実践を行った。

Ⅱ. 成果と課題

1. 成果

- (1) 本研究テーマである「つながり」を意識し、小中の系統性についてお互いに関連づけて授業内容や指導計画の見直しなど情報交換しながら研究を深めることができた。教科の特性上、それぞれの生活のあり方を大切にしていくからこそ、部会員同士の意見交換が大切であり、毎回の研究会が有意義なものであった。
- (2) 住生活のアンケートを作成し、実施したことで、子ども達の住生活に対する意識を把握することができた。また、それにより小学校の学びもふまえながら、指導計画を立てることができた。
- (3) 住生活における「生活の課題と実践」に向けて、授業実践することができた。今後、各校の授業実践をもちより、検証と改善に取り組んでいきたい。

2. 課題

- (1) 本研究テーマである「つながり」を意識し、生徒の実態把握により、授業を通して身に付けさせたい力、課題への気づき、その手立ての工夫について具体的な実践方法、内容をさらに深めていく。また、生徒の変容が可視化できるワークシートや評価を工夫する。
- (2) 3年間を見通して、実生活に生かせる学習内容と実施時期を再検討したり、ねらいに即した実践になっているのかを検証したりしていく。また、他教科とのつながり、家庭や地域、他機関との連携もふまえ、年間計画に取り入れていく。

(部長 松明舞子)

教材の本質をふまえた体育指導のあり方 ～体づくり運動（遊び）を通して～

【はじめに】

スポーツ庁が実施している「体力・運動能力調査」によると、子どもたちの体力については概ね低下傾向に歯止めがかかってきているものの、体力水準が高かった昭和 60 年頃と比較すると、基礎的運動能力は依然として低い状況にある。また、新型コロナウイルス感染症の影響が長引いている中、休み時間・放課後の遊びや体育活動の制限も続いた。さらに、コロナ禍において体育の授業以外に思い切り体を動かすことがない子どもも見られる。それにより、子どもたちの体力低下や運動経験の乏しさは加速しているとも捉えられる。だからこそ、運動の楽しさや心地よさ、喜びを味わうことができる授業を展開していくことが重要であると考えた。そこで、今回体育部会としては、「体づくり運動遊び」「体づくり運動」を研究領域とし、子どもたちの基礎体力の向上や進んで運動に親しむ姿勢を育てたいと考えた。運動がもつ本質的な面白さを味わうことができる体育授業づくりについて、研究をしてきた。

I 研究の内容

1 研究の具体的内容

- (1) 「体づくり運動（遊び）」について理論研究と実技研修を行い、授業づくりを行う。
- (2) ICT を用いたワークシートなど体育の授業の中での ICT の有効的な活用方法について研究を深めていく。
- (3) 各校での健康・体力づくり一校一実践の取組を共有し、日常的な取組や各校の体育的活動の様子の情報交換をする。

2 具体的な取り組み

- (1) 「体づくり運動（遊び）」実技講習会・理論研修会

講師 堀内 亮輔先生（東京女子体育大学）

- (2) 4 年生「作ってチャレンジ！体づくり運動」（体づくり運動）授業研究

講師 樋川 君子先生（元池田小学校校長）

授業者 小鳥居 快人 教諭（塩山南小学校）

3 授業研究

- (1) 本時の目標

○組み合わせた動きを考え、それを言葉や動きで表現することができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】

- (2) ICT 端末利用の工夫

○振り返りシート・ワークシートのデジタル化

○運動の様子を撮影&共有

(ア) 授業実践から学んだこと

- ・挑戦状を作成することは児童の意欲を向上させる手立てとして有効だった。
- ・はじめに「向き・姿勢・人数・用具の数」などの確認があり意識させることができていた。
- ・運動量が確保されていた。また、用具が充実していて自分で決めて工夫ができるので、嬉々として夢中になって取り組んでいた。
- ・ループリックで教師と学習者が、学習活動と評価を共有することができ、児童は学習の見通しを持つことができ主体的に運動に取り組んでいた。

(イ) 授業実践から、今後さらに研究を深めたいこと

- ・体育部会として、体づくり運動の系統性をふまえた授業づくりをしていくべきだった。
- ・動きとしての組み合わせではなく、道具の組み合わせになってしまった班が多かった。動きの獲得につながるように「コツ」を伝えたり、教師が「ゴール」の姿を明確にもっていたりするとさらに良かった。
- ・Chromebook が活動する場所の近くにあり、危ない場面があった。置く場所や使用する場所を決める、活動する場所を広げるなどすると良かった。

Ⅱ 成果と課題

1 成果

- ・実技講習会や理論研究において部会員全員で教材の本質にせまることができた。学習したことを活かして、それぞれの授業や研究授業に学習した内容を取り入れることができ、子どもたちが体を動かすことの楽しさや心地よさを味わっていた。
- ・2年目の継続研究で、昨年度の研究をさらに進展させることができた。
- ・組み合わせ技について深められて、組み合わせ技の蓄積ができた。
- ・健康・体力づくり一校一実践の情報交流も、他校の体育的な活動を知る良い機会となった。

2 課題

- ・ICTの活用方法（どの場面でどのように使うと有効か・実践例）
- ・動きづくり・感覚づくりという視点から低学年の授業でどのように行っていくか
- ・児童が主体となる協働的で主体的な学びの実践の中での教師の動き、声かけ

Ⅲ 成果物

- ・挑戦状動画
- ・デジタル化された振り返りシートやワークシート

(部長 上矢元気)

生きる力を育てる保健体育学習を目指して
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～

I 研究の内容

1 研究のねらい

- (1) 新たな時代を力強く生き抜き、生涯にわたり運動に親しめる生徒を育成するための指導方法や評価の工夫を研究する。
- (2) 知識や考え方を活用し、技能を習得できる指導計画を研究、協議し、深い学びへと繋げられる単元計画のもと、授業実践及び考察を行う。

2 研究概要

- (1) ICT の活用や学習カード、指導と評価の一体化に基づく評価計画など、各校における授業実践の共有や情報交換。
- (2) 県教委の資料をもとに、指導や評価に関わる勉強会。
- (3) 先進校の文献や資料を参考に、ICT の活用方法や学習カード、指導案の研究。
- (4) 授業研究を通して、研究のねらいに迫る。

1月24日(水)「バスケットボール(1年生)」

山梨北中学校 藤沢 仁士 教諭 , 武藤 拓馬 教諭

3 理論研究に基づいた授業実践について

事前アンケートの結果から、小学校でバスケットボールを経験していない生徒が一部いたため、経験の差を考慮する中で互いに教え合い、学び合いながら学習を進められるように単元計画を作成した。授業実践では、生徒に単元のゴールを示すことで、見通しをもって授業に臨むことができた。単元のなかばでこれまでの活動を自己評価することで、単元後半も技能向上に向けて意欲をもって主体的に活動することができた。グループ活動や振り返りの場面では、ICT の活用と学習カードを併用することで、思考や分析場面においても効率のよい授業が進められた。生徒の実態や単元の特性に合わせて、学習カードを活用しアナログ的な活動をバランスよく取り入れ、単元計画や指導計画について、今後も自校の実態に合わせて授業実践をし、ICT 活用についての優位性について研究を深めていきたい。

研究会では、様々な視点から多くの議論が交わされ、授業実践から見えた今年度の成果と課題を共有することができた。

II 成果と課題

(1) 成果

今年度は、昨年度課題にあがった「ICT 活用と対話的活動を設定する中で、どう運動量を確保していくか」という点について、授業の工夫・改善を行ってきた。ICT を活用し、自己観察や他者観察を行う中で学び合いの時間を設け、学習カードを活用しアナログ的な活動とのバランスをとりながら、お互いに理解を深める場を設定することができた。また、ICT 活用と対話

的活動を設定する中で運動量の確保を効率よく取り入れるために、各校より授業実践を持ちより工夫した点を出し合い生徒が主体的・対話的で深い学びができるよう、学習の場の工夫や振り返りから課題解決の糸口を見つけだし次の授業へと生かすことができた。

(2) 課題

今年度は、感染症による学年閉鎖で研究授業を部員が参観することができなかった。しかし ICT の活用や学習カード、指導と評価の一体化に基づく評価計画など、各校における授業実践の共有や情報交換をすることができ、研究を続ける上で大きな成果となった。今後の課題としては、習得した知識をもとに身につけた技能をどの場面でも活用するのかを明確に授業を行うこと。習得した技能がどのような場面で生きるのか（場面設定）を示せる授業を仕組むことが挙げられる。課題解決に向けて各校の授業実践で研究を進め、成果を共有し、運動量の確保と ICT 活用のバランスについても、さらなる研究を進めていくことに努める。

III 成果物

(1) 授業で使った個人カード

授業のはじめに、ドリル（主体的な活動）の時間を設け、カードに記入させることで、単元を通して、学びに向かう力を評価できた。また、声かけシートを活用し、生徒が前向きに活動できるように「仲間を褒める声かけ」や「仲間が失敗した時の声かけ」、「アドバイスの際の声かけ」について具体例をあげて提示し、運動に消極的な生徒も前向きに活動できるような雰囲気づくりを行った。

[illegible]

試合シーン①		
ひみんが笑しく、射向直にフレンシュで巻く瞬間をみんまでつくろう！！		
仲間を助けるパワーワード		仲間を助けるパワーワード
オスネのアンパルは、サキヨロイベント		
ショットドリル		
ボールを遠く方向の目標に向けて打つ。	壁はできさずボールを定数する。	リアルでの壁は、射を空を使って動かすボールを定数する。
近距離ショットジョイント		
ショットは、目標の真ん中から放つ。アゴより下から打つ。	ショットの壁は、打ちきって打つ。	ボードの目標の壁は、第一打を放つでショットを打つ。
サキヨロパス		
ボールを相手よりパスをスルーする。	相手の壁から相手の壁に届くまで一直線に射とアゴを使って、押し出す。	パスを出す際に、どきどきで壁に届くまで打ち込むがうらうら、押し出す。
バントドリル		
ボールを遠くまで打つ。	ボールから壁を打ち込む。壁と壁を打ち込むボールを打つ。	壁と壁を打ち込むボールを打つ。

（２）基礎知識・技能の確認と運動分析

ペアとこれまでのドリルを振り返り、課題解決に向けた練習を実践。動画撮影では、課題解決に向けて自分たちで考えた工夫点を説明を入れながら撮影し、協働的な学びができるようにした。活動後はグループミーティングで自己評価・他者評価をし、効果的な練習方法などについても共有することができた。



心身ともに健康な生活を送る子どもをどう育てるか ～健康な生活習慣への取り組み～

SNSが急速に普及した現代社会では、健康についてメディアで取り上げられるなど、健康に対する関心は高く、多くの情報で溢れている。また、近年の子どもたちの健康課題は、就寝時刻の遅延や体力の低下、食生活の多様化、メンタルヘルスなど、複雑化かつ多様化している。さらに、長期にわたる新型コロナウイルス感染症の流行やメディア機器の普及など社会状況の変化は、子どもたちの心身の健康に大きな影響を与えている。

そこで、心身ともに健康な子どもの育成と健康な生活習慣の確立を目指し、今年度も引き続き「生活習慣」と「心の健康」に焦点を当て研究を進めている。科学的根拠に基づいた内容で子どもたちが健康の大切さを実感できるような指導の工夫、また、よりよい健康生活を意識し自分事として考え、行動・習慣化できるような支援や指導、環境づくりをしていきたいと考え、取り組んでいる。

I 研究内容と方法

1 生活習慣グループ：ICT端末の使用と目の健康について

実態把握と保健教育の実践

2 心の健康グループ：心の健康を保持するための効果的な健康教育のあり方について

実態把握と保健教育の実践

II 成果と課題

生活習慣グループでは昨年度に引き続き、各校の実態把握と指導教材等の見直しを図りながら、各校の実態に応じた実践を積み重ねてきた。5学年学級活動指導案を検討し、ICT端末を活用することで、アンケート集約の簡素化や児童の考えを即、一覧でき、児童への声掛けや授業へ組み入れる実践研究を行うことができた。来年度以降、知識の定着や意識の向上、行動変容が持続できるように、より効果的な指導方法や保護者への啓発について検討していきたい。

心の健康グループでは、昨年度に引き続き、ICT端末を活用した「心の健康観察」を実施し、作業時間の短縮や情報把握、結果の反映等速やかに行うことができた。また、各校で心の健康を保持するための保健教育を実施することができた。来年度以降、児童生徒の一人ひとりの心の状態をより効果的かつ経年的に把握するために、「心の健康観察」については、個々のデータ化を寛容にできるように改善し、また、今年度の実施された保健教育について、発達段階毎に分け、発達に合わせた指導計画の作成を含めた研究を続けていく。

III 成果物

1 生活習慣 保健教育資料（指導案、配付資料等）、Google Formsでのメディアについての（事前・事後）アンケート、チャレンジカード

2 心の健康 保健教育資料（パワポ、配付資料等）、Google Formsでの心の健康観察

（甲州支会代表 加藤 真菜）

児童生徒が意欲的にとりくめる健康教育をめざして

山梨支会では、昨年度から「子どもたちの心の健康の現状とその課題解決に向けて」をテーマに掲げ、研究を進めている。新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、生活に大きな制限をもたらした。5類感染症に移行後は、社会的活動の制限も徐々に緩和されているが、このような環境の変化は子どもたちの心の健康に大きな影響を及ぼしていることが推測される。保健室から見える子どもたちの姿からは、心の健康状態が懸念される場面も多く、子どもたちに心の健康の保持増進のための自己管理能力を身に付けさせることは喫緊の課題だと考える。

そこで、本支会では心の諸問題を未然に防止する予防的援助として心の健康を支える土台づくりに着目し、やる気や感謝、強みといった心のポジティブな側面に注目する心の健康習慣を身に付けさせ、主観的幸福感を高めることが心の免疫力を上げ、心身の不調を遠ざけることにつながるのではないかと考えた。困難の多いこれからの時代を生きていくために必要である、元気な心、へこたれない心、しなやかな心を持った子どもたちの育成を目指した健康教育の実践について研究を深めることとした。

I 研究内容の方法

- (1) 主観的幸福感尺度を活用した児童生徒の心の健康状態調査
- (2) ポジティブ心理学等を取り入れた健康教育の実施

II 成果と課題

主観的幸福感尺度を活用して児童生徒の心の健康状態調査を把握し、より良好な心の健康習慣づくりを目指して、ポジティブ心理学等を取り入れた健康教育を実施した。健康教育の実施前後に同じアンケート調査を行い、主観的幸福感の変化を評価した。今回の実践が児童生徒の心の状態に良い影響を及ぼすことが示唆された。また、向上した主観的幸福感は、指導後2ヶ月経った時期でも維持されていた。このような結果を得られたことが今年度の大きな成果であり、心の健康教育の重要性を再認識することができた。

本研究が始まり2年目にあたる今年度は、研究内容についての学習を深めながら、3校で実践を行った。来年度は、研究を計画的に進めていく上で実践を山梨市内全学校に広げ、自らの健康課題を解決しながら、心身ともに健康的な生活を送ることができる子どもたちの育成を目指し、取り組んでいきたい。

III 成果物

- ・主観的幸福感尺度を活用した心の健康状態調査
- ・幸福学やポジティブ心理学等を取り入れた指導教材

（山梨支会代表 上治真央）

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」

～主体的・対話的で深い学びを引き出すための手立てを通して～

生活科において、子どもたちが身近な人々、社会及び自然と関わり合う中で、価値ある経験をしていき、交流や関わりを深めていくことでより豊かな学びへと繋がっていく。友達や物と関わり、言葉や活動でやりとりをしたり、指導者との言葉のやりとりをしたりする中で体験による学びがより深まっていく。また、評価の視点や基準を明らかにしていくこと、そして見取ったことを生かして、その子どもなりの前進を見い出していくことで、適切かつ子どもの気持ちの動く学習へと繋がっていく。

そこで、子どもたちが主体的に学び、物や人や自然との関わりの中でより深い学びをしていくための「具体的な手立て」「学びの深まる交流」「適切な評価のための評価カードや見取りの方法」、「学びを深めるための教師の関わり方」についての研究をすることで生き生きと学ぶことができるのではないかと考え、このテーマを設定した。

I 研究の内容

1 研究の内容

- ・日々の授業についての情報交換を行う中で、授業力を高める。
(授業内容・方法・教材等の実践の発表)
- ・授業研究を通して「子どもが生き生きと学ぶ生活科」について研究を深める。

2 研究の内容・方法

(1) 全会員の実践紹介と意見交流による学び合い

- ◇1学年「日下部小学校のスタートカリキュラムと生活科の授業実践」 佐藤淳貴(日下部小)
 - 「がっこうたんけんをしよう」 奥山美恵(奥野田小)
 - 「きせつとあそぼうーあきー」 山下史江(井尻小)
 - 「もうすぐ2年生」 岩下亜希子(後屋敷小)
 - 「わたをそだてよう」 向山有紀(八幡小)
- ◇1,2学年「自然を教室に」 梶原裕子(山梨小)
- ◇2学年「ぐんぐんそだてみんなの野さい」 大久保有羽(日下部小)
 - 「町たんけん」 守屋博貴(井尻小)
 - 「町たんけん2」 大島めぐみ(神金小) 高野裕平(山梨小)
- ◇3学年社会「まちの様子」 米倉佑季(日下部小)
 - 総合「ころ柿探検隊～ころ柿の作り方を紹介しよう～」 天野ねいろ(井尻小)
- ◇自立活動「体を動かそう～感覚トレーニング～」 矢崎さつき(奥野田小)
- ◇指導助言 古屋雅章校長先生(加納岩小)

(2) 学習会の設定

山梨大学教育学部附属小学校の笠原成晃先生を講師に迎え、「2年生の生活科に関わる指導について」というテーマで理論研究を行った。授業を作る上で大切にしたいことを中心に、資料や先生の実践を紹介していただいた。その後、研究授業や日々の授業に生かす中で大変参考になった。

(3) 研究授業

「こんなに大きくなったよ ―広がれわたしー」 八幡小学校 第2学年 指導者 精進 利恵

本単元のねらいは、自分の成長を振り返る活動を通して自分のことやたくさんの人たちに支えられてきたことについて考え、できるようになったことがあることに気付くとともに、自立への心構えをもって生活しようとするところである。本時では、「自分のいいところをもっとたくさん見つけよう。」というめあてで授業を行った。グループでの交流とICTの両方を組み込んだ活動は、言葉を伝え合ったり、Jamboardに書かれた友だちの言葉を見たりする中で、子どもたちの思考が深まっていた。ワークシート1枚に自分の気付き、友だちや家族からの言葉がまとめられていることで、気付きの質がより高まる授業となった。子どもの自己肯定感や自己有用感の高まりを見取ることができた実践であった。

II 成果と課題

1 成果

- 実践報告では、ICTの活用を含めた子どもたちの意欲を高める工夫を共有することができた。
- 同じ単元であっても、地域や学校、子どもの実態に合わせたアプローチの仕方が様々あり、大変興味深かった。
- 体験的な活動が重要な教科のため、先生方の実践や知識を情報共有することが何より参考になり、自身の実践に生かすことができた。
- 夏季学習会では、講師の笠原先生を招いての学習会を通して単元づくりのポイントや気づきの質の高まりについて学ぶことができた。
- 研究授業では、本時のめあてから授業の流れ、子ども達の交流の仕方やワークシートの形式まで、部会員みんなで意見を出し合って1本の授業をつくりあげることができた。

2 課題

- 今年度から部会のGoogleクラスルームができたので、今後有効活用できるといいと感じた。
- 生活科では今後、家庭の実態（母子家庭・父子家庭・ネグレクトなど）に応じて、家庭生活に関わる活動の指導内容を検討しなくてはならないと思う。情報を共有し、家庭との連携について研究していく必要があると思う。
- 思考ツールの使い方が実践発表の中で出されたが、どの場面でどんなツールを使うのが効果的なのか知りたいと思った。

(部長 奥山 美恵)

一人ひとりを大切にした学級づくり

I 主題設定の理由

今の子どもたちが成人して社会で活躍するころには、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予想が困難な時代となっている。子どもたちを取り巻く環境の変化により学校が抱える課題も複雑化・困難化している。

しかし、学校が抱える課題が複雑化・困難化しても、学校での「学び」の基本は、学級集団にあるといえる。一人ひとりの子どもが集団の一員として互いに認められ、楽しく生活し、学ぶための空間が確保できるような学級集団づくりが求められる。そしてさらに、自分たちの思いによって自治的な活動を創り出し、そこから学びあえる学習集団にまで高めていく必要があると考える。

そこで、本部会では、一人ひとりが認められる学級づくりをめざして、「一人ひとりの子どもが居心地の良い集団づくり」、「人間関係の絆を強め、人とのつきあい方を学んでいく場面づくり」について研究を進めてきた。今年度は、人権教育の推進についての学習を位置づけ、「一人ひとりの児童生徒がその発達段階に応じ、人権の意義・内容や重要性について理解し、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができるようになる」という人権教育の視点も大切にしながら、「子ども自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だて」を明らかにするための研究を行っていくこととし、本主題を設定した。

II 研究の内容

1 研究の方法

- (1) 学級づくりのための手だての学習・演習に取り組み、学んだことを日々の実践に生かしていく。
- (2) 講師を招き「学級づくり」についての学習会を行う。
- (3) 授業研究を通して「子ども自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だて」についての学習を深める。

2 研究の具体的内容

- (1) 第1回研究会 今年度の研究の方向性の確認
- (2) 第2回研究会 年間計画についての検討・確認
学習会① 「学級づくりのための手だて」
講師：藤原 祐喜 教頭先生（山梨市立笛川中学校）
- (3) 第3回研究会
学習会② 「話し合い活動を取り入れた学級経営について」
講師：岩下 和子 先生（甲州市教育委員会 指導主事）
- (4) 第4回研究会
学習会③ 「実践報告」
・学習会①②で学んだことをいかした実践や資料などを持ちより、「一人ひとりを大切にした学級づくり」について、学びを深めた。

(5) 第5回研究会

学習会④ 「実践報告」

- ・学習会①②で学んだことをいかした実践や資料などを持ちより、「一人ひとりを大切にした学級づくり」について、学びを深めた。

(6) 第6回研究会 秋季教育研究山梨集会の還流報告

統一授業研究会に向けた指導案検討

(7) 第7回研究会 研究授業 第1学年学級活動

「学級をよりよくしよう～きらきらワードでニコニコ大作戦～」
＜学級活動（2）イ＞よりよい人間関係の形成

指導者 加納岩小学校 藤本 優美 教諭

(8) 第8回研究会

研究のまとめ（本年度の成果と課題について、来年度の研究の方向性について）

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- ・毎回活発な研究討議ができた。また、丁寧なご指導ご助言をいただき、学びが深まった。
- ・藤原教頭先生、岩下指導主事による2回の学習会が実施できたことが、日々の実践にすぐ生かせる充実した学びとなった。実践することで、さらに自身の学びにつながった。また年度のはじめに実施できたので、学級をつくっていく上で参考にすることができた。
- ・実践報告では紙面だけではなく、写真や動画などのICTを活用することができた。また、学習会⇔実践のつながりがありよかった。実践者の学級集団づくりへの熱い思いが伝わってくるものばかりで、たくさんのことを学ぶことができた。
- ・甲州班、山梨班ともに、県外研修も実施できた。このような機会を今後も大切にしていきたい。
- ・本部会の研究が、全国教研の県代表に選ばれた。
- ・部会員みんなで指導案検討し、意見を交流することによって、「一人ひとりを大切にする」ことについて改めて考え、全員が研究を深めることができた。
- ・構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング、クラス会議など、小学校でも中学校でも実践できる内容を、小中学校の先生たちが一緒に学び、理解を深めることができた。理論研究や部会員の実践発表、そして研究授業という流れで研究を進め、研究テーマに迫ることができた。
- ・教科における授業や総合的な学習の時間、学校行事について考える活動などで研究していくことも可能である。今後も、一人ひとりを大切に、クラスの成長、また子どもの個の成長や変容を実感できる研究をしていきたい。

2 課題

- ・指導案検討が1回だけであった。早い段階で一度検討する時間を作れると授業者の安心感にもつながるので、指導案検討の時期と回数を検討していく必要がある。
- ・子どもたちの主体性とは何か、子どもたちの主体性を伸ばしていくためには9年間という視点でどのように進めていくのか、などをもっと多くの中学校の先生たちと一緒に考え、さらなる小中連携につなげていきたい。
- ・学年の発達段階に応じた話し合い活動の手立てについて、学ぶ機会を設けていくことも今後検討していきたい。

（部長 鶴田望）

「自立をふまえて（どの子ども共に生き，共に育つ）」
～一人ひとりの実態をふまえた支援と指導のあり方～

I 主題設定の理由

東山梨地区では，今年度通級指導教室が2つ新設されるなど，特別な支援を必要としている児童生徒の増加が見られた。特別支援学級においても，障害種別は多様で，それぞれの児童生徒の実態に応じた指導が求められている。また，通常学級においても支援や配慮を必要とする子どもが多くおり，支援学級・通級指導教室・通常学級の担任・担当が抱える課題は山積している。児童生徒，一人ひとりの障害の状況や発達段階，その特性に合わせた支援・指導を充実させることは，共通した研究課題である。

今年度の第73次春季教育研究集会において，本県の研究テーマは「どの子ども共に生き，共に育つ」～多様性を認め，共に成長する支援方法の工夫を通して～に決定した。

具体的な研究内容として

◎各地区で一人一実践など，全員が主体的に研究に参加し，組織研究にあたる。

◎レポート作成においては，子どもを中心とした実践により，子どもたちの変容をみとり，成果と課題を明らかにすることが確認された。

そこで，本部会でも，授業実践・学習会・情報交換などを通して，これまでの研究の蓄積や成果を踏まえた継続的な研究を基にしつつ，児童生徒一人ひとりの実態に合わせ，自立をめざした支援の方法を探るべく本主題を設定した。

II 研究の内容

1 講師を招いて学習会を行った。

8月 9日 「特別支援教育におけるICTの効果的な活用について」

講師 山梨県総合教育センター 相談支援センター

主幹・指導主事 原 満登里先生

2 小グループに分かれ，情報交換を行った。

8月 30日 個人差・学年差のある学級での授業 自立活動についてなど

1月 10日 不登校・登校渋りへの対応 ルールを意識させる工夫など

3 研究テーマに基づいて，研究授業を行った。

9月 20日 指導案検討 八幡小学校 菊嶋 理奈教諭

1月 24日 研究授業 特別支援学級(知・自・病)合同 自立活動指導案
題材「宝探しでクイズ！」

授業者 菊嶋 理奈教諭 (八幡小)
指導・助言者 岡 輝彦 校長先生 (八幡小)
川崎 剛 教頭先生 (菱山小)

4 成果と課題について話し合い、次年度に向けて見通しをもった。

2月 14日 今年度の成果と課題 来年度へ向けて

Ⅲ 成果と課題

1 成果

(1) 研究授業について

- ・指導案検討を含めた授業研究を通して、実際の場面での指導のあり方や目標のたせ方など、多くのことを学ぶことができた。また、自立活動の取り組み方も今度に生かせる内容であった。
- ・研究授業をVTR提案で行うことは、児童への負担も少なく良かった。今回の提案においては、本時のみではなく、単元を通して授業の様子を紹介していただき、児童の普段の様子や変容がよく分かった。
- ・グループに分かれて研究討議を行ったことで、様々な意見がでて有意義な話し合いができた。

(2) 学習会について

- ・特別支援学級におけるICTの活用について、児童の特性に合わせた様々な実践事例やアプリを紹介していただき、とても参考になった。

(3) 情報交換

- ・情報交換を行うことで、悩みや課題を共有し、みんなで考えたりベテランの教師からアドバイスをもらったりすることができ、有意義だった。

(4) 全体を通して

- ・多様な実態の子どもたちと担任のかかわりについて、深く考えることができた。
- ・教材の共有ができるよう、データベース化が進んだ。

2 課題

- ・研究授業はとても意義あるものだが、過度な負担とならないよう工夫していく。
- ・情報交換の場がもう少しほしい。そこで教材の紹介などもできるのではないか。
- ・特別支援教育について、もっと深く知識をつけていけるとよい。

(部長 中村 悦美)

学校教育における福祉教育のあり方を探る

I 研究の内容

- 1 各校の福祉教育の実践や様々な実践例から学び合う。
- 2 福祉教育のあり方を探りながら、研究授業に向けて部会員全員で授業づくりを行う。
- 3 理論研究などを通して、福祉について理解を深める。

II 実践・研究授業

1

研究授業

第6学年 家庭科 加納岩小学校 小池 美樹

(1) 題材名 「共に生きる地域での生活」A (3) 家族や地域の人々との関わり

(2) ねらい

○自分の生活と地域の人々との関わり合いに気づき、身近な人々との関わりで生活が成り立っていることや協力して助け合っていく必要があることについて理解できるようにする。

(3) 本時の学習内容

- ①自分が利用したことがある施設はどのようなものがあるか考える。
- ②幸せだと思うこと、幸せではないと感じる場面についてイラストを見て挙げる。
- ③【全体交流】どんな場面があるか、自分だったらどうするか交流する。
- ④地域の人と普段関わっていくには、どのように生活したらよいか考える。

(4) 研究会より（話し合いの内容と助言）

- ・一方が幸せであっても、一方が幸せでないということに気づくことができた児童がいたのがよかった。
- ・家庭科と福祉どちらのねらいに沿って行くかが難しいところではあった。
- ・今回は、「ふ・く・し」（ふだんの・くらしの・しあわせ）を紹介することで、福祉に対する子どもたちの視点が広がった。またこの紹介によって、地域に目を向けられる児童も多くいた。
- ・「幸せ」「幸せでない」を考えるのが少し難しかったかもしれない。事例を最初に確認するという時間もあってもよかったかもしれない。
- ・jamboardで意見を出し合った。ほかの班の意見をjamboard上で見合う活動もあってもよかったかもしれない。
- ・今まで、家庭科での実践は、東山梨地区では挑戦したことがなかった。今回の提案によって、改めて様々な教科や切り口で取り組めることが授業研究からも分かった。

2 各校の実践報告会

各校の福祉教育の実践から、互いに学び合い、自己の実践に生かした。

大藤小 「平和について考えよう」(6 学年)

菱山小 「SDG s 活動における実践～炭作りからウクライナ支援～」
(6 学年を中心とした全学年)

奥野田小 「『すみつつ』の活動」他(特別支援学級)

松里小 「めざせパーフェクト」他(3 学年)

井尻小 「ころ柿集会での地域とのつながり」他(5 学年)

「いいことばたけ・がんばりの卵」他(2 学年)

神金小 「児童会活動『神金の花』」他(全校)

「自分のよいところを発見しよう」(6 学年)

「一つの学級としての意識化(複式学級における)」(2・3 学年)

加納岩小 「居住地交流～甲府支援学校との交流～」他(5 学年)

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- ・研究内容が取り組みやすいものに設定されていた。
- ・各校の実践報告が年々、取り組む教科等も増え幅が広がっている。
- ・普段の学校生活の中で福祉教育を意識して取り組むことができた。いろいろな学校規模や学年が違う中でも、どの学年や教科であっても実践できることが分かった。
- ・Google クラスルールの整備もあり、アンケートの電子化等にも挑戦できた。

2 課題

- ・部会員の入れ替わり等を見据え、外部講師を招いて、理論研究もしていきたい。
- ・総合的な学習に福祉が位置づけられていない学校も複数ある。いざ取り組もうとするとその中で、時間的・計画的見通しが難しい。
- ・甲州市に比べ山梨市の部員数が少ない。人数のバランスがよくなるとよい。
- ・小学校の先生だけでなく、中学校の先生とも研究を深めていきたい。

3 成果物

- ・統一授業研の授業案
- ・実践報告学習会で報告された実践

(部長 中村 咲)

食生活を考える
～子どもたちのより良い食習慣づくり～

I 主題設定の理由

本研究会では、学校教育の様々な場面で食に関する指導の実践を広げ、子どもたちがより良い食習慣を身につけ、健やかに成長していくことを目指している。そのために、学級担任と栄養教職員によるティームティーチングでの授業の進め方や教材教具の活用方法、給食時間における食に関する指導案や指導資料を用いた実践の工夫など、研究を進めている。

授業実践や給食の時間における食に関する指導を学校教育の一環として計画的に進めていくことは、子どもたちのより良い食習慣づくりにつながると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 授業実践

小学校第2学年生活科

授業者：日下部小学校 島田直美 教諭 小林由紀子 栄養教諭

題 材：秋冬野菜について知ろう

内 容：事前学習として、1学期に栽培・収穫した夏野菜について簡単なレシピを栄養教諭から教わり、家庭で作るということにとりくんでいる。2学期のはじめに、夏野菜の栽培や調理を思い出し、次に秋冬野菜の栄養や給食の献立にどう使われているかなどを知り、これからのさつまいもの栽培について意欲を持たせるための授業を学級担任と栄養教諭のT・Tで行った。授業の中では、1学期の振り返りやさつまいも料理の検索などにICTを活用した。

2 夏期学習会

講座名：教科等における食育実践の進め方

講 師：武庫川女子大学 藤本勇二先生

内 容：食育を教科で実践するためには、食育と教科の親和性を検討する必要がある。家庭科や保健体育は目標が一致している。生活科・理科・社会科・道徳・総合学習は一部が一致している。この講座では具体的な実践例を通し、生活科や社会科で教科の目標を逸脱することなく食育の目標を達成する方法を学んだ。

3 実践発表

内容：昨年度までに作成した「給食の時間における食に関する指導案、指導資料」を実際に活用した実践や今までの取り組みなどを交流し合った。

○実践発表Ⅰ 加納岩小（小林），山梨南中（福岡）

○実践発表Ⅱ 東雲小（五味・菱澤・村田）

○実践発表Ⅲ 塩山南小（鈴木・小林・芹沢），塩山中（宮島）

Ⅲ 成果と課題

1 成果

(1) 授業実践

- ・生活科の部分をT1が、食育の部分をT2がそれぞれしっかり担っていた。T1は子どもの実態に沿って、T2は専門性を生かして分かりやすい指導をしていたので、生活科と食育の両方の目的を達成できた。
- ・夏野菜料理の宿題について、栄養教諭が示したレシピが本当に簡単で、自分でもやってみようと思える内容だった。そのため、多くの家庭が積極的に取り組んでくれて、家庭との連携も上手くとれた。
- ・夏と秋冬野菜の違いを考えるときの植物のつくり（根・茎・葉・花・実）は、3年生の理科につながる。
- ・さつまいもの栽培を頑張りたいという意欲がわき、収穫後も学校や家庭で調理したり、給食で使ったりと、作って食べることの喜びを感じていた。
- ・夏野菜のお花クイズや1学期の振り返り、さつまいも料理の検索のときなど、効果的な場面でたくさんICTを活用していた。

(2) 夏季学習会

- ・教科において、栄養教職員が専門性を生かして効果的に参画することで、食育はもちろんのこと、教科においても深い学びとなることを知った。

(3) 実践発表

- ・部会としての過去の研究をもとに、各校の実態に合わせた一実践の内容について考え、取り組むことができた。
- ・それぞれの実践を発表しあい他校の実践を学ぶことで、具体的な指導の手立てや教材を知ることができた。

2 課題

- ・夏季学習会では「教科等における食育実践の進め方」を学んだが、家庭科における実践以外はまだまだ実践例が少なく、教科のどこの部分に関わっていけるのか見つけるところから始めなければならない。
- ・部会のテーマが広いので、先生方は受け持つクラスの、栄養教諭は受け持つ学校の課題に合ったテーマで授業実践が行えると良い。
- ・授業づくりにおいては、栄養教職員が給食センターに行くことが多いため、なかなか時間を作り出せない。しかし、この部会は栄養教職員の専門性を生かした指導ができることが強みなので、これからも連携を大切にしていきたい。
- ・系統立てた食育とPDCAサイクルを大事にしていくためにも、様々な学年や校種の方々と学びあうことが必要である。

(部長 小林由紀子)

研究テーマ「平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして」

I 研究の内容

- 1 テーマに沿った各自の実践の積み重ね
- 2 実践の共有
- 3 授業づくり及び検証

II 研究の方法

- 1 テーマに沿った各自の実践の積み重ね

日々の授業において、平和・人権を意識した実践を行う。行った実践を実践例として記録する。

- 2 実践の共有

各自が行った実践例を持ち寄り、実践報告会を行う。報告された実践について意見交換を行い、情報の共有を図る。

- 3 授業づくり及び検証

統一授業研究会に向けて、指導案検討を部員全員で行いながら、より良い授業に向けての手立てを考えるとともに、授業を参観する視点を共有する。授業後に研究会を行い、検証を行う。

III 研究の経過

5月10日	研究組織，研究テーマ，研究内容・方向性について
6月14日	研究計画決定，授業者・一実践決定
8月 9日	夏季学習会（平和と国際理解について考える）
8月30日	実践報告（紙面開催）
9月20日	授業案検討・実践報告
1月10日	授業案検討・実践報告・県教研還流報告
1月24日	統一授業研
2月14日	研究のまとめ・実践報告

IV 成果と課題

1 成 果

- ・テーマに基づいて、小学校と中学校で実践が行われ、部員の知識、授業経験を共有することができた。また、それぞれの実践から、発達段階に応じた実践を積み重ねていくことの大切さを改めて感じることができた。今後も、一人一実践を行っていきたい。
- ・夏季学習会では、指導助言者の依田校長先生に日本人学校勤務のご経験を話していただき、普段知ることのできない日本人学校の様子を知ることができた。テーマに関わる話もいただくことができ、部会の財産となった。
- ・研究授業では、性的マイノリティについての授業が行われた。学校現場では難しいところに触れるため、実践することに躊躇してしまう内容であったが、身近な話題を取り入れながら、子どもの実態にあった授業がなされた。人権についての意識の広がりを、子どもも教職員にも広げていくきっかけができたと思う。また、中学校での研究授業の取り組みは、中学生の人権に対する反応や思いを参観する機会になり、よかった。

2 課 題

- ・平和・人権・国際理解に関するテーマで研究を行っているため、一つ一つの内容の深まりが希薄になってしまう部分があった。
- ・夏季学習会では、講師の依頼に毎年苦勞しているように感じる。互いの人脈を駆使して探していけると良い。

V 成果物

1 指導案

第3学年 性的マイノリティへの共感, 理解 (内容項目 B (9) 相互理解, 寛容)

三枝 洋介 (塩山北中学校)

◇ねらい: 多様な性について知る。

性的マイノリティの人々が、自分らしく生きていける社会になっていくためには、社会はどう変わっていくべきなのか、寄り添う気持ちをもって考える。

◇資料: Job Rainbow

(<http://jobrainbow.jp/magazine/lgbt-percentage/> 2023年9月21日)

2 実践報告資料

第2学年【小】平和について考える親子読書 Part 3

岩下 城 (日川小学校)

第3学年【中】「住み続けられるまちづくりを」

広瀬 竜太 (勝沼中学校)

第5学年【小】NHK for school でSDGsを学ぼう!

飯室 林 (日下部小学校)

第6学年【小】チョコちゃんと考えるSDGs教室

関口 哲也 (日下部小学校)

第6学年【小】総合実践報告

中山 貴彰 (山梨小学校)

第6学年【小】考えよう! 未来のために、未来のこと。

望月 泰祐 (日川小学校)

第5学年【小】自分の強みを見つけよう

佐野 理恵 (山梨小学校)

第5学年【小】家庭科におけるSDGsを考える取り組み

保坂 千恵子 (八幡小学校)

3 関連資料

① へいわってすてきだね (作: 安里 有生 絵: 長谷川 義史)

② かみず (作: 藤巻 愛子 絵: 山梨県内の小学生)

③ NHK for school でSDGsを学ぼう! (冊子)

④ SDGsのうた・17の目標・SDGsかるた

https://www.nhk.or.jp/irotoridori/sdgs_song/

⑤ チコちゃんと考えるSDGs教室 <https://www.nhk.or.jp/school/chico-sdgs/>

⑥ SDGs アイデアシート (Benesse)

https://www.benesse.co.jp/brand/about/about_sustainability/pdf/

⑦ 日本ユニセフ協会 <https://www.unicef.or.jp/>

⑧ みんなの教育技術 <https://kyoiku.sho.jp/71872>

⑨ SDGs 動画シリーズ//ゴール2//飢餓をゼロに JICAchannel1- YouTube

<https://www.youtube.com/watch?v=h9Zz61Z7k0k>



(部長 中村 依里)

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方 ～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～

I 研究テーマにかかわって

自然環境は全ての生き物の生活基盤であるが、人間はこれまで自然を破壊し、あたかも人間だけが特別な存在であるかのように自然に対して大きな負荷を与え、再生不可能ではないかと思われるような開発を行ってきた。その結果、地球は、大気汚染、海洋汚染、オゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨、水質汚濁、食糧問題、人口問題、エネルギー問題、絶滅が危惧される動植物の数々…。実に様々な環境問題を抱えるようになった。

これら問題を解決するためには、私たちの生活と自然とのかかわりにどのような問題があるのかという実態を正しく把握し、その原因を追求することが大切である。また、環境問題を引き起こしている社会経済の仕組みも理解し、環境に配慮した仕組みに変革していく努力も大切である。私たち一人一人が、問題解決のために何をしなければならぬかを考え、実行していくことが必要とされている。

本部会では、まず、私たちが科学的な知識に裏付けられた環境に対する現状認識を深めるとともに、環境問題を自分の課題としてとらえ、主体的に取り組んでいけるような子どもの育成をめざしていきたい。そのためにも、子どもたちが自然に親しみ、自然の素晴らしさや不思議さに気付くことができるような環境学習の機会を重視して、環境に対する豊かな感受性を育んでいきたい。

II 研究内容

1 授業研究

第4学年総合的な学習の時間 「環境問題について自分たちにできることを考えよう」

～山小から地球を守ろう！プロジェクト～

授業者 佐野 彩乃 教諭（山梨小）

単元目標

- ・環境に配慮した生活について考えたり実践したりすることを通して、環境問題と自分の生活が結びついていることを理解し、自分たちが協力できることについて考えるとともに、自ら行動しようという心情を育むことができるようにする。

2 一人一実践

- ・部会員一人一人が環境教育に関わる実践を報告し、意見交換をする。

3 学習会

- ・講師：菰原 桂 先生

「オルビスの森」を題材とした、森に関する学習

散策の視点、葉や幹などを使ったクイズなど

Ⅲ 成果と課題

1 授業研究

2月の統一授業研は、第4学年総合的な学習の時間の授業を実施した。まず自分が実践することを児童自身が決め、次に実践を振り返りながらスライドにまとめ、最後に友達の発表を聞きながら自分にできることを考えるという単元の流れで、研究授業は最終の場面であった。授業の最後で、「～をやっていないのでやってみたい」という感想が多くの子供から出されたことから、実践の中でどのようなことが環境に影響するのかを考え、振り返りや発表を通して達成感を得たり、自分もやってみようという意欲をもったりして、主体的に学んでいる過程を見取ることができ、大変有意義な研究となった。また、ICTを効果的に活用し、子どもたちにねらいとする様々な気付きや考えを持たせるために、授業者の佐野先生が労を惜しまず熱心に作成した教材は、本部会の財産となった。研究会においても、授業がいかに子どもたちの心に残る素晴らしいものであったかを感じ取ることができた。

2 一人一実践

本年度は、生活科や総合的な学習、特別活動、自立活動などの様々な実践が報告された。工夫を凝らして身近な環境や自然に対してのアプローチを試みたことは意義が大きかった。環境教育にも様々な切り口があることを部員相互に理解し、視野を広げることができた。その中で、環境教育は長期的で継続的に行われる必要があることから、次年度につながる系統的な視点をもって指導を行っていくことが効果的であることがわかった。また、SDGsの考え方やICTの活用などを重視した実践がいくつも挙げられ、系統性を意識したSDGsの取り組みやICTを効果的に活用する方法、実体験の大切さについて、部員同士で共有することができた。

本研究部会が環境教育へのより深い理解や知識を学ぶ場となるよう、今後も研究を進めていきたい。

3 学習会

8月9日に、神金小において、講師に菰原桂先生をお迎えし、「オルビスの森」を題材とした、森に関する学習を行った。当初は、「オルビスの森」での臨地研修の予定だったが、荒天に阻まれ神金小を会場として室内での開催となった。菰原先生が事前に「オルビスの森」で葉を採集しておいてくださり、実際に手に取りながら葉や幹などを使ったクイズを解いたり、マップや写真を見ながら散策の視点や危険個所の見つけ方を学んだりすることができた。また、野外で楽しめるレクリエーションも多数紹介してくださった。日頃、何となく眺めているだけでは気づかない自然の魅力を再認識することができ、今後の実践に生かしていきたいと強く思った。屋外での学習会は天候に左右されやすいが、再度菰原先生にお願いし、野外での学習を実現させたい。

(部長 松岡 めぐみ)

情報活用能力の育成

I 研究の内容

社会の情報化は急速に進展しており、今後も、社会の情報化はさらに進展し続けると考えられる。このような状況のもと、子供達が「情報活用能力」を身に付け、情報社会に対応できる力を得ていく必要性は、今後ますます高まってくると考えられる。

学習指導においては、情報コミュニケーション技術（ICT：Information and Communication Technology）を効果的に活用することにより、子供達の学びに向かう力や思考力・判断力・表現力を高め、「協働的な学び」「個別最適な学び」を実現することが求められている。また、情報活用能力が「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけられ、学校の ICT 環境整備と ICT を活用した学習活動の充実に配慮することとされている。

そこで本部会では、児童の情報活用能力を高めるための研究及び ICT 端末の活用に関する教師の指導力の向上を図るための研究、また、プログラミング教育やプログラミング的思考、情報モラル教育等についての研究も含め、これまでの研究の成果と課題をふまえながら研究を進め、深めていきたい。

効果的な ICT の活用例

- ・ ICT 端末の写真や動画機能を活用して、運動・音読・演奏の様子などを撮影し、子どもが自ら見直し改善し、観察や実験の記録を残す。効果的に情報収集を行うことができ、見えにくい情報を可視化できる。
- ・ 表計算ソフトで、道徳の学びを記入するワークシートや体育の運動カードを作成。ルーブリック評価に活用する。
- ・ Kahoot, Scratch, Google フォーム等を利用して、既習事項をふり返り、知識の定着を図る。
- ・ Chat や共有ドライブなどを活用して自分の考えを入力・共有。Jamboard をノートとして使うなど、情報収集・整理・分析の学びのサイクルを意識した学習者主体の授業づくり。
- ・ タイピングやプログラミング教材。

2 研究の具体的内容

(1) 授業研究（1月24日）

小学校 第4学年 総合「Scratchでプログラミングを楽しもう」

(2) ICT機器を活用した指導の工夫

- ・ 課題の難易度を高めに設定。時間内の課題の達成を目指すのではなく、児童に課題に向き合い、真剣に考えたり、試行錯誤したりすることが重要であることを繰り返し伝え、価値づけた。
- ・ 命令についての細かな説明はせず、児童が試行錯誤の中で意味を理解して

いけるようにした。

- ・児童間で教え合いができるよう、自由にコミュニケーションが取れるようにした。

(3) 検証方法

- ア 児童の振り返り、感想
- イ 教師の見取り（児童の活動や話し合いの様子、視点、発言）
- ウ 成果物の検証・分析
 - 児童が提出したファイル
 - 児童が課題に取り組んでいる様子の録画動画の分析

II 成果と課題

1 成果

- ①各校の実践や ICT を使った授業の交流があり、学びがあった。即座に取り入れられるアイデアが多く、実践に取り入れることができて良かった。
- ②夏季学習会では、講師の先生の説明が分かりやすく、収穫があった。自己表現ができるように語彙を増やす学習を仕組む、批判的思考ができるように読解の物差しを身に付ける授業をするなど I, CT を扱う素地を養う大切さを教えていただいた。
- ③プログラミングに特化した研究実践が成果を上げたと感じる。プログラミング的思考に関する研究は非常に有益であり、多くの学びがあった。思考を育成する手立てに関して、先生方が協力し合い同じ方向を向いて研究できたことが良かった。研究授業校の児童のプログラミング力が大きく向上した。また、研究授業の検討会で活発な議論と検証があり、これまであまり明確に示されてこなかったプログラミング学習の実践において、非常に参考になった。

2 課題

- ①ICT を活用した探究的な授業においても、課題をうまく解決できない児童への手立てが必要である。
- ②研究授業の課題が 4 年生には難しかったという反省があり、事前に部会で同じ課題に触れる機会があるとよかった。その方が事前に児童のつまずきや学習の展開に気づきやすかった。
- ③限られた検討会数の中で、授業者が授業に関するアイデアを得て、まとめられるように、もう少し早い段階から多くの意見が出るようにしたい。
- ④プログラミング教育については、教育課程におけるより適切な位置づけを検討すべきではないか。
- ⑤ICT 利活用についてはまだ途上であり、新たな価値観が出ている。その時間に学ばせたいことを明確にし、ICT 利活用そのものとならないように研究を進めていく。

III 研究の成果物

- ・第 4 学年 総合的な学習の時間 学習指導案「Scratch でプログラミングを楽しもう」
- ・ICT 端末の教科・校務における効果的な活用方法の実践例

（部長 中村 千春）

一人ひとりにあった生きる力をつけるための進路指導・キャリア教育はどうあるべきか
～小・中における授業実践を通して～

I 研究の方法

- ・各教科の授業をキャリア教育の視点で実践し、資料を持ち寄り、情報交換および相互的に学習する。
- ・地域との連携、また職場体験について各校独自の実践を学び合う。
- ・キャリア教育について小中連携をしながら研究する。

II 研究の具体的内容

1 授業実践

塩山中学校 第2学年 数学科 (佐々木 英司 教諭)

単元名 連立方程式

「一人ひとりにあった生きる力をつけるために ～連立方程式の学習を通して～」

- 目標
- ・単元テストの問題数と配点を、連立方程式を利用して考える。
 - ・連立方程式の解が、成り立つかどうかを、ICTを活用して確かめる。
 - ・他者の意見や考えを参考にして、クラスにあった問題数と配点を選ぶ。

2 実践・資料発表

奥野田小	小学校におけるキャリア教育の実践紹介
後屋敷小	小学校におけるキャリア教育の実践紹介
松里小	小学校におけるキャリア教育の実践紹介
笛川中	総合的な学習の時間におけるキャリア教育の実践紹介
山梨南中	総合的な学習の時間におけるキャリア教育の実践紹介
山梨北中	エコーズ教育についての実践紹介
塩山北中	総合的な学習の時間における教育の実践紹介
松里中	総合的な学習の時・教科におけるキャリア教育の実践紹介
塩山中	数学におけるキャリア教育の実践紹介
勝沼中	総合的な学習の時間におけるキャリア教育の実践紹介

Ⅲ 成果と課題

成果

- ・進路教育（キャリア教育）を幅広くとらえ、教科におけるキャリア教育など、さまざまな実践を共有できたことは大きな成果だった。
- ・各校での実践を持ち帰り、自校で活用することができた。
- ・毎年、部員の入れ替わりが激しいのがこの部会の悩ましいところであるが、継続して研究している部員がリーダーシップをとり、さまざまな実践が紹介され、研究を深めることができた。
- ・小中の情報交換の場となり、連携の糸口になっていて大変勉強になった。互いの実践を交流する中で、9年間のどの段階でどのような学びを保障していくべきか研究を深めることができた。
- ・中学校における切実な進路指導の実態を知ることができ、小学校でどこまでどういう力を培っておくとよいのかと、考えることができた。
- ・実践発表ももちろんであるが、そこから意見交換をする中で「進路教育」として小中として子どもたちに指導していく必要のある内容を明らかにできた。
- ・「キャリア教育」はどの教科でも、どんな学校の教育活動の場面でも実践できることを示していただいた授業研は意義深かった。

課題

- ・幾つかの柱を立てての研究もよいだろう。
- ・設定された教協研究日の関係で、研究が中断されたような時期があった。
- ・キャリアパスポート等、小中連携が必要となる研究ができればよい。そのために小中それぞれに参加人数（部員数）の増加が必要。
- ・以前行っていたように、高校の先生方のお話を聞ける機会があると、さらに長期的な視点で進路教育を考えられるだろう。

理論研究に基づいた実践について

- ・小中それぞれの視点をもって研究ができるため、継続した研究でよい。
- ・キャリア教育におけるスキルの育成に関わる題材について研究をしたい。
- ・教科、進路、キャリアの視点を改めて確認して実践することができた。
- ・今後も、特活や総合的な学習の時間にとらわれず、キャリア教育の視点をもって幅広い研究をしていきたい。
- ・子どもたちに将来必要な能力について意識した実践をたくさん学ぶことができ成果が大きかった。

Ⅳ 成果物

- ・中学校2年生数学科レポート
- ・各校実践レポート

（部長 佐久間 潤）

地域とともにある学校づくりをめざして

I 研究の内容

1 研究の方法

(1) 研究の柱

- ・学校と保護者、地域との関わり方・提携の方策について
- ・学校・子どもたちが地域の人々や保護者とのつながりを生み出す実践
- ・研究成果の共有（情報発信も視野に入れる。）

(2) 部員は各校の実践を通して、子どもたちの変容、問題点、悩みなどを提案しそれについて討議し研究を深める。

常任講師の先生方に、常時ご指導・ご助言をいただく。

(3) 保護者・地域との提携について、授業実践を通し研究を深める。

2 実践発表と授業実践の紹介

〔実践発表…各校での保護者・地域住民と提携した教育活動や行事の実践〕

(1) 日下部小学校

- ・日下部小学校・地域教育ビジョン 2023（学校と地域の在り方について）

(2) 塩山南小学校

- ・保護者、地域との連携：有価物回収作業・JA と連携した取組：2 年生「野菜作り」

(3) 祝小学校

- ・勝沼図書館との連携：学校巡回読書支援・2 年生活科「まち探検」 ・ 5 年総合
- ・150 周年記念事業

(4) 山梨小学校

- ・地域・他機関との連携：「人権の花」運動（全校対象）、人権教室（2 年生対象）
- ・児童の学習活動への関わり・支援：3 年総合「東仲クラブとの食育・農業体験」

(5) 岩手小学校

- ・世代間ふれあい活動：工作教室（年 2 回）、グランドゴルフ、昔遊び
- ・農業体験活動 ・ 岩手太鼓指導 ・ 学校・地域安全活動

(6) 大和小学校

- ・保護者・地域と連携した取組：学習成果発表会・勝頼太鼓・座禅教室・神社清掃等
- ・保護者と連携した取組：親子挨拶標語、生活ノート（生活習慣改善）、親子活動等

(7) 菱山小学校

- ・地域学校協働活動：ぶどう農家、ワイン工場、NPO、敬老会、ライオンズクラブ等
- ・保護者・住民との連携：農業体験、緑の少年少女隊の森林活動、SDGs 活動等

(8) 松里小学校

- ・保護者と地域住民との連携：地域講話、PTA 奉仕作業、松里小縁日等

(9) 勝沼小学校

- ・創立 150 周年記念式典について

〔授業研究〕

（１）小１生活（塩山北小学校 倉田 和美先生）

単元名：もうすぐ２年生 “新しい１年生に小学校のことを紹介しよう”

授業の概要：入学する前の様子を振り返り，新入児が知りたいことはどんなことか考え小学校について紹介する文章を書く。ICT 端末を活用し児童が紹介したい場所などを写真で撮影することで伝えたいことを明確にしたり，分かりやすく発表したりする手立てとした。

〔夏季学習会〕

テーマ：「武田家の歴史～武田家２度の滅亡～」

講師：青柳真元御住職（天目山栖雲寺・臨済宗大本山建長寺）

○青柳住職に山梨を語るうえで非常に重要な人物や武田家の歴史について話を伺うことができた。また，摩崖仏や文化財など貴重なものも実際に拝見し見聞を広げられた有意義な学習会となった。

Ⅱ 成果と課題

１ 成果として

- 各学校の実践発表を行い，情報交換ができた。保護者や地域との連携には様々なものがあること，学校規模や環境など特色を生かした実践が行われていることがわかり自校の教育活動の参考となった。
- 研究テーマに関わった，縦の繋がり（保幼小）と横の繋がり（保護者）を意識した授業提案であった。児童が相手意識を持ち主体的に学ぶことができる課題設定であった。今日的な課題である小１ギャップや不登校などの不安要素を取り除き，円滑な接続を促進する新たな取組となる提案だった。

２ 課題として

- 新型コロナが５類に移行され，学校での活動の制限も緩和された中で，今後学校が保護者，地域，各機関とどのように関わり，学校での取組を持続可能なものにしていくのか考えていく必要がある。
- 教員の働き方改革につながる，保護者と地域住民，各機関との連携について研究を進めていきたい。（コーディネーターなど）
- 保幼小だけではなく中学校とのつながりも持てると研究の幅が広がると考えられるので，中学校の先生にも加入していただき研究していきたい。

Ⅲ 成果物

- 各校の実践レポート
- 小１生活科学習指導案
- 小４国語科授業実践の教研レポート

（部長 廣瀬 尚子）

「豊かな教育を子どもたちに」

I 研究内容

1 研究内容の具体的内容与方法

(1) 甲州支会と山梨支会に分かれ、それぞれの課題について研究をすすめた。

ア 甲州支会…「豊かな教育を子どもたちに～私たちにできる働き方改革とSDGs～」

○予算分析・教育環境実態調査

○学校徴収金改善に向けてのとりくみ

○中学校統合へ向けたとりくみ

イ 山梨支会…「豊かな教育を子どもたちに」

○働き方改革とICTの活用…働き方改革調査、ICT活用調査、リーディングDX

○業務改善とより良い学校環境づくり…多忙化解消、業務改善についての相互学習会

○保護者負担軽減と教育予算要求…私費調査、予算分析、教材費無償化について

○事務職員の仕事、組合活動…共同学校事務室との連携、事務職員としての学校への

関わり方

(2) 『東山梨教育研究62号』内の「教育行財政及び教育環境の実態」を担当し、調査を実施。

調査前には留意事項を全体で確認し継続調査を実施した。教育環境の実態把握と改善点を探り、調査の活用を考える。

II 成果と課題

1 成果

(1) 甲州支会

昨年度まで研究を進めてきた働き方改革やSDGsについては、内容を深めてきたので、「学校徴収金」「統合準備」を新たに研究内容として追加した。それぞれが甲州市で現状抱えている課題の部分でもあるため、情報を共有しながら課題解決に向けての方策を探ることができた。継続してとりくんでいる予算分析については、対面での研究会で行うことにより、研究がより深まった。

(2) 山梨支会

春季教研で決定した4つの研究の柱に沿って研究をおこなった。「働き方改革」について各校における調査・分析をおこなった。毎年おこなっている「予算分析」に加え、私費の状況を調査した。校務のDX化が求められる中で、ICT活用状況調査や、リーディングDX指定校となっている市内の学校よりとりくみ事例を共有し、自校の改善につながるような研究を深めることができた。

(3) 全体として

分散会形式で支会ごと研究をおこない、各市における課題を明確にし、それぞれ継続している研究を更に深めることができた。甲州市は、「学校徴収金徴収方法検討特別委員会」が市に設置されたことに伴い、徴収方法や私費のあり方について先回りをした研究を行った。また、中学校での統合が予定されていることから、文書管理や備品の移管について過去に統合した学校からの実績を参考に、全校で当事者意識を持ちながら情報を共有することができた。山梨市は、働き方改革・ICT活用・私費についての調査をと

おして、市内小中学校の課題や改善点について情報共有をおこなった。共同学校事務室との連携も機能していた。あわせて、予算に関わる継続的な研究をとおり、採用年数や年齢に関わらず、全部員の共通理解のもと、学校事務職員の専門性を高めあうことができた。

2 課 題

(1) 甲州支会

新規に学校徴収金のとりくみをはじめたが、市で設置した「学校徴収金徴収方法検討特別委員会」の進展が望めず、現状の課題や先進地域でのとりくみ内容を共有したままの状態となっている。委員会組織が動き出さないことには前へ進めない状態のため、甲州市共同学校事務室とも連携し、課題を抱えている学校徴収金の改善に向けて更なる運動が求められる。

(2) 山梨支会

前年度決算・当初予算推移の結果分析、私費の調査については今後も継続した研究を重ね、効果的な予算執行へつなげていき、保護者負担の軽減に向けてもとりくんでいく必要がある。また、共同学校事務室とも連携し、市教委への要求活動をすすめていきたい。ICTの活用にあたっては、自校の状況と照らし合わせ、最適な活用方法を模索し、働き方改革へもつなげていきたい。

(3) 全体として

継続して予算分析をする中で、両市とも厳しい財政が続いているのが明らかである。調査等を活用し、予算要求や私費負担軽減へのとりくみに結び付けたい。山梨市が導入している「教材費無償化」については全県を見渡しても先進的なとりくみのため、近隣である甲州市も参考とし、有益な情報は共有して課題解決に向けてとりくんでいきたい。

各市が抱える課題に対して研究を支会ごとに進めているが、学校事務職員として学校運営に関わっていかなければならないことに変わりはなく、両支会の研究発表や情報交換を通じて共通理解を持ち、教育条件の整備をすすめていく必要がある。その結果、児童・生徒のより良い学校生活につながるため、研究会員が高い意識を持って、今後も研究活動にとりくんでいきたい。

Ⅲ 成果物

1 甲州支会

- 予算差引簿・分析ファイル
- 統合時の文書保管整理簿
- 学校徴収金課題解決に向けたワークシート

2 山梨支会

- 学校配当予算分析表、学校配当予算一覧表、学校配当予算・決算一覧表
- 「働き方改革」分析
- 「私費調査」分析
- 「ICT活用」分析

(部長 砂山玲央)

豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の編成と実践

I 研究の内容

1 研究の方向性

新学習指導要領が全面実施され、子どもたちの学力向上に対する期待が高まっている。私たちは、「何を学ぶか」ではなく、「どのように学ぶか」を改めて問い直し、自主創造的な教育実践を積み重ねることによって、これらの声に対する結果を出していかなければならない。子どもたちに「ゆたかな学び」を保障していくために、質の高いカリキュラムや実践を創造していくことは、私たち教職員の使命である。子どもの実態をふまえ、教材の活用や授業の展開を徹底的に検討することに加え、カリキュラムや授業プランを工夫して、その内容や方法を創り変えていく必要がある。すべての子どもたちに、学び合いの中で「学びの意欲」を喚起させる「わかる授業」「楽しい授業」を創造するために、日々、目の前にいる子どもたちの実状に合わせたカリキュラムを追究し続けていかなければならない。

本部会ではこれまでに、主にカリキュラム編成の工夫について総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきた。部会員全員がそれぞれの実践を持ち寄って意見交換を行い、総合的な学習の時間における指導の工夫や可能性について討議を重ねてきた。新学習指導要領においては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」によって学力向上を図ることが示されているが、時間数が削減された総合的な学習の時間においては、各教科で学んだ知識や能力を生かすことによってその成果を高めることが期待されている。そこで本部会においては、総合的な学習の時間だけにこだわらず、他の教科での実践も視野に入れ、自主編成によるカリキュラムの工夫について研究を進め、検証結果を日常実践に還元していくことを目指している。

授業実践においては、多角的な視点をもって教材や単元を分析しながら「どのように教えたらいいか。」「どういう授業を展開したら効果的か。」を模索していくことを基本とし、定められた指導計画によるものではなく、「教科書“で”教える。」という意識を大切にしながら、自主創造的な学習プランを策定して実践を進めていく。

そのために、次の3つの視点を重視して、成果の検証にあたる。

- (1) 授業（単元）における、「子どもにつけさせたい力」は何かを明らかにする。
- (2) 授業（単元）において、授業者が「自主編成した部分はどこか。」「工夫したところや作り直した点はどこか。」を明らかにする。
- (3) 授業（単元）のふり返りや分析を丁寧に行い、成果と課題を明らかにする。

授業の分析においては、授業の様子を撮影した画像・映像の効果的な活用と、子どものノート・作品・感想記述などを、時間をかけて多角的に分析していくことによって、子どもの変容をみとり、成果と課題を明らかにしたい。本部会としては、すべての子どもたちの「学びたい」という意欲を引き出す工夫と、すべての子どもに「豊かな学び」を保障していくことによって、結果として子どもたちの学力の向上にもつながるように、内容や方法を捉え直す努力を積み重ねていきたい。

2 研究授業と各教科などにおける個人実践発表

○総合的な学習「パラスポーツ 共生について考えよう」	祝小：小宮山公仁 教諭
○総合的な学習「わだつみ平和文庫から学ぶこと」	塩山北中：金森 淳 教諭
○数学科「直接測定できない長さを求めよう」	山梨南中：前田 大輔 教諭
○総合的な学習「自分を知り、自分の生き方を考える」	山梨北中：飯島 聖華 教諭
○理科「てこのはたらきを使った道具を探そう」	後屋敷小：山田 勝博 教諭
○通級による指導「サポートルームかのいわ」	加納岩小：岡 京子 教諭
○社会科「防災シミュレーションゲーム」	山梨北中：前島 香織 教諭

研究授業

○総合的な学習の時間

小学校6年生「やってみよう！My SDG s プロジェクト」

加納岩小：藤木真里佳 教諭

※ 指導助言

塩山南小：山縣 重人 教頭

II 成果と課題

1 成果

- 授業実践を行うにあたり、「子どもにつけさせたい力」「自主編成した部分・工夫したところや作り直した点」「振り返りや分析を丁寧に行い、成果と課題を明らかにする」という観点を改めて意識することで、自分自身の授業を見つめ直す、考え直す機会となった。
- 小学校と中学校の先生が共に研究できたこと。それぞれが総合だけでなく、専門とする教科の実践も発表し、実践に対して積極的な意見交換を行ったことで、視野や知識が広がり、自身の授業改善や教材研究に生かすことができた。この部会ならではの強みである。
- 「総合的な学習の時間」の授業づくりはもちろん、他教科の実践も聞くことができたので、教科横断的な視点で学習教材を考えることができた。
- 小中お互いの情報交換ができ、連携した指導につなげられると思う。

2 課題

- ・なかなか総合的な学習の時間に紐づけたり、また教科としてその要素を入れ込んだりすることができなかったことが課題として残った。今後どう意識づけし、取り組むことができるかを念頭に研究を進めていきたい。
- ・人数が少ないこと。一人一人の意識が高く、全員が発言するメリットも大きいですが、よい部会なので人数が増えるとともに、新しい人にも入ってもらい、よりよい研究を進めたい。
- ・この部会の性格上、総合の時間で育成した力をどのように各教科での知識や能力につなげていくこと、生かしていくか考えることが重要であると強く感じる。教科を横断的に捉え、今日での取り組みをさらに総合の時間に還元して、という良い循環が求められていると感じる。提供していただく授業実践を大切に、自らの実践につなげていくことが、子どもたちにとっての豊かな学びを創造することになると思う。

(部長 前島 香織)

「生きる力」をはぐくむ評価のあり方

I 主題設定の理由

本部会ではこれまで、子どもたちに『生きる力』をはぐくむため、子どもの学ぶ意欲や学びの過程、学びあう人間関係づくりを大切にし、社会に出て生きる力につながる『ゆたかな学び』を保障していくことに焦点を当て教育研究活動を進めてきた。子ども一人ひとりの『ゆたかな学び』を保障するためには、各学校における児童・生徒や地域の実態に応じた教育課程の編成・実施や、それに伴う指導法の工夫、指導の振り返り改善、適切な評価と支援など、様々な重要な要素が考えられるが、本年度も日常行っている評価を見直し、児童の学び・変容を丁寧に見取り、具体的・積極的な評価を行うことで次の学習活動への意欲を高め、確かな学力の定着をいっそう図りながら『ゆたかな学び』を保障していきたいという考えにたち研究を進めてきている。

II 研究の内容

1 研究の方向性

1 枚ポートフォリオ評価、ICT活用、またポートフォリオを使った指導と評価の一体化を目指した研究を進めていきたいと考えた。学習会で1枚ポートフォリオ評価とICT活用の関わりについて学び、その学びを元に多教科に関わったOPPの実践を出し合い、評価方法を検証し確認することができた。

2 研究授業

- ◇ 本年度も、部会員の先生方の授業実践の報告・検討を中心にして研修を深めた。
- ◇ 令和6年1月24日（水）に山下 陽子先生（山梨小）の生活科「きせつとあそぼうーふゆー」の研究授業を行った。

III 成果と課題

1 成果

- ・1枚ポートフォリオの活用により、児童生徒の変容が把握しやすいこと、学びの意欲に繋がる支援に活かすことができること、さらに指導改善のポイントも明確になることが授業実践を通してより明確になった。
- ・OPPの蓄積をもつ部会員とOPPを初めて実践する部会員が今年度は所属した。そのため、OPPの基本的なことを知ることを年間の前半の研究で行った。それにより、実践を

するにあたって、見通しをもって取り組むことができた。

- ・ICTの活用による、可視化の効果・瞬時の情報の共有による他者参照や他者との比較の容易さなどが実践発表を通して再確認することができた。
- ・実践の交流で先生方の工夫や技術や理論を学ぶことができた。
- ・お互いの実践を持ち寄ることで、いろいろなポートフォリオについて学べたり、評価言について自分の実践を振り返ったりすることができた。
- ・夏季学習会で基本的なOPPの在り方とICT端末の活用について学び、実践に広がりがあった。また、本質的な問いについて多くのことを考えることができた。
- ・研究授業では、教師の意図的指名や児童の考えが広がるような問い返し・自分ごととして考えられるような問い返しが目標を達成するための一助となることが実証された。また、気づきを表出できない児童に対する教師の評価により児童が新たな気づきを得る場面があり、指導者の評価言の大切さと効果が実証された。自己評価の質を上げていくには、教師の意図する評価規準を満たしている児童のコメントをクラスで共有する方法もあることが確認された。
- ・研究授業では、教師の深い児童理解に基づいた授業をすることにより、児童は授業を通して自己肯定感が育まれ、本部会の研究テーマである「生きる力」を育む評価のあり方について研究を深めることができた。
- ・ICT端末とOPPの活用について、実践法の広がりの可能性を得ることができた。

2 課題

- ・1枚ポートフォリオ(アナログ・紙ベース)による評価とICTを活用した(デジタル)評価のそれぞれのメリットをより明確にした上で、それを効果的に授業と結びつけるための手立てや方法を明らかにしたい。
- ・連絡を取り合ったり、素晴らしい実践・技能・資料を共有したりしやすいと思うので、市をまたいで、ClassroomやGoogleDriveを共有できるとよい。
- ・1月の研究授業をするにあたり、約半年前からの取り組みとなることもある。指導案検討を、1月以外にも持てるとよい。
- ・「評価」という枠組みの中で引き続きいろいろな形態を研究・実践していけたらよい。

3 今年度も研究で確認できた評価の実績

- ・ICT端末の活用とポートフォリオ評価を活用した児童の実態把握に基づいて、授業づくりを組織的に行うことができた。

(部長 小林 淳子)

ICT の活用と小中連携

I 主題設定の理由

同じ地域に学ぶ子どもの教育に携わるという立場で、共通課題を確認し、講演会・授業参観を通して系統的によりよい指導が行えるよう、本主題を設定した。特に、GIGA スクール構想による ICT 端末の導入を受けて、ICT の活用に重点を置いた。

II 研究の内容

1 第1回交流研究会（講演会 於：山梨南中学校）

（１）日時 令和５年５月１７日（水）１５：３０～

（２）目的 教員の ICT 端末操作技能と指導力向上のため

（３）内容 講演会

演題 「ICT の活用と小中連携～実践の共有と児童生徒の活用能力の育成～」

講師 山梨県教育委員会義務教育課 指導主事 古屋達朗先生

2 第2回交流研究会（日川小学校授業参観及び情報交換会）

（１）日時 令和５年１１月２２日（水）１４：００～

授業参観と ICT・生徒児童の情報交換会

（２）目的 小中学校の教職員が小学校の授業を参観し、小中の連携の視点から意見を交換し合い、今後の教育活動に生かしていく。

（３）内容 ア 授業参観 日川小学校全学級

イ 情報交換会

II 成果と課題

1 成果

- ・第１回の交流研究会では、個別最適な学び、先進自治体の事例、情報活用能力について学習を深めた。ICT を活用することにより、児童生徒の思考を深め広げられること、理解を高めることに繋がることを再確認することができた。
- ・第２回目の交流研究会では、日川小学校の授業を参観した。全クラスの授業と日川地区に伝わる「川倉」を実際に見ることで、ICT の活用法だけではなく地域文化の良さや教室の様子、児童の反応など共有することができた。さらに、情報交換会では活用事例を交流し、有意義な小中連携の場となった。

2 課題

- ・情報交換、研究会の方法について、話し合いが深められるよう、ICT の活用やグループ分けの工夫、題材の設定等を検討したい。

（ブロック長 内田 晴奈）

山梨北中ブロック交流研究

研究主題

「小中の連携を深め、山梨北ブロックの児童・生徒の指導に生かす」

I 主題設定の理由

山梨北中ブロックの児童・生徒を健全に育てるためには、普段交流の機会の少ない小・中の教職員が共有の活動や話し合いを持ち、教育上の課題を見つけ、より良い解決の方法を探り、連携を深めることが必要だと考える。

本ブロックでは、これまでも同じ地域で学ぶ子どもたちを共に教育するという立場から、共通の教育課題に対して講師を招き、学び合いを行ってきた。その取組を通して、目の前の児童・生徒の指導に生かせる有意義な内容であったと成果を確認し合うことができた。また、小・中の授業参観や研究会についても継続して行ってきたが、児童・生徒の実態の理解が深まると共に、発達段階による特性や各校の特色、学力向上の取組などを交流し合うことができ、その意義を実感できたところである。

今年度は、日下部小学校を中心とした授業参観・研究会という交流研究により、本ブロックの児童・生徒理解と小・中連携を深め、各校の指導に活かしていきたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1. 第1回交流研究会

（講師が日下部小学校にて講演し、その様子を日下部小学校から各校に配信して実施）

(1) 日時 令和4年5月17日（水） 午後3時15分から

(2) 演題 「これからのICTの授業づくり」

(3) 講師 LDX スクール事業 学校アドバイザー 兼 柏市教育委員会 教育研究専門アドバイザー
西田 光昭 先生

2. 第2回交流研究会

（日下部小学校にて公開研究会：参集は各校1名。その他の職員はオンライン参加にて実施）

(1) 日時 令和4年11月21日（火） 午後2時から

(2) 内容 授業 4年生国語科「世界にほこる和紙」 研究協議 講師からの指導助言

(3) 講師 LDX スクール事業 学校アドバイザー 兼 柏市教育委員会 教育研究専門アドバイザー
西田 光昭 先生

III 成果と課題

1. 成果

- ・講師の先生の話や授業の実践を見たり聞いたりすることができて参考になったとともに、ブロック内の各学校でのDXを進める上での共通の課題について考えることができた。
- ・ICTを普段使いのツールとする方法について、ブロックで確かめ合ったり、課題を出し合ったりすることで、1つの学校だけが進んだり、取り残されたりすることなく、ブロック全体の前進につながった。

2. 課題

- ・ブロック内の各校の児童・生徒の実態等を把握するための情報交換を密に行い、その様子を理解した上で、最善の方法を研究していくという面から考えると、情報交換の機会が少なかったことは課題であった。

（ブロック長 佐久間 剛）

笛川ブロック交流研究会

研究主題

小・中連携を図るための小中学校児童・生徒の相互理解

I 主題設定の理由

同じ地区で学ぶ児童・生徒をともに教育していくという立場から、小学校・中学校の共通課題や今日的な課題に迫る学習会や授業参観、交流会を計画し実施していく。また、研究会を通して教師間の連携を深め、地域の児童・生徒をより理解しながら効果的な教育活動を目指したい。

II 研究の内容

1 第1回ブロック交流研究会

- (1) 日時 令和5年5月17日(水) 14:00～
- (2) 場所 笛川中学校 1～3年教室(授業参観) 研究会・情報交換(図書室)
- (3) 内容
 - ・ 笛川中学校における全学年の授業参観
 - ・ 情報交換
 - (小中における指導の系統性・授業規律・1年生の様子・家庭学習について)

2 第2回ブロック交流研究会

- (1) 日時 令和5年11月22日(水) 14:00～
- (2) 場所 笛川小学校 4～6年生教室(授業参観) 研究会・情報交換(図書室)
- (3) 内容
 - ・ 笛川小学校における全学年の授業参観
 - ・ 掲示物の工夫や授業規律等の工夫について
 - ・ 小中学校で相互における課題解決
 - ・ 児童・生徒の情報共有

III 成果と課題

1 成果

- ・ 画面越しではなく、実際に足を運び授業参観を行うことで授業だけでなく、学校の雰囲気や児童・生徒の様子を知ることができた。
- ・ 発達段階に応じた各校の取り組みを把握した上で、今後の小中における指導の系統性について考える一助となった。
- ・ 小学校の授業から、掲示物等について学び、中学校でも活用することで小中連携の取組となった。

2 課題

- ・ 普段の生活や取り組みについての情報共有を行い、授業以外でも9年間を見越した指導につなげていく。
- ・ 英検、漢検等だけでなく、小中連携して行事等の実施も今後検討していきたい。

(ブロック長 布施 洋)

「小・中の連携を深める中で、系統性をつかみ授業に生かす」

I 主題設定の理由

小・中の連携では、義務教育9年間の教育活動を理解した上でその指導の系統性をつかみ、授業改善を行っていくことが必要である。また、塩山中学校区の生徒指導上の諸問題に対して、協力しながら対応していく目的も担っている。塩山ブロックにおいても、小・中の教職員が共通理解を深め、同一の課題意識のもと、子供たちの育成にあたることが必要となる。そのため、地域が抱える教育課題を共有し、教育課程の系統性も確認しつつ、今後の教育活動に生かしていけるよう、本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1 第1回ブロック交流研究会「塩山南小学校授業公開及び情報交換会」

(1) 日時 令和5年5月17日(水)14:00~16:00

(2) 内容 ア 塩山南小学校の授業を参観する。

イ 教科を軸とした分科会に分かれ、話し合いの柱について情報交換・意見交流を行う中で、小・中が連携した教育実践が進められるようにする。

2 第2回ブロック交流研究会「塩山中学校授業公開及び情報交換会」

(1) 日時 令和5年11月22日(水)14:00~16:00

(2) 内容 ア 塩山中学校の授業を参観する。

イ 分科会(①総合的な学習の時間 ②英語・外国語 ③家庭学習 ④一人一台端末 ⑤特別支援)に分かれ、話し合いの柱について情報交換・意見交流を行う中で、小・中が連携した教育実践が進められるようにする。

III 成果と課題

1 成果

- ・小・中それぞれの授業参観を実施することができ、その中で学年の発達段階や教科に応じたICTの活用の仕方などを知ることができた。また、共通する課題について意見交換することもでき、授業改善に生かすことができた。
- ・教科、テーマ別に行った分科会の情報交換の場で各校の取組や課題が話され、小・中それぞれでこれから必要な指導のポイントが確認できた。塩山中学校区の教員が同じベクトルで児童・生徒を育てていくためにとても有意義な時間となった。

2 課題

- ・情報交換や意見交流を小・中の円滑な接続に繋げていけるよう、更に研究を進めていきたい。

(ブロック長 中根 絵里)

塩山北中ブロック交流研究会

「小中の連携をはかり、塩山北中学校区の子どもたちを育てていこう」

I 主題設定の理由

塩山北中ブロックでは、これまで、地域で子どもを育てていこうと、教職員同士の連携を図ってきた。児童から生徒への成長や、既習の学習内容・授業規律などを小中が互いに知り、児童・生徒同士、教師同士、児童・生徒と教師の交流を図ることは、小規模校であることを生かしながら、より効果の高い教育活動を行うために効果的であると考ええる。学校・地域・保護者の連携の必要性が求められている中で、中学校区全体で塩山北中ブロックの児童・生徒を育てていくために、本主題を設定した。

II 研究の具体的内容

1 第1回ブロック交流研究会

- (1) 日時 令和5年5月17日(水) 15:30～16:00
- (2) 目的 児童生徒の実態把握と小中連携について理解を深める。
- (3) 場所 塩山北中学校
- (4) 内容
 - ア 授業参観(全学年)
 - イ 情報交換(中学校の様子・小中連携・小々連携)
 - ウ 部活動見学

2 第2回ブロック交流研究会

- (1) 日時 令和5年11月22日(水) 14:00～16:45
- (2) 目的 児童生徒の実態把握と喫緊の教育課題について理解を深める。
- (3) 場所 神金小学校
- (4) 内容
 - ア ふるさと発表会(全学年)
 - イ 教育講演会(講師 多田孝志先生「学習者主体のアウトプットを重視した授業づくり・授業改善」)

III 成果と課題

1 成果

第1回目は、中学の授業参観を実施し、各校を卒業した子どもの様子を知ることができた。また、ICTを活用した授業の提案なども行われた。情報交換会では、ブロックに分け、少人数での情報交換を行ったことで、議論の活発化が図れた。ICT端末の活用状況や、児童生徒の様子など情報交換し、小中連携を深めた。また、小学校の三校合同行事について打合せする時間を設けた。

第2回目は、神金小児童による学習発表会を参観した。児童がICTを活用して、様々な工夫をしながら発表する様子が見られた。その後の教育講演会では、金沢学院大の多田孝志先生に御講義いただいた。今後教師に求められる資質、学びのあり方への提言など幅広いお話のほか、豊富な実践事例も紹介していただいた。講義後、先生達から学習者主体の授業づくりのコツや、今後の入試についてなど質問も多く出され、多田先生が時間をかけて答えてくださった。

2 課題

授業参観は次年度も実施したい。また、来年度末に塩山北中が閉校することから、ブロック交流の行い方について考えていく必要がある。

(ブロック長 中村 千春)

「同じ地域に学ぶ子どもたちの教育のために、
小・中・地域の交流と連携を深めよう」

- 同じ地域に学ぶ子どもたちを教育する立場で、地域が抱える教育課題を共有し、その解決に向けた指導に結び付ける。
- 地域との連携を強化し、「地域の子供は、地域で教育する」という視点で地域の教育力向上を図る。
- 小学校・中学校の連携を強化し、小・中の系統的な教育の在り方を研究する。

I 研究の内容

1 目的

- ・松里ブロック教職員が、小中学校の授業の様子を参観し、児童生徒の様子を把握し、情報共有する。
- ・学習や生活の様子を情報交換することで、地域の教育的課題を明らかにし、小中連携して児童生徒の健全な育成を図る。

2 日時・内容

第1回ブロック交流研究会 令和5年 5月17日(水)

(1) 松里中学校の授業参観 (2) 全体会(授業参観の質疑・意見交換、各校の児童生徒の情報交換)

第2回ブロック交流研究会 令和5年 11月22日(水)

(1) 井尻小学校の授業参観 (2) ブロック研究会(授業参観の質疑・意見交換、各校の児童生徒の情報交換)

II 成果と課題

成果

- ・松里中学校の授業を参観させていただき、昨年度末に中学校に送り出した少人数の1年生が頑張っている様子や、丁寧に学習を教えていただいている様子を見ることができ良かった。
- ・小中両方の授業を見合うことで、9年間の発達の段階をみると、小中が同じ歩調で指導にあたることができている。
- ・井尻小学校の授業参観では、様々な教科の授業を参観し、ICT 端末を活用し、多様な場面における活用の仕方を学ぶことができた。中学校でも教える段階や発達に合わせた指導方法を考える糸口になった。

課題

- ・1回目の交流研究会での研究協議の内容を、①授業への質疑応答・意見交換②各校の児童生徒の情報交換の内容としたが、全体での会だったため、まとめるか絞っておいても良かった。参加者全員に一言ずつ言ってもらうような時間をとったほうが、さらに交流を深めるためにも良かった。

(ブロック長 山下史江)

甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携を図りながら、同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える。

I 主題設定の理由

「地域の子どもは、地域で教育する」という基本理念のもと、同地域の子どもの育成に携わる教職員が、甲州市の「確かな学力」育成プロジェクトとの連携のもと、小中の系統的な教育の在り方を研究するために本主題を設定した。

II 研究の内容

1 第1回ブロック研究会（会場：祝小学校）

（1）日時 5月17日 14：00～16：00

（2）内容

ア 祝小学校の全学年の授業参観

イ 3つの分科会に分かれ、校内研究、学習・生活習慣、ICTの活用等について交流学習会

2 第2回ブロック研究会（会場：勝沼中学校）

（1）日時 11月22日 14：00～16：00

（2）内容

ア 勝沼中学校の全学年の授業参観

イ 3つの分科会に分かれ、学習・生活習慣、ICTの活用等について交流学習会

III 成果と課題

- ・小学校、中学校ともにICTを活用した授業をどのように展開しているか、各校の取組について情報交換ができた。
- ・発達段階に応じた活用方法や同学年の情報を得ることができ、大変参考になった。
- ・情報交換が当たり障りのない内容になる傾向がある。小学校から中学校へ（逆も）要望等の話ができるとよい。
- ・「ブロック交流」という場なので、もう少し各校の先生方と交流する場面を作ることができるとよい。
- ・担当校の負担が大きくならないようにしていく。

（ブロック長 広瀬沙希）

児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究

児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会の活動

I 研究の内容

1 活動目標

ア 助け合い・ボランティア活動・環境問題・平和を守ることなどに対する活動を活発にします。

- ・社会奉仕活動を推進します。
- ・身体の不自由な人への関心を高め、積極的に協力します。
- ・平和と環境を守る活動に関心を高めていきます。

イ 教育祭「子ども・保護者・教職員の会」を成功させます。

ウ 私たちの声を、県や市町村に強く要望していきます。

以上の目標を立て、本年度取り組んでいきました。そして、代表者会、子ども・保護者・教職員の会の開催、古切手やベルマーク集めなど県の児生連活動にも参加協力していきました。

2 経過報告

- | | |
|-----------|--|
| 6月16日(木) | 東山梨地区 児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会
(東山梨地区 第1回顧問の会(松里中学校)) |
| 7月 6日(木) | 第1回県代表委員会(県立図書館) |
| 7月 6日(木) | 東山梨地区 児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会
(東山梨地区代表者会(夢わーく山梨)) |
| 11月14日(火) | 東山梨地区「子ども・保護者・教職員の会」(松里中学校) |
| 11月16日(木) | アフリカ飢餓救援活動(お米・募金)しめ切り |
| 1月26日(金) | 古切手・ベルマーク等の最終しめ切り |
| 2月 2日(金) | 能登半島地震義援金・ウクライナ支援金 しめ切り |
| 2月 6日(火) | 第2回県代表委員会(県庁防災新館) |
| ※大雪に伴い中止 | 知事(教育長・県議会議長)と語る会 要望書提出(県庁防災新館) |
| 2月27日(火) | 東山梨地区 児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会
(東山梨地区 第2回顧問の会(教育会館)) |

II 成果と課題（活動報告）

1 地区児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会〔地区代表者会〕（夢わーく山梨）

代表者会では、今年度の活動目標やとりくみ内容の共有をした。各校での児童会・生徒会活動を充実させ、児生連の場でそれを共有することが東山児生連の活動を活性化させることを確認できた。後半の学習会では、中学生が中心となって「自分たちの目指すリーダーについて考えよう」というワークショップを行った。各校の会長・副会長が交流をしながら、自分達の実践すべきリーダー像について意見交流を行った。同じ立場の生徒同士でリーダーとして何が大切なのかなどを考えることができたので、自校に戻ってから自信をもって活動する様子が見られた。

2 東山梨「子ども・保護者・教職員の会」（松里中学校）

分科会では児童会3分科会、生徒会1分科会の4分科会に分かれ、研究討議が行われた。参加した児童生徒自身が、各自に任された係分担をしっかりとこなしながら、学び合う場となった。それぞれの提案校からは、スライドを使って児童会・生徒会活動が発表された。各校とも素晴らしい実践発表であった。また、実践発表をもとに各校の取り組みの様子などの意見交換が活発に行われた。提案校の取り組みを各校で共有し、今後の児童会・生徒会活動に生かしてってもらいたい。全体会では、古切手・ベルマーク回収など例年行っているボランティア活動の意義が共有され、取り組みの提案があった。

【各校からの提案資料】



3 第2回県代表委員会 知事（教育長・県議会議長）と語る会（県庁防災新館）

本年度は、2月6日（火）に開催予定だった。前日に積雪に伴い、児童・生徒の安全を確保するため中止となった。東山梨支部は、松里中学校と勝沼小の会長が参加予定だった。

4 ボランティア活動について

本年度も様々なボランティア活動に各校協力していただき、以下のような成果であった。

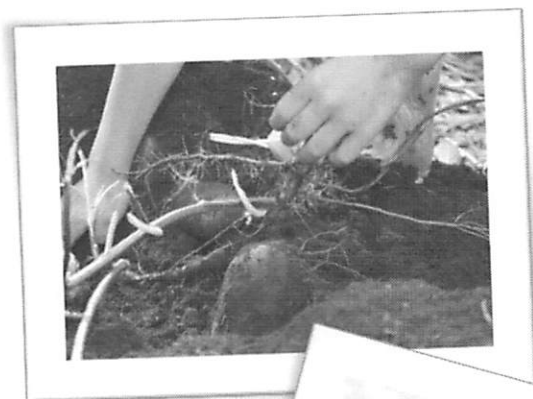
- | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|
| ・ アフリカ救援米 | 611,35 kg | ・ 輸送費募金 | 237,531 円 |
| ・ 古切手 | 5,88kg | ・ ベルマーク | 2,819 kg |
| ・ 能登半島地震義援金 | 1,068,452 円 | ・ ウクライナ支援金 | 90,587 円 |

※県児生連からの提案

※第1回代表者会で決定

各校の取り組み及びご協力に感謝したい。

（児童生徒連絡協議会担当 雨宮 友久）



学校経営ビジョンの実現や働き方改革の推進に向けた学校組織マネジメント 学校経営ビジョンの実現を図る組織の編成と円滑な運営

I はじめに

本研究会では、学校経営ビジョンの実現を図るための組織の編成と円滑な運営に関して、担任を本務へ向けるためのマネジメント、人事管理面等に関するマネジメント、持続可能な学校運営に関するマネジメントの3つの視点をベースにし、研究1年目である本年度は、各校からの実践報告による研究を進めることとした。

II 研究の概要

1 研究のねらい

各校の実践報告を整理し、学校経営ビジョンを実現させるための組織の編成と円滑な運営に向けた校長としてのマネジメントについて考察を行う。

2 研究計画

(1) 1年次（基礎研究①）

- ・学校経営ビジョンの実現を図るための各校の組織上・運営上の工夫や取組について、実践報告を行い、各校の現状を把握する。

(2) 2年次（基礎研究②）

- ・各校からの実践報告をもとに校長の組織マネジメントの在り方について、考察を行い、具体的な取組を整理する。

(3) 3年次（実践研究）

- ・2年次に考察・整理した校長の組織マネジメントの在り方をもとに、各校で実践検証を行い、組織マネジメントに関する成果と課題をまとめる。

3 研究内容

(1) 各校からの実践報告

今年度は、基礎研究として次のアからウの三つのマネジメントに関する視点をもとに、実践報告を行った。

ア 担任を本務へ向けるためのマネジメント

- ・組織的な指導体制の強化

学級担任の主たる本務を遂行するためには、個々の職員が責任をもって行動することを前提としつつ、複数配置・複数対応・複眼チェックの実施（分掌主任・副主任の配置など）、特別支援教育の充実（体制の整備・充実）、いじめ、不登校等への組織的対応、SCの活用として教職員の相談枠を設ける等の取組が報告された。

- ・業務の効率化及び改善に向けた取組

業務改善に向けた方針・目標を明確にすること、具体的取組内容を示すこと、ICTを活用した業務の効率化を進めること、資料の事前提示による会議時間の短縮等の取り組みが報告された。また、担任の負担になっている児童のトラブルに関する保

護者対応については、複数回対応が必要なケースでは管理職が窓口になることで負担軽減を図ることができた事例や、事務処理の時間を確保し、仕事の効率化を図る上で教科担任制の導入が有効であることの事例も報告された。

イ 人事管理面等に関するマネジメント

・適材・適所の人的配置と組織の修正・改善

校長として次年度の学校経営を見越したビジョンを持つこと、教職員の年齢構成、男女のバランスを考慮すること、人事上の情報をきめ細かく把握・分析し、適材・適所への人的配置に努め、状況に応じた業務分担の改善を進める等の取組が報告された。一方、課題として、4月当初から教員の欠員が埋まらず、管理職も授業に入らざるを得ない状況や、産休・育休取得に関する代替教員の確保が困難など、人事上の課題も多く報告された。

・教職員のキャリアアップ

適切な人事評価の実施等を通して、教職員の理解に努め、それぞれの資質・能力の向上と学校組織の活性化の必要性が話題となった。

ウ 持続可能な学校運営に関するマネジメント

・教職員の意欲の喚起・向上

各校には、これまで積み上げられてきた取組がある。それをもとにしたマネジメントを行う必要があること、担任の持ち上がりを基本とするなど複数年の継続を大切にすること、行事等の反省を次に生かし、行事の在り方を見直す（既成概念「あたりまえ」からの脱却）等の取組が報告された。また、個々の教職員の業務遂行場面を校長が積極的に視認し、進捗状況を把握すると同時に適切な指導・助言を行うことで教職員の自己肯定感の維持・向上を図ることの重要性が出された。

・同僚性の醸成

学校組織は県費負担教職員だけでなく暫定再任用教職員、市単教職員、非常勤講師、一人職、ボランティア等様々な立場の人材で構成されている。採用形態や勤務条件が異なる人材で構成されている組織の運営に苦慮していること、コロナ禍で希薄になりつつある職員同士の関係性を再度深めるため同僚性の醸成を図り、互いを思いやる職員集団の形成を大切にしているとの報告が出された。

・地域・保護者との連携

学校が担うこと、学校が担わなくてもよいことを整理し、学校運営協議会、PTA活動との連携を進めていること、6カ年計画として「〇〇小地域教育ビジョン」を学校運営協議会で検討している取組等が報告された。

Ⅲ まとめと課題

市内8校の報告内容を整理すると①職員のモチベーションの向上、②業務の振り分けと人材育成、③組織としての改革意識の向上の3点に集約できると考えた。

今年度は、各校の実状を把握することが研究の中心となったが、今後は、校長が進めるマネジメントの具体的な内容に踏み込んだ研究を進めていく必要がある。

(部長 岡 輝彦)

家庭・地域・関係機関と連携したいじめ防止対策等，健全育成の推進 ～健全育成のための，学校・家庭・地域・関係機関の連携～

I はじめに

学校は，いじめ・不登校の問題を最重要課題の一つとして認識し，未然防止，早期発見・早期対応に取り組んできた。しかし，子どもを取り巻く環境には，インターネットの普及により膨大かつ多様な情報が溢れる一方で，子ども・家庭・地域社会のつながりは希薄化し，生徒指導事案の増加・複雑化が進む深刻な状況にある。

令和4年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると，全国の小学校においての暴力行為は61,455件，いじめ件数は551,944件，学年別では小学校低学年が増加傾向にある。不登校児童は105,112人，いずれも過去最多であり，山梨県や甲州市においても同様の傾向が見られる。

このような状況の中，学校は，カウンセリングマインドで対応し，子ども一人一人に寄り添う支援を進めることが求められている。そこで，本分科会では，いじめ・不登校や問題行動等の未然防止及び早期発見・早期対応等を切り口とし，子どもの健全育成に向けた課題解決のための連携に焦点をあて，研究を推進していく計画を立てた。

II 研究の概要

1 研究のねらい

健全育成のための学校・家庭・地域・関係機関との連携の在り方や具体的方策を探る

2 研究内容

各小学校の健全育成に関する実践報告と県SSWによる学習会

3 実践報告

(1) 学校と各関係機関との関わり

ア 県・市との連携

市教育委員会（生徒支援会議，いじめ問題対策連絡協議会，教育講演会，幼児教育推進協議会，WEBQU），福祉総合支援課，公共施設，県SC，市SC，県SSW等

イ 関係機関との連携

フリースクール，学校支援団体，民間福祉施設等

ウ 保護者との連携

学校だより，PTA・学年総会，家庭訪問，家庭教育・子育てQ&Aと家庭学習の手引，e-ネット安心講座，SNS防犯教室，アウトメディアチャレンジ等

エ 地域との連携

・自然を生かした関わり

大藤花回廊，ころ柿探検隊，桃博士になろう，米作り，学校林自然学習，水神池学習，竹森川水質調査，ザゼンソウ見学，水晶山見学等

- ・環境を生かした産業との関わり
やぎいずビレッジ，花火工場，ワイン工場の見学等
- ・文化財・史跡との関わり
地域学習，史跡見学，玉諸神社例大祭等
- ・地域人材との関わり
地域学習会，昔がたり，伝統芸能教室，議員出前授業等
- ・地域の方との関わり
昔のあそび，ふれあい集会，納涼祭，有価物回収等

オ 関係機関との関わり

- ・SC や SSW による行動観察や面談 ・福祉や医療の専門機関でのケア

(2) 不登校・問題行動に関わる具体的事例

ア A児（暴力） イ B児（不登校） ウ C児（問題行動） エ D児（発達障害）

4 学習会より（講師：県 SSW）

- ・複数の要因が絡まっているため多くの情報を得ることが肝要
- ・学校の強みを生かした学校経営ビジョンを家庭や地域に示す
- ・事案件数に惑わされず解消の視点で取り組む
- ・専門的知見とエビデンスに基づいた支援を確立する

Ⅲ 研究の成果と課題

1 成果（明らかになったこと）

- ・ケース会議の有効性
フリースクール対応や児童状況の把握
- ・校長としての組織作り
関係者の選択，方針を統一する調整，役割の棲み分け
- ・情報収集
自ら足を運ぶ，会議を設ける等の積極的な情報収集
- ・「地域学校協働本部」の必要性
教育委員会や社会教育関係機関との構築

2 課題

- ・連携体制の明確化と共有
連携の取組をまとめたマニュアルの作成・共有
- ・早期発見・早期対応の強化
保護者と定期的に面談，アンケートや相談窓口の設置などの整備
- ・専門的知見に基づいた支援の充実
目的に合った関係機関の選択
これらの課題が解決に向かうよう，学校・家庭・地域・関係機関が連携を強め，さらなる取組を推進していく。

（部長 小宮山 昇）

互いの文化の違いを認め合い、広い視野で主体的にコミュニケーションを楽しむ
子どもを育成するための国際理解教育
～グローバル社会の中で様々な人とつながり、
ともに生きる子どもを育てる教育の推進～

I 研究のねらい

グローバル人材の育成を目指す教育課程の編成・実施・評価・改善について、各校の取組やその成果及び課題を把握することを通じて、校長としての在り方を探る。

II アンケートの目的

- 1 異文化に対する児童の意識を明らかにすること
- 2 国際理解教育の効果を明らかにすること

III 考察・提言

設問3「将来、外国で仕事をしたいと思うか?」、設問4「外国を旅行したり、外国に住んで勉強したりしてみたいと思うか?」では、5・6年生を比較すると6年生の方が「そう思う」と回答している児童が少なくなると同時に「そう思わない」と回答している児童も少なくなっていることから、自己の学習を深めるに従い外国に興味はあるが、実際に外国に行く等、将来について迷っている姿が推察される。

設問5「もし、困っていそうな外国の人がいたら、いろいろと手伝ってあげたいと思うか?」では、どの学年も90%以上の児童が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的にとらえていることから、各校の道徳を中心とした教育活動が自らの解釈を複眼的・相対的視点から見つめ直し、人の痛みや不安を深く洞察し、建設的に対処できる異文化間能力（インターカルチュラル・コンピテンス）を養うための異文化教育に効果があると考えられる。

設問1「外国の人と友だちになりたいか?」では、6年生になると80%以上の児童が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的にとらえ、設問9「これからの社会では、世界の人々と協力しながら生きていく必要があると思うか?」では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的にとらえている児童が、高学年になるに従い高くなっている。これらのことから、グローバル人材の育成を目指す各校の教育課程の編成・実施が、世界規模でものごとを考える力の育成に効果があると考えられる。

設問11「外国の人と話せるように、外国語を勉強することが大切だと思うか?」では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的にとらえている児童が、どの学年も90%以上を超えていることから、多くの児童が、外国語を学習することの必要性を強く感じていることが分かる。また、設問15「自分が住んでいる甲州市について、簡単な外国語で説明できるようになりたいと思うか?」では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的に答えている児童が、どの学年も約85%となっている。設問11と15の結果から、外国語を学習し、自分の住んでいる地域について説明できるようになりたいと考えていることが推察できる。

設問12「外国のことについて、もっと知りたいか?」では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的にとらえている児童が、どの学年も80%を超えていることから、外国について興味を持っている児童が多いことが分かる。

設問13「日本や甲州市のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいのか?」では、どの学年も約90%の児童が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的にとらえていることから、アイデンティティのもととなる自らの国・地域の伝統・文化を知ってもらいたいと思っている児童が多いことが分かる。しかし、設問14「外国

の文化と比べるために、日本や甲州市の文化をもっと勉強したいと思うか？」では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的にとらえている児童が、高学年になるに従い、少なくなっており、設問１３に比べ、４年生以外は、約７ポイント低くなっている。これらのことから、知ってもらいたいという意識と、実際に自分が学習するという意識では、若干の差があることが推察される。今後は、「知ってもらいたい」という意欲的な意識をもとに、積極的に「学習したい」という意識につなげた指導の工夫が必要となってくると考えられる。

異文化に関する児童の意識では、設問１０「他の国の子どもが、どんな勉強をしているかを知りたいか？」では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的にとらえている児童が、６年生は９０％を超えている。他の学年も８０％を超えており、同世代の学習について興味を持っていることが推察できる。また設問２「外国へ旅行に行ったり、外国の人との交流会に参加したりすると、外国のことを理解できると思うか？」では、経験不足からか、どの学年も「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的にとらえている児童が、６０％前後にとどまっている。設問６「外国の文化を紹介する番組があったら見たいと思うか？」では、高学年になるに従い、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えている児童は少なくなっている。設問７「外国の人と交流をしたいと思うか？」、設問８「これから、外国の人と交流するイベントなどがあったら、参加してみたいと思うか？」では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えている児童は、多くても約７０％、少ない学年は５０％にとどまっている。これらのことから、ただ、外国旅行をしたり交流会に参加したりするだけでは、外国のことを理解できないと考えているが、実際に自分が主体的に行動しようという意識は低い児童がいることが推察できる。言葉の壁、文化の違い、経験不足等、主体的な行動をしようとしていることを妨げている原因は何なのかを探究し、そのことに応じた指導が求められる。

さらに、設問１６「甲州市について、簡単な外国語で説明したことがあるか？」では「そう思わない」と答えている児童が、５年生では約５０％、他の学年も４０％弱の児童がいることから、広い視野で主体的にコミュニケーションを楽しむ子どもを育成するための国際理解教育を受けている経験が少ないことが分かる。

実際の異文化接触機会が少ない環境において、異文化に対する意識を形成するためには、教職員が児童に対して意識的に異文化接触機会を増やし、交流活動などの開催を通じて、国際理解教育の支援を行う必要があると考えられ、外国人との交流機会の少ない環境の中でより効果的な活動の開催に向けて、地域の多様な人的資源や物的資源を調達しなければならない。そのためには、コーディネーターとなる教職員のモチベーションの持続と地域コミュニティに対するコミュニケーション能力が管理職には求められると考えられる。加えて、次年度においては、異文化に関する児童の意識と、実際に簡単な外国語で説明した経験を持っている児童の回答の関連性を考え、アンケート項目を精選する必要があると考えられる。

今回、アンケートをとったすべての小学校で、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などのいずれかの時間において、何らかの国際理解教育が教育課程に位置づけられている。しかし、設問１７「授業の中で、外国の人や文化について学んだことがあるか？」では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えている児童が、６年生は約９０％いるものの、５年生は７０％ほどにとどまっていることから、実際に授業の中で学習したことと国際理解が結びついていない一面もあることが推察できる。このことから、さらに、児童は国際理解についてどの教科等で学習していると思っているのかを調べ、各校の取組やその成果及び課題を把握し、グローバル人材の育成を目指す教育課程の編成・実施・評価・改善について検討をしていく必要があると考えられる。

(部長 松井 渉)

中学校経営研究会

多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成

「生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教員の育成と研修の在り方」

I はじめに

生徒を取り巻く教育課題は年々複雑化・困難化し、こうした課題への組織的な対応力が求められている。また、大量退職・大量採用の時代を迎え、教職員の年齢構成も大きく変化している。そして再任用者、中堅ミドル世代、初任者など、キャリアステージにおける人材育成や組織の一員としての役割や使命の自覚など、各教員の資質向上も課題である。

さらに、コロナ禍で急速に整備された 1 人 1 台タブレットの効果的な活用や学校 D X 化の流れの中で、I C T 指導力や高い授業力も期待されている。

こうした状況を踏まえ、確かな指導力を持った教員を育成し、保護者や地域の信頼に応える学校経営は、校長にとって喫緊の課題である。

II 研究の概要

1 研究のねらい

東山梨支部では研究テーマを「喫緊の課題に対応できる人材や教員育成指標に基づいた人材の育成と研修の在り方」とし、教育課題に対応できる人材育成や研修の在り方を明確にし、学校としての課題対応力を向上させ、保護者や地域から信頼される学校経営を目指すこととした。

2 研究計画

(1) 1 年次（本年度）

- ア 研究テーマをどのように捉え、研究を進めていくか共通理解し、計画を立てる。
- イ 各校の教育課題や人材育成・研修の課題を明確にする。

(2) 2 年次（令和 6 年度）

- ア 教員育成指標に照らした人材育成の実践を学びあう。
- イ 地域の信頼に応える上での課題等を明確にし、対応策を探り実践する。
- ウ 効果的な人材育成や研修の方法について、研究協議する。

(3) 3 年次（令和 7 年度）

- ア 教員育成指標に基づいた人材育成と研修の充実を図る。
- イ 効果的な課題対応力育成について研究協議し充実を図る。
- ウ 3年間の研究をまとめる。

3 本年度の研究

- (1) 6月13日 テーマの検討，研究計画の確認
- (2) 7月4日 研修会や人材育成の様子や課題など研究の方向性について検討
- (3) 8月1日 課題レポートの作成
- (4) 8月29日 課題レポート提出，各校の実態把握
- (5) 10月24日 各校の研修会や人材育成の課題の共有
- (6) 12月7日 研修会や人材育成の課題の明確化
- (7) 1月16日 研究紀要のまとめ
- (8) 2月13日 次年度に向けての方向性の検討

Ⅲ まとめと課題

各校の実態を把握する中で，以下に挙げる4点が，共通する課題として明確になった。

- 1 初任者，中堅（ミドルリーダー），ベテラン（再任用）など各ステージにおける人材育成。組織の一員としての意識の高揚。自分の役割や使命の自覚。情熱と教育的愛情の醸成など。
- 2 有機的なチームとしての組織の構築（指示・連絡系統の整備と徹底。喫緊の課題への組織的な対応力の向上）
- 3 ICT活用力・指導力の向上（指導の個別化・個性化に向け，一斉授業から脱却した授業観，学習観の意識改革）
- 4 授業力の向上（個別最適な学びと協働的な学びによる，主体的・対話的で深い学びを実現する授業力の向上）

1年次の本年度は，研究テーマをどのように捉え研究を進めていくか共通理解をし，計画を立て，各校の教育課題や人材育成，研修の課題を明確にすることができた。次年度は，より具体的な事例研究や情報交換を通して，さらに研究を進め「喫緊の課題に対応できる人材や教員育成指標に基づいた人材の育成と研修の在り方」という本支部の研究テーマに迫り，校長としてのマネジメント力を高めていきたい。

（部長 石原三正）

社会に開かれた活力ある学校づくりのための教育課程の工夫

～探究的・協働的な児童生徒の育成をめざして～

I はじめに

山梨市では、市内全小中学校において「学校運営協議会制度」を導入し「コミュニティ・スクール（ＣＳ）」の取組をスタートさせている。また今年度より「社会に開かれた教育課程の実現」に向けた取組として、市教委提案の地域連携学習「山梨市ＥＣＨＯＥＳ（エコース）学習」を市内全小中学校の教育課程に位置付け、市内にある素材・人材・フィールドを活用した、教科横断的・総合的な学習を各校の実情に応じ展開している。

山梨市教頭会では、これまで３年間、教頭として組織づくりに携わりながら研究・実践を進めてきたＣＳの取組と「山梨市ＥＣＨＯＥＳ（エコース）」の取組を効果的に融合させ、地域社会との連携・協働を、さらに進展させていくための教育課程の構築を市内の小中学校での協力体制のもと進めていきたいと考えた。

そこで、今年度から３年間の本会の新たな課題別研究のテーマを「社会に開かれた活力ある学校づくりのための教育課程の工夫 ～探究的・協働的な児童生徒の育成をめざして～」と設定し、以下のように進めていくこととした。

II 研究のねらい

ＣＳの取組と「山梨市ＥＣＨＯＥＳ（エコース）」の取組を効果的に融合させた教育課程について、市内各小中学校での協力体制を組み合わせながら社会に開かれた活力ある学校づくりのための教育課程を構築していくために、①地域素材・人材・フィールドを活かした教育課程の編成、②市教委と連携した教育課程の構築と実施、③学校運営協議会（ＣＳ）等と連携した地域とともにある学校づくりの３点を主な内容として３年間の研究を進めていく。

III 研究計画

1 1年次

- (1) 研究の方向性の確認，研究テーマの設定，研究内容の検討
- (2) 市教委提案の「山梨市ＥＣＨＯＥＳ（エコース）学習」の各校での実施
- (3) 「山梨市ＥＣＨＯＥＳ（エコース）学習」の実施内容の検証

2 2年次

- (1) 「山梨市ＥＣＨＯＥＳ（エコース）学習」の取組の改善
- (2) 学校運営協議会（ＣＳ）等の取組と連携した活動の構築
- (3) 学校間の取組に関する情報共有（取組事例の収集）

3 3年次

- (1) 取組内容を工夫・改善した「山梨市ＥＣＨＯＥＳ（エコース）学習」の実施と検証
- (2) 研究のまとめ（取組の成果，今後の課題に関するまとめ 等）

Ⅳ 研究の概要

1 山梨市ECHOES（エコース）について

令和5年度より市内各小中学校の教育課程に教科横断的・総合的な学習として組み込み、導入を図っている市教委提案の取組である。

ECHOESの「E」は「Experience（体験・経験）」、「C」は「Community（地域社会）」、「H」は「Hometown（ふるさと）」、「O」は「Originality（独創性）」、「E」は「Enjoyable（楽しく）」、「S」については「Sustainable（持続可能な）」を表しており、市内各小中学校において、「市内にある素材・人材・フィールドを活用した教科横断的・総合的な学習を通して、学ぶことの楽しさを味わうとともに、互いの考えや想いに共鳴し合い、共感し合える児童・生徒の育成を図る」ことを目的として展開していく学習である。これを市内各校の教育課程の中に位置付け、目的達成のために取り組み、地域素材や人材等を活かし、「社会に開かれた教育課程の実現」に向けて研究を進めていく。

2 学校運営協議会〈コミュニティ・スクール（CS）〉について

学校運営協議会（CS）は、保護者や地域住民の意見を学校運営に反映し、地域とともにある学校づくりを実現するための仕組みである。子供たちの「生きる力」を育むためには、教職員のみならず、保護者や地域住民等の適切な支援を得ながら、学校運営の改善を図っていく必要がある。このため、学校と地域の組織的・継続的な連携を可能とする協議会について、設置の促進と更なる活動の充実が図られた。

今日の学校を取り巻く課題に適切に対応するためには、保護者や地域住民等とのさらなる連携・協働体制を構築し、その協力を得ることが不可欠である。そして、その協力・支援活動が適切に行われるためには、その活動を担う保護者や地域住民等が、当該学校の校長の学校運営のビジョンや運営の現状、児童生徒が抱える課題等を的確に把握することが重要である。山梨市では現在、市内全小中学校に組織されている。

Ⅳ 研究の成果と今後の課題

1 成 果

CS・ECHOES（エコース）の各校の現状の把握と成果と課題の共有実際に導入・運営している学校の現状、成果や課題を共有することで、今後の各校での教育課程の構築に向けて大変参考となった。成果があった取組は各校で参考にし、課題点については、その内容や方法等を再検討していくことで、さらに改善していきたい。

2 課 題

教育課程への位置づけと素材や人材の確保、保護者や地域と連携した活動を仕組んでいくためには、活動を教育課程へ適切に配置し効果的に活用していくことが重要である。また、人材・素材・フィールド等とのさらなる協力・継続体制の構築等についても考えていく必要がある。

（課題別研究部長 堀井勝彦）

人・自然・ふるさとを愛する甲州教育 ～市教委と進める統一取組～

I はじめに

甲州市においても他の市町村同様、国の教育振興基本計画を参酌し教育振興基本計画を定め、基本理念・基本目標を掲げ、甲州市の教育が目指す姿を明示している。基本理念を「人・自然・ふるさとを愛する甲州教育」、学校教育の基本目標を「たくましく 心豊かな人づくり」として6つの施策（後述）が掲げられている。

その中でも、「新しい時代を生き抜く資質・能力（確かな学力）の育成」が項目の1番に掲げられている。この施策を具現化するため、全市立小中学校では甲州市教育委員会と連携し、平成23年10月より「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」（以後：学力P）を発足し、「人づくり」を基盤とした教育活動を推進している。このプロジェクトは、学級集団を「支え合い、学び合い、教育力のある、質の高い集団」に育成することを基盤とし、「授業づくりや授業改善」、「保護者・地域と連携した取り組み」を進め、子どもたちに「豊かな人間性」と「しっかりとした規範意識」、「時代の変化に適応し、将来にわたって自立して生きて行くことができる力」を育成することを基本的な考え方としている。

取組の一つとして「甲州市ティーチャーズノート」（以後：Tノート）がある。これは、研究主任を始め、教頭会代表が参加して自分たちが作成している。それを基に、全職員で協働的な取組を行っている。

また、教頭会は甲州市役所で開催され、冒頭では、教育長や市の指導主事から市の教育状況について説明がある。また、市校長会の議題の情報提供がある。具体的には、学校教育グランドデザインや働き方改革方針、部活動地域移行状況、学力テスト等の結果・分析結果などである。昨年度は、市で進めるパートナーシップ制度に関する学習会も開催された。また、外部人材紹介や世界農業遺産認定をもとにした教材化奨励、「確かな学力育成プロジェクト」に関しては、教科指導と生活指導を一体化させた実践も行われている。これは、学校運営の核となっている甲州市の各教頭に甲州市の教育状況を伝え、その見識を深めさせ、校長を補佐したり、教員を導いたりして、甲州市の教育をよい方向に実現させてほしいという思いが元になっている。教頭は甲州市の教頭会での学びを、各校における日々の学校運営に生かし、学校長への情報提供、意見具申を通して、学校教育目標の実現、甲州市学校教育グランドデザインの実現に向けて努力している。

II 研究のねらい

甲州市の特徴として前述のように確かな学力プロジェクトを立ち上げている。3つ

の部会に校長、教頭、教員が代表として参加し、部会の実践が各校に下ろされ、全学校で様々な具体的な取組を行っている。市教委が目指す教育を実現するために市教委と学校や校長との連携の橋渡しとして教頭の果たす役割は大きいと考える。今回、教頭としてどのような取組ができていて、次にどのような取組が必要なのかを研究することで、市全体で目標・理念・実践を統一して一つの方向をめざす甲州教育を推進できると考え、本課題を設定した。

Ⅲ 研究内容

1 アンケートの実施と、確かな学力の実践の数値化

甲州市の施策項目にそって、各項目ごとにアンケートをおこなった。施策ごとにそれを数値化することで数値が高いものは、各校でも重点的におこなっているという強みの確認と低いものは、各校であまり取り組んでいないと感じていてのではないかという弱みの把握をおこなった。そのことで今後どの項目を重点的に取り組む必要があるのかが見えてきた。

2 各校の実践の紹介と実践集の作成

各校での実践を発表しあい、それを実践集としてまとめた。発表の中で特筆すべき実践を関東ブロックで他県の方々にも紹介することができた。実践を発表し合うことで良いものは積極的に取り入れ、学校運営に生かすことができた。甲州市で統一して取り組むことの再確認をすることができた。また、来年度の関東ブロック山梨大会の発表に向けてどのような実践を発表すればよいかの資料となった。

Ⅳ 研究のまとめと今後の課題

成果としては、教育委員会の教育目標・教育理念を再確認して、それをもう一度見直しながら日々の実践に生かすことができた。また、他校の実践を発表し合うことで学校運営に生かすことができた。次に、アンケートを通して甲州市の教育目標の強み、弱みを数値化することができた。高い数値の所は、さらに伸ばしていき、低い数値のところは、重点的に今後取り組み、教頭会として統一して進めていきたい。関東ブロックの発表で甲州市の様子を他県に伝えることができた。

課題としては、目標・理念の研究である。学校として組織的にやっているのに教頭としてどのように係わるのかが見えない部分が多いので、どう関わっているのかを明確にすると研究がわかりやすくなる。来年度、重点項目の内容が少しかわるのでそれに対処しながら2年目の研究を進めていく必要がある。

(課題別研究部長 川野 和昭)

第65回全国公立学校教頭研究大会 石川大会オンライン参加報告

令和5年度「第65回全国公立学校教頭研究大会 石川大会」が8月3日（木）、4日（金）の2日間、石川県金沢市で行われた。コロナ感染症が5類に移行になり、「ハイブリッド大会」という参集とオンライン併用の新たな形で行われた。研究主題は『未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり』であった。私がオンライン参加したのは「教育課程に関する課題」で、教頭の果たすべき役割や関与のあり方について議論を深めた。

<提言1>「地域の特色を生かした教育活動の推進と教頭の役割」

-体験活動を通したキャリア教育の充実について-

兵庫県 神埼郡神河町立長谷小学校 藤本 悟 教頭

子供たちが「生きる力」を育み、「自立」に向けた自己のキャリア形成を促すことを目的に、兵庫県型「体験教育」等の体験活動を推進している。各地域における体験活動をキャリア教育の視点で見直し、神埼郡の特色を生かした取組とするために、教頭が果たすべき役割を明確にしているということであった。

グループ討議では、提言の内容4泊5日の体験活動の取組にどの県の教頭も驚いていた。神埼郡としていくつかの学校が一緒に取り組み各学校の教員が分担等しているということであった。地域の人的・知的教育資源や教育力を生かした体験活動の充実に向け、家庭や地域、関係する機関との連携等、やはり教頭の連絡調整という点が非常に大切であり、様々な機関との連携も意識されていた。

グループ討議のメンバーのそれぞれの特色についても話し合われた。それぞれに地域の特色があり様々な活動が行われているが、教頭の役割はやはり連絡調整が大切であるということであった。また、若い教員が増える中、教頭が全てやるのではなく、若い先生方にやらせて覚えさせていくことも大切であるという話題もあった。教頭が見守り育てていくという視点も大切である。

<提言2>「地域とともにある学校づくりを目指して」

-コミュニティ・スクールを基盤とした推進と教頭の関わりについて-

三重県 松阪市立鎌田中学校 玉置 知子 教頭

松阪市教育ビジョン「夢を育み 未来を切り拓く 松阪の人づくり」を基本理念とし、その施策の一つとして「地域とともにある学校づくりの推進」を掲げ、令和6年度には市内全ての小中学校でコミュニティ・スクール導入を目指しているとのことであった。それを受け、市内各小中学校によって、学校や地域の実情が異なる中、児童生徒に未来を切り拓く力を育むことができるよう、「地域とともにある学校づくり」の推進と教頭の関わりについての提案であった。

グループ討議では、それぞれの県の状況紹介があった。まだ、CS導入が始まっていないところもあり、状況は様々であった。始まっているところの状況では大きな負担があるわけではなく、助かっている面も大きいという意見があった。CSを広げていくための教頭の役割という点についても話し合いを行ったが、「広げる」ということから行事を増やすというイメージを持ちがちだが、そうではなく今ある行事の中でうまく活用していくべきではないかという意見も出た。地域と学校をつなぐということを意識し、負担を増やすのではなく地域と一体となって子どもを育てていける環境作りをしていくべきであり、教頭としてそのつなぎ役をどうしていくかが大切である。やはり日常からの地域社会とのつながりを大切にし、お互いに成長していけるよう教頭の役割は大切である。

（勝沼小学校 中村亮二）

第64回関東甲信越地区教頭会研究大会東京大会
「教育目標・教育理念に関する課題」分科会 参加報告

期日 令和5年11月17日(金) 場所 ベルサール新宿グランド

◎「教育目標・教育理念に関する課題」分科会では、参加者が15グループに分かれ、次の2つの提言について協議・情報交換等を行った。

提言1 人・自然・ふるさとを愛する甲州教育 ～市教委と進める統一取組～

提言者 山梨県 甲州市公立学校教頭会 甲州市立神金小学校 川野 和昭 先生

1 研究内容

甲州市では、平成23年より「確かな学力プロジェクト」を発足し、これまで13年にわたり、学級集団を「支え合い、学び合い、教育力のある、質の高い集団」に育成することを基盤とした「授業づくりや授業改善」、「保護者・地域と連携した取り組み」を進めている。

2 研究討議の内容(抜粋)

(1) 市内共通の活動と各校独自の活動を推進するための教頭の役割

・長年にわたり、市教育委員会と市内全学校が協力体制を組んで取り組んでいることはすばらしく、その中で教頭として各校の取組をつなぐ調整役としての役割がある。

(2) 子どもの資質・能力を育むための教育施策への取組

・市教育委員会が舵を取り、市内全学校が共通の目的や視点を持ちながら、市内の子供たちの資質・能力の向上を目指していることはすばらしく成果もあがっている。

提言2 学校の特性を生かした教育活動の推進

～SWOT分析を生かした具体的な教育活動を通した教育理念の実現～

提言者 東京都 立川市公立学校副校長会 立川市立上砂川小学校 齋藤 祐介 先生

1 研究内容

立川市では、教育課程特例校の指定を市内全公立小・中学校で受け、教科「立川市市民科」を展開している。取組を推進するためにSWOT分析を用いて、それを活用して具体策を提言する。

2 研究討議(グループ討議)の内容(抜粋)

(1) 子どもの資質・能力を育むための教育施策への取組

・学校運営協議会や地域学校協働活動本部などの協力を得ながら「地域とともにある学校づくり」を進めていくことで、地域の担い手たる子供たちの資質・能力を育んでいくことにつながる。

(2) 学校課題を解決し、教育理念を実現するために教頭が大切にすること

・学校と地域が互いのニーズを把握し、学校課題と地域課題がどちらも解決に向かうような双方にメリットのある活動を仕組んでいくことが取組の有用性や継続性につながる。

まとめ

学校運営協議会(CS)の設置状況や設置してからの期間が都県や市区町村によってだいぶ差があることに加え、地域や学校により活動方法や取組内容も様々であった。

討議では「公民館とつながることが活動を前に進めるのに有用である」、「教職員以外の人材で、地域を知り、地域教育に想いをもったコーディネーターの存在とその働きが、活動や取組を大きく前進させる」という考えが共通した意見として出され、共感できるものであった。

(課題別研究部長 堀井勝彦)

研究テーマ：心と体をほぐし、楽しく音楽の力を付ける常時活動の実践 ～「聴く力」に着目して～

I 研究の動機

現行学習指導要領では、子どもたちに身に付けたい資質・能力を三つの柱として整理し、「何のために学ぶのか」という学習の意義をすべての教科において共有すると共に、学びの過程を重視した授業の在り方が求められている。音楽科においては、「音楽を形づくっている要素とその働き」に着目し、様々な角度から音楽に対する感性を育んでいくことが肝要であり、そのためには聴取活動を軸とした学習が欠かせない。限られた授業時数の中、どのように聴取活動の機会を生み出していくのか、音楽科としての大きな課題であると言える。

本研究は、この課題を解決するための方法として授業の導入時に行われる帯活動、いわゆる「常時活動」に着目し、「聴く力」を育てるための方法やその効果について考察し、実践したものである。

II 研究の内容 ～音楽科における「常時活動」の有用性～

常時活動とは、主に導入の5分から10分程度を使い、毎時間、継続的に行うことで音楽の力を付けていこうとするもので、近年音楽科の授業実践においてその学習効果が注目されている。その内容は、子どもたちの年齢や実態に応じて柔軟に構成され、音楽あそびやリトミックなどの要素が取り入れられることも多い。小学校では、既に様々な音楽あそびが授業に取り入れられているが、改めてそれらを常時活動として捉えなおすことで、より学習としての効果が高まると共に、短い時間を有効に使って音楽の基礎となる聴取力を育成することが期待できる。

現状を把握するため行った実態調査では、多くの教員が「音楽の授業は専門性が必要である」と感じていると共に、自身の指導内容に対して不安を抱えていることが分かった。また児童からは、技能面に関する不安（歌唱が苦手、リコーダーが難しいなど）が、音楽への苦手意識を生み出していることなどが分かった。これらの調査結果を参考に、常時活動の有用性を検証するため授業を行った。

III 成果と課題（検証授業を通して）

（授業協力校：山梨市立加納岩小学校（第4学年）／実施期間：2023年11月～2024年1月）

今回はリズム遊びを中心とした常時活動を実施した。その結果、全体的に表現技能や読譜力など基礎的な音楽力の向上が見られたことから、常時活動は効果的であったと言える。具体例として、簡単なリズム譜を読み表現できたこと、音や拍を意識した活動が見られたこと、常時活動で身に付けた力を本活動に活かした学習場面が見られたことなどが挙げられる。特に、児童が実態調査で最も「苦手だ」と答えた音楽づくりでは、常時活動で身に付けたことを活かし、創作につなげることができた。

課題として、より多くの先生方にこの常時活動を知ってもらい授業に取り入れてもらうためにも、より簡単で取り組みやすい実践を考えていくことや、ICT教材を取り入れていくこと、また、常時活動のバリエーションを更に広げていくことなどが挙げられる。今後も研究していきたい。

（山梨市立加納岩小学校 平井祥子【研修先：山梨大学】）

学ぶ意義を実感できる小学校社会科授業
—複線化を取り入れた工業学習の実践—

I 研究の内容

小学校高学年を対象とした好きな教科調査では、調査開始以降、社会科が好きな児童の割合は全て最下位となっている。児童はその理由について、「覚えることが多いから」「教師の話聞くだけで面白くないから」といった回答が多数みられた。この調査から、小学校社会科においては、児童が主体的に学ぶ意識が低いことがうかがえる。こうした背景には、社会科の授業の多くが、教師主導の「単線型の授業」となっていることが考えられる。それにより、児童が社会科の学習に対して学ぶ意義を実感できる機会が少なくなっていると考えた。そこで、教師主導ではなく児童が、めあてや学習方法を選択できる場面を取り入れた「複線型の授業」の実践について研究を進めることにした。児童が学習活動を選択し、学習を進めていくことで、児童の学ぶ意義の実感とどのように関係するのかを検証した。

授業実践は、山梨県内の公立小学校、第5学年2学級55名を対象に実施した。単元は、「自動車生産にはげむ人々」で実践を行った。全11時間の単元を構成した。複線型の学習活動は、「めあての選択」と「学習方法の選択」である。6時間の学習を複線型の学習活動で行った。4つのめあてについて児童は、自分の学びたい内容を選択して学習を進めた(図1)。教科書、資料集、映像資料からの選択し学習を行った。

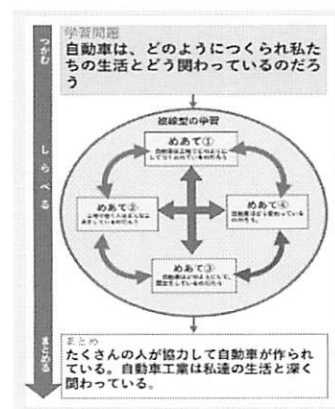


図1 複線型の学習の流れ

II 成果と課題

授業後に、「複線型の学習」についてのアンケートを児童(回答者49名)に実施し、授業を検証した。

児童の多くは、複線化された学習活動に対し「更に知ることによって分からなかったことがわかるようになったし、もっと深く深く調べたいと思いました。」など肯定的な感想が見られた。自分の選択によって主体的な姿が生まれ、調べたことを交流し合うことで、理解の深化が可能となった。一方で、児童自身で学習内容をまとめることに難しさを感じる児童もいた。どのように教師が介入していくのが今後の課題となった。

III 成果物

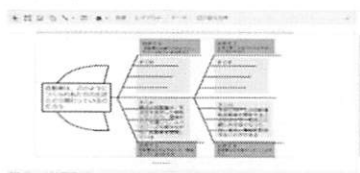


図2 思考ツールの活用

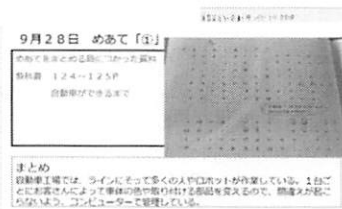


図3 複線化した学習活動で作成した枠シート

複線化した学習では、単元の見通しを持てるように思考ツールの活用、ワークシートを作成した。
(日下部小学校 三澤 瞬)

小学校道徳科における評価についての研究 －学習状況と道徳性に係る成長の様子を見取る方法の提案－

I 研究の内容

道徳科の評価について小学校学習指導要領では、「児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導の改善に生かすよう努める必要がある」（文部科学省，2018）と規定されている。しかし、道徳科で養うことをねらいとする道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲及び態度を諸様相とする内面的資質であるため、一朝一夕に道徳性が養われた否かを判断することは難しい。そこで本研究では、小学校低学年において児童の学習状況を普段の授業で見取るための手立てと工夫について考察し、授業実践を通しその有用性の検証を目的とした。

II 成果と課題

今回の実践における成果の1つ目は、ワークシートを工夫することで、問いが明確になり、無回答や発問から大きくずれる記述が減り、記述から児童の学習状況を把握することができたことである。2つ目は、低学年児童においても自己評価を活用し、自身の学習を客観的に振り返ることができていることがわかった。また、自己評価を分析することで教師の指導を改善することができたことである。3つ目は、板書を活用したエピソード記録シートを作成することで、授業での学びの姿が明確になり、道徳の授業をきっかけとして、日常生活の中で児童の前向きな姿を見取ることにつながったことである。

今後の課題としては、今年度の実践は限られた時間の中での短時間での検証であったため、長期的に学習状況を把握していくなかで、評価方法の有用性を検証していく必要があると考える。また、蓄積した学習状況をどのように組み合わせて、児童の道徳性に係る成長の様子を見取っていくのが課題として挙げられる。次年度の研究課題として実践を行いながら、粘り強く検証をしていきたい。

III 成果物 『エピソード記録シート』

エピソード記録シートは、授業エピソードと生活エピソードを合わせて記録するために作成したシートである。授業エピソードには、授業中の発言の記録である板書の写真とペアでの学習の様子や、ワークシートの記述の様子など授業内での学びの記録を合わせて残す。生活エピソードについては、授業に関する内容について、学校生活の中での児童の言動の記録を残していく。エピソード記録シートを活用することで、児童の学習状況と児童の日常での成長の样子の二つの面を合わせて一枚のシートに蓄積することができる。

（東雲小学校 中根淳）

保健室における「SOS の出し方に関する教育」の実践について —生徒の援助要請の実態調査及び援助要請スキルを高める心理教育の実践—

I 研修の内容

山梨大学教育学部において、田中健史朗准教授のご指導のもと、上記のテーマを設定し、研修を行なった。大学では、教育学部の教職基礎科目を中心に授業を聴講させていただき、児童生徒の発達や心の問題を臨床心理学、発達心理学、教育心理学の観点から研究テーマに迫る学びを得た。

研究においては、研究1として山梨南中学校第2学年の生徒を対象とし、生徒の援助要請の実態について、調査「悩みの相談行動に関するアンケート」を実施し、調査研究を行なった。調査項目は、悩みの経験を尋ね、「相談行動の利益・コスト尺度改訂版」(永井・新井 2008)、及び「レジリエンス尺度」(石毛, 2001)を用いて、それらを測定尺度とした。次に、研究2として、研究1で明らかになった実態をもとに、研究1と同様の対象に、認知行動療法の手法を用いた心理教育を実施した。対象の3クラスのうち、1クラスを統制群に設定し、心理教育の効果も検証した。効果の検証には、研究1と同様の測定尺度を用いた。研究1の調査をベースライン調査として、研究1で実施した調査をベースライン調査とし、2回目調査を研究授業先行実施群の研究授業後、3回目調査を統制群の研究授業後に実施し、尺度のデータの変容について分析を行なった。

II 研修の成果と課題

調査研究を通し、生徒の援助要請の実態と援助要請に関連する要因について明らかにし、心理教育の介入の効果を援助要請に関連する尺度で検証することができた。統計的処理により、エビデンスとなるデータは得られなかったが、生徒の相談行動の実態から生徒の援助要請に関わる要素を考えることができた。生徒の援助要請行動において、相談行動の利益・コストは重要な視点であることを捉えることができ、本研究においても、実行のコストである「否定的な応答」「秘密漏洩」「自己評価の低下」の平均値はそれほど高い数値を示さなかったが、相談行動実行の利益である「ポジティブな結果」との間で負の相関関係が見られたため、相談行動実行のコストである「否定的な応答」「秘密漏洩」「自己評価の低下」を低減していけるような「SOS の出し方に関する教育」の実践や、相談体制や環境づくりも必要であることが示唆された。

研究授業の実践では、認知行動療法の基本にある「気分や行動はそのときの考えの影響を受けている」という考え方を理解し、悩みを「できごと」「考え」「気分」に整理して、「考え」を見直すことを授業内容とした。介入によって、相談行動の利益・コストの因子である「秘密漏洩」が有意に低減し、レジリエンスの因子である「楽観性」は有意に高くなった。また、この心理教育については、保健室における健康相談活動においても活用できる方法であることを捉えることができた。

研修を通して、学校における「SOS の出し方に関する教育」において、SOS を出せる子どもを育てること、SOS を伝えやすい学校のあり方の重要性を再認識した。本研修では、学級活動の1時間の中で心理教育を行なったが、学校現場における授業時間の確保に課題を感じた。学校において「SOS の出し方に関する教育」をさらに推進していくには、時間の確保が課題として捉えられた。

III 研修の成果物

- 1 学級活動指導案 学級活動(2)ウ 題材名:「悩みを整理する」
- 2 質問紙調査 悩みの相談行動に関するアンケート (山梨南中学校 養護教諭 荒井 恵子)

あ と が き

令和5年6月16日に第4期「教育振興基本計画」が閣議決定されました。将来の予測が困難な、VUCA の時代の教育の羅針盤として、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」を2本柱とした、今後5年間の国の教育政策全体の方向性や目標、施策などが定められました。この計画には、教育基本法の普遍的な使命としつつ、新たな時代の要請を取り入れていく「不易と流行」の考え方が基調とされています。

視点を各校の研究テーマや設定理由に移すと、社会や時代の流れを受けた言葉である、「個別最適」や「協働的」、「学習者主体の授業」、「自己決定・自己選択」などが見られます。目新しい言葉であり、一見進むべき教育の方向が変わったかのように感じますが、それぞれが目指す先は「主体的・対話的で深い学び」の実現であり、これらは学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」を育むためであることは、現学習指導要領総則に明記されています。

「東山梨教育研究」は昭和38年の初刊以来、62号を数えます。これまでも各学校・研究部会では、多くの先輩方が築き上げてきた実践とその成果の上に立ち、社会背景や地域の現状を踏まえ、目の前の子供たちに必要な力を見据えた教育研究を進めてきました。教育の「不易と流行」について心に留めながら、日々の実践、持続可能な研究を積み重ね、教育活動の更なる充実を図るためにも、年度の研究成果が収録される「東山梨教育研究」の果たす役割は、ますます重要なものとなることでしょう。

末筆ながら、本誌の発刊にあたり、ご多用の折に玉稿を賜りました甲州市教育委員会教育長様並びに東山梨教育協議会会長様をはじめ、貴重な原稿を寄せられた皆様、発行にご協力いただきました皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。また、山梨・甲州両市教育委員会には財政の面で大きなご支援をいただきました。深く感謝申し上げます。なお、今号の表紙は山梨北中学校中村心葉さんの作品「ポジティブの中には…」です。ありがとうございました。

【編集実行委員会】

甲州市教育委員会教育長	小林 俊彦
東山梨教育協議会会長	新海 直仁
山梨市教育委員会教育長	嶋崎 修
峡東教育事務所副所長	中村 英彦
峡東教育事務所指導主事	小林みずほ
山梨市教育委員会指導監	小串 吾郎
山梨市教育委員会指導主事	志村 貴美子
甲州市教育委員会指導主事	那須 栄樹
甲州市教育委員会指導主事	岩下 和子
東山梨教育協議会事務局次長	日野原和貴
東山梨教育協議会研究推進委員長	広瀬 竜太
山梨支会研究推進委員長	村田 裕紀
甲州支会研究推進委員長	中村 大介

発行日	令和6年4月1日
発行責任者	東山梨教育研究編集実行委員会
編集責任者	東山梨教育研究編集実行委員会 事務局
印刷所	昭和堂印刷

I 児童・生徒数と教職員の定数

1 児童・生徒数及び教職員等の配置状況【2023年5月1日現在】 ※「欠員12月」は、2023年12月31日現在

項目 校名	児童 生徒 数	学級数				教職員等配置状況												備考	
		通常	特 支	分 校	合 計	校長	教 頭	主 幹 教 諭	教 諭	養 教 諭	栄 養 教 諭	事 務 員	市 立 教 諭	司 書	調 理 員	用 務 員	欠 員 5 月	欠 員 1 2 月	○→市立職員(数字は人数)①②③など ●→民間委託職員(数字は人数)④⑤⑥など ※→業務職員の配置校組み合わせ ケ→県員で業務 ⑦→市立で業務 ※→県立で業務 県立→学校栄養職員 県立→栄養士 ◆は学習指導員等(コロナ加配)
加納岩小	306	13	3	0	16	1	1	0	22	1	ケ	1	0	①	0	①	0.5	0.5	※ケ英語専科(本校校:後援数小、八幡小、富川小) ※ケ担任指導員(本校校:日下邸小、山梨小、八幡小) ※ケ栄養(本校校:日下邸小、給食センター) 県非常勤4(アクティブ)、通級指導0.5、担任研後補充2) ○特別支援員② ◆学指3 ◆スサ2
日下邸小	351	15	5	0	20	1	1	0	30	1	ケ	1	0	①	0	①	1	1	※県立(ケ)英語専科(本校校:ケ岩手小、山梨小) 1 通級加配4 特別支援加配0.5 ※県立常勤(さめ知、不通知、) 1 ○特別支援員(市)③ ◆学習支援2 ◆スサ1
後援数小	190	8	4	0	12	1	1	0	13	1	ケ	1	0	①	0	①	2	1	○特別支援教育支援員② ◆学力向上支援員1
日川小	136	6	3	0	9	1	1	0	11	1	ケ	1	0	①	0	①	0.5	0.5	アクティブ加配 [0.5] 1 県非常勤講師 [0.5] 1 (後援より) 特別支援員② ※県立(ケ)加納岩 日下邸小 給食センター ◆学指1 ◆スサ1
山梨小	208	6	3	0	9	1	1	0	10	1	ケ	1	0	①	0	①	2	1	アクティブ加配 (0.5) 4 市特別支援員2 ◆スサ1 県立校(山梨南中・後援数小) ※英語専科(日下邸小・八幡小・岩手小)
八幡小	119	6	3	0	9	1	1	0	10	1	ケ	1	0	①	0	①	0	0	※英語専科(加納岩小 後援数小 富川小) ※担任指導員(加納岩小 日下邸小) ※県立常勤(理科専科)0.5 ※県立(給食センター 富川小 富川中) 担任研後補充1 特別支援員① ◆学指2 ◆スサ1
岩手小	33	4	2	0	6	1	1	0	6	1	ケ	1	0	①	0	①	0	0	※英語専科(ケ)日下邸小 県立(給食センター) ※司書(八幡小) ○特別支援員①
富川小	146	6	5	0	11	1	1	0	12	1	ケ	1	0	①	0	①	0	0	※ケ英語専科(本校校:加納岩小、後援数小、八幡小、富川小) 県非常勤1 (担任研指導員加配) ○市立特別教育支援員② ◆スサ1
山梨南中	352	11	4	0	15	1	1	0	25.7	1	ケ	1	0	1	0	①	0.3	0.3	○特別支援教育支援員② 県立非常勤講師3名(内SC1名)
山梨北中	372	12	3	0	15	1	1	1	27	1	ケ	2	0	①	0	①	0	0	○市立教諭職員・特別支援員② 県立(給食センター) 県立非常勤講師1
富川中	77	3	2	0	5	1	1	0	9	1	ケ	1	0	①	0	①	0	0	※県立(富川小) ○特別支援員②
山梨市合計	2290	90	37	0	127	11	11	1	175.7	11	0	12	0	1	0	0	6.3	4.3	
塩山南小	351	14	3	0	17	1	1	0	24	1	ケ	2	①	①	0	②	0	0	※県立1 (給食センター 塩山北小 玉宮小) ※英語専科①(奥野田小 後援小) 担任研後補充2 学習支援員④ ◆スサ① 用務員2 (シルバー人材交代で)
塩山北小	96	6	2	0	8	1	1	0	10	1	ケ	1	③	②	0	①	0	0	※県立:ケ(塩山南小・塩山北小・井尻小・玉宮小) 英語専科:ケ(塩山北小・松重小・東谷小・井尻小) 司 書①②(塩山北小・玉宮小) ○学習支援員②
奥野田小	116	6	2	0	8	1	1	0	9	1	ケ	1	①	①	0	②	0	0	◆学指2
大森小	39	5	1	0	6	1	1	0	5	1	ケ	1	①	②	0	②	1	0.5	※県立(給食センター) ※司書(井尻小) ※市立英語専科員① ◆複式解消支援員① ◆学習支援員① ◆小学校専科指導員加配非常勤講師① ◆公立小中学校非常勤講師①(9/4より)
神倉小	32	4	2	0	6	1	1	0	7	1	ケ	1	③	①	0	①	1	1	※県立 センター兼職 市立教諭 複式解消支援員2名 英語指導(大森小本務) 司書(松重小本務) 用 務員 市立見守り員
玉宮小	24	4	2	0	6	1	1	0	6	1	ケ	1	②	②	0	②	0	0	※外国語専科(大森小) 複式解消支援員② 用務員② ※司書(塩山北小) ※県立(塩山南 小)
松重小	103	6	2	0	8	1	1	0	9	1	ケ	1	②	②	0	②	1	0.5	市立教諭員...学習支援員2名、(1名は、新採用後援校を含む) 司書1名(神倉小本務)、栄養士1名(給食セ ンター勤務)、用務員2名(シルバー人材交代で勤務) 英語専科(松重小 塩山北小(本務校) 井尻小) ※担任指導員...育休代替1名
井尻小	82	6	3	0	9	1	1	0	10	1	ケ	1	0	①	0	②	0	0	○学習支援員① ※県立(給食センター) ※英語専科(塩山北小) ○司書① ◆用務員2(シルバー人材交 替) ◆スサ1
藤沼小	134	6	2	0	8	1	1	0	10	1	①	1	0	②	②	①	0	0	外国語専科教諭 栄養教諭(東谷小) ◆学指2 ◆スサ1 司書①
祝小	87	6	2	0	8	1	1	0	8	1	①	1	0	②	②	①	1	1	○学指① ○スサ① ○外国語専科教諭①(藤沼小) 専科指導非常勤講師1
東谷小	124	6	2	0	8	1	1	0	10	1	1	1	0	①	②	①	0	0	※県立、県立教諭である。教諭の10の中に、教員大学院生を含む。実質は9名。
菱山小	48	5	3	0	8	1	1	0	9	1	①	1	①	②	②	①	1	0	※英語専科(藤沼小・祝小・大森小) 英語専科(塩山南小・奥野田小) ※県立(祝小) ※司書(奥 野田小) ○複式解消学習支援員① ◆スサ1 (9/4より)
大和小	36	4	2	0	6	1	1	0	6	1	ケ	1	0	②	0	①	0	0	※英語専科(藤沼小) ※県立(給食センター) ※司書(東谷小) ○複式解消学習支援員②
塩山中	333	11	4	0	15	1	1	1	26	1	1	1	0	1	0	②	0	0	県立非常勤講師1 県立(奥野田小 塩山北中 松重小) 学習支援員②
塩山北中	34	3	2	0	5	1	1	0	8	1	ケ	1	0	②	0	②	0	0	県立(本校校塩山中)、支援員①、用務員2
松重中	69	3	3	0	6	1	1	0	9	1	ケ	1	0	①	0	①	0	0	①司書 ①用務 ◆学指1 ◆スサ1
藤沼中	231	8	2	0	10	1	1	0	18	1	ケ	1	0	①	0	①	0	0	県立非常勤講師1(はぐみ0.5) 県立①(市給食センター) ◆学指3(通常2+統合1) ◆スサ1
甲州市合計	1939	103	39	0	142	17	17	1	184	17	3	18	0	1	0	0	5	3	

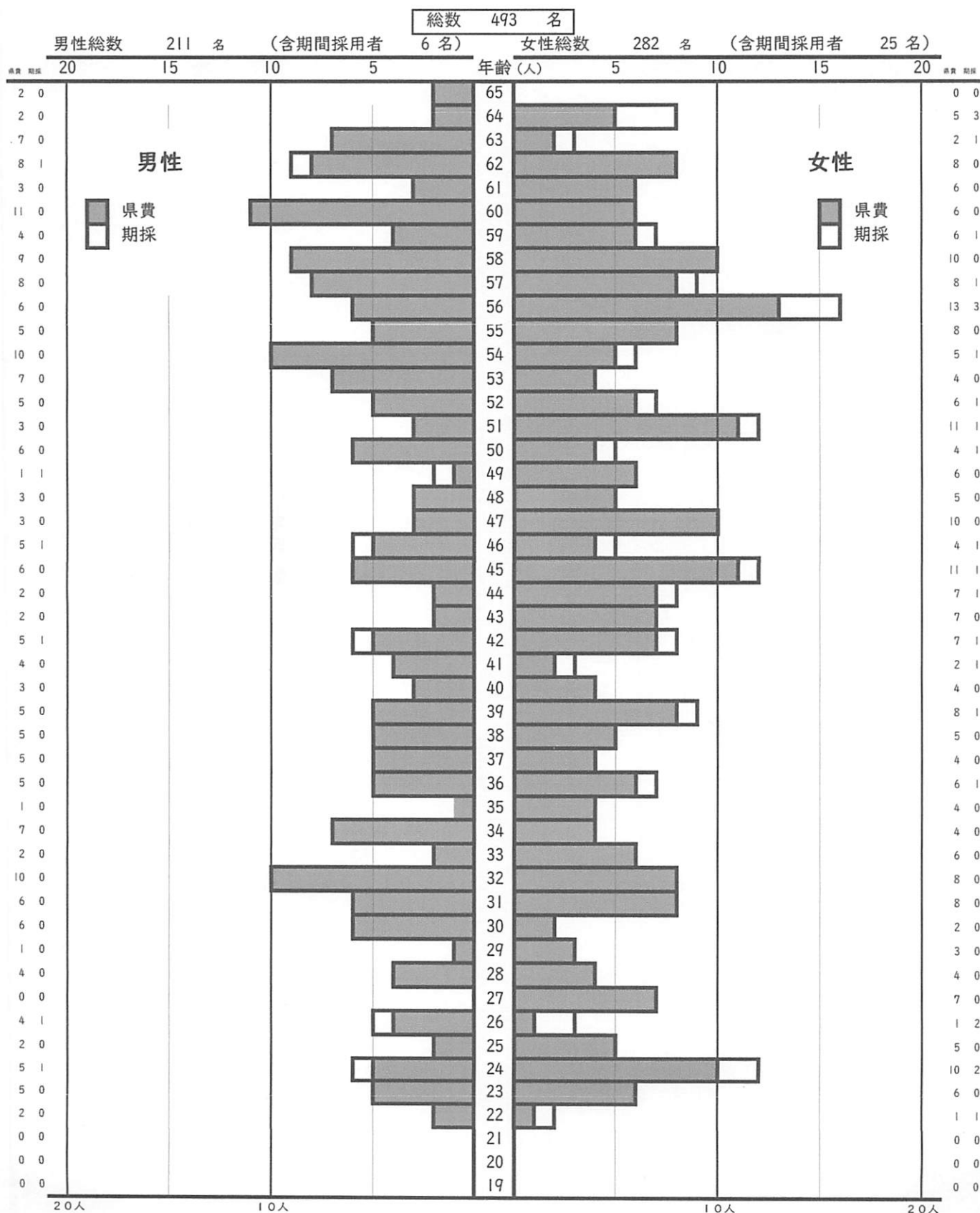
2 教職員年齢別・男女別分布状況 <2023年度>

(県費教職員：校長・教頭・主幹教諭・教諭・養護教諭・栄養教諭・学校栄養職員・事務職員)

・期間採用者数は外数，61歳以上は再任用者数

・充て，専従，傷病，在外等研修，育児休業者等を含む

・年齢は2024年3月31日時点【2023年12月調べ】



3 東山梨地区 市別・学校別在籍数及び学級予定数

※小学校は35人学級として、中学校は40人学級として算出、特別支援学級は除く

種別	年度	2024年度			2025年度			2026年度			2027年度		
	項目 校名	入学 予定者 数	在籍 予定者 数	学級 数	入学 予定者 数	在籍 予定者 数	学級 数	入学 予定者 数	在籍 予定者 数	学級 数	入学 予定者 数	在籍 予定者 数	学級 数
小学校	加納岩小	53	317	13	59	335	14	51	334	13	44	323	13
	日下部小	60	365	12	55	369	12	50	349	12	58	356	12
	後屋敷小	26	171	7	22	169	7	31	169	8	11	149	7
	日川小	24	141	8	28	142	8	19	139	8	23	140	8
	山梨小	26	196	9	24	186	6	29	176	6	21	161	9
	八幡小	18	114	6	19	108	6	20	111	6	22	107	6
	岩手小	0	27	3	7	29	3	2	25	4	1	21	3
	笛川小	17	136	6	19	132	6	15	113	6	11	105	6
	塩山南小	53	345	12	58	343	12	62	348	12	55	344	12
	塩山北小	22	103	6	17	103	6	12	97	6	12	95	6
	奥野田小	15	111	8	15	109	8	13	94	8	14	89	8
	大藤小	5	37	5	6	36	4	5	32	4	7	33	4
	神金小	1	26	5	3	25	5	5	23	5	6	24	5
	玉宮小	5	25	4	2	22	4	4	22	4	2	20	4
	松里小	25	108	6	12	106	6	12	96	6	9	92	8
	井尻小	8	73	6	7	68	6	7	62	6	9	50	6
	勝沼小	16	129	8	24	132	8	6	115	7	10	101	7
	祝小	10	78	8	8	66	8	8	65	8	7	52	7
	東雲小	18	109	8	6	96	8	8	88	8	2	67	7
	菱山小	5	44	5	7	46	6	2	42	5	6	39	5
	大和小	7	37	4	8	41	4	4	38	4	2	31	4
	小学校合計	414	2692	149	406	2663	147	365	2538	146	332	2399	147
中学校	山梨南中	108	333	12	104	326	11	111	323	11	108	323	11
	山梨北中	120	252	10	105	251	10	110	225	9	134	215	10
	笛川中	27	73	3	20	70	3	34	81	3	18	72	3
	塩山中	111	314	8	139	419	11	122	433	11	105	427	11
	塩山北中	17	36	6									
	松里中	13	50	3	26	44	3	30	69	3	34	90	3
	勝沼中	74	224	7	70	212	6	61	205	6	86	217	7
	中学校合計	470	1282	49	464	1322	44	468	1336	43	485	1344	45
市別	山梨市小学校	224	1467	64	233	1470	62	217	1416	63	191	1362	64
	甲州市小学校	190	1225	85	173	1193	85	148	1122	83	141	1037	83
	合計	414	2692	149	406	2663	147	365	2538	146	332	2399	147
	山梨市中学校	255	658	25	229	647	24	255	629	23	260	610	24
	甲州市中学校	215	624	24	235	675	20	213	707	20	225	734	21
	合計	470	1282	49	464	1322	44	468	1336	43	485	1344	45

Ⅱ 教育行財政及び教育環境の実態

教育環境実態調査の調査項目について（解説・留意事項等）

○ ICT 環境

文科省「令和５年度学校の ICT 化に向けた環境整備に係る地方財政措置」において、以下の通り ICT 環境整備目標値が示されている。（2023 年度～2024 年度）

- *指導者用コンピュータ 授業を担当する教師 1 人 1 台
- *学習者用コンピュータ 3 クラスに 1 クラス分程度整備
- *インターネット及び無線 LAN 100%整備
- *大型提示装置・実物投影機 100%整備（普通教室 1 台 特別支援教室用として 6 台）

☆ICT 支援員とは…

授業や研修、校務において、教員と相談したり依頼を受けたりしながら業務を行う専門職員。教育の ICT 化に向けた環境整備 5 か年計画(2018～2022 年度)から引き続き、4 校に 1 人配置が目標水準と示されている。

ICT 支援員の具体的な業務例

- ・機器・ソフトウェアの設定や操作，説明
- ・機器・ソフトウェアや教材等の紹介と活用の助言
- ・機器等の簡単なメンテナンス
- ・情報モラルに関する教材や事例等の紹介と活用の助言
- ・デジタル教材作成等の支援

- ・貸出用の Wi-Fi ルーターがある場合は「○」、ない場合は「×」。
- ・図書館システムが導入されている場合は「○」、導入されていない場合は「×」。
※学校独立型は学校単独で市内と連携していないもの。市内連携型は市内学校や図書館と連携しているもの。
- ・指導者用デジタル教科書は教科ごと全学年分あれば「○」、全学年はないが一部ある場合は「△」、どの学年分もない場合は「×」。その他の場合は他の欄に「有」。
※セット教材に含まれているものは対象外。
- ・電子機器の整備状況の前年比較欄について、前年度より増加は「○」、減少は「▼」、維持(増減なし)は「ー」。
- ・本調査において、大型テレビとは 50 インチ以上の大きさのものとする。

【施設設備面】

○ 防災対応 ガラスの状況

ガラスの事故は、重大事故につながる可能性が高い。学校施設は、児童生徒が学校生活を送る場であると同時に、非常災害時には住民の避難場所としても使用されるため、ガラス破損事故への対策が必要である。

ガラスの防災対策には、下表のような方法がある。

ガラス品種	安全性能
飛散防止フィルム	・破片が飛散しにくい
強化ガラス	・破損しにくい ・破片が鋭利でなく、しかも小粒である
網入り板ガラス	・火災や火の粉の侵入を防ぐ

○ 空調設備

児童生徒の良好な学習環境を維持し、適切な教育活動を実施するため、普通教室及び特別教室等に空調設備を整備し、健康管理に配慮する必要がある。

○ 屋外施設

プール授業の実施状況

プールの授業を、外部施設を利用し実施している学校や、他校の施設を利用している学校もある状況である。施設の維持・管理や薬品代の予算も高額であることから、他市や他校の状況を自校と比較することができる。

プールからの緊急連絡手段については、スマートフォンの普及等により、調査項目より除外する。

○ 新 JIS 規格児童生徒用机イス

教科書や教材の大型化（A 判化など）に対応できるよう、机面寸法を拡大し、多様な大きさを確保できるよう、新 JIS 規格の机イスを整備することが望ましい。

【危機管理対策】

○ 校内緊急通報システム

不審者の侵入防止だけではなく、万が一侵入された場合に校内各教室等への連絡を迅速に行うための通報システムを導入することが望ましい。

○ 電子メールによる情報通報システム

緊急事態等が発生した際は、保護者等に迅速に伝達することが求められる。そのためには、緊急時の連絡先リストや情報伝達網を日頃から整備しておくことが大切である。

○ 敷地周辺フェンス等設置・侵入者用監視カメラ

学校施設の防犯性を確保するため、門・囲障の設置や防犯監視システムの導入等により、物理的かつ視覚的にも守るべき範囲を明確化し、不審者の侵入を防ぐ必要がある。

○ 災害時備蓄食料

地震等大規模な災害が発生した場合、保護者の引き取りが困難な児童生徒が生じることが想定される。こうした事態に備えるために食料品の備蓄が必要である。

災害時の備蓄に望ましい飲料水・食料品等

	飲料水	食料品
発災～3日後	1日3リットル（ペットボトルは賞味期限が2年近くあるので保存しやすい）	包装を開けてすぐ食べられるもの（ビスケット・カンパン・チョコ・あめなど）
～約1週間後（電気が回復）	給水を受けるための容器（ポリタンクなど清潔でふたのできるもの）	レトルト食品、缶詰等（使い切りで、ゴミの出ないもの）

【図書】

○ 文部科学省基準蔵書数（学校蔵書数・充足率は、12月1日現在の数を記入）

小学校

学級数	蔵書冊数
1	2,400
2	3,000
3～6	$3,000 + 520 \times (\text{学級数} - 2)$
7～12	$5,080 + 480 \times (\text{学級数} - 6)$
13～18	$7,960 + 400 \times (\text{学級数} - 12)$
19～30	$10,360 + 200 \times (\text{学級数} - 18)$
31～	$12,760 + 120 \times (\text{学級数} - 30)$

中学校

学級数	蔵書冊数
1～2	4,800
3～6	$4,800 + 640 \times (\text{学級数} - 2)$
7～12	$7,360 + 560 \times (\text{学級数} - 6)$
13～18	$10,720 + 480 \times (\text{学級数} - 12)$
19～30	$13,600 + 320 \times (\text{学級数} - 18)$
31～	$17,440 + 160 \times (\text{学級数} - 30)$

※特別支援学級含む学級数

【理振】

○ 理振基準金額

小学校	11,630,000 円
-----	--------------

小学校：1組 10,000 円以上のものが対象

中学校	21,525,000 円
-----	--------------

中学校：1組 20,000 円以上のものが対象

教育環境の実態調査

調査項目 学校名		I C T 環 境												
		ICT 支援員	貸出用 Wi-Fi ルーター	図書館 システム	指導者用デジタル教科書									
					国語	算数 数学	理科	社会	英語	音楽	保健 体育	図工 美術	技術 家庭	他
山梨市	加納岩小	○（外部委託）	△（機器のみ貸出）	○（学校独立型）	○	○	○	△	○	×	×	×	○	
	日下部小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	後屋敷小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	日川小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	山梨小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	八幡小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	岩手小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	笛川小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	山梨南中				○	○	○	○	○	×	×	×	○	
	山梨北中				○	○	○	○	○	×	×	○	○	
	笛川中				○	○	○	○	○	×	○	×	○	
甲州市	塩山南小	○（市教委配置）	○（市教委貸出）	○（学校独立型）	○	○	○	○	○	×	○	×	×	有
	塩山北小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	奥野田小			×	○	○	○	○	○	×	○	×	×	有
	大藤小			×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	有
	神金小			×	○	○	○	○	○	×	○	×	×	有
	玉宮小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	松里小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	井尻小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	勝沼小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	祝小			×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	
	東雲小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	菱山小			×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	有
	大和小			×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	
	塩山中			○（学校独立型）	○	○	○	○	○	○	×	○	○	有
	塩山北中			×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	有
	松里中			×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	有
	勝沼中			○（学校独立型）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	有

※GIGAスクールにより一人一台端末及び無線LAN全校完備。

調査項目 学校名		I C T 環 境								
		電子機器の整備状況（台）								
		大型 テレビ	前 年 比 較	大型 モニター	前 年 比 較	実物 投影機	前 年 比 較	プロジェ クター	前 年 比 較	その他の機器（台）
山梨市	加納岩小	18	▼	19	－	7	－	3	－	
	日下部小	0	－	17	○	6	－	4	－	
	後屋敷小	0	－	9	○	3	－	2	－	
	日川小	0	－	10	－	6	－	2	－	
	山梨小	0	－	12	－	3	－	2	－	
	八幡小	0	－	8	－	3	－	3	－	
	岩手小	0	－	6	－	3	－	5	－	
	笛川小	0	－	4	－	2	－	3	－	
	山梨南中	0	－	12	－	4	－	6	－	
	山梨北中	0	－	14	▼	6	－	4	－	
	笛川中	0	－	3	－	1	○	3	－	
甲州市	塩山南小	16	▼	5	－	8	－	1	－	Apple TV(1)
	塩山北小	5	○	6	○	1	－	1	－	
	奥野田小	8	－	0	－	2	○	2	－	Chromecast(8)
	大藤小	8	－	0	－	9	－	2	－	Apple TV(6)
	神金小	7	－	0	－	3	－	1	－	Apple TV(5)Chromecast(8)
	玉宮小	9	－	0	－	2	－	2	－	Apple TV(6)
	松里小	7	－	0	－	1	－	2	▼	Apple TV(4)
	井尻小	6	○	2	－	6	－	2	－	Apple TV(6)
	勝沼小	6	－	7	－	10	○	2	－	
	祝小	4	－	5	○	5	○	1	▼	Chromecast(8)
	東雲小	7	－	0	－	1	－	2	－	
	菱山小	3	－	4	○	2	－	2	－	Chromecast(5)
	大和小	9	－	0	－	6	－	2	－	Chromecast(9)
	塩山中	9	－	7	○	2	－	8	－	iPad (1) Apple TV(1)
	塩山北中	5	－	3	○	1	－	2	－	Apple TV(1),Chromecast(5)
	松里中	9	－	0	－	1	－	3	－	Apple TV(2)
	勝沼中	11	○	5	○	1	－	3	－	Apple TV(10)

調査項目 学校名		施 設 設 備 面			
		防災対応 ガラスの状況			
		教 廊 室 下	体 育 館	プ ール	そ の 他
山梨市	加納岩小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム）	全校舎飛散防止対応済
	日下部小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム・網入）	
	後屋敷小	○（強化・フィルム）	○（フィルム）	○（フィルム）	
	日 川 小	○（強化・フィルム）	部分（強化・網入）	○（フィルム）	
	山 梨 小	○（強化・フィルム）	○（強化）	○（フィルム）	
	八 幡 小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム）	
	岩 手 小	○（強化・フィルム・網入）	○（強化・フィルム・網入）	部分（強化）	プレハブ倉庫以外飛散防止対応済
	笛 川 小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム・網入）	全校舎飛散防止対応済
	山梨南中	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	×	プール以外飛散防止対応済
	山梨北中	○（強化・フィルム・網入）	○（強化）	×	プール・プラットホーム以外 飛散防止対応済
甲州市	笛 川 中	○（フィルム）	○（強化・フィルム・網入）	施設なし	全校舎飛散防止対応済
	塩山南小	部分（強化・網入）	○（強化）	×	給食配膳室・トイレ（網入・一部） 渡廊下（網入）
	塩山北小	×	○（強化）	×	校舎玄関（網入）給食配膳室（強化）
	奥野田小	×	×	×	児童用玄関・エレベーター脇窓（強化）
	大 藤 小	×	部分（強化・網入）	×	保健室一部（強化）児童玄関横（網入）
	神 金 小	×	○（強化）	×	
	玉 宮 小	×	○（強化）	×	校舎内一部（網入）
	松 里 小	部分（網入）	○（強化）	×	本館玄関（網入）
	井 尻 小	×	○（強化）	×	校舎玄関（網入）
	勝 沼 小	○（強化）	×	×	玄関・トイレ（網入）
	祝 小	×	部分（フィルム）	×	職員室フィルム
	東 雲 小	○（強化）	×	×	
	菱 山 小	×	×	×	正面玄関網入・廊下一部網入・体育館一部網入
	大 和 小	部分（強化）	○（強化）	×	正面玄関網入・廊下一部網入・体育館一部網入
	塩 山 中	部分（強化・フィルム・網入）	○（強化）	部分（網入）	玄関・昇降口・東階段・教室ベランダ出入口・図書 室・南館出入口・パソコン室南側・保健室
	塩山北中	部分（強化・網入）	○（強化）	×	校舎玄関（網入）
	松 里 中	部分（強化・網入）	×	×	校舎玄関（網入）
	勝 沼 中	○（強化）	部分（強化）	施設なし	校舎玄関（強化）

調査項目 学校名		施設設備面											
		空調設備											
		職員室	校長室	保健室	図書室	会議室	音楽室	理科室	図工室	家庭科室	普通教室	学級特別支援教室	その他
山梨市	加納岩小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	日下部小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	後屋敷小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	日川小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	山梨小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	八幡小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	岩手小		○		○	○	○	×	×	×		○	
	笛川小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	山梨南中		○		○	○	○	○	○	○		○	体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
	山梨北中		○		○	○	○	○	○	○		○	体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
	笛川中		○		○	○	○	○	○	○		○	体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
甲州市	塩山南小		○		○	×	×	×	×	×		○	オープン教室
	塩山北小		×		×	○	×	×	×	×		○	多目的室
	奥野田小	○	×	○	○	／	×	×	×	×		○	
	大藤小		○	○	×	○	×	×	×	×		○	
	神金小		○		×	／	×	×	×	×		○	
	玉宮小		×		×	×	×	×	×	×		○	
	松里小		×		×	×	×	×	×	×		○	多目的室・小会議室
	井尻小		×		×	○	×	×	×	×		○	小会議室（保管庫）
	勝沼小		○		○	○	×	×	×	×		○	給食室・調理員控室
	祝小		×		×	○	×	×	×	×		○	
	東雲小		×		○	○	×	×	×	×		○	
	菱山小		×		×	／	×	×	／	×		○	給食室・調理員控室
	大和小		×		×	／	×	×	×	×		○	ランチルーム・相談室
	塩山中		○		×	○	○	○	○	×		○	多目的室・相談室（1・2）・給湯室
	塩山北中		○		×	×	×	×	×	×		○	相談室（A・B）・多目的室
	松里中		○		×	×	×	×	×	×		○	相談室
	勝沼中		○		○	×	○	○	○	×		○	多目的室

調査項目 学校名		施 設 設 備 面				危機管理対策				
		屋外設備		新JIS規格児童生徒用机 12（設置学年を記入）		校内 緊急 通報 システム	電子メールによる 情報通報システム		敷地 周囲 フェン ス 等設置	侵入者 用監視 カメラ
		校庭 散水 施設	プール授業の 実施状況				市教委 システム	その他システム （学校単位）		
新JIS 規格	天板のみ 交換・テンパネ			×	学校安心・安全メール					
山梨市	加納岩小	○	自校のプールを使用	○ 4・5・6 年		1～4年	○	×	○	×
	日下部小	○	自校のプールを使用			1・2年	○		○	×
	後屋敷小	○	自校のプールを使用			1・2年	×		○	×
	日川小	○	自校のプールを使用			1～3年	×		○	×
	山梨小	○	外部の施設を使用			1・2年	×		部分	○
	八幡小	○	外部の施設を使用			1・2年	×		○	×
	岩手小	○	外部の施設を使用			1～3年	×		○	×
	笛川小	○	自校のプールを使用	1～3年		○	○		×	
	山梨南中	○	外部の施設を使用	○ 2・3 年		全学年	×		○	×
	山梨北中	○	外部の施設を使用			1年	×		○	×
笛川中	○	外部の施設を使用	全学年			×	○		×	
甲州市	塩山南小	○	自校のプールを使用	全校新JIS規格設置	×	甲州市安心安全ネット	学校安心・安全メール		部分	○
	塩山北小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	奥野田小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	大藤小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	神金小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	玉宮小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	松里小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	井尻小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	勝沼小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	祝小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	東雲小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	菱山小	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	大和小	×	自校のプールを使用		×			部分	×	
	塩山中	○	他校のプールを使用		×			部分	×	
	塩山北中	○	自校のプールを使用		×			部分	×	
	松里中	○	自校のプールを使用		×			部分	○	
	勝沼中	○	外部の施設を使用		×			部分	×	

調査項目 学校名		危機管理対策			図書				理振			
		災害時備蓄食料			図書費当初 予算額 (公費のみ) (千円)	文部科学 省基準蔵 書数 (冊)	学校蔵書 数(12月1 日現在) (冊)	学校蔵 書充足 率(12 月1日現 在)	基準金額 (千円)	前年度末の 現有額 (千円)	前年度 末の現 有率 (%)	
		公費		保護 者負担								主な物品名
		学校 配当 予算	他									
山梨市	加納岩小	×	市教委より帰宅困難児用飲料水・カンパン(缶)配布 給食センターより災害用アルファ化米・飲料水配布	×		1,027	9,560	11,153	117%	11,630	4,091	35%
	日下部小	×		×		1,101	10,760	12,159	113%	11,630	5,059	43%
	後屋敷小	×		×		715	7,960	10,086	127%	11,630	4,704	40%
	日川小	×		×		581	6,520	8,576	132%	11,630	3,471	30%
	山梨小	○		×	ライスクッキー	639	6,520	8,917	137%	11,630	5,270	45%
	八幡小	×		×		561	6,520	8,659	133%	11,630	2,719	23%
	岩手小	×		×		391	5,080	6,996	138%	11,630	4,215	36%
	笛川小	×		×		585	7,480	8,839	118%	11,630	2,592	22%
	山梨南中	×		×		1,074	12,160	14,534	120%	21,525	5,303	25%
	山梨北中	×		×		1,140	12,160	15,137	124%	21,525	14,762	69%
	笛川中	×		×		485	6,720	10,364	154%	21,525	12,314	57%
甲州市	塩山南小	×	×	×		750	9,960	16,306	164%	11,630	3,383	29%
	塩山北小	×	×	×		403	6,040	8,381	139%	11,630	4,150	36%
	奥野田小	×	×	○	飲料水	360	6,040	10,230	169%	11,630	3,969	34%
	大藤小	×	×	○	飲料水・カンパン	270	5,080	6,904	136%	11,630	4,822	41%
	神金小	×	×	○	飲料水	215	5,080	6,664	131%	11,630	2,186	19%
	玉宮小	×	×	×		225	5,080	6,676	131%	11,630	2,328	20%
	松里小	×	×	×		300	6,040	8,833	146%	11,630	3,430	29%
	井尻小	×	×	○	飲料水・焼菓子	308	6,520	8,333	128%	11,630	2,946	25%
	勝沼小	×	×	×		420	6,040	9,183	152%	11,630	3,194	27%
	祝小	×	○	×	飲料水・焼菓子	320	6,040	7,314	121%	11,630	3,189	27%
	東雲小	×	×	×		554	6,040	8,764	145%	11,630	3,228	28%
	菱山小	×	×	×		225	5,560	7,024	126%	11,630	2,363	20%
	大和小	×	×	○	飲料水・カンパン	220	5,080	7,695	151%	11,630	3,504	30%
	塩山中	×	×	×		850	12,160	15,111	124%	21,525	14,852	69%
	塩山北中	×	×	×		325	6,720	6,964	104%	21,525	7,557	35%
	松里中	×	×	×		355	7,360	7,797	106%	21,525	12,114	56%
	勝沼中	×	×	×		600	9,600	10,729	112%	21,525	10,885	51%

Ⅲ 子どもの生活実態に関する調査

1 調査のねらい

社会の変化が激しい時代における様々な教育問題を背景として、ここ数年、教育の根幹をなす家庭教育のあり方に視点をおいて調査を行ってきた。今年度は、子どもを対象に、

- (1) 家庭での基本的な生活習慣の様子
- (2) 子どもの心配や相談等
- (3) パソコンの有無や活用の様子
- (4) 自分の携帯電話やスマートフォン所持の様子
- (5) 休日の過ごし方

などについて調査した。

昨年度とほぼ同様の調査を行うことで、子どもの意識や行動・生活環境の実態や変化を知り、それらを地域・家庭・学校の連携や子どもの成長に役立てることができればと思う。

2 調査期間

2023年12月8日（金） から 12月20日（水）まで

3 調査対象

東山梨地区内抽出校（小学校5校、中学校4校）

- ・児童（小学3年生・小学6年生）
- ・生徒（中学2年生）

4 調査方法

google forms（グーグル・フォーム）使用

5 回答数

小学校3年の児童 94名

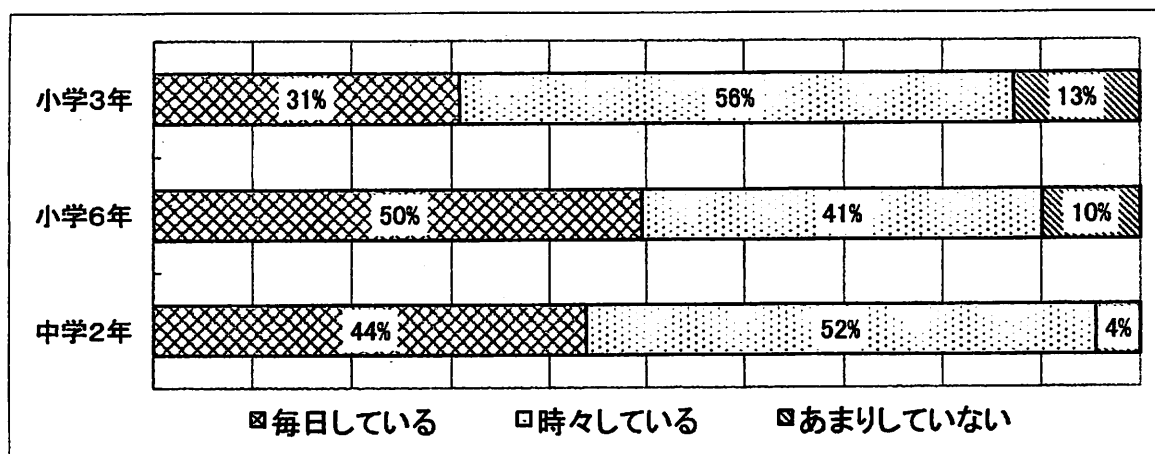
小学校6年の児童 111名

中学校2年の生徒 112名

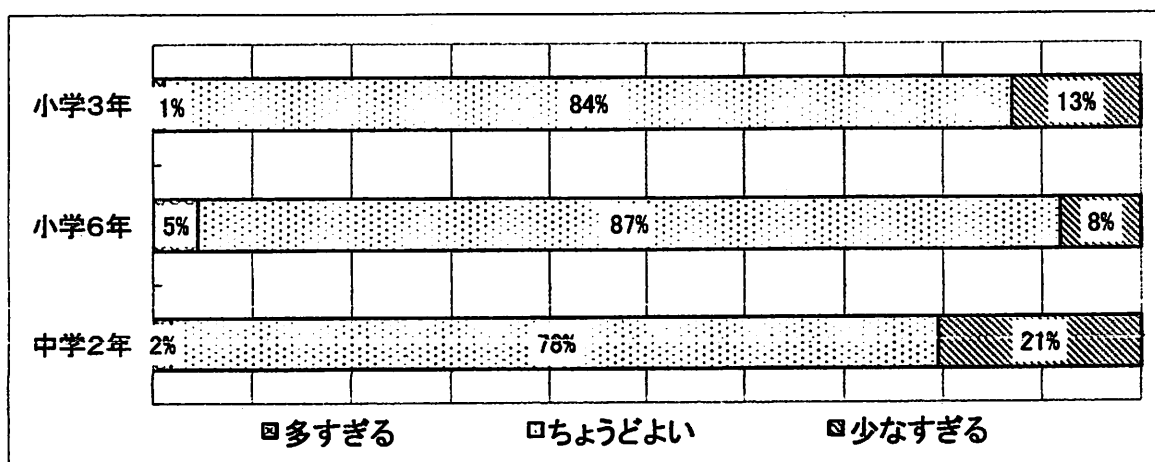
6 その他

- ・グラフ上の数値は割合を表す。
- ・理由等の記述内容をまとめて示す。

1 あなたは、家族の一員として、家のお手伝いをしていますか。



2 あなたは、今しているお手伝いについて、どう思いますか。



3 お手伝いについて、あなたの考えを書いてください。

小学3年

肯定的意見

・家族の一員として当たりまえだと思う・家族のみんなが自分がお手伝いをする事によって楽になればいいと思う・家族のため お母さんのため・家のために頑張って進んでやっている

中間的意見

・暇つぶしになっていいと思う・草取り掃除をやりたい

否定的意見

・面倒くさい・大変だと思う

小学6年

肯定的意見

・お手伝いをする事で、家の人の負担を減らすことができていると思う・これから、もっと家の人のお手伝いをしていきたいと思う・お手伝いをする事で、お母さんがとても喜んでいたので頑張りたいと思った・お手伝いは将来、自分で家事をしたりすることにつながるので良いことだと思う

中間的意見

・時間がかかるからあまり時間がかからないものにしてほしい・暇だからお手伝いをしている・少し面倒くさいところと楽しいところがある

否定的意見

・大変で疲れる・めんどくさいと思いながらやっている・お手伝いしてほしいならちゃんとやってほしい・自分のペースでやらせてほしい

中学2年

肯定的意見

・手伝いをする事で、家族の負担が減ると思うからいい・将来大人になった時のためになるし、負担がかからないちょうどよい量をすれば良いと思う・手伝いはとてもいいことで自身の積極性や自主性を高めることができる・今お手伝いをしてなければ将来自分が家事ができていないと思うのでお手伝いはとてもいいことだと思う

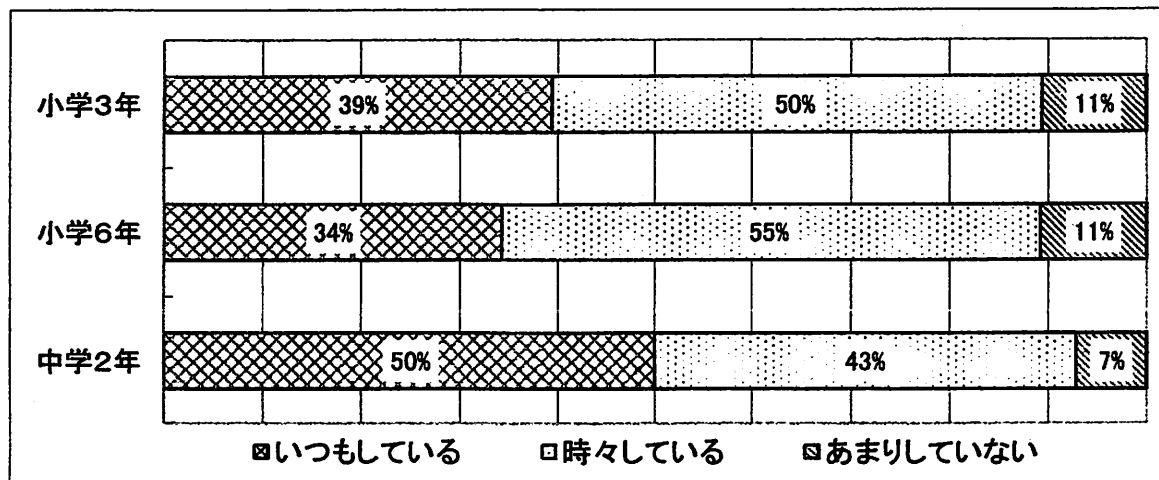
中間的意見

・家族の一員としてすべきこと・もう少し時間があったら自分ができる手伝いはしたい・あまり手伝いをしていないので手伝うようにしたい・手伝いは強制でやらせるものではないと思うのでやりたくない人はやらなくても良いと思う

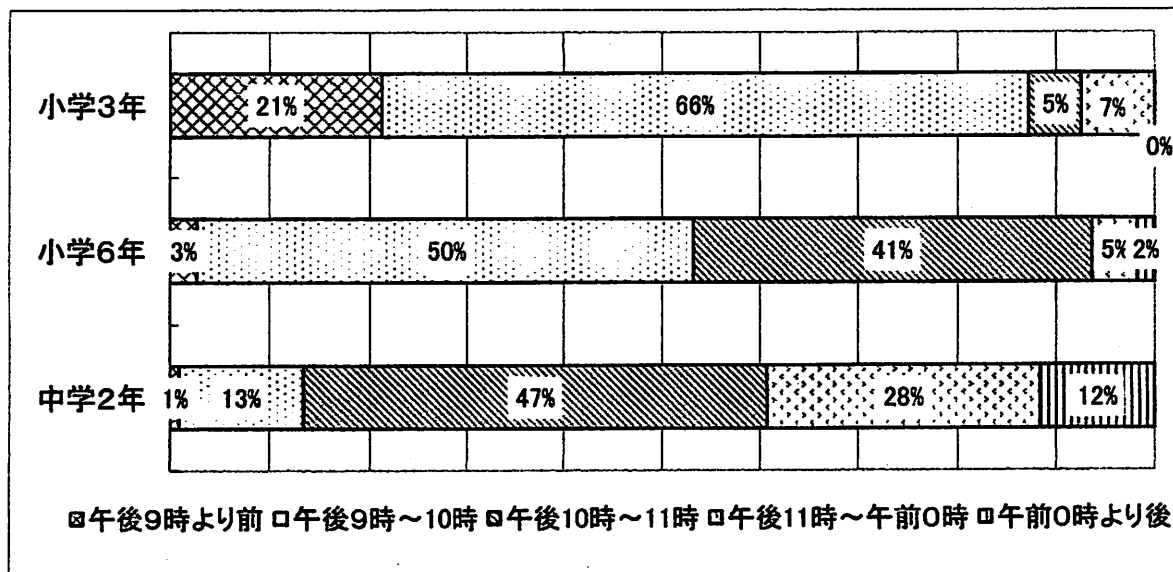
否定的意見

・誰もがやりたくないこと・疲れる

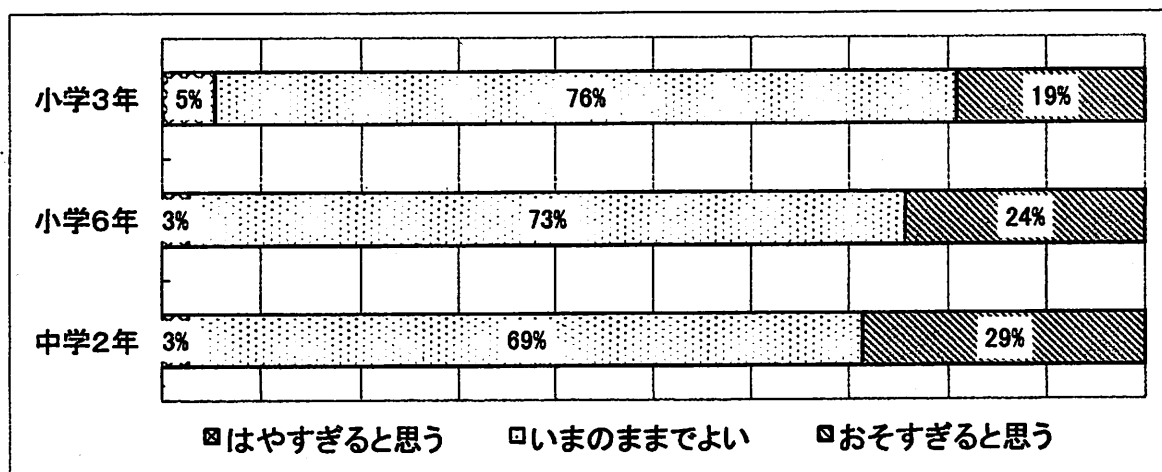
4 身の周りのこと(お手伝いではなく)で、自分でできそうなことは自分でしていますか。



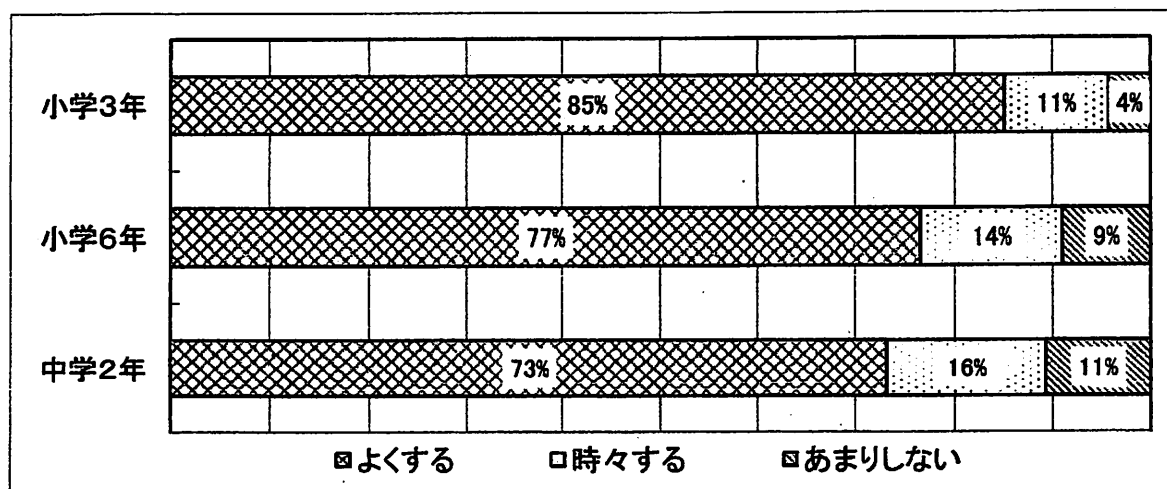
5 ふつうの日は、何時ごろ寝ますか。



6 あなたの寝る時刻について、どう思いますか。



7 あなたは、学校の様子や友だちのこと、家族のことなどについて、家の人とよく話をしますか。



小学3年

・話したいことを忘れてしまう・話す理由がない・めんどくさい

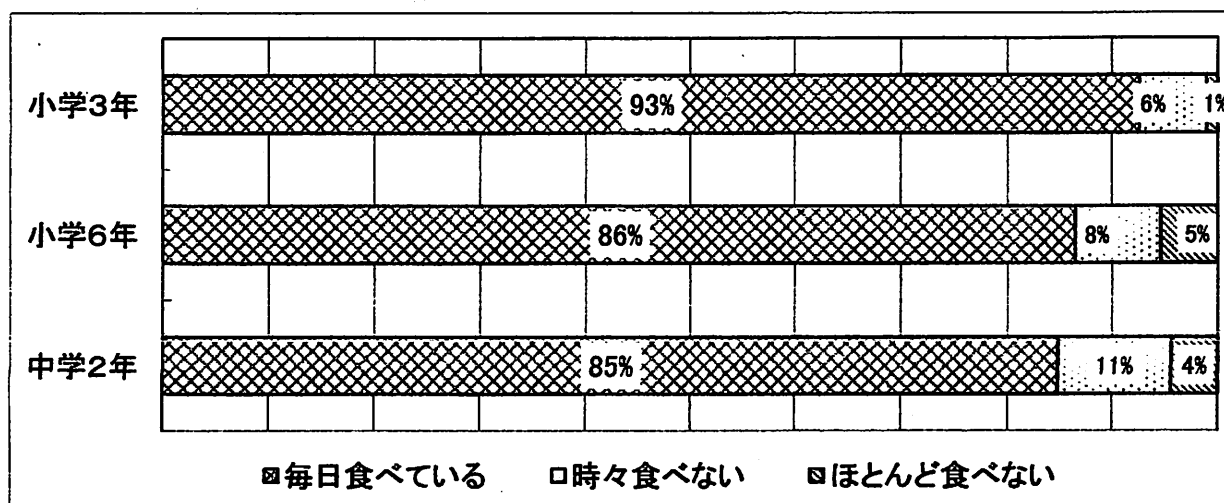
小学6年

・家族に話すと心配になって色々してくれるし自分も苦しくなってくるからあまり話さない・あまり話す時間がないし、別に話そうともしていない・特に話すことがない・話している時間があまりない

中学2年

・変わったことがない・話す必要がない・別に話す必要はないと思うし家族に学校のことを知ってほしくない・習い事や部活などで家にゆっくりいることが少なく話す時間があまりない・そのことでとやかく言われたくない・普段の生活でもあまり話さない

8 あなたは、ふだん朝食を食べますか。



小学3年

・起きるのが遅い・眠くて食べられない・おきられなかった・サッカーの試合がある時忙しい

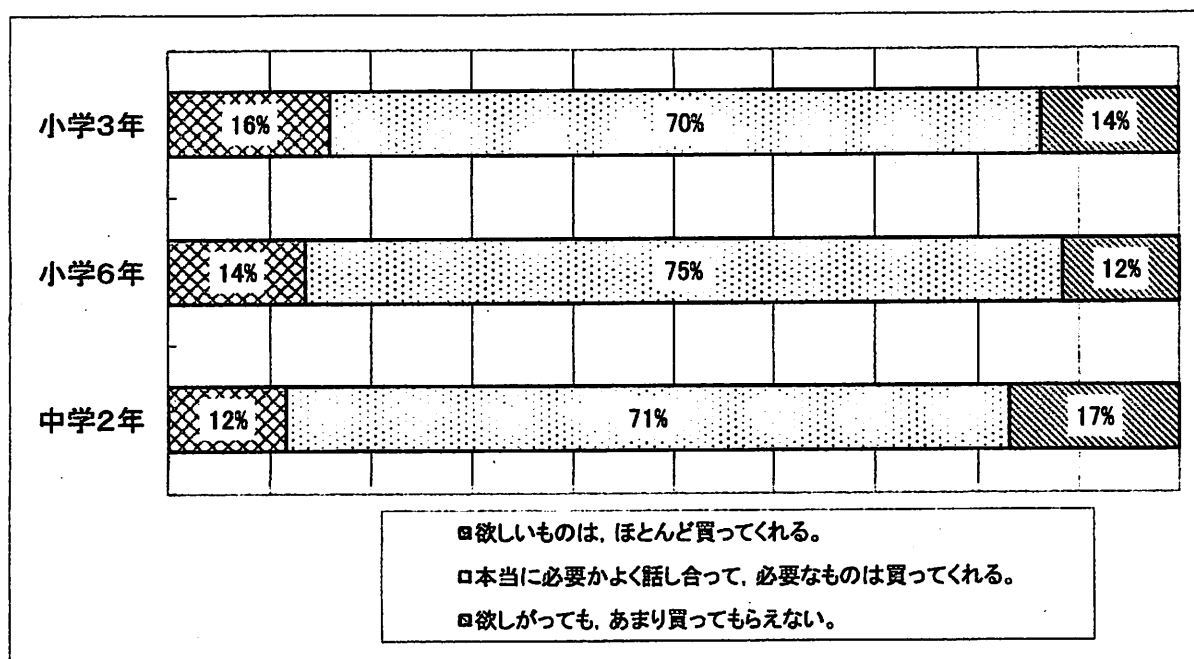
小学6年

・あまり朝は食欲がない・時間がない・寝坊してしまう・朝ごはんを食べると気持ち悪くなる

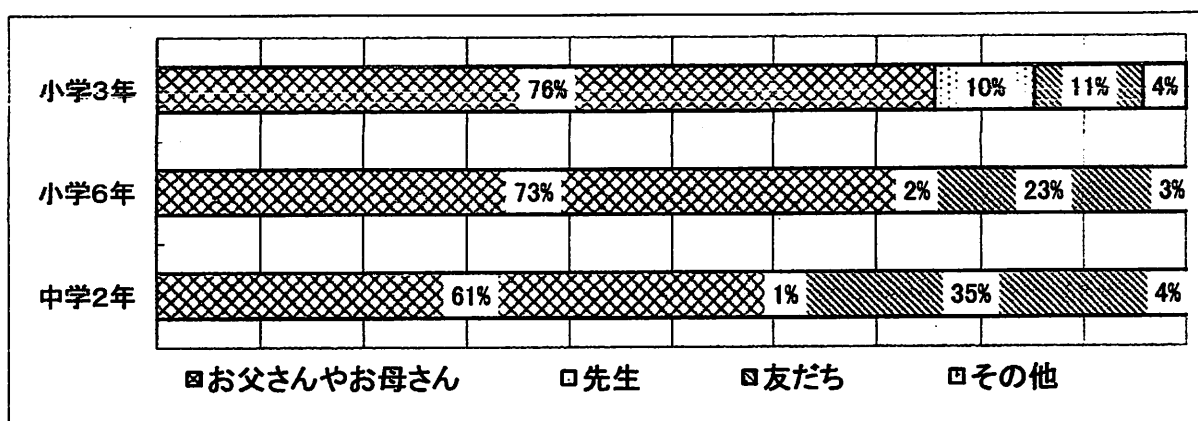
中学2年

・食欲がない・時間がない・起きる時間が遅くて、身支度や朝食などの時間がない・休日の朝、起きるのが遅くなってしまったときなどは朝と昼を一緒にしてしまう

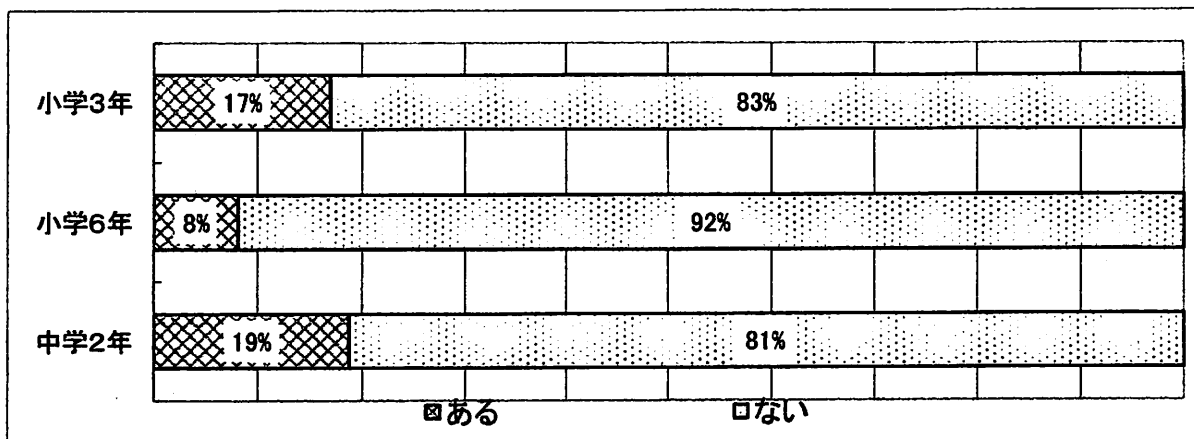
9 あなたは欲しいものがあるとき、家の人はどうしてくれますか。



10 あなたは、何かこまったことがあったとき、主にだれに相談しますか。



11 あなたは、今心配なことや悩みごとがありますか。



◎「ある」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

・走ってないのに「あつ、走った。」と言われた・ケンカした友だちとこれからなかよくやっていけるか・家族にめいわくをかけていないか・学校の友達との関係・クラスで悪い言葉を使う人がたくさんいるのできずつきやすい

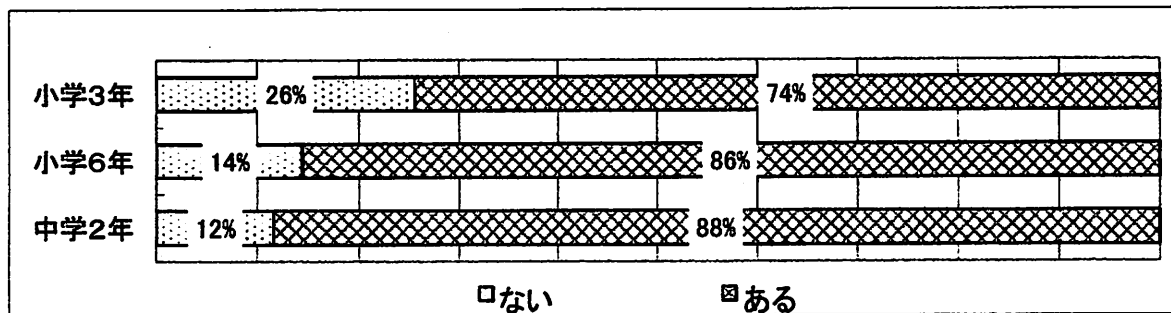
小学6年

・学力が心配・家族のこと人間関係・進学したときの勉強についていけるか心配

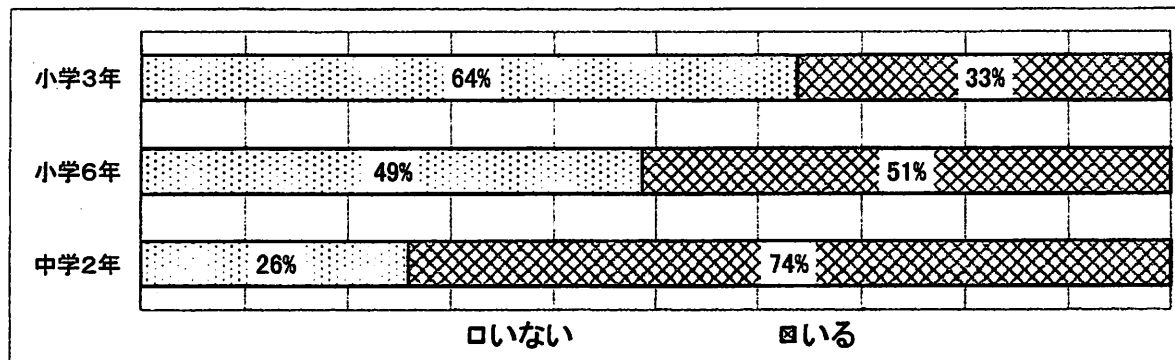
中学2年

・勉強、進路、将来のこと・人間関係・人間関係や自分の考えすぎやネガティブ等の性格・いつ死ぬだろうと心配になる・父親が妹に手をあげないか・髪型のこと・お母さんと仲直りができるか

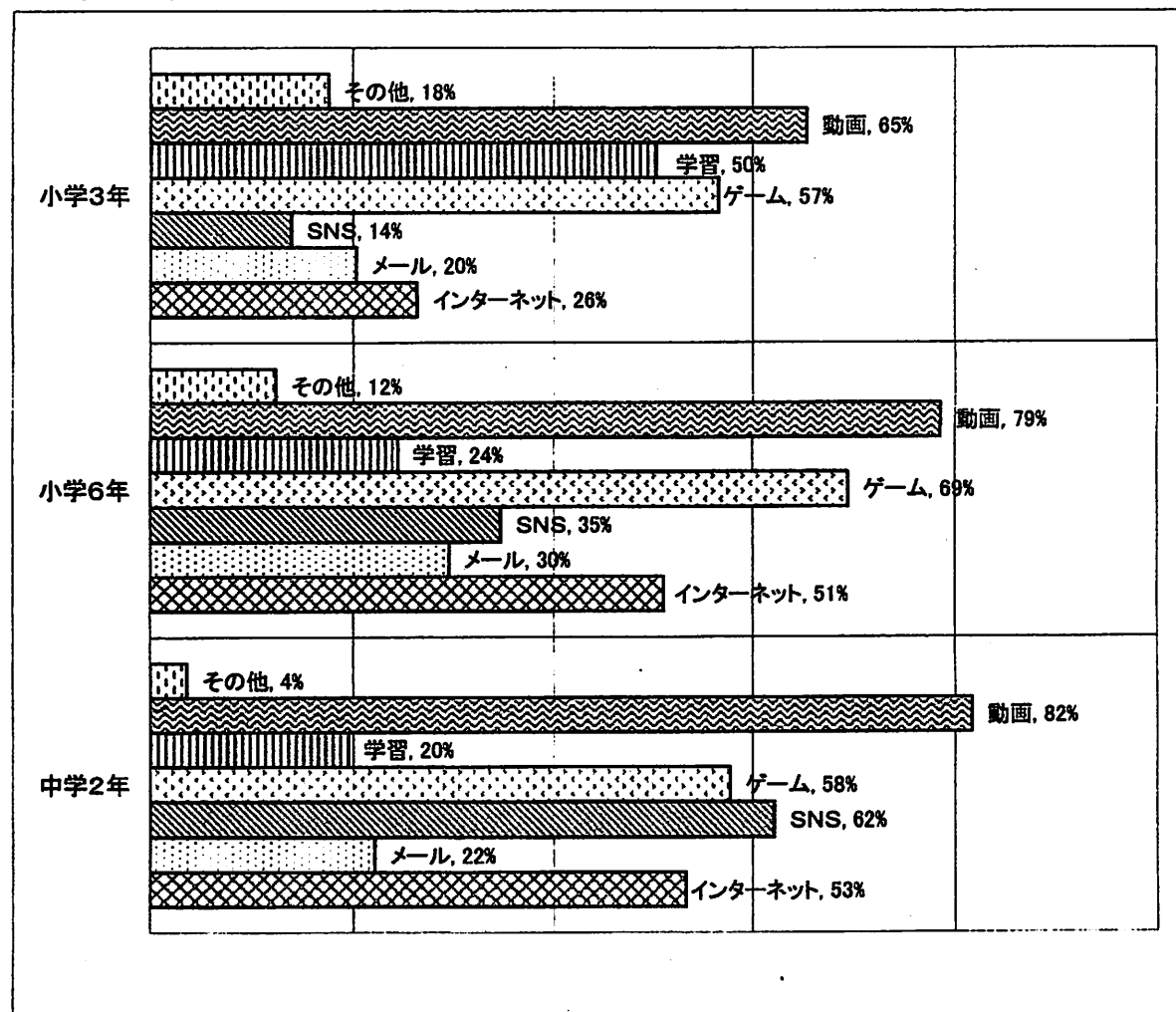
12 あなたの家には、パソコンやタブレットがありますか。



13 あなたは、自分の携帯電話またはスマートフォンを持っていますか。



14 あなたは、家のパソコン・タブレットやスマートフォン・携帯電話をどんなことに使っていますか。(3つまで)



◎「その他」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

・防犯携帯・調べ事・目覚ましで使っている・写真を撮る・曲を聴く・電話・お絵描き・予定表

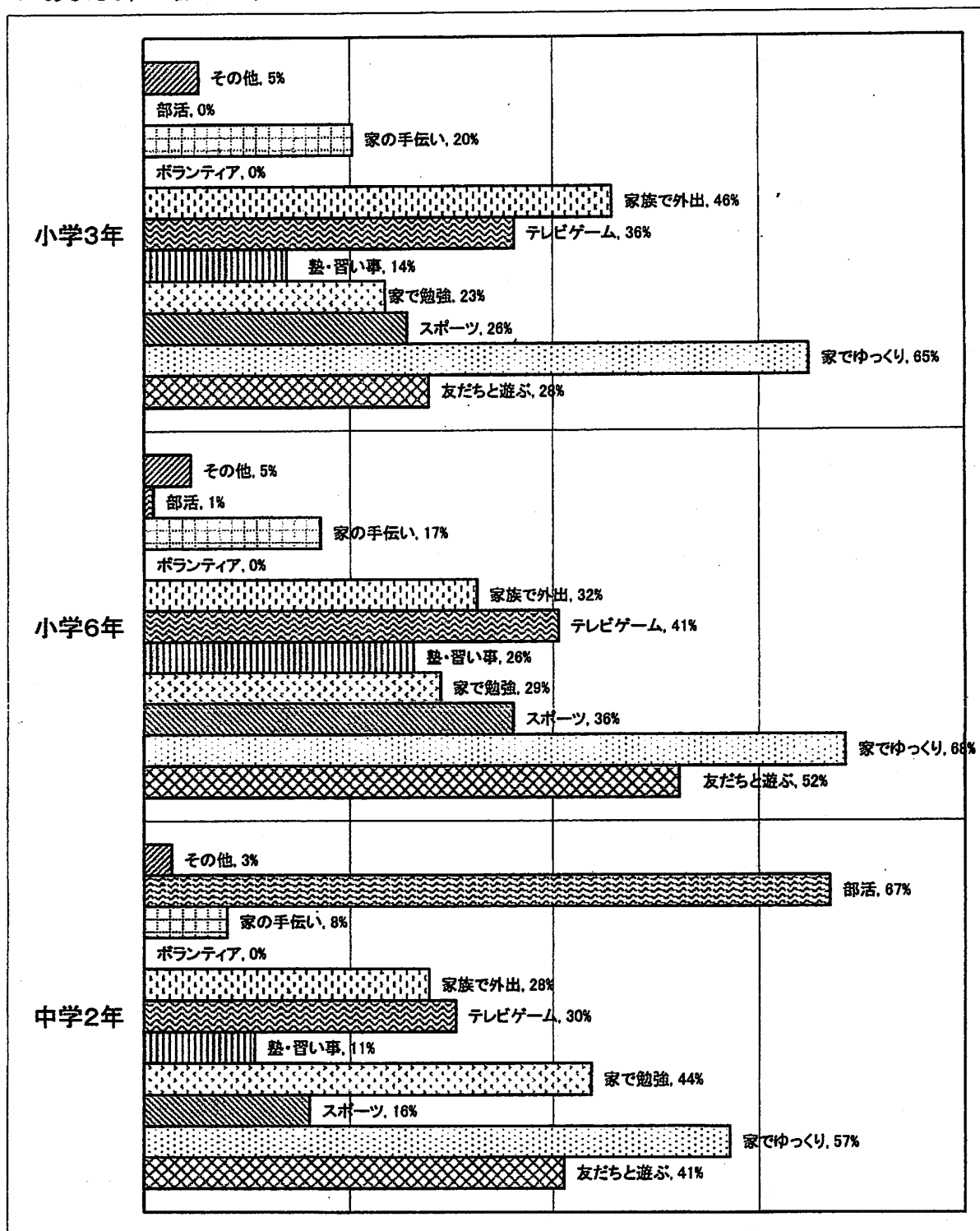
小学6年

・検索・電話・本を読む・連絡・絵を描く

中学2年

・音楽を聴く・撮影

15 あなたは、土曜日・日曜日・祝日には、何をしていますか。



◎「その他」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

・公園に遊びに行く・読書・おばあちゃんの家に行く

小学6年

・おばあちゃんの家泊まったり行ったりする・犬と遊ぶ・動画視聴・家で家族と同じゲーム

中学2年

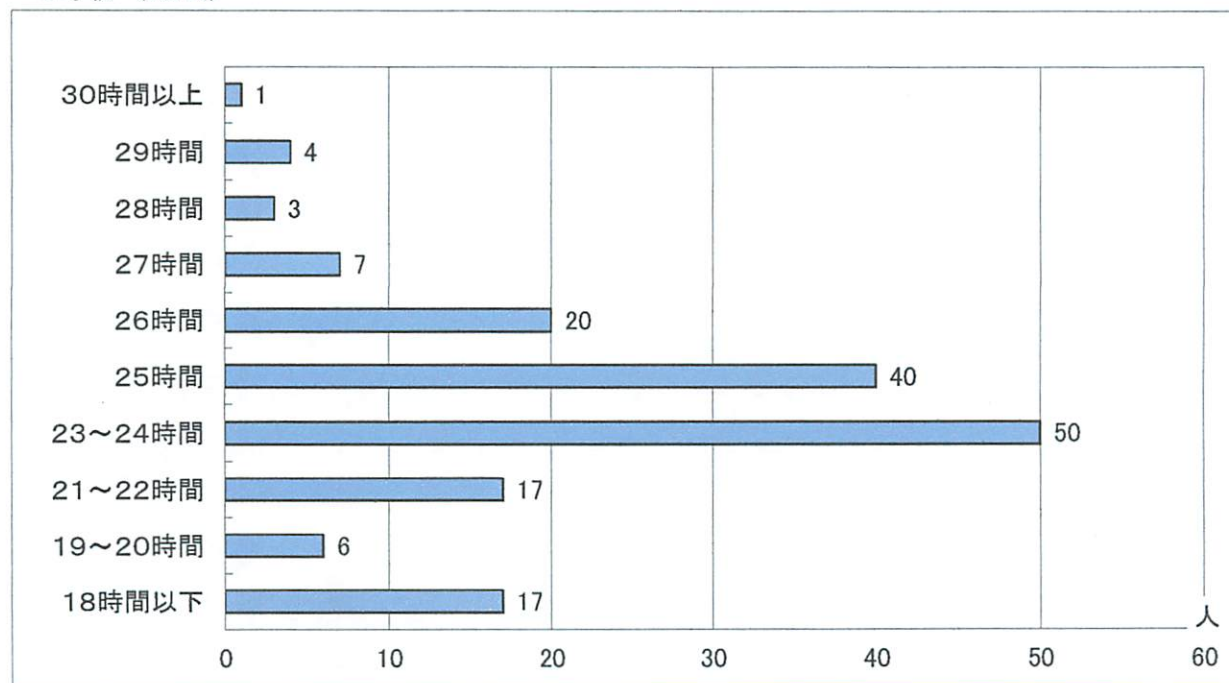
・なにもしない・ボーイスカウト・スマホを見る

IV 教職員の健康と労働

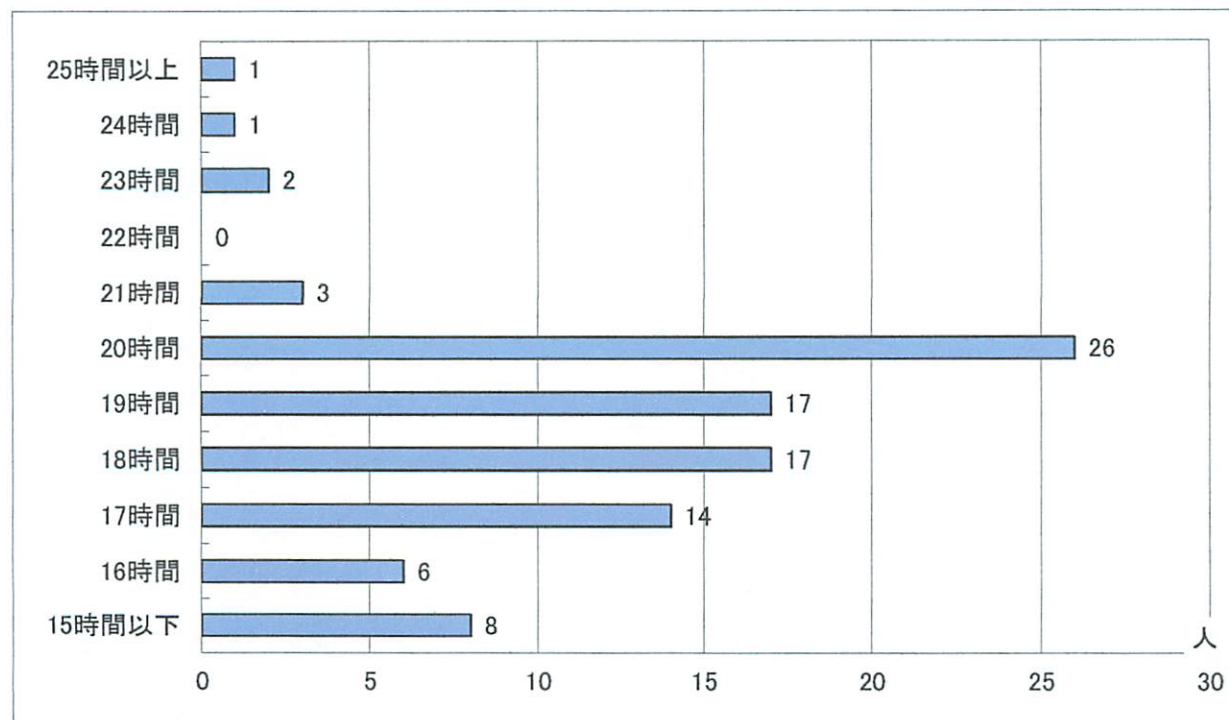
調査年月 2023年11月
調査対象 東山梨全組合員
回答数 260人

1 週担当授業時数 (1週間あたりの担当授業時数)

小学校 (165人)



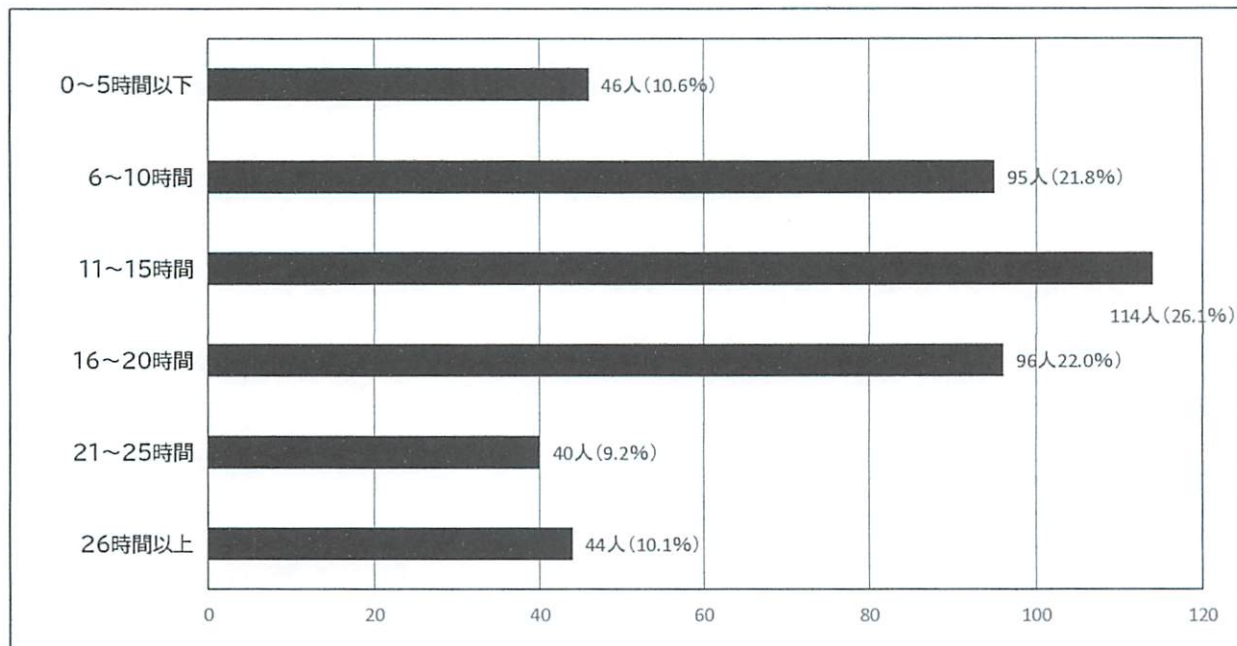
中学校 (95人)



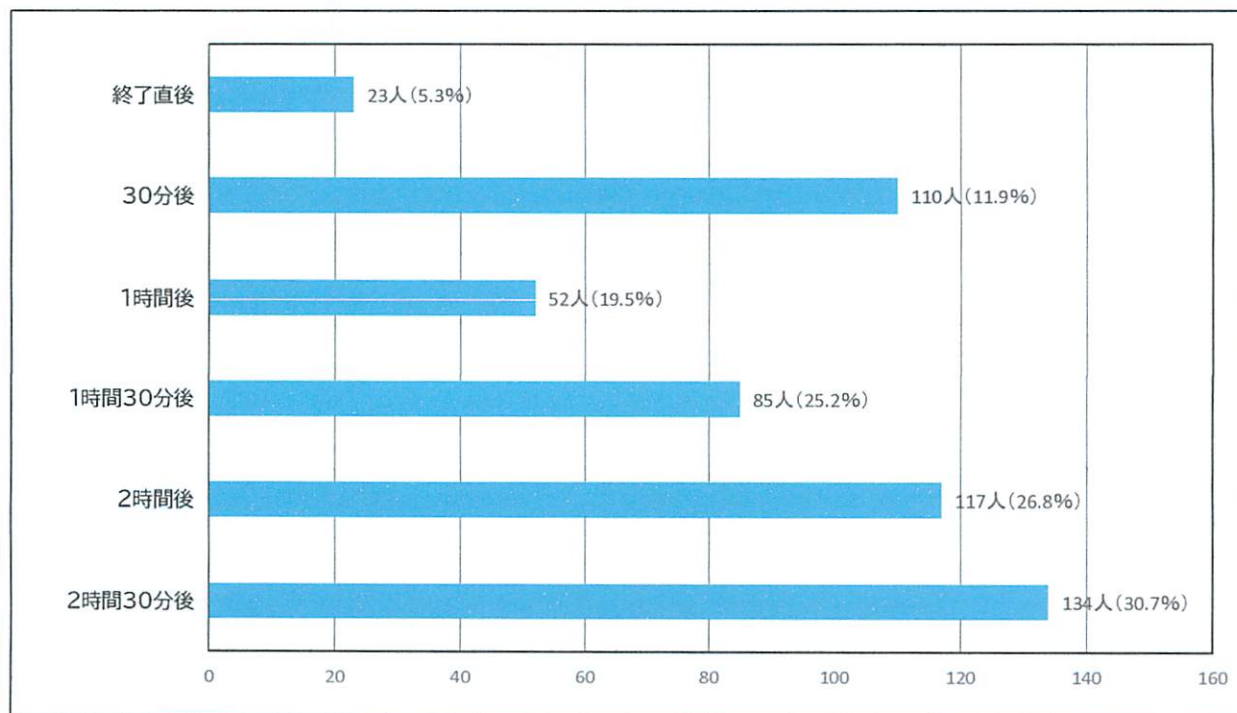
2 勤務時間外の仕事について

調査年月 2023年12月
調査対象 東山梨全教職員
回答数 436人

(1) 勤務時間外の仕事時間（1週間あたり）（1つのみで回答）

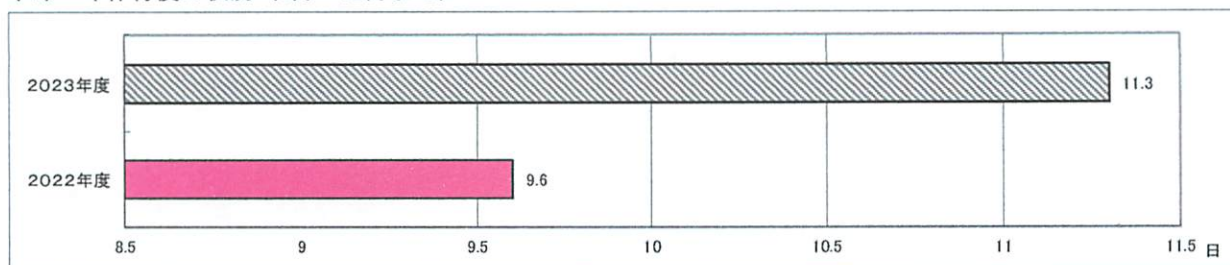


(2) 勤務時間終了後の退校時間（1つのみで回答）

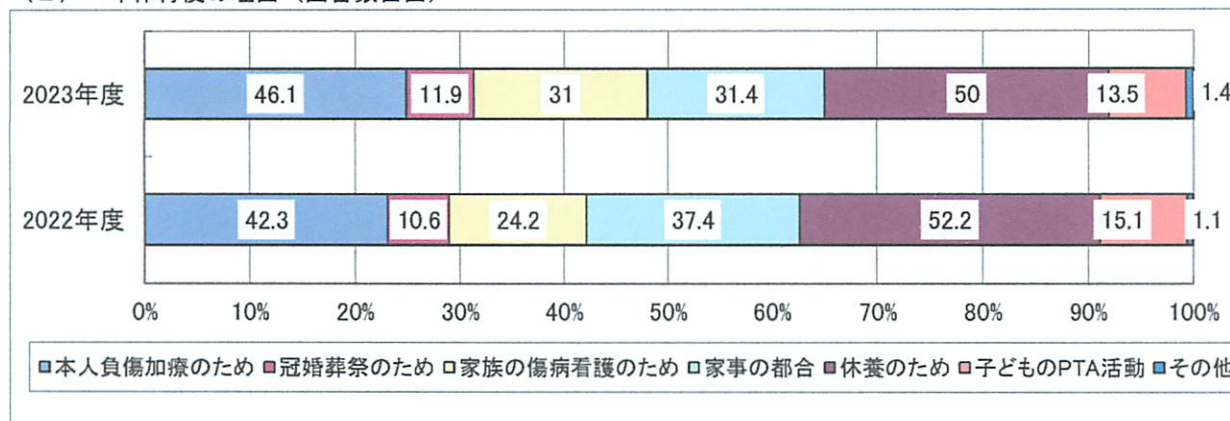


3 年休行使について

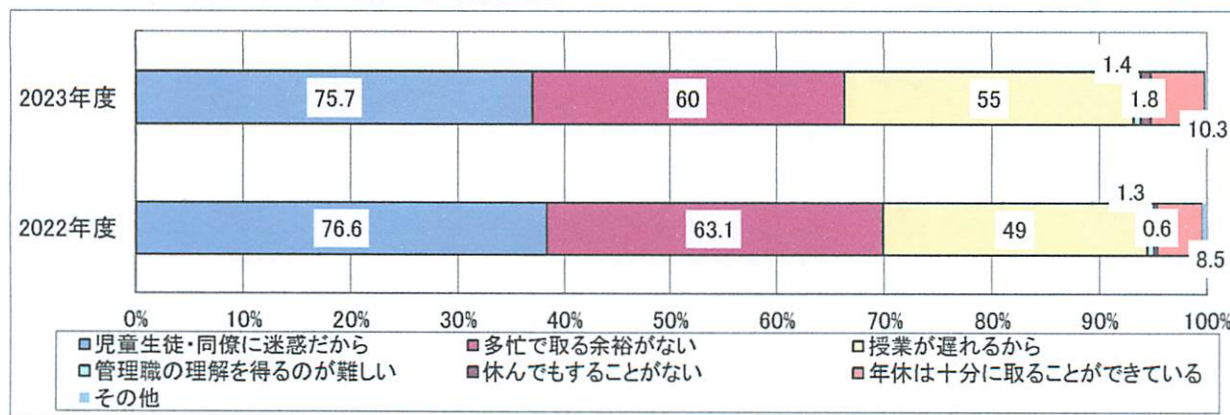
(1) 年休行使の状況（1月～12月まで）



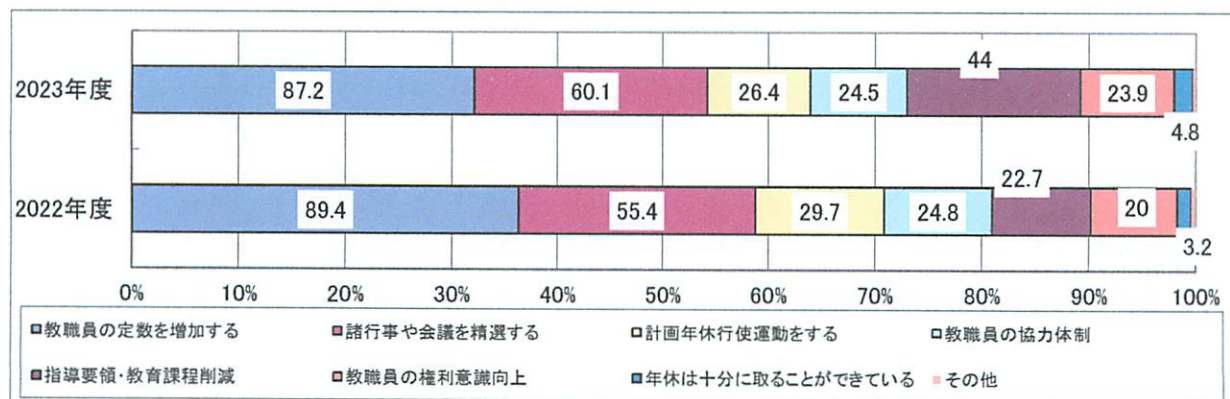
(2) 年休行使の理由（回答数自由）



(3) 年休が十分に取れない理由（回答数自由）

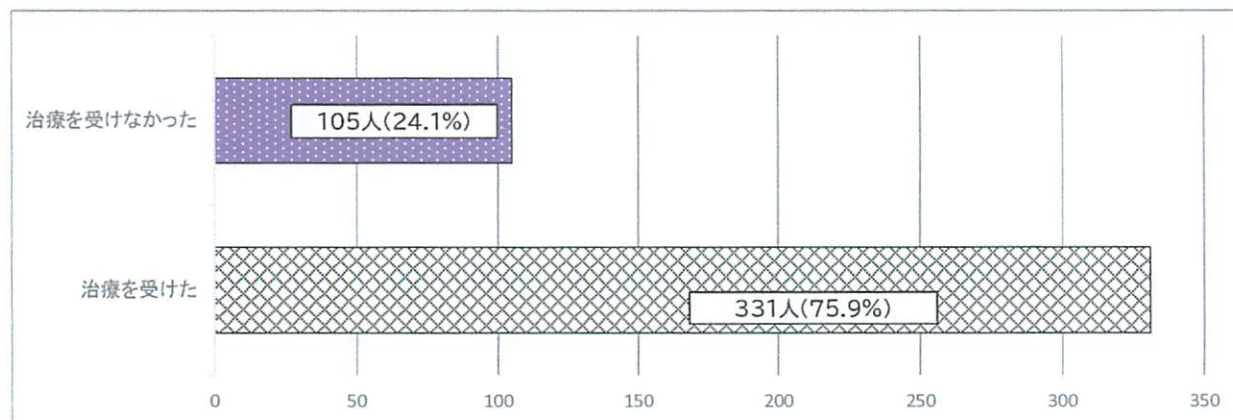


(4) 年休をもっと行使する方法（回答数自由）

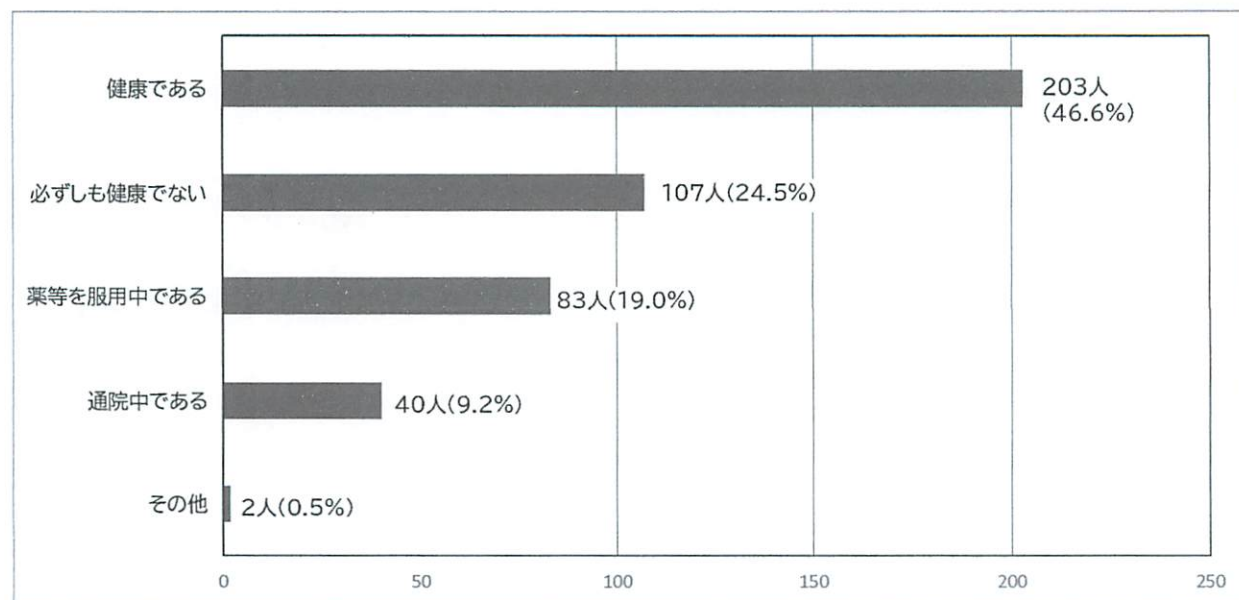


4 教職員の健康状態について

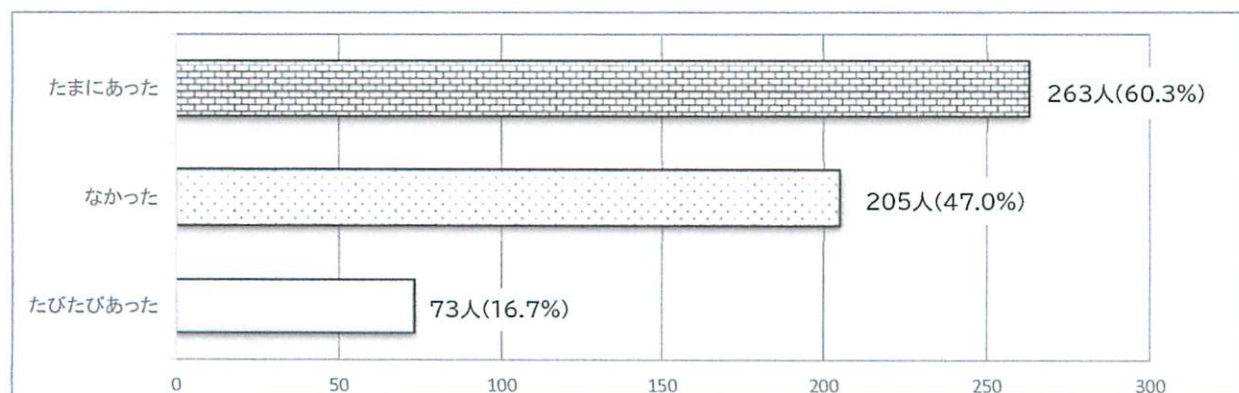
(1) 今年度1年間の治療状況（1つのみで回答）



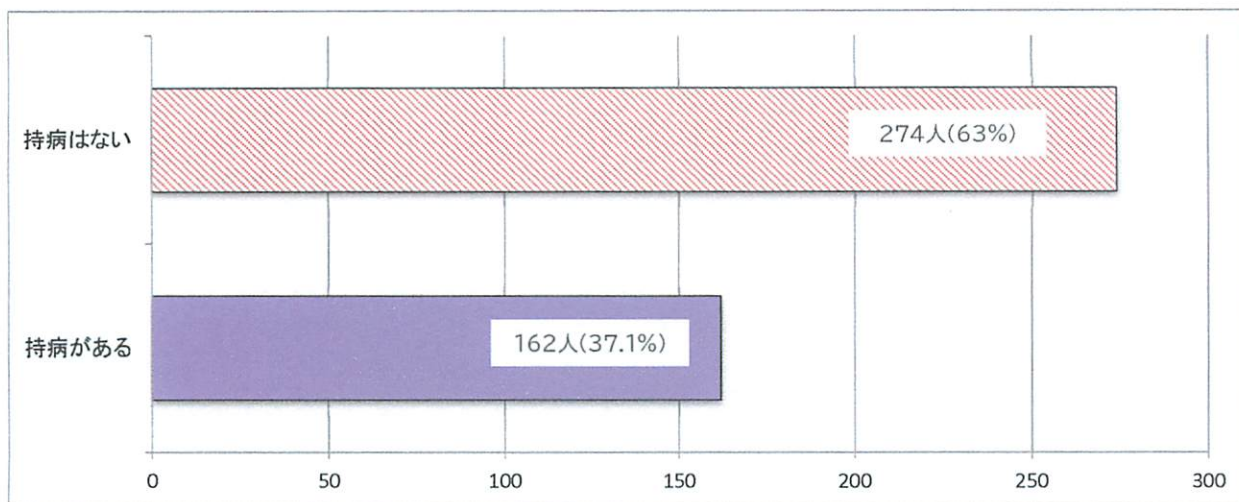
(2) 現在の健康状態（1つのみで回答）



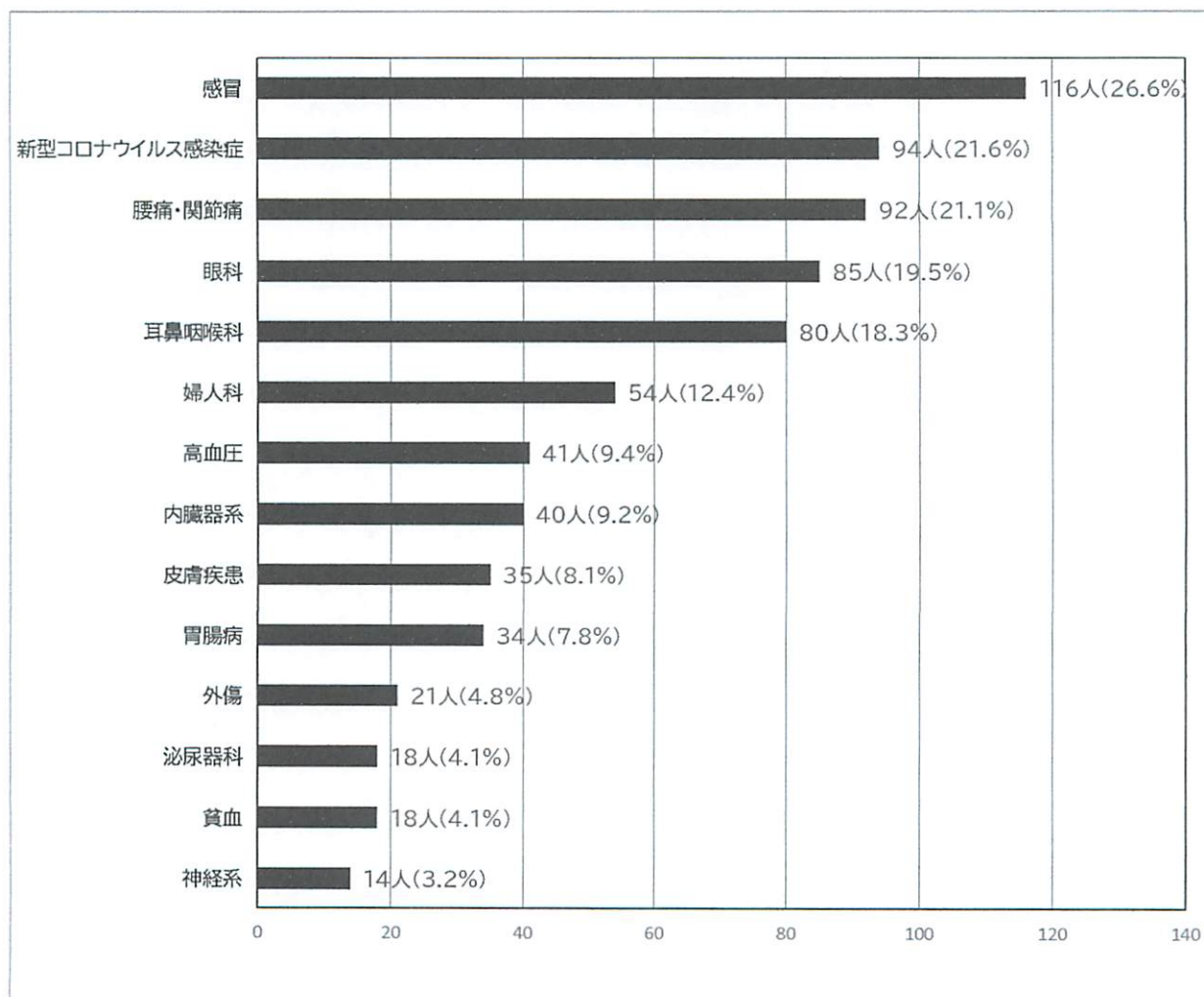
(3) 不健康での勤務状況（1つのみで回答）



(4) 現在持病の有無 (1つのみで回答)



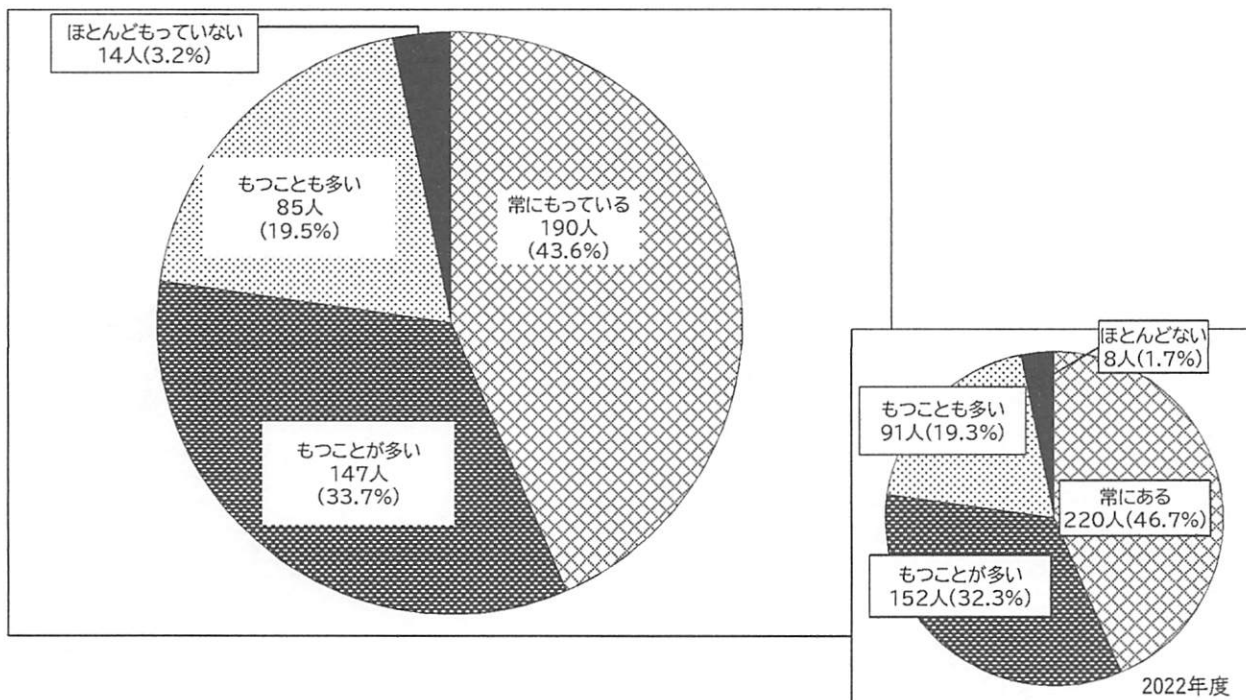
(5) 治療を受けた主な疾病 (回答数自由)



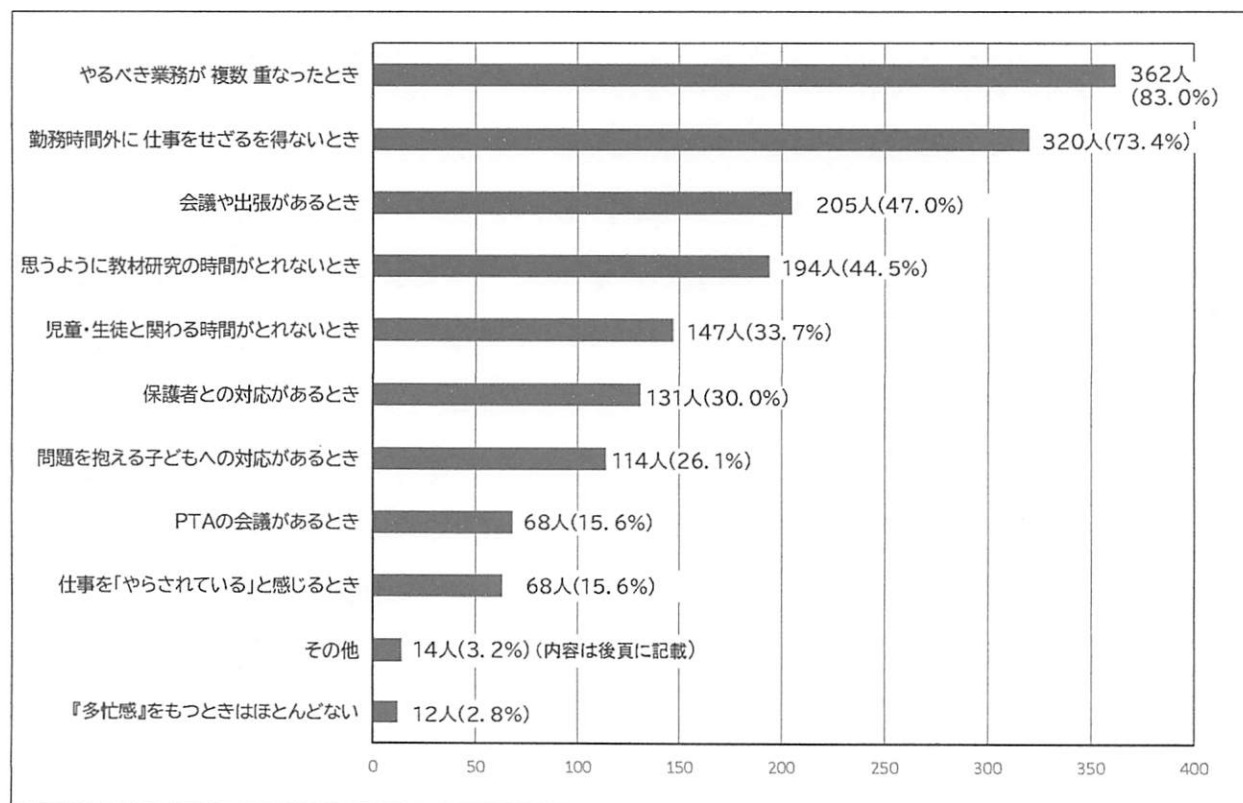
5 多忙感に関する調査結果

調査年月 2023年12月
調査対象 東山梨全教職員
回答数 436人

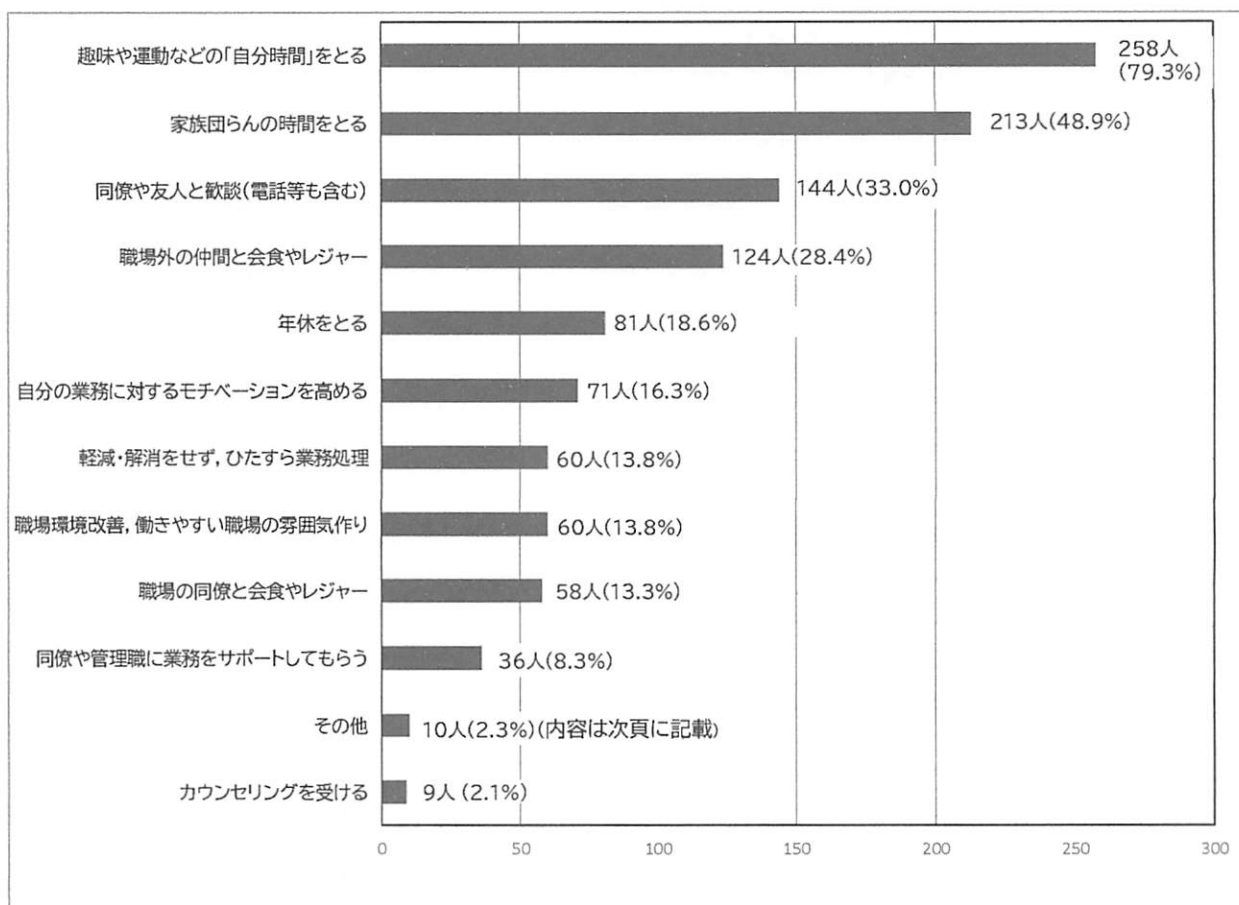
(1) 勤務の中に「多忙感」を持つことがありますか。(1つのみで回答)



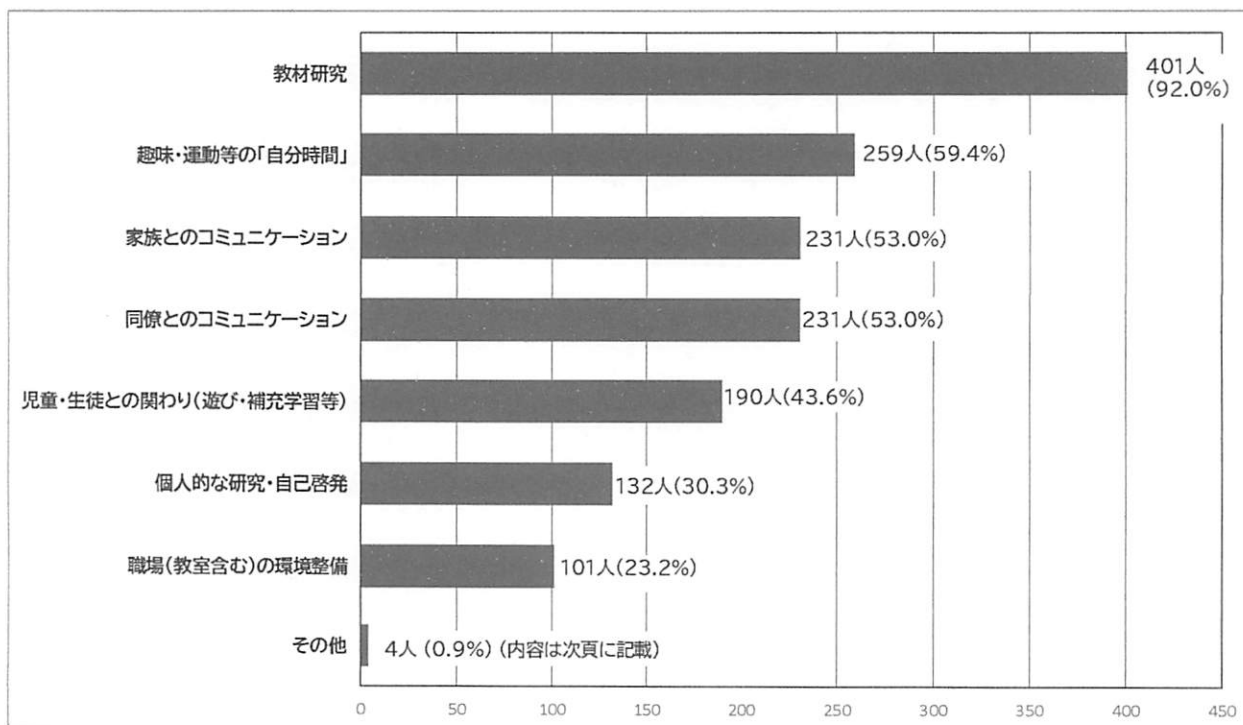
(2) 多忙感を持つときは主にどんな時ですか (回答数自由)



(3) あなたの多忙感を軽減・解消する方法は何ですか (回答数自由)



(4) 多忙感が解消されたら、その充実させたいことは何ですか (回答数自由)



※その他の項目

5-(2) 多忙感を持つときは主にどんな時ですか (回答数自由)

- ・ 休日に参集しなければならない会があるとき
- ・ リモート開催できた会議なのに、参集になった会議
- ・ さまざまなアンケート
- ・ 勤務時間外の電話
- ・ 研究集録のための提出資料
- ・ 地域行事との関わり
- ・ 教職員が定数に満たされていないのに、仕事量が多いとき
- ・ 自分の担当の仕事を他の人の考えや効率のよい方法でやらなければならないとき
- ・ 多忙でも管理職や同僚に職種への理解を得られていないと感じるとき
- ・ 長時間な会議や出張
- ・ コロナ後、復活しなくてもよい会議や出張が増えてきたこと
- ・ 部活動指導
- ・ 役員を担うときは、通常業務プラスαの仕事量になる

5-(3) あなたの多忙感を軽減・解消する方法は何ですか (回答数自由)

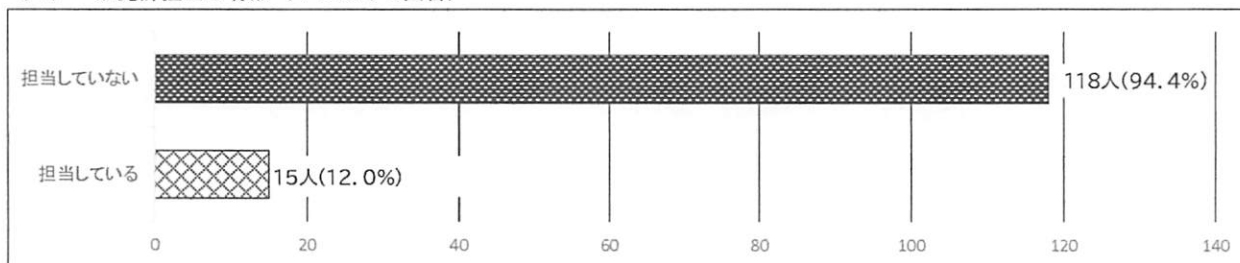
- ・ ゆっくり考える時間があるとき、先のことを見通して少しずつ仕事を進めておく
- ・ 業務の時間設定をし、カレンダーに入れている
- ・ 決められた時間の中で、仕事を終えるようにする
- ・ 指導サポートの立場にあるため、業務の振り分けや調整をする
- ・ 質の良い睡眠を心掛けている

5-(4) 多忙感が解消されたら、その分充実させたいことは何ですか (回答数自由)

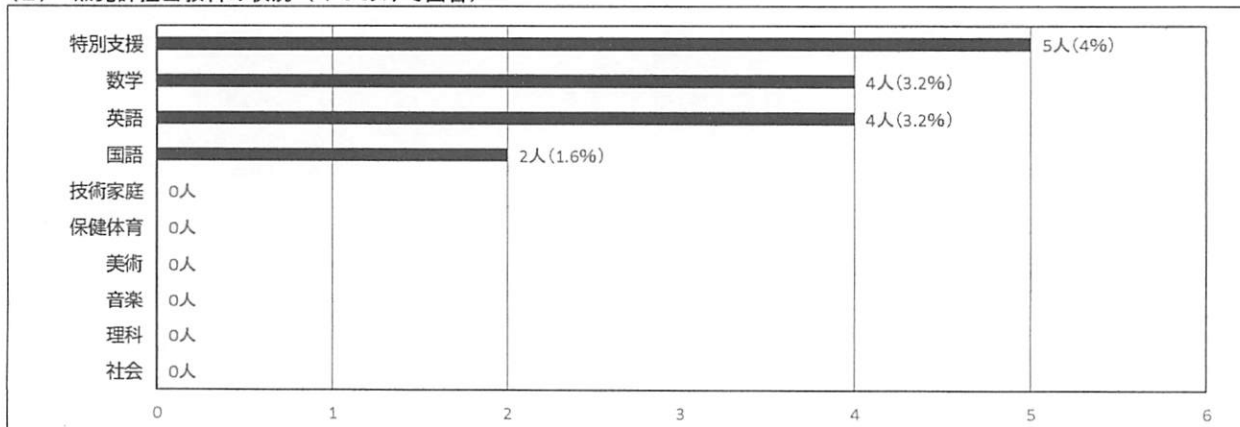
- ・ 家事，自分の体のケア，家でゆっくり休む

6 中学校の無免許担当について

(1) 無免許担当の有無 (1つのみで回答)



(2) 無免許担当教科の状況 (1つのみで回答)



教育環境研究特別委員会

研 究 を 終 え て

5類に移行となった新型コロナウイルス感染症は、未だに収束せず密かに陽性者数の増減の波を繰り返す中、インフルエンザが猛威をふるっています。また、地球沸騰化による猛暑日の増加や甚大な被害をもたらした能登半島地震では、人間の些細な力では、抗うことのできない自然災害の脅威を改めて感じました。

このような1年間を東山梨の各小中学校では、従前のものに様々な工夫をしながら児童生徒の教育活動の充実を図ってまいりました。今年度も東山梨の小中学校における教育環境の研究に当たり、各市教育委員会事務局の皆様をはじめ、多くの教職員の皆様にご協力をいただき、資料収集のための調査を実施することができました。

調査内容につきましては、これまでの調査研究を継続するとともに、今日の教育活動の状況をより明確に読み取ることができるよう、特に課題となっている状況調査を加えて、若干の変更をおこないました。

本調査の結果からは、児童生徒を取り巻く教育環境や生活環境、教職員の勤務等の状況を読み取ることができます。また、長年に渡り教育環境の改善や課題解決に取り組まれてきた成果や教育に携わる方々の努力と工夫も感じることができます。

しかしながら、児童生徒及び教職員をとりまく教育環境には、まだまだ取り組まなければならない課題が残されていることから、本調査研究が今後の東山梨教育充実のための一助となることを期待しております。

結びに、この調査研究をまとめるに当たり、ご協力をいただきました多くの関係者の皆様に、衷心より感謝申し上げます。

2023 年度 教育環境研究特別委員会 委員長 三 枝 一 哉

2023 年度 教育環境研究特別委員会 委員名簿

○ 校 長 会	三 枝 一 哉	(岩手小)
	古 屋 雅 章	(加納岩小)
	矢 花 和 仁	(神金小)
	鮎 澤 智 美	(大藤小)
○ 教 頭 会	鶴 田 心	(加納岩小)
	佐久間 覚	(玉宮小)
	成 瀬 貢	(大藤小)
○ 事 務 職 員	雨 宮 美 沙	(八幡小)
	浅 川 実 里	(岩手小)
	砂 山 玲 央	(塩山中)
	堀 内 彩 香	(松里小)
○ 職場の民主化	鶴 田 望	(笛川小)
○ 事 務 局	大 澤 祐 子	(勝沼中)
	前 田 大 輔	(山梨南中)
	保 坂 洋 仁	(勝沼小)